
おまけ召喚 第一部 異界より来たる少年

草野 瀬津璃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おまけ召喚 第一部 異界より来たる少年

【Nコード】

N0858L

【作者名】

草野 瀬津璃

【あらすじ】

中学三年生の少年・折部流衣は、妙な勘の良さ（靈感）を持つせいで、学校の帰り道に異世界ラーザイナ・フィールドへ。そこに現れた女神に、別の者を召喚した際に、流衣が勝手におまけでついてきたから元の世界には戻せない、自力で帰るか諦めると言われ、異世界に放り出されてしまう。女神につけてもらったオウムの姿をした使い魔・オルクスと共に、ひとまず帰る方法を探すことに決めた流衣だけれど……！？ 【 気弱で常に逃げ腰な主人公が、異世界で厄介ごとに巻き込まれながら成長していく感じの話です。男の

友情とかが大好きなので、そういうのを中心に書いてます。恋愛要素はほとんど0です。目的もなくつらつらする感じが苦手な方はご注意ください【

序章 おまけ召喚

「嫌な予感がする……」

その日、折部^{おりべ}流衣は朝からずつと悪寒のようなものを感じていた。背筋がぞくぞくして、どうにも嫌な気分が拭えない。

それって風邪じゃないのかという当然の疑問に、しかし流衣は違うと言いつつ切れた。

昔から、これは大抵不幸の起きる前触れなのだ。例えば、交通事故の影響でバスが遅れたり、どう見ても虐めっ子のような者達に目を付けられたり、拳句の果てには事故に遭^あいかけたり。

出来れば予感が外れて欲しいと思いつつ、通学に使っているバスから、アザミ中学校の正門脇へと降り立つ。それから妙に重い空気を引き連れつつ、正門を抜けて三年の教室がある方へと向かった。三年二組の教室の戸を開けると、自分の席で他のクラスメイトとだべっていた高山浩人が振り返る。スポーツ刈りをした澁刺そうな容姿をしていて、背が高い。二学期の途中である今は受験シーズンである為に部活のサッカーには参加しておらず、だから朝練もないので最近朝から余裕がある様子だ。

「おう、流衣。お早う」

「お早う、ヒロ」

流衣は同級生からすれば155cmと背が低く、気弱そうな外見から小動物のようだといわれ、がたいの良い同年男子達から侮られたり軽く見られがちなのだが、浩人は小学生の頃からの友達ということもあって対等に見てくれる。いわば親友だ。

少しはにかんで挨拶すると、何故か教室の隅で黄色い悲鳴が上がった。

ビクリとそちらを見ると、四、五人の女の子のグループがこちら

をガン見している。そして何故だか頬が赤いような気もした。

「え、なに、なんかこっち見てる」

途端に挙動不審になる流衣。

それからすぐに、浩人が笑ったからだろうと思ひ至る。サッカー部のエースは伊達じゃない。浩人は子供の頃から女子達によくもてているのだ。

周りから好かれる浩人は流衣の自慢だし、そういう親友を見ているのが流衣は好きだったので、嬉しくなる。

「良かったね、ヒロ。相変わらずすごくもててるみたいだ」

笑顔でそう言つと、浩人と、それから浩人と話していた翔太と耕介が揃つて呆れた顔になる。

「お前……、こりゃちつとも気付いてねえな」

「ヒロ相手にカワイイなんて言葉出ねえだろ」

「相変わらずの鈍感小動物め」

三人はぼそぼそと何かを言い合っているが、あいにくと流衣は鞆から教科書類を取り出すのに忙しくて聞いていなかった。

そこでまた悪寒を覚えて身震いする。

「どうした、流衣。風邪か？」

目ざとく気付いた浩人が不思議そうに問い、流衣は困った顔で答える。

「うつん、違う。朝からどうも嫌な予感がするんだよね」

「気を付けるよー、お前の不幸の勘はよく当たるから」

「うん、ありがと。気をつけるよ」

流衣はそう答えながら、心の隅で呟く。

よく当たるのではなく、外れたことがないというのが正しいかな。

放課後になつても悪寒は消えず、沈みがちな気分で帰路についた。いつもの馴染みのバス停でバスを降りると、毎日通い慣れた自宅

までの道を歩いていく。

夕方とはいえ明るく、人通りの多い時間なのだが、今日は人影が見当たらない。珍しいこともあるものだと思って歩いていると、ふいに肩を叩かれた。

「はい？」

道を訊かれても答えられるかな。咄嗟とっさにそんなことを考えて振り返った瞬間、どこかに放り出された。

序章 おまけ召喚（後書き）

初めまして。書き手の草野と申します。

この話は、気弱な少年が異世界で成長していく物語です。
暇つぶし程度にお楽しみ頂ければ、幸いです。

一章 旅の始まり

「いたつ」

まるで、急に足元の地面が消えたようだった。

バランスを崩した流衣は、成すすべも無く地面に尻餅をついた。痛みで目を瞑り、何が自分の身に起こったのかを確認しようと目を開けて、まず呆然とした。

「ど、ど」……、「ここ」

ピチヨンと水音がして、すぐ側の地面に雫がはねた。

天井にぶら下がる幾つもの鍾乳石の一つから、水が落ちたのだ。

もう何年もそうなのか、雫の当たった所だけ地面にへこみが出ている。

それは分かる。分かるのだが……。

流衣は呆然と洞窟内を見回した。壁や地面と同様、乳白色をした地面は流衣の座っている所だけが周りよりも円形に盛り上がっており、それを囲むように五つの灯台のようなものがあった。洞窟内でも暗くないのは、そこに灯る炎のお陰だ。

間抜けみたいに口を開けて放心する流衣。どうしてこんな所にいるのか皆目検討がつかなかったのだ。ついでに理解も出来ない。

さつきまで通りにいたし、こんな洞窟に來た覚えはない。

「え、えと？　もしかしてマンホールに落ちたら地下世界とか、気付いてないだけで死後の世界とか、それとも寝てる……とか」

でもさっきの尻の痛みは本物だった。寝ていて痛みを感じるはずがない。

ここは地下世界が妥当かと真剣に悩んだところで、馬鹿にするような声が割り込んだ。

「お主はアホか。何故、そこで地下世界になる。せめて死後の世界

で止めておけ」

目の前に、足先まであるピンク色の髪と赤い色の目をした女が浮かんでいた。古代ギリシヤの衣服のような、白い服をひらひらさせて。ミロのヴェーナスも真つ青になるような美しい顔立ちと豊満な身体つきをしている。女が服を着ているというのにも関わらず、何故か流衣の方が恥ずかしくなり目を反らす。

一拍後。

「う、浮かんで……る？」

我が目を疑い、もう一度女の方に目を戻す。

女は相変わらず宙に浮かんでおり、風も無いのに衣服をたなびかせ、そして非常に不満げに鼻を鳴らした。

「フン、可愛げのない子供よの。少しは驚いたらどうじゃ？」

見た目二十代半ば、モデル体系のお姉さんは不思議な言葉づかいで言いました、とさ。

って、逃避してる場合じゃない！

「なっ、なっとなんな」

流衣は啞然としながら、ずりずりと後ろへずり下がる。

顔から一気に血の気が引き、心臓は凍り付いていた。

(前から声とかは聞こえる方だったけど、見たのは初めてだっ。うわあつわあどうしよう、呪のろわれる祟たたられる殺される！)

「呪わぬし祟らぬし殺しもせぬから安心せい」

女はひらりと右手を一振りし、ひっじょーに面倒臭そうに溜め息を零す。

(あれ、今、声出したっけ)

「心の声くらい聞こえるはたわけ」

女が言い、流衣はますます凍りついた。

「わらわはツィールカという、ここの世界で神なんぞしてある」

「神……様？ 世界……？」

目を白黒させつつも、啞然と繰り返す。

「お主、勘が良すぎじゃ。わらわは勇者を召喚したというに、いら

ぬオマケがくつつついてきて正直困っておる」

「勇者？ 召喚？」

流衣の顔からさああと血が引く。もう引きすぎてこのままぶっ倒れそうだ。

「ま、まさか……僕とか言いませんよね？」

「言うわけなかるう」

「じゃあ何で」

「だから、いらぬオマケじゃと言ったではないか」

流衣は沈黙し、言葉の意味を考えてみる。

いらぬオマケ。余計なもの。つまりは用無し。

ポンと手を叩く。

「いらなんだったら、戻して下さい」

「無理じゃ」

ツィールカは笑顔で言い切る。

「……は？」

流衣は目を点にした。

「じゃから、お主はいらぬオマケじゃ。呼んだ対象に勝手に付随してきおった余計な者じゃ。呼んだ対象ならば戻すことも出来るが、勝手についてきた者を戻すことはわらわには出来ぬ。それがこの世のルールじゃからの」

「ついてきたって、僕は何もしてませんよ！」

悲鳴じみた声で抗議する流衣。

「ふむ。勘が良すぎるのも困りもの。お主、わらわの術に勝手に応えて自分から飛び込んだのじゃ。つまり自業自得、わらわは何にも悪くないぞえ。戻りたければ自力で戻るしかあるまい。それが無理ならもう帰れぬ」

流衣の頭の中で、ゴーンと寺の鐘が鳴った。

ああ、ほんのう煩惱が消える。

つまりなんにも考えられない。

「だがわらわは鬼ではない、慈悲と愛の女神ツィールカじゃ。」

このままではあんまり哀れじゃから、勇者とは違う場所に転移させ、こうして相對しておるわけじゃ。勇者と共に呼び出すなど、恥の上塗りじゃろ？ しかも余計な付属品ぞえ？」

ぐふっ。

流衣は心の中で吐血した。

(申し訳ないのですが女神様、慈悲を与えるどころかトドメを刺しております)

「それは悪かったの。まあ哀れに思っておるのは本当じゃ。だからこちらの一般言語と文字の読み書きを出来るようにしておいた。それから、そうじゃのう、お主はあんまり取り立てて取り柄もなさそうじゃし、魔力だけは授けておこうかの」

そう言つて、ツィールカは流衣の方を指差した。

一瞬、ぽつと身体が温かくなる。その感覚が消えると、不思議なことに身体が軽くなった。

「うんうん、よしよし。あとは案内役に使い魔つかを一匹と、生きていくのに必要な物だけを与えてやろう」

ツィールカが右手の平を上に向けると、小さな皮袋や折りたたまれた布、そして黄緑色をしたオウムが現れた。

「そやつの名はオルクスじゃ、よき友になるじゃろう。他にはそうじゃな」

ツィールカは地面に落ちていた流衣の黒い通学鞆に指先を向ける。すると鞆の蓋が勝手に開いて、中からリングのついたメモ帳が浮かび上がる。そのメモ帳が光り、そのまま鞆に戻って蓋が閉まった。鞆が静かに地面に落ちる。

「知識のメモ帳 を授けよう。必要なことが記きされる。好きに使うが良い」

流衣はその言い回しに違和感を覚えた。「記きされている」ではなく、「記きされる」？

「これでわらわの施しは終わりじゃ。あとはせいぜい頑張るがよい、小さき人間よ」

ツイルルカは一仕事して疲れたわあとばかりに思い切り伸びをして　神の威厳などへったくれもない　不敵に笑うとそのまま姿を消した。

啞然と話を聞いていた流衣はそれで我に返り、目の前が暗くなる思いだった。

「頑張れって……どうしよう」

頭の中が真っ白だ。

神様が出てきて、召喚とか言っつて、しかも自分が勝手にいついきたらしくて余計なもので、それで、ええと？

帰れないから、もう家族にもヒロにも友達にも会えないわけで。

気付いた瞬間、勝手に目から水が零れ落ちた。

あまりの理不尽さに泣ける。いや、泣いている。

「僕みたいなのがどうやって生活していけば……」

ただでさえ普段から、冴えないチビとか使えない小動物とか色々馬鹿にされてるのに！

悲しくて仕方が無くなって、ひとまず泣くことにした。

幸いなことにここには誰もいないのだから。

気の済むまで泣いて、そろそろ現実に戻ろうかと思いついた頃、誰もいないと思ったのに誰かに声をかけられた。

『やっと落ち着きましたかね、坊ちゃん』

「ふぐつ、だ、誰!？」

心臓がひっくり返るほど驚いて、流衣は洞窟内を見回した。人影はない。

「……ストレスで幻聴が聞こえる……」

ますます泣けてきた。

『幻聴じゃないですよ。わてです、わて。初めまして、オルクスといます』

「オルクス？」

流衣はもう一度洞窟内を見回してやっぱり人影がないことを確認し、それから女神がオルクスがどうのと言っていたのを思い出す。確か使い魔がどうか言っていた気がする。

『そうです、そうです。坊ちゃんの使い魔になりました、オルクスです』

流衣の足元で、オウムが自己主張せんとばかりにクイクイと頭を突き出してくる。

流衣はそちらを思わず凝視する。頬に冷や汗が浮かぶ。

「あれ、おかしいな。気のせいかオウムが喋ってる気がするんだけど。ストレスでとうとう精神破綻しちゃったのかなあ」

『わては坊ちゃんの使い魔ですから、坊ちゃんとは意思疎通が出来るんです』

気のせいじゃなかった。オウムが喋ってた。

「案内役の、使い魔？」

『そうです』

オウムはコックリコックリ頷く動作をする。

『どうわっ!?!』

流衣は無言でオウムに手を伸ばし、両手で掴んで目の前まで持ち上げた。まじまじと観察する。

全体的に黄緑色のオウムは、頭の羽と嘴は黄色く、足は赤色をしていた。どこから見ても普通の、可愛らしいオウムだ。

「もしかして、普通にしても喋れる？」

「喋れマス、ガー、この通り、片言、デス！」

「おおっ、すごい！ それでもすごい！」

流衣は両手でオウムを支えたまま興奮する。オウムが喋ってる！ 頭の中に響く声でもなく、普通に喋ってる！

手放して喜ぶ流衣に、オウムも嬉しげに黒い眼を光らせる。

「ワア、イツ。坊ちゃん、笑う、嬉しい！」

その言葉に、流衣は心臓を鷲掴みにされた。

可愛すぎるよ、このオウム！

大の動物好きだが、アパート暮らしのせいでペットを飼えなかった流衣には一撃必殺並みの威力だった。

可愛い可愛い可愛いと心の中で呟きながら身悶えし、どうにか興奮を収めてオウムを地面に下ろす。

こんな所に放り出されたシヨックも小さなオウム一羽で吹き飛んだ。こんな可愛いオウムと過ごせるなら、案外これも悪くないかもしれない。単純な流衣はそんなことまで思った。

「僕は折部流衣。流衣って呼んで」

『分かりました、ルイ様ですね』

「いや、だから流衣で……」

『わては使い魔です故、幾ら主人の頼みといえど呼び捨てするわけにはいきません』

流衣は鼻白む。うーん、固いなあ。

「でも、僕は友達になつて欲しいな」

『友達ですか？ わては使い魔ですよ？』

「うん。その方が心強いな」

流衣がそうはにかんで言うと、オルクスは何も言えないようだった。

『ルイ様がそうおっしゃるのなら、わては友にもなりましょう』

「あのさ、様付けは気恥かしいから、ちょっと」

『それでは前の通り、坊ちゃんとお呼びします』

「う……。分かったよ」

どうやら呼び方を変えてくれる気が無いようなので、この辺で妥協する。様付けされるような人間ではないし、第一恥ずかしすぎる。気を取り直し、流衣は笑みを浮かべる。

「よろしく、オルクス」

『こちらこそ、坊ちゃん』

こうして、ここに来て初めての友達が流衣に出来た。

『ええー、では坊ちゃん。ひとまずここを出る前に、所持品の確認と、この世界についての説明をしましょう』

オウム　オルクスの言葉で、ルイは地面に転がった鞆や女神が置いていった品物に、初めて注目した。

『そうだね、そうしておこう』

頷いて、まずは小さな皮袋に手を伸ばす。

『お金が入ってるみたい』

金貨が五枚、銀貨が三枚、銅貨が十枚入っている。金貨は五百円玉くらいの大きさで、銀貨はそれより一回り小さく、銅貨は一円玉くらいの大きさだった。

『それは世界共通貨幣のクリエステル貨幣といます。今いる国はルマルディー王国というのですが、この国は、このラーザイナ・フールドという世界で一番大きい国なのです。この国の始祖しそクリエステル・ルマルディーが考案した貨幣なので、クリエステル貨幣といます』

オルクスの講釈を頭の中で噛み砕き、優しく直してみる流衣。

『それってつまり、この世界で一番大きい国の王様が考えたからそれが一番使われてるってこと？』

『そういうことです。いやあ、坊ちゃんは見た目より聡明でいらっしやる！』

『見た目……』

流衣はへこんで肩を落とす。

『あつ、ももも申し訳ありません！　ちよつと本音が口から、あわわわっ』

慌ててバサバサと翼を羽ばたかせるオルクス。しかし墓穴を掘りまくっている。

『いいよ、僕がとろくさそつなのはよく分かってるから。それで使い方は？』

『金貨一枚が銀貨十枚、銀貨一枚が銅貨百枚に相当します。一人暮らしたら、銀貨五枚もあれば一ヶ月は楽に暮らせますよ。切り詰め

ても三枚あれば十分です』

「ええっ、それじゃ相当な大金じゃないかつ！ 怖っ、逆に怖いよ、そんなお金！」

泥棒に狙われて逃げられる自信がないので、流衣は取り乱した。しかしすぐに心を落ち着け、鞆から自分の財布を取り出した。

小遣い日の前だったので三百二十五円しか入っていなかった財布から小銭を出し、カード入れの方にそれを移動する。

『何をなさってるんです？』

「一つにまとめておくと危ないから、分けて持とうと思って」

落とした時に路頭に迷うのを避ける為、そうしておく。皮袋は保管用にする為、金貨三枚を入れる。残りの金貨二枚を鞆の内ポケットに入れ、最終的に残った銀貨三枚と銅貨十枚を財布に入れた。自分がドジなのを理解しているので、念には念を入れておくことにしたのだ。

『ほほう、なかなか用心深くていらっしやる！』

「いや、単に僕が落し物しやすいからなんだけど」

そう答えつつ、ひとまず安心したので、他の道具にも手を伸ばさず。折りたたまれた布を広げると、工具入れだったようでナイフや工具などが幾つもおさまっていた。よく見ると火打石のようなものも入っている。

「何これ？」

『生活用品です。ここではナイフがないと旅も出来ません』

「ああ、そういうこと」

頷いて、布を元通りにして鞆にしまいこむ。

そしてラストは 知識のメモ帳 とやらだ。

鞆から馴染みのリングのついたメモ帳を引っ張り出す。表紙は黄色いプラスチック製で、中は普通の紙だ。授業の宿題とか連絡事項をメモしておくのに使っていたのに、書いていたことは全て消え、謎の言葉が記されている。 ように見えたのは一瞬で、瞬きすると日本語みたいに読めた。形は全然知らないはずの文字なのに不思議

議だ。

「このメモ帳には、必要なことが記される。地図が必要であれば、地図が。言葉の意味を知りたければその意味が記される」

書いてあった文字を口に出して読むと、文字はスウツと溶けるように消え、メモ帳は白紙になった。

「えっ」

流衣は驚き、思わず呟く。

「どうして消えたの？」

必要ではないからだ。

文字が浮かび、また消えた。

流衣は眉を寄せる。

「なんか、メモ帳と会話してるみたいだ」

しかしこれは疑問系ではなかったため、メモ帳に変化はおきなかった。

流衣はちよつと考えて、訊いてみる。

「使い魔って何？」

使い魔とは、魔法使いが召喚し、その召喚主に従属する魔物のことである。形は動物から人型までさまざまであるが、人型に近づけば近づくほど高位の魔物となる。また、言葉を解す魔物もまた高位に位置する。

基本的に食事などは自分で摂取するか、召喚主の魔力を食らうので、用意する必要は無い。また、使い魔を返す時には自由にする宣言をすれば元に戻るだろう。

『わては自分で食事を探しますから、魔力は食べませんよ。あと、ツィール力様に頼まれた手前、自由にされても帰りませんので。坊ちゃんが生きている間はお側にいます』

思わずオルクスを見ると、流衣の肩に乗ってメモ帳を覗いていたオルクスはそう言った。

「や、オルクスって高位なんだすごいって思ってた」

そう言うと、オルクスは胸を反らす。

『お褒め頂きありがとうございます。使い魔のレベルは召喚主の魔力にも左右されますから、今の坊ちゃんでも十分わてを呼べますよ。そうは言いますが、魔力量が匹敵するだけで、わては女神様にお仕えしている身ゆえ、人間の使い魔になることはないのですが。今回は女神様が配慮されて、わてを選ばれたのです。人型の使い魔なんか喚ばれても、坊ちゃんの魔力が磨り減るだけですからね。人型は、召喚にかかる魔力はわて程必要ない反面、喚んだ後の魔力消費が激しいですから』

「そうなんだ」

それは助かった、と流衣は思い、ふと、

「魔力って？」

魔力とは、魔法を扱うのに必要な力のこと。

体力や精神力ではなく、自然界に宿る精霊に働きかける力。世界を動かす力とも呼ばれる。

誰でも体内に宿して生まれるが、その量は人によって異なる。魔力量が多ければ多いほど、魔力が大きいとされ、それにより扱える魔法のレベルも上がる。

「僕の魔力ってどれくらい？」

一般的な魔法使い三百人分くらい。

「え、本当!？」

流衣は仰天して思わず叫んだ。

『ちなみに、わてを召喚するには魔法使い百人分くらいの魔力がな

いと無理ですよ』

「そうなんだ？ オルクスってすごい大物なんだ！」

大物で喋ってしかも可愛いオウムなんて最高だなあ。流衣は感心して何度も頷く。

それから、また疑問を覚えて口に出す。

「魔法使いつてことは、魔法があるの？」

魔法という概念は、魔力と言葉により自然界に宿る精霊に働きかけ、それにより現象を引き起こすことを指す。

魔法使いは、魔法を扱う知識と才能を持ち合わせた者のこと。中には術を扱うよりも道具を作り出すことに長けた者もいるが、大まかに魔法を使えばそれで魔法使いである。

小難しい答えが返ってきた。

「今、僕が使える魔法は？」

火の魔法の初歩、点火てんかの術じゆつ。言葉は「ファイアー」。魔力を意識し、それに火をつけるイメージを持たれば使える。……はず。

現在ではこの魔法のみ。これ以上使いたいなら、魔法書で学ぶか、もしくは魔法学校に入学するか師匠を見つかるべし。

途中の「はず」という一言が気になったが、そうなのかと感心する流衣。

ひとまず納得したので、メモ帳に「ありがとう」と礼を言い、大事に鞆にしまいこむ。それから鞆の外ポケットに突っ込んでいた肩かけ紐を取り出して、黒い皮製の鞆の両脇についている金具に取り付けた。

いつもは手提げ鞆にしている。そうでもないかと、背が低いせいで鞆負けするか、郵便屋か何かにか見えなくて笑われるのだ。何故か「カワイイ」と。

しかし旅をするなら手提げで移動はきつい。

出来ればどこかでリュックサックでも揃えたいなとちらりと思う。肩に鞆をかけて長さを調節しながら、魔法について思考を馳せる。まさかの漫画や小説の世界だ。

（魔力を意識し、かあ）

ちよつとだけ瞑想して、魔力というのがどうなのか考えてみる。ファンタジーものの小説は結構好きで、色々読んでいた。ああいうのには大抵、青い色とかで表現されていたが……。そういえば古代の日本では、青は魂の色とされていたとどこかで読んだ気がする。

大人しくて運動が得意な方ではない上に背が低く、女の子と間違われがちな流衣にも小さな取り柄がある。読書家なところだ。漫画も好きだが小説の方を好んで読んでいた。読むのが速すぎるせいか、漫画ではすぐに読み終わって暇を潰せないせいだ。物語を読むという点ではゲームも結構好きだが、いつべんに読むならやはり小説が一番だと思う。

（青、青……）

青色つばい力ってどんなのかなあと考えていると、閉じた目蓋の闇の、その更に奥にぼんやりと青い光が滲んでいるのに気付く。いつもなら、目を閉じた闇の奥には白い色の光が見える気がしていたのだが。

（これ、のことかな？）

首を傾げ、それが全身を流れているのを想像し、それを手の方まで引き伸ばしてみる。

そこで目を開けると、不思議なことだが、自分の右手が青く光っていた。

『素晴らしいです、坊ちゃん！ 感覚で魔力を操るなんて！』

肩の方から、オルクスの感極まった声が出た。

その声に驚いて光を消してしまったが、思い直して、今度は目を開けたままで光らせてみる。

「お、おお？　こづかな？」

身体の中というよりは表面を伝っていく魔力を、手の平の上に引き伸ばしてみる。

『これで先程の言葉を唱えながら、使う魔法をイメージするのです。そうすれば使えるはずです』

「分かった」

オルクスのアドバイスを受け、挑戦してみる。

（えーと、点火の術でファイアーだっけ？　点火でファイアーって、ロケットの点火みたいだなあ）

思わずロケットの点火の瞬間を思い浮かべながら、流衣は呟いた。

「ファイアー」

すると、ロウソクの火どころではない爆発が起きた。

「ゲホツ、ゴホゴホツ」

土埃で盛大にむせながら、流衣は目を丸くした。

何だ！？　何が起こったんだ！？

どうやら今の衝撃で明かりが消し飛んだらしく、洞窟内は暗闇に閉ざされていた。

しかもズズズという嫌いな音が腹の奥に響いてくる。

『まずいです、坊ちゃん！　今の衝撃で洞窟が崩れそうです！　急いで脱出して下さい！』

「えっ、ええ！？」

自業自得ではあったが、流衣はあたふたと慌てる。

それからさっきの記憶を頼りに、道のあった方へと走る。

ゴシャツ！

そのすぐ後ろで、何かが潰れる音がした。

「わああ見えない！　どっちに行けば良いの！？」

パニックを起こしかけていたら、目の前に光が浮かんだ。

『さあ、あの光を追って下さい！』

どうやらオルクスが出した光らしい。

流衣は無我夢中で光を追って走り出した。

どうやら洞窟は小さな山の遺跡の中にあっただらしい。

洞窟を抜け出し、古代建築のような遺跡に出た流衣は、更に洞窟から距離を取る。振り返ったところで、地響きをあげて洞窟が崩れた。

「き、危機一髪……？」

『そうですね』

落ち着き払ったオルクスの返事を聞いた途端、流衣はへなへなとその場に座り込んだ。

あああ足が震えてるううう。

「ご、ごごごめん、オルクス」

遅れてやってきた震えで歯をガチガチ鳴らしながら、流衣は涙目で謝る。

『いえいえ、わても悪うございました。坊ちゃんの魔力の大きさのことを忘れていましたよ』

い、いや、多分魔力の大きさとか以前に、ロケットの点火の場面を想像していたせいだと思う。

流衣はそう思ったが、口には出さない。オルクスがそう思ってるのだから、そういうことにしておこう。

しかし魔法っていうのは恐ろしいな。初歩の術で爆発を引き起こせるとは思わなかった。普通、明かりをつけるところから始まるのがサーガなんかの基本だろう。

「と、ともかく助かったし、行こうか。行くって言うてもどこに行けば良いのか分からないけど」

そういえば、行き先を決めてない。

流衣はおまけで召喚に応じてしまっただけで、使命なんて何にも無いのだ。とりあえず、帰る方法を探すのが目的と言えは目的だ。

『ひとまず村に行き着かないと。わてから見ても坊ちゃんの装備はあんまりです。武器も防具も、ましてや食料さえないんですから』

「食料！ そうだよ、水もないんだ。死んじゃうよ！」
さっそく青くなつた流衣である。

『はい、ですが餓死の前に魔物に襲われて死ぬ危険があります』
冷静に言うオルクス。

「ま、魔物っ!？」

声がひっくり返つた。

オルクスは大真面目に続ける。

『そうです。この辺は比較的弱い魔物しか棲んでいませんが、それでも装備のない坊ちゃんには危険過ぎます。村人その1の勢いで死にます』

「村人その1つて、映画になんて出てきたら、真っ先に悪役に殺される役じゃないか！」

悲鳴じみた叫びを上げる流衣。

「それなら暗くなる前に急いで村に着かなきゃっ」

急いで鞆から 知識のメモ帳 を取り出し、この辺の地図を出してもらおう。

現在地：黄昏の遺跡。

慈悲と愛の女神ツィールカを祭っていた宗教遺跡。今では人も住んでおらず、荒廃しているが、神聖さは当時のままである。また、黄昏という名は、ツィールカの溜め息は黄昏のように美しいという故事からきている。

「そんなのどうでもいいよ」

聞いてもあんまり嬉しくない由来がメモ帳に浮かび、流衣は思わず突っ込みを入れた。

「現在地が分かる地図を出して下さい」

現在地を教えると言ったからそんな説明が出たのだと思い、きちんと頼む。すると、ちゃんと地図っぽい地図が出た。地図っぽいというか、まあ地図なのだが。

「えーと、ルマルディー王国の東部か。で、ここが一番東なわけだね。『言葉交わしの森』の中にある『黄昏の遺跡』ってことか」

地図を見ながらぶつぶつと呟く。

地図というのを使ったことがないが、漠然とそういうことは分かった。

「西に進めばカザエ村っていうのがあるみたいだよ」

肩に乗ってるオルクスに言っと、オルクスはコックリと頷く仕草をする。こうしているとただのオウムにしか見えない。

「西はあちらです。方向ならお教えしますから、とりあえず進みましよう」

オルクスの言葉に頷いて、流衣はメモ帳を持ったまま遺跡に背を向け歩き出す。異世界の旅の始まりだ。……嫌だなあ。

「ああ、そういえばオルクス」

『何でしょう、坊ちゃん』

「さっき、暗かったのによく見えたよね」

『何故です?』

「だって、鳥目なんだから?」

『わては魔物ですから』

「あ、そっか」

そんな他愛のない話をしながら、ひとまず一人ではない幸せに感謝した。

二章 勇者

言葉交わしの森は、その名の通り、森が言葉を交わして常にざわついていることからその名がついた。森の木達は自身の幹や枝を揺らし、葉ずれの音をさせて言葉を交わす。

一つ言っておきたいが、そんな珍妙な現象が起きるのは、ルマルデュー王国のここだけだ。

十三歳の時にこの森にやって来るまで、そんな森は見たことがなかったから、初めて見た時は悪魔の呪いかと仰天したものだ。しかしこれが普通だとカザエ村の人々と木こりの爺さんボロスに諭され、どうにか落ち着きを取り戻した思い出は、今ではすっかり笑い種になっている。

こんな森であるから、木こりの仕事を遂行するには技術が必要だった。揺れない木の相手でも結構な重労働なのだが、ここは木が常に揺れているのでタイミングと腕前が必要なのだ。でないと、木が倒れてくる位置を見誤り、大怪我をしてしまう。

ちなみに一つ付け加えておくと、この木は別に魔物ではなく、単にユレギという種類の木なだけであり、切ったからといって襲われることはないので安心して欲しい。

「今日のノルマはあと二十本と」

スコーンという木の割れる小気味良い音が辺りに響く。

言葉交わしの森の中にぽつんと建った丸太小屋の前で、赤い短髪と琥珀色の目をした、目にも鮮やかな色の少年が斧を振るっていた。少年の名前はリド。四年前にカザエ村に放浪してきて、ボロスに弟子入りした風変わりな少年である。

風変わりとはいえ弟子入り志望をしてきたので、重労働な上に技術のいるユレギを伐り出す木こり志望者はおらず、ここでユレギ伐りの伝統も廃れるのかと諦めていたボロスはお構い無しにリドを迎え入れた。リドは澁刺とした明るい少年だったのもありボロスの可愛がりようは半端なく、まるで本当の血を分けた祖父と孫のようだったとカザエ村の人達は見ていた。

ともかくとして、可愛がられて技術を学んだリドは、一年前にボロスが他界してからも丸太小屋で木こりを生業にし、今ではカザエ村になくはならない村人の一人になった。

黒い長袖のシャツの上に緑色の上着を重ね、灰色のズボンと皮のブーツを身に着けているリドの動きは颯爽としていて、俊敏だ。斧を振り下ろす都度、額に巻いた黄色い布とその先についた飾りが翻り、午前の緩やかな日差しに彩りを添えている。

今は薪を作っており、出来あがったら村に運ぶことになっていた。

「……ん？」

ふいに、リドは顔を上げた。

遠くで落雷のような地鳴りのような低い音がした気がしたのだ。

リドは昔から目が良かったが、それ以上に耳が良かった。

「何だ？ 遺跡の方か？」

古い建築物が崩れでもしたのだろうか。

しかしそれにしても、空に舞い上がった鳥達の数が多い気がした。リドは少し考えて、木こり小屋に入ると武器とカンテラを手にしてまた外に出てきた。腰帯にカンテラを結わえ付け、その帯の上にダガーの鞘さやを取り付けたベルトを固定する。ただの一木こりに見えて、実はダガー使いとしての腕もある方だ。木こりをしているお陰で体力もある。

村に世話になっている手前、不審なものは看過かんかできない。

リドは真剣な顔をして、遺跡の方へと森を歩き出した。

「ひいいい、木が、木が揺れてる！ 怖っ、不気味っ、ぎゃっ！」
足元の小石に蹴つまづいて転ぶ流衣。

「坊ちゃん、落ち着いて下さい。この木はユレギという種類で、揺れるだけで害はありませんから」

つまづいた流衣に驚いて、空中で羽ばたきながらオルクスはなだめる。

「そうなの？ 呪われたりしそうに見えるけど呪われない？」

「呪いませんとも！」

流衣が怯えるのも道理で、揺れている木のうろが笑いさざめいているように見えてしまうのだ。今から呪いかけるぞーウキャキャキヤと笑っているように見えなくもない。

そう見える人間は、薄暗い森と揺れる木という組み合わせに恐怖フィルターがかかってそう見える。落ち着いて見ればそうは見えない。

「ほら、坊ちゃん。こういう時は深呼吸ですよ」

「うう、分かった。スーッ、ゲホゲホッ」

思いきり息を吸い込んだ流衣だったが、急に肺に空気を入れたせいで盛大にむせた。

うう、我ながらなんて情けない。

むせたのと情けなさで目尻に涙が浮かんでくる始末だ。

己の不甲斐なさに悲しくなりつつ、立ち上がって学ランのズボンについた草を払う。最悪なことにオナモミが生えていたようで、ズボンにびっしりついていてた。取るのは諦め、西の方へと歩き出す。
「ねえオルクス、魔物いない？ いたら教えてよ、すぐに逃げるから」

猛獣を恐れる小ネズミのごとくビクビクしながら、肩に降り立ったオルクスに問う。

「今のところはいないようです。でもまあ、ご安心を。危なくなったらわてが助けますから」

「ほ、ほんと？ 頼もしいなあ。ごめん、こんな頼りないのを女神

様に押し付けられえて」

「だんだん申し訳なくなってきた流衣である。」

オルクスは人間の自分なんかより余程できた性格をしたオウムだ。いや、使い魔か。」

「なんのなんの。わては使い魔、主人に頼られるのは嬉しい限りです。女神様のじきじきのお呼び出しなのですから、尚更です。それに坊ちゃんといると、妙に落ち着くんですよ、不思議なものです。しっくり馴染むといえますか」

「そうなの？ 君って心が広いんだなあ。僕も見習わなきゃ」

流衣は心があつたかくなり、自然と微笑んだ。するとオルクスはくすぐったそうに笑う。

「坊ちゃん優しい方そうですね、わてのような使い魔にも優しい」

「友達だから当然だよ」

昔からだ、友達だと認めた相手にはとことん甘くなるのが流衣だった。友達が笑えば嬉しいし、頼られたら応えたくなるものだ。

侮られることが多いせい、そういう友達は大変貴重な存在だった。

流衣はそんな落ち着いた心で森を再度見た。

すると不思議なことだが、さっきまであんなに怖かった森が何ともなかった。

恐怖が抜け落ちたことで、澱みない足取りで森を歩いていく。あとは魔物にさえ出くわさなければ平気なはずだ。

「そう思っていた、のだが。」

遺跡から歩くこと三十分ほどの所で、予想外にも人間に出くわした。そしてまたまた予想外にも、刃を突きつけられて凍りつく。

「誰だ、てめえ。遺跡から来たな？ 何してた？」

赤い髪をした少年は軽く話しかけているようで、その実、その目に警戒と不審の色を浮かべていた。そんなことは目を見ずとも、武器を突きつけられている時点で気付くだろうが。

「あああ、あの……っ」

目の前でギラリと光る金属性の刃に、流衣は背筋が凍りついた。青くなり、その刃から目を反らせない。

(まずいまずいまずい！ 早速泥棒さんに出くわした！)

森の中で刃を突きつけられて脅されるイコール追い剥ぎ、という偏見を持っていた流衣は恐怖でガタガタと震えだす。目にじわじわと涙が浮かんでくる。

意識の遠いところで、走馬灯のように家族との思い出が駆け巡る。ああ、僕はここで死ぬのか。せめて遺言だけでも書いておけば良かった。

だが、少年は流衣が怯えているのに気付くと、不可解そうに片眉を跳ね上げてから刃を下ろす。

流衣は盛大に安堵して、どっと汗が噴出した。何だかよく分からないが、危害を加える気は……多分ないのだと信じたい。

「あの……、ききき君はその、泥棒？」

「は？ 盗掘屋はお前だろう？」

「トウクツヤ？」

聞き覚えのない単語だった。流衣がきよとんとすると、少年は別の言葉で言い換える。

「墓荒らしとも、遺跡荒らしともいうな」

「遺跡荒らし……？」

流衣は本気で首を傾げ、それから洞窟が遺跡の中にあつたことを思い出して頭から爪先まで一気に血の気が引いた。バツと頭を下げる。

「すつ、すいませんでした！ 遺跡というか、洞窟壊しちゃってっ。

あのその、どうすれば良いですか？ 修復ですか？ もしかして大事な観光資源とかそういうのだったりして、わあああどうしよう！」

弁償なんて出来ないし泣きそうになりながら、こっぴどいたらいいかああしたらどうかと、混乱の余り口早にわめき散らす。

その様に少年は口を挟む暇もなく唾然とし、それから面倒そうに顔をしかめた。

「別に観光資源なんかじゃねえから、弁償なんていらねえよ。怪しい者かと思っただけだ」

「えっ!? あ、怪しいですか僕っ」

「ああ」

少年はきつぱりと頷いた。

流衣はシヨックを受けて沈黙する。

「そんな上下黒い服で、しかも旅人にしては軽装だ。防具も武器もねえし、これは余程の手練か世間知らずな馬鹿のどっちかだろ」

流衣は肩を落としてうつむいた。

「……すみません、世間知らずな馬鹿の方です」

というか、世界知らずなんですけど。

心の中で付け足す流衣。

「坊ちゃん、坊ちゃん、泣かないで!」

オルクスが片言で叫び、それに少年はビクリとする。

「大丈夫だよ、オルクス。泣いてないよ。なんか悲しくなっただけ泣く一歩前なのは確かだが。

あんまり自慢にはならないが、流衣は泣き虫で定評がある。

「だあもうそんな顔するなよ! まるで俺が虐め^{いじ}てるみたいだろ! それに男にんな顔されても気持ち悪いだけだ!」

その一言に、流衣はパツと表情を明るくする。

「僕が男って分かるの!？」

「あんだよ、男装した女なのか?」

「違うよ! うわあ、嬉しいなあ! 初対面の人って、すぐに僕の性別尋ねるんだよ、どう見ても男なのに不思議だよね!」

いきなり嬉しげに言い募られて、当の少年は面食らい、それから大仰に溜め息をついた。

「分かった、分かった。お前はどう見ても妙な奴だが怪しくない」
それから、疲れたように付け足す。

「ついてこい、ちょっと話聞かせろ」

「は、はいっ。すみません、妙な奴で!」

流衣はビシツと返事をして、それから少年の後に続いた。

俺も風変わりと言われてきたが、こいつには負ける。

リドは眼前の少年を見て、そう判じた。

遺跡の方からやって来た少年は、歳は十二歳くらいだろうか？

黒髪黒目で、詰襟のある黒い上着とズボンを身に着け、白い布製のよくな不思議な光沢をした靴を履いていた。それに、横に提げた靴も黒い皮製。全体的に真っ黒で、どこから見ても怪しい。加え、肩にオウムを乗せているのが胡散臭さを倍増させている。

よく見れば肌の色も不思議な色だ。白でも黄色でもない、初めて見る人種。亜人だろうか？ しかし亜人は寒さに弱いから南方に住んでいるし、身体の一部がどこかしら獣のパーツをしている。見た所、獣のパーツは無い。

軽装なのは余程の手練なのかと警戒してかかったが、刃を向けた時点で怯えたので違うようだった。

一見すると地味だが、よくよく観察してみると顔立ちは整っている方だ。背が低くて目が大きいせいで、小動物を連想させるのもあって女みたいに見える。が、これは男だと思う。ちよつと脅かしたくらいで泣きそうになるなんて、なよつちい奴だ。

しかし男だと断定したら、普段から女に間違われるのに辟易していたのか急に嬉しそうに主張し始めたから驚いた。

目まぐるしく表情を変える少年を見ていたら、こちらの方が疲れしてきたので、ついてくるように言って丸太小屋の方へ歩き出す。

妙な奴ですみませんと謝りながらついてくる少年に、何だか厄介ごとの匂いをかぎとつたりドである。

完全に大丈夫だと判断出来るまで、ひとまず丸太小屋で話を聞いて監視してみることしよう。

と考えていたのに。

丸太小屋の中のテーブルにつき、休憩も兼ねて茶を準備したりド

に、少年は非常に言いづらそうに口火を切った。

「えーと、多分信じられないと思うんですけど。というか僕も信じられないというか、信じたくないというか」

いいからとつとと話せ、とばかり、茶を一口飲みつつ顎あごで促うながすりだ。

「僕、違う世界から来たんです！」

ブフツ。

初しょ端ぱなからのカミングアウトに、リドは思わず茶を吹き出した。

何を言い出してんだ、このチビ！

口元を袖口で拭い、もしかして俺はとんでもない変人を拾ってきたのかと少年を見れば、嘘を言ってるようには見えない真剣な顔をしていた。

ひとまず落ち着いて、話を聞いてから判断しようという意味を話すように催促さいそくする。

すると、少年は若干落ち込んだ様子ながら、訥々とつとつと身に起きた不幸とやらを語りだした。

人に会えたのが嬉しかったのもあつて事情を暴露した流衣は、軽い興奮状態が冷めると急に不安になった。

こんな話をいきなりされたら、自分の世界だったら間違はなく精神病院を紹介されるか、妙な宗教団体と勘違いされるに違いないと思つたのだ。

居心地悪く、椅子の上で身じろぎする。

「信じられねえ」

少年は思いつきり眉間に皺しわを寄せて呟いた。

(やっぱり……、そうだよ、普通信じられないよ)

内心がっくりしている流衣に、少年は「だが」と付け足す。

「どうも嘘言ってるようには見えねえ」

そう言いながら、参ったとばかりに天井を仰ぐ少年。

「俺は人を見る目には自信があるってのに、こればかりはお手上げだぜ。でもなあ、そんなへんてこな嘘つくなんて、そっちの方が余程怪しいもんな」

少年は流衣に視線を戻す。

「お前がちよつとでも怪しかつたら、村長んとこに突き出そうと思つてたんだけどなあ」

「ええっ！」

流衣は椅子から落ちそうになる。

「でもまあ、魔法使いなんて奴らがいるんだし、一人くらい異界人が混ざっていてもおかしくねえか」

「はあ……」

目をパチパチさせる流衣。そう言われると納得してしまうような不思議さがあった。

「ところでさ、女神様は勇者を召喚したんだって言ったよな？」

「はい、そうです」

「じゃあ、その勇者ってのはお前の世界の奴ってこと？」

「へっ!？」

訊かれてみて、初めてその可能性に辿り着く。

「いや、僕は知らないんだ。女神様は勇者を召喚したって言っただけで……」

目の前がパツと開ける気がした。

元の世界に戻ることを第一目標にして、第二目標は勇者に会うってというのが良いかもしれない。

(そっかあ、同じ日本人なのかもしれないなあ。会うだけ会ってみよう)

勇者なら身の回りに頭の良い人間がついていそうだし、手がかりが得られるかもしれない。

「そっだよオルクス、そうしよう！ 勇者って人に会いに行こう！」

『坊ちゃんのお世のままに』

「ありがとう！」

すっかり舞い上がってオルクスに話しかけ、返ってきた返事に礼を言う。

それを目の前で目撃してしまった少年は、哀れみの混ざった視線を流衣に向けた。

「あーあー、動物に話しかけるなんてなあ、よっぽど衝撃的だったんだなあ」

「？」

少年の言い分が分からず、流衣は首を傾げる。

「オルクスは見た目はオウムだけど、僕の友達で使い魔なんだよ。女神様がつけてくれたんだ。さつきも喋ってたでしょ？」

「はあ？ オウムは何も喋ってねえだろ」

「え？」

流衣は動きをぴたりと止める。

『こつして意思疎通が出来るのは坊ちゃんだけです。声を出せばそちらの少年にも伝わるでしょうが』

そ、そうなのか。それでは、端はたから見ると随分同情を誘う感じじゃないか。

「わてハ、坊ちゃんと、心を通わせラレルの、デス」

オルクスが片言ながら喋ると、少年はビクリと肩を揺らした。

それから、まじまじとオルクスを見つめる。

「まじで喋ってんのか？」

「そうです」

テーブルに飛び移ったオルクスは、少年を見上げてコツクリコツクリと頷く動作をする。

少年は参ったと言いなながら両手を広げる。

「分かったよ、信じる。お前は異界人で、そっちは使い魔な」

そこで息をつくくと、少年はにっと口の端を引き上げた。

「俺はリドだ。よろしくな」

そんな少年に、流衣も笑顔で名乗り返した。

怪しくないことは認めてくれたが、どちらにしろ村長に話を通さなくてはいけないということで、流衣はリドと共にカザエ村へと向かった。

村に運ぶ薪たきぎがあるというので、微力ながら流衣も手伝う。本当に微力だ。リドは薪を重ねた台のようなものを背負っているのに対し、流衣は両腕で抱えきれぬ分だけ。オルクスも薪を一本両足で掴んで運んでくれた。

薪を各家に配ってから、その足で村長の家に向かう。

「こんにちは、リドです。オルドフさんいらっしゃいますか？」

リドが村長の家の戸を叩くと、中から三十代くらいの女性が顔を出した。腰まである茶色い髪を三つ編みにしている、穏やかそうな人だった。

「あら、リド君こんにちは。お父さん、今さっき酒場に出かけた所なのよ」

「酒場ですか？ まだ日は高いですけど」

村長が堅物なのを知っていたリドは、日のあるうちから酒を飲みに行ったという話に目を丸くする。それに小さく吹き出す女性。

「違うわよお。お酒飲みに行ったんじゃない、話し合いに行ったの。隣町から伝令が回ってきたんですって」

「伝令？」

「ええ。勇者がどうとかっていう話と、ここ最近活躍してる盗賊団の話をしてたわ」

「！」

タイムリーな情報にリドは息を呑み、思わず流衣の方を振り返る。流衣も流衣で驚いていた。

すると女性は流衣に気が付いて、軽く目を見張る。

「あら、その子どうしたの？ 初めて見る子だけ」

「あー、なんか道に迷ったらしくて森をさ迷ってたんすよ」

それで村長に話をと思つて、とリドは付け加える。
女性はそうだったのと驚いて、

「あの森って遊び場にちょうど良いものね。次からは気を付けなさいね。」

につこりと、どこかずれている気のする注意をした。

流衣は素直に頷いた。

「あのさあ、お前の事情はこの村の人達には黙つとけよ」

酒場の方へ歩きながら、リドが言う。

流衣は不思議に思う。

「どうして？」

「どうしてつてお前、こういう村の人間つてのは迷信深いからだよ。異界人なんて聞いたら追い出されるぞ」

「でも君は信じてくれたでしょ？」

「俺はこの村に流れ着いた者で、元からここに住んでたわけじゃねえし、迷信なんてものは信じてねえんだ。風変わりつてよく言われている」

流衣は、目の前を颯爽と歩くリドを見る。流衣より一、二歳くらい年上に見えるリドは兄貴然としていて、頼りになりそうな印象だ。

(これで風変わりなら、僕は相当の変人になつちゃうな)

そう思い、他の者には他言しないようにしようと思つて決める。

「分かつた、他の人には黙つとくよ」

「おう」

そうこうしているうちに酒場に着いた。

酒場はくすんだ薄茶の煉瓦造りの壁と干草で葺かれた屋根をしており、一軒家をまるごと店に当てているようだ。出入り口である緑色に塗装された扉の上部には、酒の絵が描かれた看板が釣り下がっている。

リドについて中に入ると、酒場の中では村の男達が集まって何事

か話していた。どこか陽気な気配である。

彼らはリドを見つけると明るく挨拶し、それから流衣に気付いて訝しげな顔になる。そこにリドが適当にそれらしくでっちあげた話
森をさ迷っていた旅人談　をして、男達の中で一番の年長者である老人に問う。

「　　ってわけで、困ってるみたいだから今日一日俺の家に泊めようと思うんですけど、良いですか？」

老人　オールドフは灰色の短い顎鬚あごひげを手で梳きながら、じろじろと流衣を見る。

「ふうむ、お主がそう言うんなら大丈夫か。一日くらいなら、まあよかるう」

許可が下りたので、流衣は頭を下げる。

「ありがとうございます！　今日だけお世話になりますね」

そう言っ流衣がにっこりと笑うと、ガチャンと何かが割れる音がした。

びっくりしてそちらを見たら、カウンターでグラスを磨いていたらしい少女と目が合った。二つのお下げを垂らした少女は何故か頬を上気させてこつちを見ていたが、グラスを床に落として割ったことに気付くとあたふたと床にしゃがみこんで片付けだした。

結構ドジな子なのかなあと思いつつ首を傾げる流衣。目の前の男達も不思議そうな顔をしていた。

「大丈夫？　メアリー」

カウンターの奥にある台所から、おかみさんと思われる中年女性が箒とちりとりを持って駆けつける。

メアリーは何事かをコソコソとおかみさんに話し、おかみさんはこつちを見た。

「あれま、本当だ。カワイイね」

そのおかみさんの視線を辿ると何故か自分に行き着いた。流衣は首を傾げ、更にその視線の先を見る。すると目が合った中年の男が、まさかとばかりにブンブンと首を振った。

流衣は何がカワイイのか考え、自分の肩に乗っているオルクスのことだと気付く。

「あ、ありがとうございます。良かったね、オルクス」

オルクスに笑いかけたら、オルクスは身体を前後に揺らして頷くような動作をした。

すると今度はゴトンと音がし、箒が倒れる。

おかみさんまで表情を緩めているので、オルクスの可愛さは万国共通なんだと流衣は誇らしくなった。

「お前……」

リドは呆れた目をして何か言いかけるが、そのまま口を閉じた。

「？」

流衣は首を傾げ、肩に乗っているオルクスと目を合わせた。

小動物みたいな見た目と頼りなさは、庇護欲ひごよぐかなにかを掻き立てるらしい。

笑っただけで酒場のおかみとその娘を落とした流衣を見て、リドは不思議と同情を覚えた。

これが格好良いとか素敵とかいう言葉だったらイラつきもするだろうが、褒め言葉が「カワイイ」では同じ男として同情を禁じえない。他の村の男達も同様に思ったらしく、可哀相にという目を流衣に向けている。本人が肩のオウムのことをカワイイと言ったと思っているのがせめてもの救いか。

空気がしんみりしてしまったので、それを払拭せんとばかりにリドは村長に質問を投げる。

「あ、オルドフさん。さつきポーラさんに伝令の話を聞いたんですけど、なんなんですか？勇者って」

「おお、あの話かの。最近、魔物が異常行動をとりだしたのは知っておるじゃろっ？」

オルドフの問いに、リドは頷く。

ここ二年程の間、急に魔物が妙な行動をとったり凶暴化しているという噂が流れていた。前ならそんな場所に出てくることはなかったのに、という場所で鉢合わせ、それほど危険でもなかった魔物に襲われて重症を負ったという話だ。

「その原因が北の山に魔王が誕生したせいだとカザニフの託宣で出たのじゃと。それで今日の早朝に勇者を異界より召喚したんじゃそうだ。これでそのうち片が付くだろうから安心しろという伝令じゃな」

オールドフは顎鬚を指先でいじりながら、面白そうに口元を歪める。

「あの、その勇者ってどこにいるんですか？」

流衣が話に食いつくと、オールドフは微笑ましげに目を細める。勇者に憧れるとは子供らしいとも思ったのだろう。

「今はカザニフの神殿にいるはずじゃ。何じゃ、お主、勇者に会って仲間に入れて貰おうと言い出すクチかね？」

「いえ、単に会ってみたいなって」

「そうかそうか」

ますます微笑ましそうにするオールドフ。子供は無邪気で良いのう、と呟く。

それに流衣は複雑そうな顔になった。

「あのう、僕、もう十五歳なんですけど……」

爆弾発言に酒場内がどよついた。

「なっ、坊主、そのなりで十五か？」

「嘘つくなって、どう見ても十二かそこらだろー」

冗談だと流そうとした大人達に、流衣は消え入りたそうに身を縮める。

「……冗談なら良かったんですけど、本当です」

酒場内は静まり返った。

それから、実際年齢十五といっても子供に変わりはないことに気付いた大人の一人が慌ててフォローに走る。傷つきやすい年頃だから思いつめたら悪いと思っただけらしい。

「ま、まあ、それでも十五は子供だからな」

「そうそう、気にしなくてもあと三年もすれば背が伸びて、歳相応に見られるさ」

「三十年経ちや嫌でも貫禄かんろくつくしな！」

誰かが冗談めかして言ったことに、「言えてらあ」と笑いが起る。

それで納得したようで、流衣も一緒になって笑った。

「あー、それじゃオルドフさん、これで失礼します。話ありがとうございます」

リドは聞きたいことは聞いたので、村長に礼を言って酒場を後にすることにする。

あんまり居座ると、流衣が余計な墓穴を掘りかねない気がした。見た所、約束事は守りそうだが、うっかりで暴露しそうなタイプだ。流衣が妙な奴だとばれたら、ようやく得てきたリドの信用もなくなってしまうって困る。

「待ちなさい、リド。あと一つ話しておく。」

ここ二ヶ月程だが、東部である盗賊団の活躍が目立つらしい。襲われた村や町は焼かれ、金品は盗まれ、男は殺し、女子供を人買いに売り飛ばすという非情な集団だそう。この村も他人事ではないから、警戒しておいてくれ」

「分かりました」

リドはそう頷いて、それから何気なく尋ねる。

「ところで、その盗賊団の名前はなんていうんです？」

「レツディエータだそうじゃ」

* * *

酒場で盗賊団の話聞いてからというもの、リドは浮かない顔をして黙りこくっていた。

盗賊団に嫌な思い出でもあるのかもしれない。

さばさばしてはいるが、自分からしても怪しい人物としか思えない流衣を泊めてくれるというし、リドは良い人なのだろうと流衣は思い、そんな人を煩わせるのも嫌だったので、気付かれないようにそつと丸太小屋を出た。そして庭先の木陰に腰を下ろす。その際、鞆から 知識のメモ帳 も持ってきた。

『何やらあのリドという少年は悩んでいるようですね』

オルクスが流衣の右膝にとまり、クリツとした目で見上げた。

「そうだね、だから静かにしよう」

流衣はやんわりと言い、オルクスが頷くのを見るとメモ帳を広げる。

『何か気になることでも？』

「うん。あの勇者って人のことと、カザニフについて知りたくて」
そう呟くと、メモ帳に文字が浮かんだ。

勇者とは、魔王を倒すのに一番相応しい人物のことである。

今回の勇者は地球という世界の日本国より召喚された。

名前は川瀬達也^{かわせ たつや}。歳は十七で、寡黙^{かもく}な少年である。

「川瀬達也？」

『お知り合いで？』

「ううん、知らないよ。歳も二つ上だし」

『左様ですか』

でも名前が分かったただけでも行幸だ。それにやはり自分と同じ世界から呼ばれたのも分かった。

「じゃあ、カザニフは？ 地図でいうとどの辺？」

メモ帳に地図が浮かび、世界地図のちょうど中心地点を示す。その下に説明が浮かぶ。

カザニフ：五芒星^{ごぼうせい}を描く^{えが}ように建てられた、五つの神殿のほぼ中心部に位置する神殿のある都を指す。

神殿は別名を中央神殿というが、正式名称はカザニフ神殿である。

世界各地にある神殿の最高峰である為、各地から訪れる巡礼者により栄えている都である。

流衣は地図を見て溜め息を零す。

「ここが東部なら、カザニフがあるのは北西の方だ。ルマルディー王国内ではあるが、地図で見ると遠すぎる。」

「オルクス、カザニフまではここからだどれくらいかかるかな？」
『そうですねえ』

オルクスは地図を見下ろして、少し考えるように小首を傾げる。
『坊ちゃんが旅慣れていないことと、徒歩で行くことを考えたら、早くても三ヶ月つてとこででしょうか』

「そんなにかかるの!？」

『ええ、遅れると半年つてところですね』

「……………」

ガーン。

そんなにかかるなんて、反則だ。

半年後にカザニフに勇者がいるとは限らないし、もしかしたら用事を済ませて帰っているかもしれない。

女神ツィールカはかなり離れた場所に流衣を放り出していつてくれたらしい。鉢合わせたら可哀相だという慈悲なんだろうかこれって。

「帰る方法探しに集中した方が良さそうだね。もし勇者に会えたらラッキーくらいに思っとくか」

それが妥当だろう。

というかそれしかない。

流衣は大きな溜め息をついて、メモ帳を閉じた。

三章 風見のリド（前書き）

*この話中、流血表現や戦闘表現があります。

三章 風見のリド

盗賊団レッディーエータの名を聞いて、リドは気が落ち着かなかった。

リドには親や家族の思い出はほとんどなく、故郷の名前すら思い出せない。

それはリドが八歳の時に起きたある事件が原因だった。

どこかの家の庭先で遊んでいたら、見知らぬ者にさらわれてしまったのである。そしてその見知らぬ者の手で売られた先が、盗賊団レッディーエータだった。

それから五年間、盗賊団で下働きのように働かせられ、時には盗賊稼業の手伝いまでさせられた。といってもリドはまだ子供であったので、盗品を運ぶという程度ではあったが。

しかし十一歳になった頃、リドのある力に気付いた親分により、最前線に参加させられるようになった。それが嫌で仕方なかったのだ、十三歳の時に盗賊団を逃げ出し、このカザエ村まで逃げてきたのである。王国で最も東にある辺境までは探さないだろうと子供ながらに考えたのだ。

リドがダガー使いとして長けているのも、その頃のこと起因していた。だから本当はダガーなんてものは大嫌い、すぐにでも捨て去りたかったが、もしものことを考えるとそれも出来なくて今に至っている。

ヒュウウ

リドの身を案ずるように、リドの耳元で風が渦を巻く。

「大丈夫だ」

台所で包丁を使いながら、囁く程度の声で呟く。

すると風は収まり、野菜を切るトントンという軽い音だけが台所

に響いた。

風切ふうせつのリド。

それが、盗賊団にいた頃のリドの呼び名だった。

「ご馳走になります……」

夕食時、リドの出してくれた料理を前に流衣は身を縮めた。

パンとサラダとスープという簡素な料理ではあるが、作ってくれたことに申し訳なさが全快だ。

「んな畏まらなくていい。一人分作るのも二人分作るのも変わらねえよ」

リドはさっぱりと言い切った。

それなら、と、流衣は「いただきます」と両手を合わせてからパンに手を伸ばす。

「そっちのオウムは何食べるんだ？ 悪いけど何にも用意してねえぜ？」

「わては、自分で探すので、必要ありません」

「そうかい、ならいい」

オルクスの返答に、リドは小さく頷いた。

流衣は単純に疑問に思っただけでオルクスの方を向く。

「オルクス、探すってどういうけど、実のところ何を食べるの？」

『あまり食事は必要ないのですが、ときどき虫や植物をつまんで食べます』

「虫は分かるけど、植物も？」

『ええ、花なんかは好きですね』

オルクスにとっての花はおやつのような嗜好品と同じなんだそう
だ。

へえ〜と感心する流衣に、リドが聞いたそんな顔をしているので、
オルクスの話をそのまま伝える。

「まんま鳥の餌だな」

あまりに普通の答えだったからか、リドは少しまらなさそうに言う。

『君の周りの精霊を食べてもいいのですが、神様がたに叱られたくないので食べません』

オルクスが呟いた不穏な言葉に、流衣はビクリとする。

精霊を食べるって、響きの怖い。

「何だ？」

「えと、オルクスが、リドの周りにいる精霊を食べてもいいけど、神様に怒られるのが嫌だから食べないんだ、って」

それにはリドも目を丸くした。

「精霊？」

オウムの方を見て、問い返す。

「気付いて、いないのですか？ 君は、風の精霊に、好かれて、いるようデス」

「……………」

リドが言葉を失くした瞬間、風が巻き起こって鋭利な刃となり、オルクスに襲いかかった。

驚いた流衣であるが、嫌な予感がしたので咄嗟にオルクスを腕で庇う。

「いつ」

突き出した右腕に痛みが走る。

肘の近くの腕にざっくりと切り傷が出来、そこから血がポタポタと落ちてテーブルに小さな血溜まりを作った。

流衣は信じられない気持ちで傷口を凝視しながら、痛みで目の端に涙を浮かべた。

「いたた、痛い痛いっ！」

今、何が起こったんだ！？

全く理解出来ないのだが、傷は本物で、痛みも本物。

「ルイ！」

理解出来なかったのはリドらしい。流衣が怪我をしたのを見る

や、血相を変えて小屋の奥に飛んでいき、手当て用品の入った道具箱やタオルを持ってきた。

「これで止血を……っ」

若干焦った様子ながらてきぱきと怪我より上の腕でタオルをきつくしぼり、怪我自体も手当てする。

「坊ちゃん、わてを庇^{かば}うなんて何てことを！ あれくらい避^よけられますし、防^{ふせ}げますっ！」

オルクスがケーツケーツとオウムみたく鳴いて叫びながら、流衣の頭の中にも言葉を飛ばしてくる。

頭の中で騒ぎ立てられ、流衣はあまりのうるささに眉をしかめつつ返す。

「そんなこと言われても、庇^{かば}っちゃったんだから仕方ないじゃないか。大体、あれって何なの？」

「風だ。風の精霊がオルクスに攻撃したんだ」

流衣の問いに、リドの方が答えた。

それからリドは怒ったような顔で呟く。

「俺は何にもしてないのに、何でこんな……っ」

それにはオルクスが答える。

「わてが精霊を食べる、などと言ったノデ、精霊達が、怒ったようです。敵だと、みなしたのでしょう。まあ、わてだって、仕返しする、つもりでしたガネ」

ただだどしく言ってから、坊ちゃんに怪我させるとは……とオルクスが黒い目を光らせたので、流衣は慌てて止めに入る。

「駄目だよ仕返しなんて。仲良しが一番。平穩が一番」

そう言いながら、なだめる為に空いている左手でオルクスの背中を撫でる。オルクスは気持ち良さそうに目を細め、仕方ないですねと呟く。

「坊ちゃんガ、そうおっしゃるナラ」

流衣はほーっと安堵の息をついた。

血も止まったので落ち着いたのもある。

パサツと乾いた羽音がして、オルクスがテーブルに乗せた腕の隣に降り立った。

「我が力、糧とし、癒しの光、ここに顕あれよ」

オルクスが何かを唱え、怪我が光に包まれた。そして光が消えると、怪我也跡形も無く消える。

「おお、すごいっ。もう痛くないよ、ありがとうオルクス」

「どういたしまして」

おじぎする仕草で頭を下げるオルクス。

何しても可愛いなあとそれに感動する流衣。

「その使い魔、魔法も使えるのか」

目を丸くしてオルクスを見つめるリド。

「イエ、これは魔法ではなく聖せいほう法デス。神に仕える者が、身に着ケルことの出来ル、聖なる力です」

オルクスはさりげなく訂正を入れる。

リドはふうんと気の無い返事をし、傷に巻こうと準備していた包帯を元のようにもう一度巻き直す。

そこでバツの悪い顔になった。

「悪かったよ、風の精霊が勝手なことして」

「いいよ、気にしないで。リドは魔法使いだっただね、驚いた」

あわよくば魔法を教えてもらおうかと心の隅で考えながら、流衣は言う。

「俺は魔法使いじゃねえよ。風の精霊には好かれてるし、風も操れるけどな。魔法は使えない」

「え？ よく違いが分からないんだけど」

魔法を使えば魔法使いつて 知識のメモ帳 が言っていたのだが……。

困り果てている主人を見かね、オルクスが口を挟む。

「リドのようナ、精霊に好かれる者のコトを、『精霊の子』と、呼ぶノデス。彼らは精霊の祝福を受ケテ術を使うノデあり、魔法で術を、使うわけでは、ないのデス」

言われてみて、魔法についての解説を思い出す。「魔力と言葉により自然界に宿る精霊に働きかけ、それにより現象を引き起こす」って書かれていたな、確か。

「つまり、魔力も言葉もいらなくて、精霊に働きかけられるってこと？」

思いついたことをそのまま訊いたら、オルクスが喜んだ。

「ソウデス、ソウデス！ 流石は坊ちゃん、やっぱり、思ったヨリ、賢い方ですネ！」

「……思ったよりって」

そりゃあ見た目は普通で、むしろ地味で、頼りなさげなのは自分が一番理解しているが、口に出されるとこちらは傷つく。

それに、流衣は頭の回転はそこそこ回る方なのだ。成績は上位ではないし中の上くらいとはいえ、読書家なのが影響してか、言われた言葉を噛み砕いて自分に覚えやすいようにして記憶したりする。だから記憶にも残りやすい。メモ帳の解説だって、そのまま暗誦するのは無理でも、要点だけは覚えている。

「申し訳ありません！ つい本音ガツ。ケーツ！」

慌てたせいかわ、オルクスはオウムっぽい鳴き声を上げて騒いだ。

それを見たりドは爆笑している。

「お前ら面白いなあ！」

他人事だと思つて。

流衣は小さく溜め息をつきながら、オルクスは自分のことをどんな風に見ているのだろうと邪推する。あんまり酷い見方をされていないといいのだが。

しかしまあ、これでさっきまでの微妙な緊張感が無くなった。そういえば、まあ良いか、という気持ちになる。

さっきの血溜まりを雑巾で手早く片付けると、夕食を再開した。

夕食後、せめて片付けくらいは手伝おうと流衣は皿洗いを買つて

出た。

小さく鼻歌を歌いながら盥たらいの水に浸けた皿を布で汚れを拭くように洗い、乾いた布で拭いて横に重ねていく。

最後の一枚を手にしたところで、いきなり鐘の音がカンカンと響き始め、驚いて落としてしまう。

「ああー……っ」

水場に皿の破片が散乱し、呆然とそれらを見る。

しかしどうにも嫌な予感がしたので、それは放置してテーブルの置いてあった部屋に顔を出す。

「あの音、何？」

すると、部屋には武器を手にして、今にも家を出て行くこととするリドの姿があった。

「緊急の警鐘けいしようちゅうだ！ お前はここにいろよ、やばそうだったら裏口から逃げるんだ、いいな！」

それだけ言い捨てると、リドは丸太小屋を出て行ってしまった。

家に残された流衣はというと、オルクスに問いかける。

「一体どうしたんだろう」

何故か動悸が激しい。

嫌な予感がした。

この世界に来る前みたいに、背筋がぞくぞくとする。嫌な兆候だ。何か問題が起きたんでしょう。警鐘ということは賊が出たか魔物の襲撃かどちらかでしょうが」

オルクスは冷静に判断する。

(賊……)

流衣はそれを聞いて、村長が盗賊団について話していたのを思い出す。

『しかしまあ、ここにいれば大丈夫でしょう。ここは村から離れていますし、何かあれば森に逃げればよろしい。それにわてもついで

おりますから……、って坊ちゃん、言ってる側からどこに行くんです？」

小屋の出入り口に向かっていく流衣に、オルクスが不審げに声をかける。

「ああ、鍵をかけるのですね？ 用心に越したことはありませんもののね！」

「違うよ、オルクス。僕も様子を見に行くんだ」

「はっ？ おっ、お待ち下さい！ 坊ちゃんが行ってどうするんです？ ここは村人に任せ、身を隠すのが先決かと！」

「どういふ事態かの確認くらいしなきゃ、そっちの方が危ないよ」
情報は早く手に入れないと命取りになる。

しかし確かにオルクスの言う通り、用心に越したことはない。流衣は 知識のメモ帳 をシャツの胸ポケットに、財布をズボンのポケットに押し込んでから外に出た。もし何かあつて戻れなかった時の最低限の処置だ。

外に出ると、薪の一つを武器代わりに拾いあげ、村の方へと走った。

嫌な予感がする。

……これもきつと当たるんだろうな。

鳴り響く緊急の警鐘に、村へと駆けつけたリドは呆然と立ち尽くした。

村が赤々と燃えていた。

それほど多い方ではない家の幾つかが燃え上がり、悲鳴と怒号に包まれている。

道端には村の男が何人が血を流して倒れており、母親とその子供が蔽つた顔をした男達に引きずられるように連れ去られようとしているところだった。

盗賊団の名前を聞いた時に感じた不吉な予感は的中した。盗賊だ。

リドはためらいなく賊に走り寄り、腰に提げた二本のダガーを鞘から引き抜いて一閃した。

賊はうめき声を上げることなく地面に倒れ伏し、母子は泣きながら礼を言い、リドの方に駆けてくる。

「森に逃げる！ 逃げ！」

母子を森へと誘導し、リドは更に村の奥へと走り出す。

（村長、村長はどこだ？）

途中で出くわした賊を軒並みダガーの餌食にしながら、オールドフを探して村を走り回る。

あの人は、ボロス爺さんと同じくリドを村に受け入れてくれた恩人だ。賊に殺させるわけにはいかない。

そうしてようやく念願の人を見つけた時、オールドフは山賊然とした大男に、大男の身の丈はある大きさの大剣を振り下ろされんとしているところだった。

「やめろ っ！」

リドは風を足に纏って瞬発力を上げ、一気に距離を詰める。

そして、ギリギリのところで大剣を受け止めた。

激しい剣撃の音が場に鳴り響く。

「オールドフさん、今の内に逃げて下さい！」

刃を受け止めたまま、じりじりと力比べをしつつ、オールドフに叫ぶ。

「し、しかしっ」

ためらう素振りを見せるオールドフに、余裕がないので怒鳴りつけるように言うリド。

「いいから！ ここは任せて、行ってくれ！」

懇願に近い叫び。

それに押され、オールドフは老体に鞭を打って走り出す。そして、その先で他の村人に連れられ、森の方に逃げていった。

オールドフが無事逃げたことを視界の隅で確認すると、リドは渾身の力で剣を弾き返し、後ろへと飛び退ってまたダガーを構えた。

大男は愉快げに鼻を鳴らす。

「ふん、やるじゃねえかクソガキ」

リドは黙ったまま大男を睨みつける。

大男は筋骨隆々とした中年の男で、黒い髪はぼさぼさ、角ばった顔立ちは無精ひげが目立っていた。その頭に白いバンダナを巻き、返り血を浴びてところどころ黒くなった深紅のシャツと黒いズボンを身に着けている。暗い茶色の目は鋭く、猛禽類を思わせた。

リドの周囲を、仲間の盗賊達が囲む。逃げ場を封じたのだ。

ここで、仲間の内の一人があつと声を上げる。

「てめえ、リドじゃねえか！ こんな所にいやがったのか！」

すると大男の顔つきがすつと冷たいものになる。

「ああ？ あーあー、あの、風切のリドなんて呼ばれてた小僧じゃねえか。確か四年前に逃げ出した臆病者」

「お前らのところで働かせられんに嫌気がさしたんだ！ 俺は臆病者じゃねえ！」

リドは大声で男の言葉を切り捨て、ちゃきりとダガーを構え直す。

「俺はもう、あの頃みたいなガキじゃない。この村を、てめえらの良いようにはさせねえ！」

大きく啖呵を切ると、足に風を纏わせ、地面を蹴る。

「！」

大男は一瞬リドの姿を見失った。

リドは風を使って瞬発力を上げ、大男のすぐ後ろに回りこんだのだ。そのまま勢いをつけて大男の頭に蹴りを叩き込む。

男は避けることも出来ず、蹴られた衝撃で吹っ飛んだ。そのまま民家の脇に置いてあった木箱にどおと音を立てて突っ込む。

「お頭！」

手下の一人が悲鳴じみた声で叫ぶが、大男はすぐに身を起こし、頭を振る。

「ふん、確かにちったあやるようになったか」

そして、にやりと、薄ら寒い笑みを口にたたえた。

「だがまあ、俺よりは下だ」

起き上がった大男は、大剣を構える。その剣の刀身に、ボオと紅蓮の炎が絡みついた。

「な……っ！」

リドは剣の炎を見て、息を呑む。

こいつ、魔法使いだったのか？

こき使われるか殴られた思い出しかない盗賊団レッディーエータの頭が魔法使いだったとは初めて知った。

だが、こちらとて風の精霊の子。負ける気はしない。

リドはすぐさま身を落着けると、ダガーを構え、刃に風を巻きつけた。これにより刃の切れ味がぐっと上がるのだ。

「はああっ！」

そして、裂ぱくの気合とともに、大男へと斬りかかる。

ガギン！

剣撃の音が高らかに鳴り響く。

あとは風と炎のせめぎあいである。

巻き起こった風は熱風となり、周囲で拳を握って戦いを見守る盗賊達に吹き付ける。

二人は一度離れ、また刃を結び、激しい攻撃を押収する。

端から見ると大男に斬りかかっては弾き飛ばされる子供のように見え、いいように遊ばれているようにも見えた。

何度目かの剣撃の音が場に響き、そこで大男が急に不敵な笑みを浮かべた。

「爆ぜろ！」

その声とともに、剣に巻きついた炎が一気に膨れ上がり、爆音が轟いた。

今まで外れたことのない嫌な予感は今回も的中した。

森の方へと逃げてくる村人達と出くわし、簡単に事情を聞く。

盗賊の襲撃があり、避難中らしい。それで村人達の何人かが怪我をしているらしい。

村人達の恐怖と不安を嗅ぎ取って、流衣もまた恐怖を覚えながら、去ろうとする村長に慌てて尋ねる。

「リドが村に向かったんですが、ご存知ないですか？」

すると、村に残って盗賊団を引き止めてくれているという返事が返った。

そう言うなり、村長は村人達を連れて森へと行ってしまふ。素性の知れない旅人の安否より自分達を優先するのは当然だ。

『坊ちゃん、わて達も村人達と逃げましょう！』

オルクスがそう急かす。

「う、うん、分かってるけど……」

そう返しながら、流衣は迷っていた。自分が駆けつけたところで助けになるどころか邪魔にしかならない。それは分かっている。

でも、彼の手助けになりそうな村人達は逃げてしまったのだ。

村人達が逃げた方向を見つめながら悩んでいると、村の方で爆音が起こった。

「……………っ」

流衣は唇をぐつと引き結んだ。

ともすれば震えだす足を叱咤して、村の方に行く覚悟を決める。

『ぼ、坊ちゃん！？』

オルクスの制止を無視して村へと走りだす流衣。

怖い。

怪我をするのも、暴力を見るのも。

言葉の暴力ですら恐ろしく感じるから、この先にあるだろうものを見るのは怖かった。

でも考えてみて欲しい。

あのさばさばとした少年は、そこへ迷わず突っ込んでいったのだ。

「うつつ、もう、どうにでもなれ！」

それでもやっぱり流衣は流衣なので、悲壮な顔で目尻に涙を浮か

べ、必死で手足を動かして走るのだった。

いきなり剣が爆発するとは予想外だった。

爆発の衝撃で吹き飛ばされ、背中を地面に打ちつけたリドは激しく咳き込んだ。直前で風でもってガードしたからまだマシだが、それをしていなかったら真っ黒い焼死体が一つ出来上がっていたことだろう。

「ちっ、運の良いガキだ」

大男は悪態をつき、忌々しそうにリドを見下ろす。

しかし打ち付けた衝撃で動けないと気付くと、口元を意地悪くひん曲げた。

「だが、その運もここまでみてえだな」

まるで恐怖を誘うようにゆっくりとリドへ近づいていき、

「蹴りの分だ」

と言って、腹に蹴りを入れた。

「ぐっ」

リドは苦鳴を漏らす。

それに反応した風の精霊達は、すぐさまリドの周りに渦をなし、鋭い刃となって大男を急襲する。

流石にそれには対応しきれず、大男の腕や足に細かい裂傷が出来た。

「つつつつ、この、ふざけやがって!」

頭に血が昇った大男は、大剣を振りかざす。

「死にやがれっ、クソガキ!」

そうして思い切り振り下ろそうとした刹那、しかしいきなり飛んできた薪が額を直撃し、思い切り空振った。

一瞬、星が見えた気がしたのを頭を振って追い散らし、勇気ある闖入者を睨みつける大男。

そこには、青い顔をしている子羊が一匹、震えながら立っていた。

その子羊こと折部流衣は、どう見ても悪役にしか見えない怖いおじさんを必死で睨み返した。

「あああ、あの、やめる！　　というかあの、やめて下さいというかええと、すみませんーっ！」

どもりながらも制止しようとして、結局謝ってしまう流衣。謝るなら最初から口を出すなという話である。

『坊ちゃん、頑張って！』

健気な使い魔は、そんな主人を応援する。

「てめ……、逃げろつつつたる……が」

あちこち傷だらけのリドが、地面に伏したまま、呻くように言う。それを目にしたら、頭が真っ白になった。

「リド！」

急いで駆けつけたかったが、すぐ側に大男がいるので出来ない。リドは動けない様子だが取り立てて大きな怪我はしていないようだ。それをざつと確認し、ひとまず安堵する流衣。

「あん？　　なんだあ、お嬢ちゃん。いけねえなあ、こんな所にいちやあ」

大男が愉快げに口元を歪める。

それにつられ、手下の盗賊達も下卑た笑いを漏らした。

これには流石の流衣もむっとした。

「僕はお嬢ちゃんじゃなくて、男だ！」

思わず言い返すと、ますます楽しげな顔をする大男。

「お嬢ちゃんみたいなお坊ちゃんが何の用だ？」

更にむかつとするが、流衣は質問に口ごもる。一応探しにきたのだが、探してどうするかは考えていなかった。ここは助けて逃げることに目的を変更しよう。

（考える、考える。どうすればリドを助けられる？）
そこでさっきの爆音を思い出した。

そうだ！ 点火の術だ！

「……一応、助けに、かなあ」

大男の問いに返しながら、魔力を練っていく。
右腕が青く光った。

（さつきみたいに、ロケットのイメージで）

そうすれば初歩の術でも。

大男がそれに気付いた瞬間、流衣は叫んだ。

攻撃出来る！

「ファイアー！！」

腹に力を込めて思いきり叫ぶ。

すると、大男を基点とし、大爆発が起こった。

爆発により大男がブスブスと煙を上げて倒れた後の変化はすさまじかった。

頭が負けたと見るや、手下達は魔法使いがいるということに恐れをなし、それこそ蜘蛛の子を散らすように逃げ出したのである。

リドは地面に仰向けになったままそんな盗賊団を見送って、あいつらもこの男に押さえつけられていただけなのかもしれないと頭の隅で考えていた。全員がそうではないだろうが、何人かくらいはいるのではないだろうか。

あんな、炎の術を使うような奴だ。あれがなくても凶暴で恐れられていたのだから、手下達の恐怖もひとしおだろう。

「は、ははははははっ」

リドは声を立てて笑った。

あちこち痛いのは、肋骨はみしみし悲鳴を上げてるは、格好悪いことこの上ない。

一人で片を付けるつもりだったのに、よりによって、見るからに臆病そうな少年に助けられるなんて。

笑い出したら止まらなくなり、無理矢理身を起こしながらそれで

も笑い、肋骨が痛んで呻きながら、やっぱり笑っていた。

今までの呪縛から解き放たれたような、清らしい気分だった。

これでもう、俺は盗賊なんかじゃない！

盗賊団の為ではなく、村の為に戦ったんだ。

その自信が、リドの気持ち大きき解き放していた。

しかし、そこでいきなり流衣が倒れこむように座り込んだので、

リドはぎょつとして笑うのをやめた。

「どうした、どっか怪我してるのか？」

「……怖かった」

流衣は今頃になつて震えがやって来たらしく、ガタガタと震えながら顔色を悪くしている。声すらも震えていて、心底怖かったのだと推察できた。

「お前……、あれだけすげえ魔法を使つといて、怖いのか？」

流衣自体はそんなに怖い目に遭っていないように見え、リドは不思議に思った。

「怖いよ……。ここに来るまでに、し、死体とかあつて。それに、君は倒れてたし、あと少しで死ぬかもしれなかった」

両手を地面について、カタカタと小刻みに震えながら、流衣は静かに泣いていた。雫が地面に落ちて沁みこんでいく。

「あんな、ちよつと強く念じただけで爆発なんて起こした……。怖くてたまらないよ。ここはこういう場所なんだ……」

耐え切れなくなったのか、流衣は固く目を閉じて、嗚咽混じりに泣き出した。

「坊ちゃん……」

肩のオルクスはそれ以上何も言えず、無言のまま頬へと身を寄せた。

異国の雰囲気をした小さな少年がオウムの姿の使い魔と寄り添い、悲鳴を上げるように泣いている様を、リドもまた言葉を失くして見守る。かける言葉が何も思いつかず、もしかけられたとしても白々しくなるだろつ為に口にも出来ず。

ただただ流衣が泣き止むのを待ちながら、とある決意を胸に覚えた。

「まさか一緒に来るなんて思わなかった」

柔らかい朝の日差しの差し込む道を、リドと並んで歩きながら、流衣はまだそのことが信じられなくて意外そうに言った。

「お前それ何度目だよ」

リドが苦笑気味に返す。

でもやっぱり信じられない。

リドの怪我は、オルクスに頼んで治してもらった。他にも村人達の怪我也治してもらったのだが、死者を八人も出して村は沈んだ空気に包まれていた。

それでも村長には感謝された。あの盗賊団は男は皆殺しにするのが普通だったようで、流衣の魔法とリドの剣技のお陰でむしろずつと生き残ることが出来たからだ。

ちなみに余談であるが、あの盗賊の頭は魔法使いではなかったらしい。魔法効果を付与した剣を使っただけなんだとか。それでも脅威には変わりはないが。

そんなことを白状させられた頭は、王国の辺境警備隊に引き連れられて村を去っていった。今までの罪状が罪状なので、極刑になるのは間違いないらしい。今後、逃走した仲間の炙り出しに精を出すと、辺境警備隊の役人は豪語して帰った。そうなると良いと流衣は思った。

「今回の件で、俺は正式に村人って認められたんだ」

リドは清清しく笑った。

「帰る場所が出来た。ありがとう。感謝してるんだぜ、これでも」「僕は大了たことしてないと思うんだけどなあ。頑張ったのはリドでしょ？」

そこで礼を言われるのが流衣には心底不思議だ。

「それでついてくるなんてのも、何だか悪い気がするしなあ」

正直、現地人と行動できるのは助かるのだが、恩にさせて引っ張り出したみたいで心苦しい。

「それだけなわけねえじゃん。今回のこと思った」

「え？」

「お前、野放しにしてると死ぬ」

「うっ」

痛いところを突かれ、流衣は怯んだ。

確かに、その辺を歩いてるだけで野垂れ死ぬ自信はある。

「そんなこと、使い魔のわてが、させませんヨ！」

オルクスが肩から叫んだ。

「……ま、他にも理由はあるんだけどな」

そう呟いたリドだが、そのことについては深く触れない。

実の所、怖いと言って泣いていた流衣を見て、あまりの心の脆さに放つといたら壊れるんじゃないかと不安になったのだ。あとの残りは、そんなことで泣く流衣だから、今後どうなるのかについていつて見届けたくなった、という理由だ。

(教えてくれる気はなさそうだなあ)

横へと視線を投げたリドを見てそう踏んだ流衣は、理由を聞き出すことは諦めた。

どっちにしろ、一緒に旅をするというのは大歓迎である。

「分かったよ、もう聞かない。これからよろしく、リド！」

流衣が笑顔で右手を差し出すと、リドは目を丸くして流衣の手を見る。ひどく驚いた顔で右手を見つめていたが、やがて唇を笑みの形にし、しっかりと握り返してくれた。

「こっちこそよろしく！」

そうして握手を交わしてから、ふいにリドが言いくそつに言う。流衣は、リドが昔「風切のリド」と呼ばれていた話を聞いて、首を傾げた。

「風切？」

「そ。俺はその呼び名が嫌いでさ、何か別の呼び名を考えて欲しいんだわ」

「うーん、そうだなあ」

流衣は首を僅かに傾げ、考えてみる。

風切というのは、リドが風を扱うことからついた名なのだろう。ということとは、風にまつわる名前が良いわけだ。

「あ、そうだ。風見鶏のリド、なんてどう？」

「……だっせー」

しかし思いついた名前は、あっさり切り捨てられた。

聞いた俺が間違ってた、みたいな目をされたので、流衣はそこからひねって答える。

「じゃあ、風見かぜみのリド。“風で切る”んじゃないくて、“風を見る”から。平和っぽくて良いと思わない？」

「なんか、適当にでっちあげたみたいなのが……。風を見るか。うん、良い感じがするな」

リドはぶつぶつと何度も、風見、風見、と呟いて、しばらくして大きく頷く。

「決まり！俺は今日から『風見のリド』だ。よろしくな、親友！」
ばしんと肩を叩かれて、流衣は反動でよろめきながら目を丸くする。

「し、親友って……」

まだ会って一日しか経っていないのに、親友なのか。

「なんだよ、戦闘を共にして、同じ竈の飯食ったんだから、十分親友だろ！」

流衣の困惑をお構い無しに、リドは陽気に笑っている。

「それって戦友じゃないかなあ。でもまあいつか」

流衣は声を上げて笑った。

異世界二日目、親友が一人出来た瞬間だった。

四章 水の七

「ねえリド、あのキラキラしてるものは何？」

カザエ村から見て隣り町に当たるドーリスへの道で、時々地面に落ちている、青く光っている石を見ながら、流衣は訊いてみた。

「キラキラって？」

ただ普通に歩いているだけなのに、リドは爽やかだ。風の精霊に好かれると雰囲気にも影響されるのだろうか？

一瞬そんなことに気を取られた流衣であるが、道端を示してみせた。

「ほら、あつちとかそつちとか、青くキラキラしてるじゃないか」

「青くキラキラ？」

リドは流衣が指さしているものを見て怪訝な顔になる。

「俺には普通の石ころに見えるけど？」

「えっ、そうなの？」

流衣から見ると、キラキラしていて綺麗だった。

『坊ちゃん、それは天然の魔昌石まじょうせきの欠片ですよ』

物知りなオルクスがさらりと言う。

「魔昌石？」

魔という響きからして、もしかして怖いものなのかもしれない。

綺麗だと思つたものが、いきなり不気味に見えてきた。

「魔昌石って、あれか？ 魔力のこもつた昌石まじょうせきか？ 何、この石がそうなの？」

魔昌石について名前だけは知っているらしいリドが、地面に座り込んでまじまじと石を見る。

「天然の魔昌石の欠片だって。というか魔昌石って何？」

その質問にはオルクスが答える。

『自然界にはときどき魔力のたまりやすい所がありましたね、そういう所にある石が魔力を帯びることがあるのです。そしてそういった石は、そこに落ちているもののように硝子質だったり、水晶のように透明です。自然に落ちているものを天然ものというのです』

「天然ってことは、人工のものもある？」

『ええ、そうです。人工の物は、魔力の無い普通の昌石に、魔法使いなどが魔力を込めたものです。輝きが青ければ青いほど良質とされます。』

一般的に魔法道具を作るのに使い、他には、戦闘で魔力がなくなり戦えなくなるのを防ぐ為の、魔力の回復用に売られていますね。まあ、魔法使いでしたら、普段から魔力を石に移しておいて、それを持ち歩く傾向が強いのですが』

坊ちゃんくらい魔力があれば、そんな必要はありませんよ。

そう付け加え、オルクスは誇らしげに胸を張る。

「俺には青く見えないぜ？」

石を見るのに飽きたリドが、顔を上げて少し不満そうに言った。

「その石の魔力は、小さすぎて、常人には見えないのデシヨウ」

オルクスが片言で言う。

「坊ちゃんは、ソレ八大きな魔力を、持っていていらつしゃいマスから、その程度の物も、視認することが、出来るのデス」

「ふーん、ルイってそんなに大きい魔力の持ち主なのか。人って見かけによらねえなあ」

「……オルクスといいリドといい、僕をどういう風に見てるのかすごく気になるよ」

流衣は小さく溜め息をつく。

『しかし坊ちゃん、その程度の魔晶石でもたくさん集めればお金になりますよ。どうです、拾っていかれては？』

「塵も積もれば山となる、か。うん、分かった、そうするよ」

流衣は素直にその提案に頷いた。

今の所持金は大した金額だから心配はいらないが、方法があるな

ら稼いでおくに越したことはないだろう。

ドーリスの町は田舎町ではあったが、賑やかな喧騒に包まれた町だった。

白っぽい色合いの煉瓦造りの街並みで、いかにも中世ヨーロッパといった感じた。あちこちに植えられている緑とのコントラストが目眩しく、穏やかな美しさを醸し出している。

しかしここがヨーロッパとは違うのは、行き交う人々だった。いかにも魔法使いといったローブを身に着けた者、鎧を着ている者、軽装ながら傭兵だと一目で分かる者、その中でも取り分け驚いたのは、動物が二本足で立って歩いていたり、身体のパーツの一部が獣だったりすることだった。

「ね、ねえリド、ああいう動物っぽい人とか、一部動物な人って、そういう種族なんだよね？」

彼らに聞こえないようにヒソヒソとリドに問いかける流衣。

その横を、威圧感たっぷり、衣服を身に着けた熊が二足歩行して通り過ぎていくので、どぎまぎした。

「まんま動物みたいなのが獣人で、一部が動物なのが亜人だよ。獣人は世界中あちこちに散らばってるけど、亜人は寒さに弱いんで大体が南にいるな。どっちも身体能力は高いが、亜人は動物の姿に化けられるって特徴がある」

リドは飄々と返しつつ、珍しいなあこんな所に亜人がいるの、と、物珍しげに呟いた。

「すごいなあ。こんな色んな種族が共存してるんだ。よく争いになつたりしないね」

「一昔前までは戦争もあったみたいだけどな、今はすっかり落ち着いているよ」

見た通り、と、リドはにやりとする。

それは良かった。

流衣は平和な時代にここに来たことに安堵する。

「あのさ、まず両替したいんだけど、どこに行けば良いのかな？」

「え？ お前、金持ってんのか？」

「女神様に貰ったんだ。金貨もある」

小さい声で流衣が言つと、リドはぎよつと目を見開く。

「はっ！？ そりやまずいだろ。お前みたいな、いかにも怪しいが
服着て歩いてますって感じのが大金持ってたら、怪しまれるぞ？」

「そこまで言うっ？」

流衣は肩を落とす。

ああなるほど、そういう風に見られてるんだ、僕。

自分でも怪しいのは分かってるけれど、それはそれである。

「両替は後だ。まず、その身なりをどうにかしよう。見栄え整えり
や、やつこさんも疑いはしねえよ」

「分かったよ」

そう頷きながら、第一印象って大事なんだなあとつくづく思う流
衣だった。

そういうわけで、流衣は古着屋に連れて行かれた。

新品を仕立てている余裕がないから、らしい。金があるのなら、
本当は体格に合うものを仕立屋で作った方が良いのだが、今の格好
だと怪しすぎるからと説明された。

……そこまで怪しいのか、これ。

流衣の世界では普通の学生服である、真っ黒い学ランを見下ろす
流衣。

「ほら、俺も適当に探してやつから、お前も探せ」

所狭しと服の並んだ店内に尻込みしていたら、リドに背中を押さ
れた。あまりに圧巻だったから目を奪われていたのだ。

「探せって言われてもなあ」

ここでの服装というのが今一分からない。

うーんと唸りながら、服の海の中を歩き回る。適当に一着引つ張り出すが、どう見て　も自分の体格に合っていない気がした。「いらつしゃいませ。お客さん、お困りみたいですね、私の方で選びましょうか?」

うんうん唸っていたら、救いの手が現れた。店員の女性である。二十代前半くらいで、人の良さそうな顔をしていた。

「お願いします。ええとその、旅しても大丈夫そうで、今の僕みたいに怪しくないやつで……」

店員はクスツと笑い、お任せ下さいと言って服をあちこち探し回る。

流衣もまた適当に探していたら、ふと目に付く服があった。

引つ張り出してみると、マントだった。最初はくすんだ青色かと思っただが、光の角度によっては灰色にも見える。手触りも滑らかで柔らかく、その上軽い。

何となく気に入って、そのマントをためつすがめつ眺めていると、さっきの店員がまあと声を上げた。

「お客さん、なかなかの目利きめねでいらつしゃいますのね」

心から感心したように言う店員。

「え?」

流衣がきよとんとしている、店を一周してきたリドも後ろからマントを覗き込んだ。

「へえ、ほんとだ。なかなか良いマントじゃん」

「ええ、何て言ったって、羽竜ウイングドラゴンの羽で織ったマントですもの。こんな上質なのが埋もれてたなんて、私ったら今まで気付かなかったわ」
恥ずかしそうに頬に手を当てる店員。

「羽竜?」

流衣はリドに視線を向ける。

「ウロコの代わりに羽が生えてるドラゴンのことだよ。結構大人しいんで飼育してるところもあるけど、その羽で織った布は貴族連中が買い占めるからあんまり出回ってないんだ」

そうなのか、と、流衣はますます感心してマントを見た。

「羽竜の羽で織った布はすごいんですよ。軽くて、丈夫で、暖かくて。しかも炎と氷の攻撃にも強いですし、洗っても乾きやすいんです！ 極上の一品ですよ！」

店員は拳を握って力説した。

衣服類に目がない人だったらしい。

やや気圧されつつ、おずおずと尋ねる。

「それじゃあ、これも結構値がするのさ。良いなあと思ったんだけどな……」

貴族なんてお金持ちが買うような物を、自分が買えるわけがない。ちよつと残念に思いながら、マントを見下ろす。

「何をおっしゃるんです！ このマントの存在に今迄気付いていなかったんですよ、私。これは私の持論なんですけど、服などの物は持ち主を選ぶんです。きつと服があなたを選んだんですわ。」

分かりました、それなら他の服も見栄えのする物を幾つか選んでみます。それで、占めて銀貨二枚でいかがです！？」

口を挟む暇すらなくまくしたてられ、流衣は目をパチパチする。

「おお、そりゃあ随分安く出たな。良いんじゃないか、それで。お前、金あるんだろ？」

「ええと、まああるけど……」

確か、切り詰めれば銀貨三枚で生活出来るんじゃないかと思ったけど、と流衣は思った。随分安くしてくれて、しかも他の服もつけてくれた上で銀貨二枚もするなんて、流石は貴族御用達の素材ってことか。「じゃあ、買います」

流衣が頷くと、店員は目を輝かせ、他の服を探しに古着の海に突撃していった。

正直、かなり気に入っていたので買わない手はないと思ったのだ。

店員が揃えてくれたのは、青灰色のマントに合うように、白に近

い灰色の上着と黒いズボンだった。あとは黒に近い茶の皮製ベストを合わせてくれた。

学ランの時ほどではないが、全体的に黒めの色合いだ。しかし、マントの色合いが柔らかいので暗い印象にはならない。店員の見立ても素晴らしい。

「まあ、ぴつたり！ マントだつてあつらえたみたいだわ！」

店員は手を叩いて喜び、自分の合わせた服を見てご満悦な様子だ。確かに、マントはちょうど膝丈までの高さで、足に絡み付いて転ぶこともなさそうだ。

しかも、面白いことに白いスニーカーがぴつたりと服装に溶け込んでいる。これなら靴を買う必要はない。

流衣は店員に礼を言つて代金を支払い、古着屋を出る。

学ランを下取りしようかと店員に問われたが断つた。数少ない、自分の世界の品だ。大切に持つておこうと思う。

あとは鞆と武器か。流衣は少し考えながら、リドに声をかける。

「リドもいる物あつたら一緒に買おうよ。どうせ一緒に旅するんだし、お金もあるし」

リドはちよつと片眉を上げ、流衣の頭を軽く叩く。

「そういうことを往來で軽々しく言つんじゃねえよ。怖そうな奴らに目えつけられつぞ」

「うっ、ごめん……」

頭を手で押さえ、流衣はうなだれる。

確かにリドの言う通りだ。幾ら町の活気で浮ついているとはいえ、考え無しだった。

「ま、でも、好意はありがたく頂戴するよ。昨日の件で、ダガーが刃こぼれしてつから、鍛冶屋かじやに研とぎに出さなきゃいけないんだよな」
腰に提げている二本のダガーを見て言つりド。

「それって時間かかるよね？ じゃあそつちから片付けてこよう。

鍛冶屋かあ、初めて見るなあ」

楽しみだ。えへへと流衣は笑う。

そうしてわくわくしていたので、静かに肩にとまっているオルクスがリドに黒光りする目を向けているのには気付かなかった。

こつえー、このオウム！

軽く叩いた程度だというのに、地獄に落とすぞこの野郎、とばかりの刺々しい視線をオルクスに向けられ、リドは内心冷や汗を浮かべていた。勿論、微塵みじんも顔には出さないが。

一方の流衣は無邪気なもので、町に来てから浮かれているので全く気付いていない。

目に映る何もかもが珍しいらしく、きよるきよるしているのは、はぐれないように気をつけなければならなかった。

小柄な体格といい、頼りなげな見た目といい、はぐれたら不良君達に目をつけられるのは確実。

そうして鍛冶屋を探して通りを歩いていると、ふいに流衣がぎよつとしたように足を止めた。

何にそんなに驚いたのかは、前を見てすぐに気付く。

「あー、ありゃあミニゲスだな」

黒いゴーレムが三つ、箱を担いでひよこひよこ通りを横切っていく。丸みを帯びた四角いブロックに、適当に落書きしたような目と口があり、ちょうど流衣の膝丈くらいの高さをしている。そこに短い足と身の丈くらいの腕が生えている。一見すると可愛らしいが、よくよく見ると腕が長いからバランスが悪く、どことなく気持ち悪い。しかし世の女性達には「ぶさ可愛い」と褒めそやされている。

「ミニゲス……？ 魔物か何か？」

あ。あれ、顔が逆さまだ。

流衣が最後尾のミニゲスを見つめて呟く。

「ゴーレムだよ。ああいう黒い粘土に魔力を混ぜて作り出した擬似ぎしせ生命体いめいたい。つっても製作者の言う事しかかかねえし、単純な命令しか守れないけどな。でも、力が強いってんで、運搬に使われてんだ」

商店のある町ならよく見かけられる光景だ。

「ちなみに、あれより四倍くらいでかくなると、ビクゲスって呼ぶ」

「そ、そうなんだ……」

目を丸くしてミニゲスが去るのを見送る流衣。

結構、衝撃的だったようだ。

「つと、そんな話してる間に着いたぞ」

鍛冶屋の看板を示すと、流衣はハツとした顔で頷いた。

鍛冶屋での用事はすんなり終わった。

武器屋と工房を兼ねているらしく、店の方で弟子のような人にダガーを預け、代理武器を借りただけで終わった。代金は前払いで、銅貨四十枚だった。研ぐだけであるから、そんなに値もしないのだという。

流衣は魔力が高く、魔法も一つだけとはいえ扱えるし、何より力も運動能力も自慢できるものはないので、ここはあらがわず魔法使いでいくことになった。魔法使いの武器である杖や魔法道具関連は武器屋では扱っていないので、魔法道具屋を探すことになった。

鍛冶屋で小銭がなくなつたので、先に両替商で金貨を銀貨九枚と銅貨百枚に崩し、また通りに出る。

「この辺が魔法道具屋の多い界限かいわいだな」

両替商の店から歩くこと五分ほど。リドが通りの一部をざっと見回して言った。

リド自身は 精霊の子 であるが魔法使いではないので、魔法道具屋を利用することは滅多にないらしい。使っても、よく効く傷薬や風邪薬を買いにくる程度だとか。

「で、どこにする？」

見た所、五軒の店が他の店の間にちよこちよこと建っている。

「どこって言ってもなあ」

どれが良いかなんて分かりっこないので、手近な所を覗くことに

した。

「ひとまず、ここに入ってみようよ」

そう言い、流衣は一番近い場所にある魔法道具屋の扉を開けた。瞬間、中を見て足を止めた。

その魔法道具屋の商品が並ぶ棚に、黒い^{よど}澱んだ空気が絡み付いているように感じたのだ。

急に吐き気を覚え、流衣は逃げるように道具屋を出る。扉を閉めて通りに戻ると、すっと気分が治った。

(何だ、今の……)

口元を手で押さえ、訳の分からない現象に混乱する。

「いきなりどうしたんだ？ 失礼にも程があるだろ」

不快な表情を露にしてすぐに店を出るといふのは、余りにも不^{ぶしつけ}躰だ。

あまり礼儀とかをとやかく言う性質ではないリドだけれど、あまりにあらさまなので流石に注意する。

「なんか、入ったら気持ち悪くなったんだよ……。リドは平気？」

しかし逆に心配そうに問われ、リドは困惑する。

「平気だけど。一体どうしたんだ？」

それで、澱んだ空気のようなもの^{こと}を挙げ、吐き気がしたことを伝えると、リドは不思議そうな顔になる。

「俺には普通の小綺麗な店に見えたけどな」

「そっか……」

流衣は少しうつむいた。

自分がおかしいのだろうか？

その後、他三軒の店も出入り口で気持ち悪くなり、これは変だと思った。他の店ではこんな風にならないのに、何故か魔法道具屋だけで気分が悪くなる。

駄目もとで残った一軒にも挑む。

他の店よりは小ぢんまりとした、悪く言えばボロツちい店だ。看板に「魔法道具屋ビスケット」と書かれていた。

「ここなら大丈夫だ」

中に入っても気持ち悪くならない。流衣はほっと息をつく。

「そりゃ良かった」

リドも安心したように返す。

「いらつしやい」

灰色の髪をした初老の男が、店のカウンターで顔を上げる。堅物
そうな顔立ちの中に琥珀色こはくの目がキラリと光った。白いシャツと茶
色の布製ベスト、黒いズボンを着込んだ男は、いかにも気難しい職
人といった感じだ。男は丸眼鏡のブリッジを節くれだった指で押し
上げ、じろじろと客を見やる。

そんな男の向こうには、三人の職人が仕事に没頭していた。カチ
カチと道具を扱う音が、静かな店内に響く。男が二人、女が一人。
全員が二十代という歳から見て、初老の男の弟子か、もしくは従業員
なのだろう。

「こんな寂れた店に、子供が何の用だ？」

初老の男は客相手だというのにぞんざいな口調で問うた。

男の眼光に怯みつつ、流衣は武器を探しているという話をする。

男はそれに答えようと口を開きかけたが、それを遮って明るい声が
店に響いた。

「お兄ちゃん、武器を探してるの？　どんなの？」

店の勝手口の方から、焦げ茶の髪をお下げにした女の子がひよこ
りと顔を出した。目は男と同じ琥珀色で、人懐こく笑っている。

「これ、エレナ」

男が短く制すが、エレナは構わず流衣達の方に駆けてくる。エレ
ナは十歳かそこらのようで、流衣の胸ぐらいの身長しかないから、
自然と見上げる形になる。

「杖を探してるんだ」

流衣はエレナに視線を合わせるように腰をかがめ、そう返す。

するとエレナはにこっと笑い、こっちだよ、と流衣の手を引っ張
った。

そして、店の奥、木枠に何本かの杖が突っ込まれている場所に案内すると、また人懐こい笑顔を浮かべる。

「これだよ。この中から自分に合うのを探して」

「分かった。ありがとう」

「どういたしまして！」

エレナははきはきと返し、パツと男の方に戻っていく。そしてお腹が空いたと男にオヤツの交渉をしにいった。

それを微笑ましく見てから、流衣は杖の入った木枠に向き直る。

『坊ちゃん、その中の物を手にとって、合う物を選ぶのです。合うかどうかは本人にしか分かりません』

オルクスがそうアドバイスをくれ、流衣は頷いて杖を手にとっていく。

十数本の杖を手にするが、あんまりしっくりとこない。

合うのが無いということなのかと、少し残念になりながらふと店の隅に立てかけられている一本の杖を見る。人気がない商品なのか、埃かぶり、灰色の柄のあちこちに黒いシミが出来ている。

何となく心惹かれてそちらを見ていると、初老の男が抑揚の無い声で口を出した。

「そいつはな、もう十年近くここに置いてるんだがさっぱり買い手のつかない品なんだよ。手放しても戻ってくるもんだから、諦めてそこに置いてるんだ」

やめておけと言わんばかりに男が言う。

「うひょー、きつたねえ杖だな！」

魔法道具屋の店内を物珍しげに物色していたリドが、ぼろっちい杖に目をやり、いっそ感心した様子で言った。

確かに汚い。この薄汚れた感じが、無情にもぼろい店内にマッチしている程。

でも何となく気になる流衣は、杖の前に近づいてみた。フツと息を吹きかけて埃を払う。杖のトップは渦を巻く形状で、童話で魔女が持っているものにそっくりだ。

手に取ってみると、軽くもなく重くもなく丁度良い重さで、しっくりと手に馴染んだ。何となく、これだ、と思った。

瞬間。

杖が鮮やかな白い光を放ち、瞬きの後、姿を変えた。

「……………！……………！？」

声もなく仰天し、青みがかった銀色の光沢を放つ、トップが花のような形状に変わった杖を凝視する。

店内にいた店員達もそれを目撃し、驚いた顔でそれを見た。

「なっ、えっ？ なんっ？」

「落ち着けよ、ルイ」

あわあわと混乱する流衣に、リドが冷静に突っ込む。

しかし落ち着いていられるわけがない。

流衣は初老の男に向き直ると、若干泣きそうになりながら謝り倒す。

「す、すみませんすみませんすみません！ 触っただけなのに、なんか壊しちゃったみたいで！ほんとすみませんっ！！」

わざとじゃないんですー！ と必死で弁解する流衣。

しかし男は特に怒るでもなく、むしろ啞然とした様子で杖を食い入るようになっている。

「まさか、こりゃあ。水みずの七ななか？」

「はっ？」

思わず聞き返した流衣であるが、よく聞く前に、男の後ろにいる三人の職人が席を立てて飛びつくように杖を覗き込んだ。

「すごい！ これがああの有名な、水シリーズの七番なんですか？」

「綺麗」

「流石は名匠ヴェルダの作なだけはある」

何だか興奮した様子で口々に言い合っているのだが、流衣にはさっぱり意味が分からない。

流衣が全く知らないことに気付いたのか、初老の男が解説してくれる。

「これはな、魔法武器職人として名を馳せたヴェルダの作品なんだ。持ち主によって形を変える、水シリーズというものの七番目だ。七はヴェルダの晩年の名作と云われていたのにも関わらず、彼の死後、行方不明になっていたのだが……」

男はそこで言葉を切り、我が子でも見るように杖を柔らかい目で見る。

「まさかワシの店にあったとはな。意外や意外。ははははは」

本気で意外すぎて、だんだん冷や汗を浮かべだす男。名作と知らず手放しては戻ってきていたことになるからだ。

「全く、その形状ならば資料で見ることがあるんだが、あんなボロイなりをしているのではさっぱりだ。よってワシの目が曇ってたわけじゃないぞ、うむ」

冷静さを装いながら、必死に言い訳する男。職人達はそんな男に生ぬるい視線を送っている。

男はその視線を咳払いで追い散らし、気を取り直して流衣に向き合う。

「ふーむ。今まであれだけ手放しても戻ってきたのは、使い手を捜していたからなのかもしれんな。お主がここに来たのも、運命を司るレシアンテ様のお導きなんじゃろっ」

「はあ」

レシアンテ？ と思いつつ、流衣は曖昧に返事する。

「すげーじゃん、お前」

リドに肩を軽く小突かれるが、何がすごいのか分からないのでどつとも言えない。

「よし。ここは銀貨一枚でどうじゃ？」

男の申し出に、職人達からブーイングが起こる。

「そりゃねーよ親方！ ここはタダで譲り渡すのがサーガの王道じゃねえか！」

「ケチねえ」

「かっこわるー」

「ええい、うるさいわ！ こつちもこれで飯食つとるんじゃ、タダで譲れるわけなかるう！」

男が顔を赤くして、職人達に怒鳴り散らす。そこへ、無邪気な声がトドメを刺す。

「そうそう。何てったってうちは他の店に売り上げ取られて貧乏だもんね！ 生活費と職人さん達に給料払うので精一杯だから、今日が私の誕生日でもお祝い出来ないんだもん」

エレナが肩をすくめて言った言葉に、男は情けない顔になる。

「エレナ……、もしかして怒っておるのか？」

「別にいい、だって仕方ないじゃない」

少し拗ねたように口を尖らせ、エレナはそっぽを向く。もしかしなくても不服に思っているのは間違いない。

（こういう年頃の子にとって、誕生日ってすっごく大きいんだよねあ）

自分も小さい頃はそうであつたから、流衣はエレナの気持ちがよく分かつた。

苦笑して、財布から銀貨を取り出す。

「あの、ちゃんとお支払いしますから。あんまり揉めないで下さい」
男は一瞬バツの悪そうな顔をしたが、それでもしっかりと代金を受け取った。

五章 魔晶石（前書き）

*この話中、戦闘表現がありません。

五章 魔昌石

「あ、そうだ。親方さん、こういうのってどこに行けば買い取って貰えるか、ご存知ないですか？」

魔法道具屋ビスケットを出る前にふと思い出して、流衣は初老の男に、ドーリスに来るまでに拾っていた、女神に貰った貨幣が入っていた小さな袋いっぱいましよっせきの天然ものの魔昌石を見せる。

「ワシはフラム・ビスケットじゃ。親方でなく、フラムと呼ぶといい。お主は客なんじゃから」

どうやら杖の一件で、ただの冷やかしの子供から客へと昇格したらしい。

「僕は流衣です。えっと、ルイ・オリベ。この肩の子はオルクスです」

「俺はリドな」

流衣が名乗るとオルクスが片方の羽を上げてみせ、リドもまた名乗る。

「私はエレナだよ！」

にこつと笑って名乗るエレナ。フラムの孫娘なんだそうだ。

エレナが挨拶したからには、職人達もという空気になる。

一番年上に見える真面目そうな青年が先に口を開き、続けて女性、気さくな印象の男という順で名乗る。

「私はモーリスです」

「カナンよ」

「ロツシオだ」

「あと一人、ハンスという奴もおるんじやがな。今は出かけておる」
フラムはそう言いながら、天然ものの魔昌石の袋を見る。驚いた顔になった。

「天然ものをこんなに集めたのか？ ワシら魔法道具屋は魔力を見る目を鍛えておるから区別は造作もないが、ただの魔法使いなら大変じゃったろ」

流衣は首を振る。

「いえ、道を歩いてたらその辺でキラキラしてたので、それを拾っただけです」

するとフラムは堪らないとばかりに笑い出した。

「はっはっは、こりゃあ水の七に選ばれるだけはある。大した小僧じゃな！」

先程のフラムの驚きようといい、どうやら結構すごいことだったらしい。流衣からすれば普通にキラキラして見えるので、そんなにすごいことだという自覚はなかったのだが……。

「天然ものの魔晶石なら、ワシの所のような魔法道具屋や市場に出ている魔法道具屋でも買い取りしておるから、そこに持っていくといい。ま、この量だと銅貨十枚つてところじゃな。待っておれ、銅貨十枚なら出せるからの」

フラムはカウンターの裏に回り、台の下でゴソゴソする。そしてすぐに銅貨十枚を出すと、流衣の手に乗せた。流衣はどうもと言ってそれを財布にしまう。

「あの、そういう魔晶石ってどうするんですか？ 小さいから使いにくい気がしますけど」

気になって問うと、フラムはあっさり答える。

「晶石は硝子質だから、一度溶かして大きい晶石に作り直すんですよ。溶かしても魔力量は変わらんからな」

「へえ、そうなんですか」

面白い性質だなあと目を輝かせる流衣。

「何じゃ、大した奴かと思うたが、もしかやお主素人か？」

「え……と、恥ずかしいですけど、そうなんです。魔力は大きいみたいなんですけど、魔法も初歩しか使えないですし……」

「ふむ。じゃあ、ちっと練習してみるかね？」

「え？」

フラムは店の商品から、空の昌石を一本取り上げて流衣に渡す。五センチくらいの長さの水晶みたいな六角柱の石だ。

「その分じゃ昌石に魔力を入れたことがなかるう？ それ一本なら壊しても構わんから、試してみなさい」

いつの間にか、フラムの顔つきが職人のそれに変わっている。今後有望そうな魔法使いの後学の為にと思ったのか、あまりに無知なのを心配に思ったのかは分からないが。

流衣は素直に好意に甘え、挑戦してみることにする。

「どうすれば良いんですか？」

「魔力を練って、石の中に注ぎこむイメージじゃ」

「分かりました」

流衣は頷いて、昌石に集中する。

その横で、リドとオルクスが興味深そうに手元を見る。

（魔力を練って……）

右腕に青い光が灯る。

（それを注ぎ込む……）

水を流すようなイメージを浮かべながら、青く光る魔力を石の中へ。魔力は何の抵抗もなく石に溶け込み、清流のように流れていく。何となく、瓶に水を注ぎ込んでいる感じがして、そろそろ止めないと溢れると思ったところで魔力の流れを止めた。

「ふう」

肩の力を抜き、作品を見下ろす。

魔昌石は紺碧に眩しく輝き、店内を照らし出していた。

フラムや職人達は息を呑んでそれを見ていたが、一拍後、ワッと歓声を上げた。

「すっげー！ こんな魔昌石初めて見た！」

「まるで宝石みたいっ、素敵！」

「この世の神秘です……」

職人が騒ぎ立てる中、フラムは啞然としている。

「あんな天然ものが見えるから、相当な魔力の持ち主だとは思ったが、これ程とは……」

ひたすら驚きながら、更に呟く。

「まさか銅貨五十枚の昌石が、銀貨四枚に化けるとはのう」

流衣は目を瞬く。

「えっ、これってそんなにすごいんですか？」

世間知らず丸出しの発言に、カナンが頬を上気させて返す。

「すごいなんてもんじゃないわ！ 魔昌石は輝きが青ければ青いほど良質なのよ。これは良質を越えて、特上よ！」

興奮気味に魔昌石を見つめるカナン。あなたこれで暮らしていきるわよ！ とまで豪語する。

しかし、そこでモーリスが不安そうな声を出した。

「でも、どうするんです親方。銀貨一枚と銅貨七十五枚なんて支払えなくないですか？」

「うっ、そうじゃった。ワシもまさかここまでとは思わなんだからのう……」

フラムが困った様子でちらちらと流衣を見てくる。

流衣はきよとんとし、首を傾げる。

「何ですか、銀貨一枚と銅貨七十五枚って」

ここで黙って知らない振りでもすればやり過ぎたのだろうが、フラムは人が良いらしく、困り果てながらも説明する。

「魔法道具屋で、魔法使いが昌石を魔昌石に変えた場合、原価を差し引いた売価の半額を払う決まりになつとるんじゃない」

「なるほど」

それで、思いの他に流衣がすごい魔昌石を作ってしまったので、対応に困ったらしい。この店が貧乏なのは、流衣も勿論忘れていない。

「銀貨一枚ならさっきので払えるとして、銅貨七十五枚は厳しいのう……」

フラムはぶつぶつと呟きながら、対応策を考えている。

「あ、あのっ！」

流衣は少し考えて、思い切って口を開く。

「何じゃ、今考えておるんじゃから急かすでないわ」

「いえ、そうじゃなくて。別にお金はいりませんっ」

「は!？」

フラムは目を丸くし、何度目かになる唾然とした表情を作った。

「だって、さっきのは練習させて貰っただけですしっ、教えて貰って、僕、すごく助かりましたしっ。それにあの、それ売ったお金で、エレナちゃんの誕生日を祝ってあげて欲しいといいますかっ」
必死に言い募る流衣。

横でリドが呆れ返った顔をして、それから面白そうに笑む。

「お人好しだな、お前。まあそこが良いとこなのかね」

「うっ、だって本当のことじゃないか。僕は世間知らずもいいところなんだし……」

言いながら、だんだん心配になってくる。

「あの、もしかしていらぬお世話とかで怒ったりします?」

流衣の提案に、相手が喜ばず、支払い能力のなさを馬鹿にされた
と怒る心配をするのを見て、フラムはまた笑い出した。

「はははは、本当に面白い小僧じゃな! 怒るわけなからう、喜んでその提案に乗るとも!

ははははは!

フラムは笑いすぎてヒイヒイ言い出す。それを見て職人達が笑う。

「お兄ちゃん、ありがとー!」

きゃーっ!と嬉しい悲鳴を上げ、エレナが流衣に飛びつく。

店内が一気に騒がしくなった。

流衣はその後、フラムに頼んで昌石四つ分練習させて貰い、何とかコツを飲み込んだ。その四つも、授業代として置いておいた。

お陰で貧乏な魔法道具屋に特上の魔昌石が五つも置かれ、今月は久しぶりに黒字の予感だとフラムは大喜びし、馴染みの宝石商の所に売りに出かけていった。

「いいか、ワシが戻るまでここにいるんじゃぞ！」
と、そう言い残して。

「俺ら、しばらくこの町にいるのにな」

リドが呆れて言い、流衣もぼかんとする。

「ね」

必要な品を揃えるだけでなく、散策して色々教えてもらおう予定でいたのだ。リド曰く、旅をするなら傭兵や冒険者を支援するギルドに入った方が良いとのこと、その辺も見に行く予定になっていた。

『この人間達はやけに騒がしいですね』

やっと静かになった店内に、オルクスが呟く。どこかうんざりした響きがある。

流衣は苦笑した。確かに、わいわい騒がしい。でも、こういう雰囲気は結構好きだ。

とはいえ待つているのは暇だったので、道具屋内で適当に品物を物色し、傷薬などの薬類や、後で買おうと考えていた鞆も買った。

見た目は普通の布製のリュックだが、物体強度と耐火の魔法をかけられた物だ。草木染めで緑がかかった茶色をしており、その微妙な模様具合が何となく気に入った。

それからいよいよ何もすることがなくて手持ち無沙汰になった頃、ようやくフラムが帰って来た。

ほくほくした顔で、店に入るとにやつと笑う。

「しめて、金貨二枚と銀貨五枚じゃ！」

フラムがガッツポーズすると、職人達やエレナがこぞって歓声を上げる。

「やったー！ 久しぶりにスープ以外のものが食える！」

ロツシオなど涙を流して喜んでいる。余程スープ生活が辛かったのだろう。

「一つ銀貨四枚じゃと思っただがの、まさかの五枚じゃ。あんまり出来の良い魔晶石に、今度その魔法使いを紹介してくれとまで言

われたわ」

「そ、そういうのはちょっと……」

人に紹介されたりするのは大の苦手だ。

情けない顔で尻込む流衣に、フラムが言う。

「そう言うと思って、断つといたよ」

「助かります……」

心底ほっとする。

「さて、これから誕生日会の準備をせねばな。ここまですてもらったのじゃ、勿論食べていくじゃろ？」

「え、良いんですか？」

流衣はびっくりしつつ、だから待っているように言ったのかと初めて気付く。

「良いに決まってるよ！」

すっかり流衣に懐いたエレナが笑顔で言う。

流衣も照れ混じりに笑い返した。

第六章 出回る闇

「親方、親方！ これ見てくれっ、すぐくないか!？」

店仕舞いの準備に入ろうと片付けだした店内に、ドアを乱暴に開けて、二十代前半ほどの青年が一人入ってきた。灰色の髪と目をしていて、楕円形の眼鏡をかけている。服装は臙脂色えんじいろのベストを着ている他はフラムとほとんど変わらない。

「何じゃハンスか。いきなり騒々しい。扉は静かに開けんか！」

フラムに怒鳴りつけられて一瞬首をすくめたハンスであるが、すぐにまた騒ぎ出す。

「そんな説教は後で聞くから、これ見てくれよ！ さっきダチの店にいたら、行商人に貰ったんだ。お近づきの印にとかで、タダだぜ!？」

そう言うハンスの手には、竜の銅像が赤い玉を背負った置物が握られていた。大きさは手の平に乗る程度で、銅像も玉も光を弾いて煌きりめいた。精巧な造りであるのは一目瞭然いちもくりようぜんだった。

ハンスが有頂天うちょうてんになるのも当然だろう。

(うえ……、なんだ、また気持ち悪くなってきた……)

しかしその一方で、それを目にした流衣は軽い吐き気に襲われた。置物から濺あんだ空気が出ているか、もしくは絡み付いているような感じだ。

急に気持ち悪そうに口を押さえた流衣に気付いて、エレナが心配そうな顔になる。

「どうしたのお兄ちゃん、気分悪いの?」

「あ……いや、大丈夫……」

そう答えながら、だんだん背中に嫌な汗が浮かびだす。その上、いきなり声が聞こえた。

殺す……。……許さない……。殺してやる……。

暗く低い声が囁くように繰り返し呪詛を吐いている。

その声が置物から聞こえることに、流衣はすぐに気付いた。

「駄目じゃな。そいつは売り物にはならん」

軽く置物を一瞥したフラムはきっぱりと否定した。

(え?)

意外だった。

流衣はフラムの、どこか苦々しげな表情をじつと見る。

「そいつは闇物だ。すぐに神殿に納めて、清めてもらえ」

「ええ? 何言ってるんだよ、親方。こんなに綺麗なのに……」

ハンスはたちまち不満げな顔になる。

「……闇物って何なんだい?」

二人の遣り取りに、リドが口を挟む。

フラムは振り返り、ふうと息をつく。

「こういう魔法の品を扱う仕事をしておるとな、たまにあるんじや。いわゆる“いわくのある物”という物がな。見た目は完璧なのに何故かすぐに壊れたり、置いておくだけで不幸を引き寄せたりする。

そういう物をな、この業界では隠語で『闇物』と呼ぶんじや。病んだ物という意味合いが込められておる」

フラムは置物に目を戻し、断言する。

「そしてこいつは不幸を呼び寄せる方の物じや。全く情けない。それだけ禍々しい魔力をしておるのに、何故気付かんのだ? ワシの目には、その玉は黒く濁って見えるよ」

魔法道具屋の親方の名は伊達ではなかったらしい。一目で本質を見抜く力量がこの人には備わっているのだ。

しかしそれでも解せないようで、ハンスはむしろ僻みだした。

「そんなこと言って、俺がお宝をタダで仕入れてきたんで妬んでんだろ」

ハンスは眉を吊り上げ、どこか黒く濁った目をフラムに向ける。
「ちょ、ちよつとハンス、何言い出してんの？」

慌てたように声を上げるカナン。

「そうだぞ！ それにさっきから、その口の利き方はなんだ。親方に失礼だろうが！」

ロツシオもまた憤然と言い立てる。

だんだん、場の空気がおかしな方向に傾き始める。

「まあまあ落ち着けよ」

リドが面倒臭そうに口を挟む。

「俺もフラムさんが正しいと思うぜ。精霊が嫌がってる」

「はっ、精霊が嫌がる？ どこにそんなのがいるってんだ、頭おかしいんじゃないのか？」

鼻で笑うハンス。

「んだとお」

聞き捨てならない、と、ハンスをねめつけるリド。

場の雰囲気がどんどん悪くなっていく。

どちらかといえば仲の良い職人達のピリピリとした空気に圧され、エレナが怯えたようにフラムの足に身を寄せる。フラムはそれに気付き、場を治めようと口を開きかける。

「すごいなあ」

が、流衣の、どこかのほほんとした言葉に遮られた。

場の緊張が一気に霧散する。

「フラムさんは本物だ」

流衣は本気で感心して、うんうんと頷く。

「な、何だてめえ。何が言いたい」

ギツと流衣を睨みつけてくるハンス。

それに内心びくつきながらも、流衣は平常心を装って、独り言を言うように返す。

「僕は前から聞こえる方だったけど、こんなにはっきり聞こえたのは初めてだよ」

流衣の言っている言葉の意味に勘付いたリドが、ひくりと頬を引きつらせる。

「お、おい……まさか」

「うん、そのまさか」

こつくりと頷く流衣。

「聞こえるって、何がだ！ ちゃんと言え！」

焦れたハンスが声を荒げる。

流衣は言っているのかと困った顔になったが、仕方が無いので返事をする。

「その置物から聞こえるんだよ。そ、その。『殺す』とか、『許さない』とかそういう声が……」

「な……？」

ハンスは目を丸くし、自分の手にした置物を見る。そこで初めて、置物にどす黒く穢れた空気が絡み付いているのに気が付いた。

「ヒッ！」

思わず裏返った悲鳴を上げ、置物を落としてしまう。

するとそれは玉の方から床へと落下し、ガシャンと音を立てて碎けた。

「キシヤアアア！」

砕けた玉の中から、奇妙な声を上げながら黒い影が伸び上がった。悪魔のような形相の影は天井まで伸び、腕が二本生え、三本の指が鋭く尖る。

「きゃーっ！」

エレナが悲鳴を上げ、フラムの足にしがみつく。

「なっ、何なのあれ！？」

「魔物だ！ 魔物が封じられてたんだ！」

「に、逃げる！」

職人達は騒ぎ立てて逃げようとするのだが、化け物を見たシヨッ

クで足が動かない。

リドはチツと舌打ちし、風を右手に収束、槍を投げるように影に投げつける。

しかし、その風の刃は影の腕の一振りで掻き消えた。

「なっ!?!」

まさか一振りで消されるとは思わず、息を呑むリド。

「マリヨク……マリヨク……ホシイ……」

影はぶつぶつと呟きながら、店内を見回す。そして流衣に目をとめると、影がぶわりと膨れ上がって襲い掛かった。

「オオキイ……ソノウツワ、ヨコセエエエ!!」

「ひっ」

硬直していた流衣は、喉の奥で引きつった悲鳴を上げる。

流衣が動けないのを見て、リドが流衣を突き飛ばす。

「わあっ!」

流衣はカウンターに背中から激突し、一瞬、息が詰まった。空咳しながら体勢を立て直すと、左頬に痛みが走って顔をひそめる。

リドの機転で影を避けられたが、影の爪が頬をかすめていたらしい。頬に手を当ててみると、血がべったりと手の平についていた。

ちよつと泣きそうになりつつ、傷口を手で押さえ、左側を見る。

すると、折しも商品の陳列した棚へ突っ込んだ影が身を起こすところだった。

影には足がなく、まるでゴーストのようにも見える。

「マリヨク……ウツワ……ユルサナイ……コロス……コロス!」

呟く中身がさつきよりも格段に物騒になった。

凍りつく流衣に、宙に飛び上がって難を逃れていたオルクスが傍らに戻って訊く。

「坊ちゃん、血と魔力を少し頂いてもよろしいですか?」

「え? あ、うん、いいけど……」

意味は分からないながら、動揺しているのもあって頷く流衣。

オルクスはひよいと流衣の左手に乗ると、血のついた手の平をつ

いばむように舐めた。

そこへ、影の奇襲。

「コロスウウウウアアア！」

膨れ上がり、飛び掛ってくる影。

流衣は思わず身を縮めて目を閉じた。

バシン！

何かの弾けるような音がした。

しかしそれだけで、数秒経っても痛みはやってこない。

「……………」

恐る恐る目を開けてみる。

すると目の前に黄緑色の壁が立ちふさがっていた。

いや、壁ではない。いつからそこにいたのか、黄緑色の長衣を着た金髪の青年が立っていた。右手の平を影に向けている。

青年の黄色に近い金髪は短く、前髪を上げて後ろに流している。

顔は見えないが、長衣の裾から覗く黒いズボンを纏った姿は凜々しい。そして、生成り色のブーツについている赤い羽根飾りは民族っぽさを醸し出していた。

「ふん、低級ゴースト風情が。我が主人に仇成すとは、死んで報いて頂きましょう」

滑らかに紡がれる言葉と同時に、青年は右手の指をパチンと鳴らす。

それと同時に深紅の炎が立ち昇り、影をそっくり飲み込んだ。

影は断末魔を上げ、そのまま黒煙とともに消え失せた。

影が消えたのを見届けると、青年はくるりと流衣の方を振り向いた。

そこで初めて青年の顔が見えた。穏やかそうな顔立ちの中、どこか策士のようなしたたかさが垣間見える。どうやら歳の頃は二十代後半くらいのようなうだ。

「耳が、羽……」

しかしそんなことよりも、流衣は青年の耳を凝視してしまっていた。黄緑色の羽の形をしていたのだ。

啞然としている流衣に構わずに流衣の前に膝をつくと、青年は眉をひそめる。

「ああ、おいたわしや。あんな下等に怪我をさせられるとは。わてがついていながら申し訳ありません」

深々と頭を下げると、青年は流衣の頬に手をかざし、呪文を唱える。

「我が力、糧とし、癒しの力、顕れよ」

どこかで聞いたような言葉とともに、怪我が完治する。それに、どこかで聞いた声のような気もする。

それに思い至ると、流衣はそーっと尋ねる。

「も、もしかして……、……オルクス？」

「左様でございます！ お気づきになりましたか、流石は坊ちゃんです！」

青年　オルクスはパツと顔を輝かせる。まるで子供みたいな笑みだ。

（ほんとにオルクスだ……）

その反応は何度か見たことのあるものだったので、流衣はようやく納得した。

オルクスはにっこりと微笑む。

「では坊ちゃん、ちよつとお待ち下さいね」

「……え、あ、うん」

間の抜けた返答をする流衣を放置して、オルクスはにこにここと笑顔のままリドの方に向かっていく。しかしリドに近づくにつれ、冷気のようなものを帯びていつている気がした。

「あなたに言いたいことが山ほどあるんですが、今回は時間がないので少ししておきます」

「な、何だよっ」

オルクスの妙な威圧感に、リドはたじろぐ。

「さつきはよくもわての大事な主人に手を上げてくれましたね！」

「は？」

「頭を殴るなんて、地獄に落ちたいんですか？」

オルクスが何を言ってるのか気付いたリドは、眉を吊り上げて言い返す。

「殴るとか手を上げるとか、人聞きの悪いこと言ってるじゃねえよ！　ちよつと軽く頭叩いただけだろが！」

リドの反論を無視し、オルクスは続ける。

「それに加え、精霊の子の癖にこの体^{てい}たらく。使えないクソガキですね！」

「あんだと！？　大体てめえだつて、人の姿取れるんなら、最初っからそうしてればいいだろーが！　てめえの不手際をひとになすりつけんな！」

オルクスはハツと馬鹿にするように笑う。

「これだからお馬鹿さんは困るのです。わてがこの姿を取るには、主人である坊ちゃんの血と魔力が必要なんです。坊ちゃんに負担がかかることを、進んでするわけないでしょう！」

清清しいほどきつぱりと言い切るオルクス。

リドは口をパクパクと開閉し、言葉に詰まる。が、言い負かされたことに腹が立ったのか、だんだん顔が赤くなっていく。

そして、二人はどちらともなくぎりぎりと睨み合った。

いきなり始まった喧嘩に、流衣は呆然とする。

え？　一体何が起こってこうなってるの？

ひとまずオルクスが人型を取っている理由は分かったが……。

しかしだからといって、苛烈な雰囲気で見合っ二人に話しかける度胸が弱虫の流衣にあるはずがなく、ひとまず事態が落ち着くまで見守ることにするのだった。

「すみませんでした！」

ハンスは青ざめた顔で床に額をすりつけるようにして謝った。

何でも、置物を貰ってから、何だか頭がぼーっとして、妙にイライラして仕方が無かったのだという。置物が壊れた今、すっかり元に戻ったらしい。

「もういい。あの置物のせいだろうとは大体想像がついた。まあ、あれを見抜けないは、取り込まれるは、ちーっと修行が足りたらんようだがな」

フラムがキラリと琥珀色の目を光らせる。ビシビシしごいてやる。目がそう言っている。

「ありがとうございます、親方。謹んで修行させて頂きます！」

ハンスは一瞬頬を引きつらせたが、すぐにびしっと言い、もう一度頭を下げた。

元に戻ったらしいハンスは、ちよつと気弱そうだが誠実そうな青年だった。笑顔も朗らかで気さくそうな印象である。

「君達もごめんな。何だか酷いことを言っただけだ」

気にしているのか、眉を八の字にして謝るハンス。

「気にすんなよ、もう済んだことだ」

リドはヒラヒラと右手を振る。流衣も頷く。

「そうですね、元に戻って良かったです。あのままだったら誤解してるところでした」

「ありがとう、二人とも」

苦笑しつつ、ハンスはありがたそうに頭を下げる。

「それで、ハンス。お前に置物をくれたっていう行商人はどんな奴だ？」

気を取り直し、フラムが問う。

「はい、行商人は……行商人は……。あれ？」

ハンスは頭に手を当てる。

「行商人は……んー、どんなだったっけ？」

フラムはそれを見て眉を寄せる。

「性別とか名前とか、年恰好とか、どんな服だったとか、色々あるだろうが」

「は、はい……。それは分かってるんですけど……。あれ？ おかしいな、全然思い出せない。行商人は、ええとあれは何色のマントだった？ 男だったような女だったような、そもそも顔は……？」

仕舞いには頭を抱えてしまうハンス。

「駄目だ……。やっぱり思い出せない。行商人に会ったことは覚えてるのに、特徴を思い出そうとすると、なんか、頭に霧がかかるといって」

「……なるほどのう。どうやらその行商人、実に巧みな奴らしいの。恐らく、気付かぬ間に思い出せぬように催眠をかけたのか、もしくは部分的に記憶を消去したのか。なんにせよ、やばそうな匂いがするな」

流衣はふと、他の魔法道具屋のことを思い出した。

もしかしたら何か関係があるかもしれない。

それを話すと、フラムはますます難しそうな顔つきになる。

「ふん、なるほどの。そんなことがあったから、こんな寂れかけの道具屋に来たのか。しかし、他の四店が全部、行商人とやらの餌食えじきになっっているとすると、一体何が目的なんじゃろうな」

「ただの、愉快犯とかじゃ、ないですか？」

ここでオルクスが口を挟むと、流衣とリド以外の全員がビクリとした。

頬に汗を浮かべ、フラムは流衣の肩に乗っているオウムを見やる。先程リドと喧嘩していたオルクスであるが、三十分もするとオウムの姿に戻ってしまったのである。

「な……。何じゃ、喋れたのか、其奴そやつ」

「さつきも思ってたけど、もしかして亜人なんですか？」

モーリスの問いをオルクスは否定し、誇らしげに胸を張る。

「違いマス。わては、坊ちゃんの使い魔なのデス」

どうだ羨ましかろうと言わんばかりの態度である。オウムだから可愛らしく映るが、さっきの人型でこれをさらたらイラツときそつだと、流衣以外の全員が思った。流衣が入っていないのは、単に肩に乗っているせいでその仕草が見えないせいである。

「お主、魔法は初級しか使えんとか言つてなかつたか？」

フラムの最もな問いに、流衣は言葉を濁す。

「ちよつと色々あつて……」

「ふん、まあいい。あまり突つ込まんでおいてやる」

「ありがとうございます……」

フラムの偉そうな態度は、恐らく地なのだろうと流衣は思った。

「しかし愉快犯か、そういう考えも捨てきれんな。ひとまず、王国警備隊に報告しておくか」

壊れた置物を袋にまとめるようにハンスに言いつけ、フラムは考えに浸る。

「まず警備隊詰め所に行つて、その後買出しに出るかの。エレナ、希望があるなら今の内に言っておきなさい」

「はい」

にこにこ返事するエレナ。

誕生日会をすると知らないハンスだけが、一人、きよんとんとしていた。

今日一日で色々と疲れることがあつたものの、エレナの誕生日会は楽しかった。

ここでは誕生日の祝いに贈り物をするのではなく、ご馳走とお菓子で祝うのだそつだ。贈り物をするのは、成人の日など人生の区切れの時くらいらしい。

流衣からすると変わった食材の料理なんかも出てきてどきまぎしたが、気ままに飲み食いして、笑いあうのは楽しかった。

誕生日会の後、ここに滞在するならたまには店に顔を出せと促さ

れ、そうしても良いなと思った。

そういうわけで本当に楽しかったのだが……。

流衣は夜道を歩きながら、ちらりと横を見た。

オルクスとリドの間で険悪な雰囲気の流れていた。

あの喧嘩以来、たまに衝突が起きている。

「喧嘩するほど仲が良いっていうよね」

流衣は楽観的にそう呟く。

「それはない！」

「ありえません！」

呟きを拾った二人が、すぐさま断言する。

これは性格的に合わないのだろうか？

ちよつと不思議に思う。あんまり本気で喧嘩するようなら止めるつもりだが、流衣には遊んでいるようにしか見えないので放つといっている。

こういう仲間っていうのもありかもしれない。

流衣は自分に無理矢理そう言い聞かせて、夜空の月を仰いだ。

六章 出回る闇（後書き）

「闇物」という単語は、私の造語です。

七章 ウィングクロス 1

翼は自由を

十字は剣を、交差する道を示さん
剣を手に、己が道をゆけ！
されど決して忘れるな
その心の自由を！

ウィングクロス創設者 ハルメン・ブルックスの言葉より

* * *

傭兵・冒険者・旅人を支援するギルド「ウィングクロス」のシンボルは、十字とその右斜め上と左斜め下から翼が生えた形の紋章だ。ギルド創設者のハルメンが考案した図形らしい。

創設者と呼ばれているだけあって、ウィングクロスの歴史は古い。もうかれこれ五百年にはなるはずだ。

このギルドは、主に仕事の斡旋と依頼主との中継を業務としている。ただし、戦力が必要になってくる仕事のみを取り扱っている。ギルド登録者は、町ごとのギルドの壁に張り出されているクエストボードから仕事を選び、それが成功すれば報酬が貰える、というシステムだ。

ギルドに登録する利点は、ギルド内の鍛錬場や食堂が安くで利用可能となり、ギルド保管の蔵書の閲覧も出来る。また、ギルドのシンボルが書かれた提携先の宿でも安い値段で利用することが出来る。そして何よりありがたいのが、銀行があることと、連絡先として郵便物を預かってくれ、旅先のギルドで魔法使いの転移魔法により受

け取ることが可能なこと、だそうだ。

以上が、カザエ村に来る前に、一時期ウィングクロスに登録していたリドの説明だった。

「登録してたのに、何で登録消したの？」

宿で朝食を摂りながらの話に、流衣はなにげない疑問を口にする。それにリドは少し考えた風で黙り込み、やがて周りに聞こえない程度の声でレツディエータ盗賊団にいたという話と、逃げてきてカザエ村に住み着いたのだという話をした。

「ええっ、そうだったの!？」

流衣は目を皿のように丸くして、思わず声を張り上げてしまう。

ああ、びっくりした。

それで盗賊団を追い払った後、やけに嬉しそうに笑っていたのか。「昔は王国の西の方に住んでてな、東の辺境まで逃げる資金を稼ぐのに利用してたんだ。ギルドのことは、団内でも有名だったし」

基本的に、戦えれば十三歳から登録可能なんだとか。

故郷がどこかも、自分がどの家の人間なのかも覚えていないので、故郷に逃げるのが出来なくてそうしたのらしい。

「それを十三歳で思いつくってのがすごいなあ。リドは頭良いんだね」

自分なら思いつかないのではないだろうか。そもそも、思いついたとして、そんな状況で逃げる勇気が自分にあるとは思えない。ということとは、リドには思い切りの良さも備わっていることになる。

しかしそんな事情があるなら、リドが流衣より二歳年上にも関わらず、そこらの大人並みに大人びている理由もすんなり飲み込める。リドは曖昧に笑ってそれには答えず、肩をすくめた。彼からすれば、必死に考えたことであって、頭が良いと賞賛されることではないのだ。必要だから考えただけで。

昔の話はここで切り、気を取り直してさっきの話の続きに戻す。

「ともかく、基礎的な戦闘能力さえあれば、誰でも入れるから便利だぜ」

遠回しに登録をすすめるリドを見て、流衣はうーんと首をひねる。「その基礎的な戦闘能力が僕にあるとは到底思えないんだけど……」

ドーリスの町に来るまでだって、中型犬くらいの大ささのネズミの魔物に対しても遅れをとっていたのだ。ちなみにそのネズミの魔物、名前をウシネズミといい、低級も低級、雑魚雑魚もいいところの魔物らしい。農作物を荒らす害獣程度。ただし、幾ら丸々と太っているからといって、その肉には人間にとつての毒が貯えられているので食用には向かない。

「あれがあるだろ、ほら、爆発させた魔法……」

リドは盗賊の頭を倒した魔法を思い浮かべながら言う。

「あれ、何ていうんだ？ 爆発魔法のドーガか？」

「ど、どーが？ 鳥みたいな魔法だね……。あ、いや、違うよ。あれ、点火の術だよ」

「点火！？」

リドは驚きのあまり、スープの中にスプーンを落としたり。中身が半分程に減っていたから良かったが、スープがバシッと器の中ではねる。

「点火つて、ランプに火をつける程度のすっげー初歩の魔法だろ？」

爆発が起きるなんて初めて聞いたぞ？」

「だから、初歩しか使えないって言ってるでしょ。僕が使えるのはその魔法だけだよ……」

そんなにおかしいことだったのかと、流衣は身を縮める。

「はあ、妙な奴だとは思ってたがここまでとはな！ まあその一芸見せりや多分平気だよ。クエスト受ける場合は俺もいるんだし。一人だったら多分却下されるだろうけど」

「一芸つて……」

一芸入試みたいだなと思いつつ、一人だったらの台詞に情けなくなりながら、すっかり頭を下げた。

「ほんと、よろしく願いします」

ウィングクロスの建物は、一見すると良家のお屋敷のようだった。ドリスの町のあちこちに見られる生成り色っぽい白、言い方を換えれば薄いクリームイエローをした煉瓦造りの四階建てで、屋根瓦は青色だ。正面に見えるその建物の奥にも、二階建ての建物などが幾つか並んでいるし、なにより敷地を煉瓦塀が囲っているのですますお屋敷じみて見えた。

別に秘密主義を通してではなく、鍛錬場から物が飛んでも大丈夫のように壁で囲っているだけだとリドに言われたが、なんとなく圧迫感を覚えて緊張し、流衣はますます萎縮いじゆくしていた。一般人には気が重い。心なしか胃がキリキリしてきた気もする。

正面に見えた四階建ての建物に入ると、中は左手に受付らしきカウンターと、右手に雑談スペースなのか食堂みたいテーブルと椅子が並んでいた。壁にメモ用紙のような紙が貼られた掲示板があり、その前で張り紙を見ている屈強そうな男が数人見られた。奥には階段もある。

ざっと見た感じ、内装はシンプルで、きちんと清掃されていて小綺麗な印象だ。

ウエスタンの酒場をイメージしていた流衣は、それで一気に緊張が減った。

「登録したいんですけど、いいですか？」

しかしリドは流衣には気にも止めず、さつさと受付に向かってしまっている。入口で立ち止まっていた流衣は、慌ててリドの横に駆けっていく。

受付は暗い赤色の髪と桃灰色の目をした神秘的な色合いの女性だった。見たところ、二十代半ばくらいだろうか。襟元えりもとに深紅のリボンのついた青色の制服を身に纏っている。神秘的といっても目つきは鋭いので柔らかかそうな印象はなく、視線だけで敵を射殺せそうな

殺伐とした空気を背負っている。

「そちらの小僧もか」

女性がぞんざいに口を開く。

ハスキーな声に、歴戦の猛者かとびびる流衣。こくこくと激しく頷く。

一方のリドは気圧された様子はなく、爽やかに言う。

「そつだ。あと、俺は前に登録してたから、再登録になるけど平気？」

「名前は？」

「リド。サザエナの町で登録してた」

「ちよつと待つてくれ」

女性は束ねた書類をペラペラとめくり始め、該当箇所を見て頷く。

「ああ、一ヶ月ほど登録してたのか。自己申請登録削除だから、再登録は平気だ。だが、ランクはEに戻るが構わんか？」

「ああ、構わないよ」

リドの返答に、女性は頷く。

「一応、簡単なテストもする。そっちの小僧もだ。小僧、こっちに来い。名前を言え」

「はいっ、ルイ・オリベです！」

女性はにやりとした。まるで狼が牙を見せて笑うみたいな笑み。

内心竦み上がる流衣だが、単に笑っただけらしかつた。

「良い返事だ。ルイ・オリベだな。見た所魔法使いのようだが、杖つえ連盟れんめいには登録してあるのか？」

流衣はきよんとする。

「杖連盟？」

思わず、女性に聞き返してしまう。

女性は片眉を跳ね上げる。

「何だ、杖連盟を知らんのか？ このギルドより三百年古い歴史を持つ、誰かしら一度は耳にする超有名ギルドだぞ？」

「あー、こいつ、ちーっと世間知らずでさ。こないだまで辺境の辺

境に住んでたから、ほんと常識欠如してんだわ。俺と一緒に旅してんのも、そういう理由からだし」

苦笑混じりにフォローするリド。まさか違う世界から来たと話すわけにもいかないので、辺境の辺境と随分遠い所から来たことにして言葉を濁した。

「なんだ、そうなのか。それなら仕方ない。魔法使いには常識に疎い奴も多いからな」

それでいいのかとどきまぎする流衣であるが、あっさりと女性は納得した。

「杖連盟というのは通称でな、本来はラーザイナ魔法使い連盟という。簡単に言えば、魔法使いの集まるギルドだな。

どれだけ魔力が低かろうと、三年に一度開かれる会合に出席することを条件に入ることが出来る。大いなる葉と杖の描かれたシンボルが目印だから、興味があるなら行ってみることもだな」

「はいっ、ありがとうございます！」

流衣はきぱつと返事する。

この女性の前にいると、自然と背筋が伸びてしまうのだ。

「あとはリドと同じく、軽いテストをする。それに合格したら登録成立だ」

「は、はいっ。分かりました！」

女性はクスリと笑う。

「そんなに固くならなくていい。申し遅れたが、私はここの受付をしているセンリ・アーノルドだ。よろしくな」

「はい、よろしくお願いします！」

やっぱりがちがちな流衣の返答に、センリはますます愉快そうに笑みを浮かべた。

七章 ウィングクロス 2

テストを受ける為、センリについて受付のある建物を出ると、中庭のような所に案内された。鍛錬場たれんじょうだという。

言われてみれば確かに、煉瓦塀から三メートル程離れた場所に案山子が五つ並んでいる。どれも使い込まれているのか、斬きられた跡や叩かれてボロボロになっているものがあった。

「ここで自分の技を披露してもらおう。恐らく問題ないと思うが、まずはリド」

名前を呼ばれたリドは頷く。今朝方、鍛冶屋から引き取ってきたばかりの研ぎたてのダガーを二本構える。一度クロスさせ、それを横に振り抜いて走り出す。

そして、案山子の一体に急接近し、斬撃を繰り返した。
ガガン！

木を断ち切る音が鍛錬場に響く。一拍後、三つに分断された案山子が地面にガラガラと転がった。

「あつ、やばっ」

ダガーを鞘に戻したリド、後ろを振り返って顔をしかめた。

「センリさん、悪い、壊しちゃった！」

「構わん。どうせ新しいのを作り直すところだった」

センリはあっさりと返し、大きく頷く。

「良い腕だ。問題ない、合格だ」

「やрийい！」

グツと拳を握るリド。

傍観していた流衣は、おお〜！ と歓声を上げて拍手する。

「では次、ルイ・オリベ」

それも束の間、センリの言葉にぎくりと固まる。

「ルイはどうする？ やはり魔法を使うか？」

さつきから何気なく気付いていたが、センリは初対面のはずの自分達をすでに呼び捨てにしている。思うにそういう性格なんだろう。センリの質問に、流衣は小さく頷く。

「はい。それくらいしか取り柄ないですし」

大した取り柄がないからと、女神が魔力を多めにくれたのだ。一般魔法使い三百人分と、むしろそんなにいらないと思う程。

取り柄の無さを思い出してへこんだ流衣を目にしてセンリは僅かに首を傾げる。が、まあ良いか、と割り捨てて言う。

「では始める」

「……はい」

流されたのはそれはそれで虚しい。

しかし気にしている場合ではない。

流衣はリドがこちらに戻ってきたのを確認してから、無事な案山子の一本に向き直る。そして、何となく杖のトップを案山子に向けた。た。

魔法を使おうと思うと、すーっと流れるように杖のトップに魔力が引き出された。

意識しなくても滑らかに魔力が出てきたのに軽く驚き、僅かに目を見張る。

（何だか使いやすいなあ）

杖の効果だろうか？

それならそれでありがたい。

（えーと、威力は低めにしたいから……）

こんな所で、カザ工村を襲った盗賊団のお頭に向けたような威力の魔法を使うわけにはいかない。

そう思い、抑えた声で言葉を呟く。

「ファイアー」

杖のトップの花に似た形の飾りが青く輝いた。

直後。

真ん中の案山子を中心に爆発が起き、すさまじい爆音が轟いた。
爆発は他の二つの案山子も巻き込み、黒煙を上げて吹き飛ばし、爆風を引き起こす。その上、火柱まで立ち昇った。
五メートル程も離れているのに、流衣はあまりの風圧に目を閉じて足を踏ん張った。が、結局、風に負けて尻餅をつく。

風が止むと、案山子三分のスペースが黒く焦げて残っていた。

「……………!?!」

尻餅をついたまま、流衣は呆然と惨状を見つめる。

みるみるうちに顔から血の気が引いていった。

頭の中は真っ白。思考停止。

「なっ、なっ、なっ」

パクパクと口を開閉し、壊れたラジオみたいに声を零す。

「何で!?!」

やっと声はつきりと言いたいことを口にしたのは、「なっ」をプラス十回程呟いた後だった。

「ふーむ、圧巻だな。合格!」

感心した様子で唸ったセンリが結果を高らかに告げたのだが、驚愕に浸る流衣の耳には届かなかった。

『杖を手にしたからですよ』

混乱のあまり座り込んだまま動かない流衣に、オルクスはあっさりと言った。しかし口調に反し、内心は感激の渦が巻き起こっている。

ああ、やはりルイ坊ちゃんは、素晴らしい魔力の持ち主です!
女神ツィールカ様に頼まれるだけのことはあります。初めこそ弱虫そうで不安になりましたが、優しい方ですし、ええ、やはり素晴らしい!
晴らしい!

オルクスは動物型の使い魔では三本の指に入る大物であり、ラーザイナ・フィールドを守る三柱のうちの一柱・ツィールカに仕えて

いる、いわば神仕えの魔物だ。だから本来は人間に喚ばれることなく、人間を主人にすることはない。それでも心酔しているツイー ル力の頼みなので流衣を主人にすることを認めたのだ。

最初こそ不安であったものの、使い魔らしく主人を守り、ツイー ル力の頼み通り案内役をしていたのだが、カザエ村での一件以来す っかり流衣を見直したのである。きつと逃げる方を選ぶだろうと逃 げるように催促したにも関わらず、初対面の人間を探しに行き、結 果、盗賊団を追い払ってしまった。気弱で頼りなさげで泣き虫では あるが、芯は結構太いのだろうと感じ取った。

加え、流衣の傍らにいと妙にしっくりと馴染むというか、落ち 着くのもあって、ますます気に入ってきているオルクスである。町 に来た時に流衣に言ったことは世辞ではなく本音だった。

「えっ！」

流衣は杖を取り落とす。不気味なものでも思ったのか。

「杖というのは、魔力の引き出しをスムーズにさせ、魔力を高める 道具です。まさしく魔法使いに最も相応ふさわしい武器といえます」

うんうんと頷く流衣。杖を拾うか拾わざるかを悩み、真剣に耳を 傾ける。

「そして、その杖は名匠の作った名品中の名品。魔力を三割増し強 める作用があるようですね。流石は人間達にもてはやされるだけは あります」

「さ、三割増しって……！」

愕然と杖を見下ろす流衣。

流衣はしばし考え込み、恐る恐る言う。

「ていうことは、一般魔法使い三百人分が、三百九十人分になっ てるってこと？」

オルクスはしっかりと頷いた。

「そうでございます！ 計算が早くていらっしやる！ 流石は坊ち やんです！」

賞賛の言葉を浴びせてから、ただし杖を持っている場合のみです、

と付け足す。

「そ、そう……」

流衣は複雑そうに杖を見ていたが、やがて諦めて杖を拾い上げた。

ただでさえいらなくらいに魔力が大きいというのに、三割増し！

まさかの三割増しの事態に、流衣は冷や汗がたらたらと浮かんでくるのを止められない。

しかし、杖は魔法道具屋のフラムが認めた名品の水の七だ、こんな所に捨てていくわけにもいかない。

諦めて杖を拾い上げながら、ますます魔法の威力の加減が難しくなったことを嘆く。

「ルイ、何ぼーっとしてんだよ」

目の前でリドの手の平がひらひらと行き交い、そこでようやく放心から脱却する流衣。

慌てて飛び上がるように立ち上がる。

「あわわわ、ごめんリド、大丈夫だった！？ ああああとセンリさん、鍛錬場をこんなにしちゃってすみませ……っ」

「センリさんならとっくに受付に戻ったぞ」

「へ！？」

流衣はぐりんと周りを見回した。

確かに、リド以外に誰もいない。爆音に驚いたのか、窓からわらわらと色んな人達がこっちを伺っているくらいだ。

「そ、そうだよ。こんなにしちゃったら普通落ちるよね……」

「流衣がっかりしていると、リドは呆れたように言う。
「何言ってるんだ、お前は。聞いてなかったのか？ 合格したぞ」
目をパチクリ。」

しばらく意味を反芻し、目を丸くする。

「ええっ！？ 何で！？」

「圧巻だなんて言ってたから、素直に感心したんじゃないの？」
リドはけらけらと笑う。

「いやあ、こんなに威力あったとはな。驚いた。すげえよ、お前！」
バシツと背中を叩かれて前につんのめりつつ、どうやら良い方向に取ってくれたらしいと気付く。そのことにあからさまにほっとする。

自分でも威力の大きさに内心引きまくりだというのに、リドときたら引くどころか楽しそうだ。

「ほら、納得したんなら行くぞ。あの人、多分怒らせたら相当怖いぜ？」

いきなり真面目な顔になるリド。流衣も頷く。

「そうだね、僕もそう思う」

そこへセンリが「遅いぞ、小僧ども！ とつとと来ないか！」と怒鳴ったのに二人揃って首を竦め、慌てて受付の方に走った。

受付に戻ると、センリがカウンターの中に収まり、書類とトランプくらいの大きさの白いカードを二人の前にはずいと突き出した。

「これが登録用の書類だ。あとこっちは登録証明書。ここに名前を書け」

流衣は一瞬戸惑ったものの、不思議なことにこちらの文字で名前を書くことが出来た。読み書きを出来るようにしておいたというツイールカの言葉は本当だったようだ。まさか書けるなんて分かっていても驚きだ。

二人が名前をサインしたことを確認すると、センリは満足げに頷く。

「ギルドの施設を利用する際は、受付でこの登録証明書を提示しろ」
言いながら、カードの方を流衣達の前に戻す。流衣は受け取って、カードを見た。

汝、ルイ・オリベを我がウィングクロスの一員と認め、ここ

にその証明を成さん。

カードには横に三行、このような文が記され、右下にはウィングクロスのシンボルが刻み込まれていた。

「このシンボルの部分のみ、特殊なインクが使われている。だから偽造は出来ん。よってこれを持っていれば、お前達の身分は我がギルドにより保証される」

センリは抑揚のない声で話す。

「ただし、もし犯罪行為などをした場合は、一応ギルドから派遣した職員が調査して、その後、登録を剥奪される。冤罪えんざいやスケープゴートから旅人を守るのも我らギルドの職務だ。この場合において登録を消されると、再登録は出来ない」

そこまで言って、小さく息をつく。

「何も犯罪を起こすと決めてかかっているわけではないから、気を悪くしないでくれ。このことについては説明する義務があるだけだ」

「分かってますよ」

「はい」

リドと流衣が答えると、うむ、と頷くセンリ。

「では次の説明に移る。カードの裏を見る」

言われた通り、カードをめくる。

すると、カードの左上にEランクと書かれていた。

「ギルド内の仕事を受ける場合、このランクに左右されてくる。登録当初はEから始まる。」

Eランクは、いわばギルドのお試し期間だな。

Eランクと書かれたクエストを三件クリアすれば、Dランクに上がれる。次はDのランクの仕事を十回こなすと、Cランクに上がる。Bランクまではそうやって上がれるが、Aランクへ上がるには、Bランクの仕事を十回と昇格試験を受けなくてはいけない。現時点ではA^{エープラス}、S、S^{エスプラス}、S^{ダブルエス}、SSまでのランクがある」

流衣はこくこくと頷く。

それを微笑ましげに見やっってから、センリは更に続ける。

「ランクに応じて報酬は上がるが、その分、危険度も増すから注意してくれ。それから、自分のランクより上の仕事を受けることは出来ない。言いかえると、自分のランクとそれ以下のみだけ引き受けられることが出来る。」

ただし、BランクはDランクまで、Aランク以上はCランクまで下の仕事しか受けられない。D、Eランクの者の昇格を邪魔することになるからな。

ランクについては以上だ。こっちにも書いてあるから、読み返すといい。」

セリリはてきぱきと説明してから、小冊子を流衣達に差し出す。

「クエストについては、受ける場合はクエストボードから自分のランクに合ったものを選んで、受付で契約してくれ。やむを得ずクエストを中止する場合や、期日に間に合わなかった場合、報酬の減額もしくは罰則金の支払いが発生する。クエストの結果はギルドの信用に関わるからな、理解してくれよ。それから依頼主に対しても出来るだけ礼儀正しく接して欲しい」

何故かセリリはリドを見ながら言う。

「それって俺が礼儀知らずだって言いたいんすかね？」

少し不満げにリドは口を尖らせた。

対し、セリリはにやりと口の端を上げる。

「そっちの小僧は素直そうだから平気だろうが、お前は我が強そうだな。くれぐれも依頼主と喧嘩などしてくれるなよ」

「よつぽど腹立つことされなきや喧嘩なんてしませんよ」

飄々と肩をすくめてみせるリド。言外に、約束できないと告げている。

「依頼主との間でごたついた場合は、ギルドに相談しろ。こちらで仲介するから」

「分かりましたよ」

仕方なさそうに頷くリド。

一方で、流衣はそういうこともするんだなあと感心する。

「おおよその説明はそんなところだ。あとは施設だが、その小冊子に載ってるから自分で確認してくれ」

さつき差し出した小冊子を示して、センリは言う。

言われた通りに開いてみると、施設案内が載っていた。

「最後に、ウイングクロスは余程の辺境や田舎町でない限り、世界中どの町にも大抵一つの支部がある。その特性を生かし、このギルドでは銀行と郵便物預かりシステムがある。この二つは一般人も利用可能だ」

銀行と郵便についての説明は、朝、リドが説明してくれたことと同じだった。

「……そういうわけだが、お前達は どうする？ 利用するのならついでに登録を済ませてしまおうと思うが？」

「お願いします」

リドが言い、センリは了解したと頷く。

「手続きには時間がかかる。明日、ここに来い。それまでには完了させておく」

「分かりました」

「よろしくお願いします」

頷くリドと、頭をぺこりと下げる流衣。

センリはにやりと笑う。

「では健闘を祈る。新米ギルド団員達」

力強い言葉をつけ、流衣は素直に礼を言った。

八章 ウシネズミのシツポを確保せよ！（前書き）

*この話中、戦闘表現があります。

八章 ウシネズミのシッポを確保せよ！

求む。ウシネズミのシッポを十本。

報酬：銅貨二十枚

依頼主：ラーザイナ魔法使い連盟

相当ランク：E

生活に慣れる為にもしばらくドーリスの町で活動しようという話にまとなり、流衣達はドーリスのウィングクロス支部に宿を移した。登録者が安い値段で利用出来るというのは本当で、普通の安い宿で朝食が付いて一泊一人銅貨二十五枚なのに、ウィングクロスは宿舎だと朝食代抜きで銅貨十枚だった。食堂ではプレートセット一つが銅貨三枚で食べられるのだから、この安さが驚きだと理解してもらえるとと思う。

それはそうと、昼食後、早速クエストボードの前にやって来たら、こんな面白い依頼表を見つけた。勿論Eランクだ。
「ウシネズミのシッポ十本ねえ、杖連盟の奴ら、一体何に使うんだか」

リドはこの世の謎だ、というニュアンスを込めて呟いた。
流衣も興味津々である。ウシネズミは中型犬くらいの大きさのネズミだが、シッポはその二倍の長さはあるのだ。

だが、古来からネズミのシッポというのは黒魔術の材料など、とかく魔女の薬にまつわるようなネタが多い。

「薬の材料とか？」

流衣の言葉に、リドはおえつと吐きそうな顔をしてめいっぱい拒否を示す。

「そんなもん使いたくねえな」

そう言いはしたが、クエストボードからベリツと依頼表を剥ぎ取るリド。

「それにするの？」

「おう。雑魚魔物だしな、ルイでも平気さ」

「……ここに来るまでのこと見てて言ってる？」

流衣はげんなりするが、リドは笑って取り合わない。

「すぐ慣れるさ。それに魔法の練習にもなるだろ？」

上手く魔法の威力を調節できないのを完全に見抜かれている。

「そうだけどさあ」

このままでは魔法を使う自分も危ないし、何より一緒にいるリドとオルクスも危なくなるわけだ。この辺で調整くらいマスターしておかないと怖すぎる。

「はいはい、諦めて行くぞー」

「鬼ー！」

が、そう思っただけでもやっぱり魔物の相手は怖い。流衣が引けているのを看破かんぱしているリドは、ごねる流衣を引きずって受付に連行していく。流衣は悪あがきで叫んでみたが、残念なことに周りの大人達には仲の良い兄弟のように映るらしく、仲が良いなあなどと呟かれた。

町の外に出ると、カザエ村へ伸びる街道のある平原をウシネズミを探して散策した。

町や村には魔物避けの結界が張られている為に魔物は近づけないが、基本的にウシネズミはどこにでもいるありふれた魔物だ。だから探していればすぐに見つかるんだそうさ。

とは言っても、見つけるまではただの散歩と同じ。折角だから、流衣は魔法の練習をすることにした。本来の点火の術を使えるようにしたい。

ぎょっと距離をとるリドにはそう説明し、練習に入る。

ロケットの点火場面を想像するから爆発するのだ、ロウソクの火を想像すれば普通に使えるのではないかと思った。

流衣は杖を前に斜めに出し、杖の飾りの上に火が灯るのをイメージしながら呟く。

「ファイアー」

ポツ！

音を立てて火がついた。

「おおっ、……お？」

上手く火がついた！ と喜んだのも束の間。

「なんかでかくないか？」

リドが言う通り、炎は大きかった。これは点火程度の“灯火”ともしびではない、“火の玉”だ。

「ま、まあ、大きいロウソクだと思えば、そうも見えますよ」

オルクスが慰めともつかない言葉を口にし、流衣はがつくり肩を下げる。

それから炎を消し、もう一度ロウソクの火を思い浮かべる。そして今度は、杖のトップに集まる魔力を出来るだけ微細なものにする。これが、魔力を多めに流すよりも難しく、いつになく真剣な顔になった。

「くぬう……こんな感じかな……？ ……ファイアー」

心なしか声も小さく。

ポウツ。

今度は、ロウソク程度の火が灯った。

流衣はパアツと顔を輝かせる。

「やったあ！」

飛び上がって喜ぶ。

本来の使い方をするのに苦労して喜ぶなんておかしいものだが、それはそれで嬉しい。

が、喜びすぎて足元不注意になり、ずべつと転んだ。

「おいおい大丈夫かよ？」

顔から綺麗に地面にダイブした流衣を思わず見守ってしまい、はたと我に返って手を差し出すリド。

「何も無いとここで転ぶなよ、驚くだろ！ さりげなく、ここ一番のびっくりだよ！」

「うぎゆう。僕もびっくりだよ……」

打ち付けた鼻が痛くて、鼻声になりながら答える流衣。どん臭いとは思っていたが、ここまでだったとは……。

そう思って足元を見て、ぎゃあと悲鳴を上げる。

足に白い蛇みtainなものが絡みついていた。これのせいで転んだのか！

蛇にびびる流衣に対し、リドは目を輝かせる。

「おお、すげえ！」

「は？」

「こいつはヘビツタっていう草だよ。なかなか見つからない貴重な薬草。ルイ、お前、運があるのか無いのか分からねえ奴だな！」

蛇に見えたのは草だったらしい。どういう理屈か知らないが、たまたま偶然流衣の足に草が絡みついたようだ。

リドは草を摘んで持ち上げ、ためつすがめつ眺めている。

「実物見たのは前に一度つきりだぜ。すっげえなあ、まじで蛇みてえ」

害がないと分かれば流衣も気になる。

「僕にも見せて」

「ほい」

手に乗ったヘビツタはリアルに小さいヘビだ。動かないし、よく見れば草だと分かるが……。こんな心臓に悪い植物が貴重な薬草なのか。分からない世界である。

「いいや、気持ち悪いし、リドが持つてよ」

「おっ、いいのか？ じゃ、大事に持つておくかな」

楽しげにもう一度ヘビツタを見てから、リドは背負っている皮製の鞆を下ろして、中から袋を取り出し、中へと入れる。

何がそんなに気に入ったのか分からない。だが、なんとなくリドがガザ工村の人達に風変わりといわれていた理由が分かった気がした流衣である。

そこでガサガサと茂みの鳴る音がして、ウシネズミがのたのたと街道に現れた。ネズミという名に反し、ウシネズミの動きは鈍い。まさしく牛だ。丸々と肥えているからウシネズミではなく、牛のように動きが鈍いからウシネズミなのだ。

「で、出た！」

流衣はぎよつと後ろに飛び退^{すき}った。

薄茶の体毛をしたウシネズミは、黒い目をのろのろと流衣に向ける。その額には、黒い星のようなシミがある。先端を細く尖らせたダイアの形だ。

この黒いシミこそ、ウシネズミが魔物であることを示すマークである。

ラーザイナ・フィールドでは、魔王率いる闇の眷^{けんぞく}属 　いわゆる害とされている方の魔物には生まれた時からこの印が浮かび上がるのだとか。当然、家畜には何も浮かばない。一方で、使い魔と称される魔物がいるが、こちらにも印がない。使い魔の方はその辺りを漂っている不可視の精霊に近く、異空間に生まれ育つもの、らしい。「逃げちゃ駄目だろうが、魔法の練習だろ」

育った環境がそうさせるのか、リドは意外にスパルタだ。しかし、常に弱腰な流衣に付き合ってくれている辺りは寛容だろう。

流衣は後ずさりかける足を踏みとどめ、杖を構える。威力は低めに、威力は低めに。心の中で何度も呟きながら、呪文を唱える。

「ファイアー！」

ドゴーン！

爆発が起き、土煙がもうもうと視界を埋め尽くす。。

「あちゃー……」

リドは額に手を当て、ウシネズミがいた所を見る。地面が黒く焦

げ、しゅつづつと白煙はくえんが風にたなびく。当然、ウシネズミは跡形もなく消し飛んでいる。

「やりすぎだ」

「……ごめん」

流衣はしおしおと謝った。

第二ラウンド。

今度はウシネズミの姿は消し飛ばなかったが、真つ黒に焦こげてしまい、シツポの回収が出来ず、失敗。

第三ラウンド。

威力が弱すぎて、毛一本を燃やしてウシネズミに逃げられる。失敗。

第四ラウンドでようやく火力を抑えることに成功し、ウシネズミの丸焼きが出来た。シツポは無事だ。成功。

四匹に一回は失敗しつつ、それでもコツを掴んできた流衣は、ようやく十匹のウシネズミの駆逐くちくに成功した。

全てが終わった時、真上にあつたはずの太陽はすっかり傾き、西日が朱色に眩しく輝いていた。

ぐったり疲れた流衣はその後すぐにウィングクロスに戻った。

「お帰り。お疲れのようだな」

埃ほこりっぽくなり薄汚れて帰ってきた流衣を目にし、センリは軽く目を見張った。リドの方は風を操作して土埃ちいじを弾はじいていたので綺麗なものだ。

「ただいま、センリさん。これ、依頼品です……」

「ああ、確かに」

シツポ十本と引き換えに、報酬の銅貨二十枚を受け取る。

「これ、何に使うんすか？」

リドが問うと、センリも首を傾げる。

「知らん。杖連盟には変わり者が多いし、あまり聞きたくもなくて

な

「そうつすか」

互いに苦笑を浮かべるリドとセンリ。

「ルイ、そろそろ風呂が沸いてる頃だ。それじゃあんまりだから、入ってこい」

「お風呂あるんですか!」

土埃でどろどろの流衣は、神の天啓を聞いた気がした。

町の宿には風呂がついておらず、湯の入った桶と布を渡されただけだった。こちらでは天然の水はそれほど豊富ではないので、あまり風呂は普及していないんだとか。風呂があるのは魔法使いと契約している宿か、魔法使いの家か、もしくは魔法道具を持っている者のみに限られてくるんだそうだ。

「宿舎の一階に共同風呂がある。魔法で水を出し、同じく魔法で湯を沸かしているんだ。どっちも高価な魔法道具である上に燃料に魔晶石の魔力を使うからな、利用料に銅貨五枚を取っている。だが、もし魔力を充填ちゅうてんしてくれるんならタダでいいぞ」

にやりとするセンリ。

魔力を充填するのに、杖連盟から魔法使いをいちいち雇っているのが、金も嵩かさむし面倒なんだそうだ。

さつきから、何となくセンリは杖連盟にあまり良い印象を抱いていないようにも見える。

「良いですよ、それくらい。魔力ならいらなくらいありますから」
流衣はそう答え、魔法道具への魔力の充填方法を聞いてから、その場を後にする。道具の中にある晶石に魔力を入れれば良いんだそうだ。それならフラムの店で練習していたから簡単だ。

共同風呂に行くと、ザーツという水の流れる音が絶えず響いていた。
普段から水浴びはしてもほとんど風呂を利用したことがないらし

いリドは、興味津々で風呂場を目にして歓声を上げている。

一方で、流衣は脱衣所でオルクスと軽く言い合いをしていた。

『ちよつ、坊ちゃん、わてはいいです！ 風呂はいいです！』

「駄目だよ、オルクス。僕のせいで君も埃まみれなんだから、ちやんと洗わないと」

『いえつ、お構いなく！ 濡れると羽が重くなって飛べなくなるんです！』

「大丈夫だよ、拭^ふくから」

『そういう問題じゃありません！』

抵抗してバタバタ暴れるオルクスに閉口しつつ、風呂場に入れようとしていると、リドが振り返り、意地悪く笑った。

「おいおい、駄目だろペット連れ込みじゃ」

「なっ、何ですって！」

たちまち金切り声に近い声を上げるオルクス。

流衣はオウム姿のオルクスを見て、ハツとする。

「そうだね、こういう所ってペット持ち込み禁止だっけ」

「ぼ、坊ちゃんまで！」

悲壮な声を上げるオルクス。

流衣は仕方がなくオルクスを脱衣所の籠の一つに置き、謝る。

「ごめんね、オルクス。ちょっと待っててくれるかな。洗うのは部屋に帰ってからのするから」

「そつちですか！ ていうか、結構ですっテバ！」

オルクスはなにやらシヨックを受けた様子だったが、流衣は聞く耳を持たず風呂場の方に行く。

それから、先に魔力を充填しようと風呂場内を見回す。風呂場はタイルが敷き詰められていて、手前に洗い場、奥に風呂があった。

四角い風呂の槽は大人が十人くらいは余裕で入れそうな広さだ。

「ふーん、ここからお湯が出てるのか」

風呂場と洗い場を仕切るように、円形の台があり、その中央からお湯が湧き出して、洗い場の台の上を通る溝と、風呂の湯の注ぎ口

に通じている溝とに別れて流れている。そして先にある排水溝へと水が消えていく。風呂場の方も同じで、注ぎ口から一番遠い淵だけ一段下げてあり、そこから許容量を越えた湯が流れて、その真下の排水溝へと消えていつている。完全に流しっぱなしの状態だ。

それから、洗い場の台には蛇口が四つついていて、そこを回すと台の上を通る溝から湯が出てくるようになっていた。この仕組みを考えた人はある意味天才だ。

まあ、エゴを叫ぶ地球ではもったいないオバケが出そうな光景ではある。魔法で湧いているお湯だから、水道代とガス代が嵩むという心配はないだろうけれど。

「魔法道具ってこれじゃないか？」

円形の台の側面を指差し、リドが言う。

「あ、ほんとだ」

言われてみれば、側面に文字や石が埋め込まれている。表面には飾りのようにつるりとした昌石と、赤い石と青い石があった。

センリに言われた通り、まずは青い石に触れて魔法道具を止める。これで火の魔法が止まることになるので、次は水の魔法だ。円形の台を覗き込むと、平らな部分に楕円形の箱が置いてある。水はまだ流れ続けているが、手で触れると冷たくなっていた。その箱にも昌石と青い石と赤い石がはまっているので、今度は赤い石に触れて水の魔法を止める。

そして、水の出る魔法道具の昌石に魔力をギリギリまで入れると、青い石に手を触れて水を出し、元の位置に戻す。同様に水を温める作用のある魔法道具の昌石にも魔力を充填する。次は赤い石に触れ、起動させる。

仕組み自体は単純だが、発想は面白い。

一仕事を終えたので、流衣はすぐさま埃を流すことに専念する。リドが持ち込んだ石鹸や宿舎備え付けのタオルでゴシゴシ洗ってから、風呂に浸かる。至福の一時ひとときだった。

そうして日本人らしく風呂を満喫しながら、色々と生活用品が足

りていない事実には思い至り、また買いにいかなきやなあと頭の隅で考えた。

その後、風呂を出て部屋に戻った流衣は、前言通りオルクスを洗うことを実行しようとした。が、オルクスが水に濡れるのを嫌がって逃げ回ったので、根負けした流衣は仕方なく濡らしたタオルを固く絞って、それで拭くのとどめた。

(いつか絶対に石鹸で洗う!)

と、珍しくも闘志を燃やし、こっそり心に誓った。

翌日。

クエストボードを見に受付のある建物に顔を出すと、センリに声をかけられた。

「銀行の口座と郵便ポートの開設準備が出来たぞ」

手招きされるままに受付までやって来ると、長さ五センチ程の水晶のペンダントを目の前に二つ置かれた。水晶は六角柱で、驚いたことに石の中に文字とギルドのシンボルが書き込まれている。レーザーでもなければ出来ないだろう技術に、ここの技術レベルはこんなに高いのかと驚く。

「これが認識スティックだ。中にはお前達の名前と認識番号が記されている。金のお出し入れと郵便確認の際はこれを受付に出して照合し、確認を取るっていう仕組みになっている。言うのを忘れていたが、これ一つの代金が銅貨三十枚だ。もし支払いが無理なら、貯まるまで貸しにしておくが?」

センリが苦笑混じりに言う。しくじったと顔に浮かんでいる。

「あ、大丈夫です。払えます」

流衣は財布から銅貨を取り出し、枚数分渡す。

「よし、枚数分しつかりだな。いいか、これは絶対に失くすなよ。

だが、もし失くした場合、ギルドに名乗り出る。口座と郵便ポート、どちらも機能停止させるからな」

「はいっ、分かりました！」

流衣ははつきり頷く。

それから、ついでに金貨四枚と銀貨五枚を口座に預ける。大金を持ち歩くのは怖かったので、ようやく人心地がついた。

「あとそうだ、昨日は魔法道具の魔力の充填、助かったよ。魔法を扱える他の職員が、ほとんど満タンにまで充填してあると教えてくれてな。正直驚いたぞ」

「はあ、でも、充填するって約束しましたし……」

「そうではなくて、あれ二つを満タンにするには魔法使いを四人雇う必要があつてな。それで驚いている」

「あ、そうなんですか」

流衣は納得し、役に立てたことを嬉しく思う。あまり取り柄もないし、性格もこうだから頼りにされるといふ経験があまりなく、何となく照れてしまう。

「僕は魔力が多いらしいんですね。また必要なら言っして下さい、充填するくらいなら僕でも役に立てますから」

センリはそんな流衣の言葉に虚をつかれ、感極まった様子でワシワシと流衣の頭を撫で回した。

「お前、何て良い子なんだ！ 私の弟にしたいくらいだ！」

「ぎゃっ、ちよつとやめてくださいセンリさん！ イタタ、イダダダ……！」

力いっぱい撫でられて、しかも爪がガシガシ頭皮に当たり、流衣は悲鳴を上げる。

「あースマンスマン。つい力が入った」

「うう、勘弁して下さいよ」
ちよつと涙目になって両手を頭に当てる。まさか血が出ていたりしないだろうか？

「あの、それじゃ、これで……」

これ以上構われると命が危ない気がしたので、流衣はそそくさと受付を後にした。

で。

「またある」

「またあるな」

クエストボードの前。昨日と同じく、ウシネズミのシツポ求むの依頼表を見つけ、流衣とリドは思わず呟いた。

「だから何に使うんだよ」

「さあ」

リドが突っ込み、流衣は首を傾げる。

しかも、今日は同じ内容の依頼表が三枚貼られていた。

「昨日ので慣れただろうし、二十本探しに行くか」

リドはそう判断し、依頼表二枚をボードから剥ぎ取る。

「うん、多分平気かな」

昨日のように反論することはなく、流衣も頷く。と言っても、すでに剥ぎ取られた後だったが。

それから、昨日と同じように夕方まで平原を歩き回り、二十本のウシネズミのシツポを手に入れてギルドまで戻った。

報酬を貰い、Dランクへの昇格を告げられた。

これでお試し期間は終わり、一般の団員への仲間入りを果たした。

「流衣、おいしいものってのはすごいんだぞ。人を幸せにするんだ」
まだ流衣が幼い頃、七つ年上の兄が笑顔満面でそう言った。そして、笑顔のまま、テーブルにしている流衣の前に、兄自作のショートケーキを置く。

「それって本当、兄ちゃん」

その頃、まだ九歳かそこらだった流衣は、兄を見上げて問いかけた。

「そうだぞ。ほら、食ってみる。兄ちゃんの力作だ」

「うん、いただきます」

両手を合わせて、フォークでケーキを切り分けて、一切れ食べる。流衣はたちまち笑顔になった。

「おいしい!」

すると兄はニツと笑った。

「ほらな。幸せになつたろ?」

「うん! 兄ちゃん、すごいね!」

パクパクとケーキを頬張りながら、流衣は尊敬のこもった目で兄を見上げる。兄は満足げに頷いた。

しかしそこで流衣はふと不安になった。

「でも、兄ちゃん。食べた人が幸せになるんなら、作る人はどうなるの?」

兄は一瞬だけ目を丸くしてから、優しく笑ってこう答えた。

「食べた人が笑っておいしいって言うてくれたら、作る人も幸せになるんだ」

小さい頃の幸せな夢を見て、朝方に目が覚めた。

流衣はまだ暗い室内で目を開けて、ぼんやりと天井を見上げた。年の離れた兄は普段からあまりお喋りな方ではなかったが、小さい流衣よりずっと大きくて、力も強く、何より優しかった。両親が忙しい為にとんと兄に育てられたようなもので、それもあって流衣は兄が大好きだった。料理好きな兄の作る料理も好きだった。

しかし兄は流衣が十二歳になった時、パティシエを目指す為に寮制の専門学校に行ってしまった、家を出て行った。

出て行く時、気弱な弟のことを心配そうにしていたのを今でも覚えてる。

といつても、長期休暇があれば家に帰ってくるから、今生の別れというわけでもないのだが、まだ小学生だった流衣にはそれでも寂しい別れではあった。

今では、兄は専門学校の近くにあるレストランのオーナーに弟子入りし、下積みの日々を送っている。

兄を思い出したせいか、心臓をぎゅっと掴まれたような寂しさに襲われた。

(これがホームシック、かあ)

悲しくもないのに泣きたくなるのが何とも不思議だ。

兄を思い出したら両親も思い出し、家、自分の部屋、友達、学校と連鎖的に思い出してくる。

これがちよつと離れた所に旅行しに来ている程度なら、電話でもすれば寂しさも紛れるのだろうが、ここには知人は誰一人いない。

それに気付いたら眠れなくなってきたので、ベッドから降りて、窓際にある椅子の方に行つて膝を抱えて座る。すると気付いたオルクスが追いかけてきて肩にとまったので、ちよつとだけ苦笑した。どうやら起こしてしまつたらしい。

流衣はそれから、徐々に白んでいく朝の空をぼんやりと眺めた。

日の出から一時間後、いつもの起床時間にパチリと目が覚めたりドは、すぐに起き上がって大きく伸びをした。

そして、あくび混じりに目をこすりながら、なにげなく隣りのベッドに目をやってぎよっとする。

なんと流衣がいないではないか。

寝起きで頭が回らなかつたのもあり、あいつは夢遊病の気でもあったのかとか、もしかして旅人を狙った誘拐犯にでもさらわれたのではないとか、少し非現実的な方向に考えが傾いていく。そしてこれはまずいぞ、王国警備隊！ と内心で叫んだところで、窓際に流衣が座っているのを見つけた。

何だよそんなとこにいたのか傍迷惑な奴だなど、流衣にしてみれば八つ当たりの悪態を内心でつきつつ、何となく声をかけられないうで、開きかけた口を閉じた。

黒髪黒目の異国の少年が、肩にオウムを乗せ、窓枠に肘をついて見るともなく外を眺めている光景は、まるで一枚の絵のように見えた。朝の白い光がますますそう見せている。

しかしそんな見た目より、流衣がどこか寂しそうにしているので、声をかけるべきか悩んだのだ。考え事をしているのなら邪魔しない方がいいような、そんな雰囲気だった。

これまで生きてきた処世術で、空気を読むことには敏感な性質のリドだったから、尚更憚られた。

少し考えて、声はかけずに洗面所に行こうとそろりとベッドから降りる。

「あ、おはよー」

が、部屋のドアノブを掴んだところで急に声をかけられて、びくっとする。しかしそこは平静を装って振り返る。適当に取り繕うのは得意中の得意だ。

思ったよりも普通の流衣が、ちよっと不思議そうな顔でこっちを見ていた。

「どっか行くの？ 起きたんなら声かけてくれればいいのに」

「いや、まあ、うん。考え事の邪魔しちゃ悪いかと思ってな」
流衣はきよんとする。

「考え事？ ぼーっとしてただけだよ」

ああ、そうですね。

気を遣った自分が馬鹿らしくなったリドだった。

* * *

リドにはそう言ったものの、考え事をしていたといえばしていたといえた。

といつても、故郷に思いを馳せるなんて、自分には似合わないような説明文になってしまふのだが。そういうのは、美形がしないとただの鬱陶^{うっとう}しい根暗にしか見えない。

そう思つて適当にごまかした。

顔を洗つても、朝食を食べても、何となく陰鬱な気持ちが抜けず、ことあるごとに溜め息をついていたら、案の定、リドに鬱陶しいと怒られた。

「何がそんなに不満なんだか知らねえけどな、ちつたあマシな面してる。今日のクエストは無しだ、無し！ そんなんじゃかえつていらん怪我をする！」

そんなわけで、今日はクエストはせず、町を散策することになった。

流衣は一人でも平気だと主張してみたが、リドからすると大変問題があるようで ひどいと思うが、目を離れた隙にカツアゲにあいそう、らしい 結局、流衣とリドとオルクスの三人（二人と一羽？）での行動になった。

ちようどいい機会だと、足りていない生活必需品を色々買い足そうと思い、店をあちこち覗いて回る。

が、そうして歩いていて、ふと気付く。

二日前より、フラムの店以外の魔法道具屋の闇が濃くなっている。

外から見ても分かるくらいだ。

しかも事態はまずい方に進行しているらしく、通行人にもちらほらと黒い煙のようなものを連れてくる人が何人かいた。

「ふーん、俺には見えないけど、そんなに酷くなってるのか」

リドに伝えると、今一よく分からない様子ながら、リドは言う。

「風の精霊達もたまに嫌がつてるけどな、度合いが分からねえ」

あつさりそんな返事を超越され、流衣は面食らう。

「ねえ、もしかして風の精霊が見えるの？」

確か不可視の精霊ではなかったのか？

「いや、見えねえよ。声が聞こえるくらいだ」

「それでも十分すごいよ」

「お前だつて聞こえるんだろ？」

そんな切り返しに、流衣はうつと言葉に詰まる。

「僕のはあれだよ、幽霊とかそつち系だよ。精霊なら可愛い方じゃない」

「そうか？ たまにうるさいと思うから、似たようなもんだろ」

すると、その言葉に抗議するように、リドのすぐ目の前に風が渦を作った。小さな竜巻みたいなものが、ビュウビュウと唸り声を上げる。

周りの通行人達はその奇怪な現象にざわつく。

リドは両手を広げ、慌てて精霊達をなだめにかかる。

「ああ、悪かった。幽霊なんてのと一緒にして悪かった！ お前らは怖くなくて可愛い！ だから今すぐやめてくれ！」

どうやら風の精霊達は、自分達は可愛いのだと主張していたようだ。

リドの言葉に満足したのか、風はすぐに収まった。

「ほら見る、機嫌損ねるとすぐああだぜ？」

ちよつと疲れたようにリドが言い、結構苦労してるんだなあと流衣はそんなリドを見やる。

気付いたリドは肩を竦め、フラムの魔法道具屋を示す。

「何か進展してるか、フラムさんとこ行ってみようぜ。また顔出せ
って言われてたしさ」

「そうだね、そうしよう」

魔法道具屋ビスケットに顔を出すと、店は相変わらずボロボロだ
ったが、幾分綺麗に磨き上げられていた。ボロい分、清掃には余念
がないらしい。

「モリス、その釘を取ってくれ！ 全くこの窓枠ときたら、隙
間風が酷すぎる！」

脚立に乗ったフラムが、ぶつくさと文句を言いながら、天井に近
い位置にある明かり取り用の窓に金槌を向けている。そして、空い
ている左手を後ろに向けて突き出していた。

流衣は脚立の足元にある釘箱を見つけ、そこから釘を一本取って
フラムの手に乗せる。

「よし、いいぞ。これで木枠の浮いたのが直って 良し！」

金槌で釘を打ちつけ、大変満足した顔でフラムは脚立を降りた。
そしてベキバキと肩を鳴らして顔を上げ、そこで初めて流衣達に気
づく。

「うおっ！ お主ら、いつからそこに！？」

「さっきからですよ、親方」

カウンターについているモリスがおかしげに笑う。

それでさっきの釘を渡したのがモリスではないことに気付いた
フラムは、少しバツが悪そうに顔を赤らめた。

「ふん！ いるならいるとそう言え！ 人騒がせな坊主どもじゃな
い！」

「はあ、すみません」

理不尽だと思ったが、肩を竦めて謝る流衣。

フラムは気にせず脚立と道具を持って勝手口から外に出て行き、
しばらくすると手ぶらで戻ってきた。

「それで、今日はいかような用件で？」

一つ咳払いをし、気を取り直して問うフラム。

無理矢理感のある取り繕い方に、四人の若い職人達は顔をうつむけてクスクスと笑う。勿論気付いているフラムは四人をねめつけた。「こないだの闇物の一件、どうなったのか聞きたくて……」

流衣はそう答え、ますます酷くなっているようだという旨を告げる。

フラムはふうと息をつく。

「一応、王国警備隊には連絡したんじゃないやがのう。何せ一般兵が多いからな、対処しきれんのじゃろうて。ここは自腹を切っても、杖連盟れんめいに対処してもらうかのう……」

フラムはあの一件以来、他の魔法道具屋を回って、闇物を神殿に納めるように助言したのだ。しかし、ハンスと同じく黒く濁った目をした店主らに睨まれ、その上営業妨害で訴えられると言われ、渋々引き下がるしかなかった。

「杖連盟って、そういう依頼も引き受けてくれるんですか？」

流衣の問いにフラムはきよとんとし、それから流衣が魔法使いとしては素人なのを思い出して逆に訊く。

「お主、杖連盟に入つたらんのか？」

「う……。だって、三年に一回の会合に参加しないといけないってウイングクロスで聞いて。僕、そういうのって苦手で……」

未だラーザイナ魔法使い連盟、通称杖連盟を訪れていないのは、そういう理由からだった。

「ただの会合程度で、全く情けない小僧じゃのー」

「す、すみません」

ひたすら呆れられるが、流衣は身を縮めるしかない。その様はますます小動物じみて見えさせ、フラムを含めた職人達はうっかり可愛いなど思ってしまった。

四人の若い職人達が小ネズミを連想したのに対し、フラムの場合には孫を見るような心境ではあったが。

「あの、それなら、僕も何か手伝えないですか？　ほんとに、あれは危ないと思うんです……」

流衣はどきまぎしながら、勇気を振り絞って言ってみる。近付いただけで吐き気を覚えるような代物が町中を蹂躪しつつあるなんて放っておいていい問題ではない。それくらい、十五の子供にもすぐに分かる。

「ふーむ」

フラムは顎に手を当てて考え込み、そうじゃなあと天井を仰ぐ。

「それなら、魔晶石を幾つかこしらえて貰おうかの。あれをちらつかせれば、奴らも重い腰を上げるじゃろ」

良い悪戯を思いついたと言わんばかりの態度で、にやりとするフラム。

「そんなことで良ければ」

今一、自分の作り出す魔晶石の凄さを理解していない流衣は、そんな簡単なことで良いのかなあと思いつつ、頷いた。

青く輝く魔晶石を三本作り、店で売る分として更に三本作った流衣は、フラムの店を後にした。

店の分については、今回は代金を貰えた。フラムが宝石店に売り出して、そこで得た代金から支払えば良いと気付いたのだ。落ち着いて考えればそうするのが一番だと気付けたのだろが、前は急だったから仕方が無い。

銀貨六枚と銅貨七十五枚が増えてちよつとだけほくほくしつつ、通りを歩いていく。

フラムには、自分で晶石を買って、魔晶石にしたものを店で売ればもっと利益が出るのにと諭されたが、自分には魔晶石は必要ないからこの方式で構わないと返した。フラムだけでなく職人達やリドにもこぞって呆れた顔をされたのだが、何かおかしかったらどうか？

まあそれは除いて、魔法道具作りや道具の燃料にも魔晶石が使える

ると分かったので、三つ程晶石を買ってみた。何かに使えるかもしれない。

「お前さあ、お人好しってよく言われぬか？俺、ほんっといついてきて良かったよ。ルイ一人だったら、確実に悪そうな奴らにカモられてたな」

メインストリートを歩きながら、リドがやけにきつぱりと断言した。その中身に、流衣はガンとシヨックを受ける。

「だ、大丈夫だよ。チビとかドジとかとろくさいとか、そういうことをよく言われてたから、悪そうな人と善い人の区別つけるのは上手い方なんだ」

根拠のない自信を述べつつ、流衣はずんずんへこんできた。

「リド。あなたは、ほんとニ、お馬鹿ですネ！本気で、最低デス！」

へこんでいる流衣を見て、リドに食ってかかるオルクス。

「馬鹿馬鹿言うな、片言オウム！」

「何ですって、赤猿！」

オルクスは流衣の肩からテイクオフし、爪でもってリドに急襲する。

リドはそれを難なく交わし、舌まで出す余裕を見せ付けた。

「あわわわ、二人とも、こんな所で喧嘩しちや駄目だよ……っ」

人通りの多いメインストリートでの喧嘩に慌てる流衣。しかし二人とも聞く耳を持たない。

こんな所でなければ放っておいて、終わるのをじーっと待つのだが……。

妙なところで気の長い流衣は、それぐらいは普通に平気で耐えられる。待たせるより待たされることの方が断然多いので、自然と身についた気の長さだ。

困り果てたものの、止められる自信がない為に一人おろおろする。周囲の人は面白げに観察するだけで、止めようとする気配すらない。所詮、人間とオウムの喧嘩だからだ。

そうしておたついていたら二人と距離があき、人混みに飲まれてしまう。そのまま、人の波にあつという間に流された。

(うわわわわわ)

慌てて戻ろうとするも、最後には通りを横断してきた黒いゴーレム ミニゲス五つの列に押され、そのまま路地裏にペツと吐き出された。

「あでっ」

地面に尻餅をついて、啞然と通りを見る。

「うっ、とろくさいにも程がある」

駄目押しの一撃に、がっくり沈みこむ。

しかし座っていても仕方が無い。

流衣は立ち上がると、メインストリートに戻ろうとして、やっぱりやめた。ここで戻ってもまた人波に流されるのがオチだ。

さっきの場所まで戻るには遠回りした方が良さそうである。

“急がば回れ”と昔の偉い人も言っている。

もし無理でも、ウイングクロスに戻れば平気だろう。

流衣は一つ頷いて、路地裏の暗がりをどぎまぎしながら歩き出した。

九章 悪魔の瞳 2 (前書き)

*この話中、戦闘表現があります。

路地裏自体は入り組んだ造りではないのだが、通りの喧騒に比べればずっと静かで薄暗く、それだけに緊張を覚えた。

少し奥に進むと十字路に行き当たったので、さっきの道に戻る為に右に折れる。そしてまた直進し、しばらくしてまた右に曲がった。幸運にも誰にも会わないので、不良に絡まれることもない。リドの懸念のようにカツアゲにあうこともない。

少し遠くにメインストリートが見える。

そのまま走っていこうとしたら、思いがけず後ろから声をかけられた。

「もし、そのあなた」

「え？」

流衣は足を止め、きょろりと周りを見回す。

いつの間にそこにいたのか、フードを目深に被った白いマント姿の人が立っていた。顔が見えないので性別は不明。身長も体格も中間で通じそうで、断定するのは無理そうだ。

「ええと、何ですか？」

道を訊かれても困るんだけどなあと思いつつ、流衣はその人に問いかける。

「私はこの町に行商に来た者なのですが」

どうやら行商人らしいその人の声もまた、男とも女ともとれない声だった。女だったら少し低め、男だったらまあ普通、くらいの声音である。

「実は商品が売れ残ってしましまして。一つ貰って頂けませんか？」
行商人は弱ったような声を出し、鞆から置物を取り出して流衣の方に差し出す。両手の平が紫色の水晶玉を支えている、少し不気味

なオブジェだった。

「はあ、まあ良いですけど……」

これは売れ残るわけだと内心納得し、困っているならと受け取る
が、受け取った瞬間、ぶわりと全身の毛が総毛だった。

「いつ！」

オブジェに黒いものが纏わりついているのが見え、思わずオブジ
エを取り落とす。

するとパシツと行商人はオブジェを空中で受け止めた。

「どうかしましたか？」

ここにきて初めて、行商人の抑揚の無い声に不気味さを感じた。

「あ……あなたが、闇物やみものを配ってるという行商人……？」

後ずさりながら、口からぼろりと言葉が出た。

「おや、気付かれてしまったか。言い当てたのはあなたが初め
てですよ」

少し愉快気に、行商人は口を吊り上げた。

「ですが、ばれてしまったては生かしておく理由もない
にーっ」と笑みが浮かぶ。

「すみませんが、死んで下さい」

行商人はマントの下からスルリと中剣を取り出し、問答無用で斬
りかかってきた。

すみませんで殺されてはたまらない。

振り下ろされた剣を、流衣は咄嗟に後ろに跳んでかわす。

そこへ更に追撃が加わり、ほとんどまぐれで第一撃をかわしただ
けの流衣は、ヒツと息を呑んで杖を前に突き出した。

ギン！

金属の鳴る高い音がして、剣が杖に弾かれる。

行商人はチツと舌打ちし、杖ごと叩き斬らんとばかりに勢いよく
剣を振り下ろす。

流衣はそれを目を丸くして見つめ、そして。

ズガン！

突然飛来した棒が二人の間に突き刺さり、両者を弾き飛ばした。

今のは何だったのかと、尻餅をついた格好で流衣は目を白黒させていた。

まるで隕石でも衝突したかのような衝撃だった。

「え……、ステッキ……？」

しかし飛来した棒の正体は隕石でも未確認飛行物体でも何でもなく、ただの普通の黒いステッキだった。あれだけの速度で飛んできて、地面に突き刺さるだけで済んでいるのが普通のステッキなら、
だが。

呆然とステッキを見やりつつ、その奥に視線を飛ばす。流衣と対称になるように、行商人もまた尻餅をついていた。

若干混乱していると、そのステッキの取っ手に黒い影がフワリと舞い降りた。

（ステッキが飛んできたかと思えば、今度は英国紳士……！）

それはある意味、とてもシュールな光景だった。

黒いシルクハットを被り、黒いタキシードを着込んだ褐色の肌のダンディーなお爺さんが、ステッキの上に立っているのだから。

彼の髪は短めに切られた黒髪で、薄暗がりでも鈍く光る琥珀色の目をしていて、わしはな驚鼻が高貴さと頑迷さを醸かもしだしていた。格好は前述の通りで、どこからどう見ても産業革命期の英国紳士そのものだ。
「ようやく見つけましたよ、イビルスアイ悪魔の瞳の回し者殿」

ダンディーなお爺さんは声もダンディーだった。

声をかけられた行商人は、チツと舌打ちして立ち上がる。

「困りますなあ。こんな風にやみもの闇物をあちこちばら撒かれては。幾ら私が温厚な黒竜でも、これは見逃せません」

「何が温厚だ。黒竜が温厚なものか。凶暴で残忍な、悪魔の竜ではないか」
皮肉っぽく行商人は言った。さっきまでの丁寧な口調はどこへやら、乱暴な言葉遣いに変わっている。

（え？ え？ このお爺ちゃん、ドラゴンなの！？）
びつくりして、流衣はまじまじと、見た目英国紳士な老人を見やっ
つた。

どこから見ても普通の人間だ。羽もないし、鱗もない。
「私は温厚な方ですよ。でなければ、すでにあなたはこの世におり
ません」

穏やかに、まるで天気でも告げているような口調で空恐ろしいこ
とを言う老人。

行商人は鼻を鳴らし、殺気を漂わせて老人を睨む。

「何故、黒竜が我らの邪魔をする？ 魔王様の側近だろうか？ 裏切
り者か？」

「黒竜の全てが魔王に仕えていると思うのがそもそも間違いです。
人間に味方する一派も勿論おります故」

老人が笑ったような気配がした。

「こんな風に、じわじわと世の中を掻き回すのはやめて頂きたい。
あなた方も同じ人間なら、人間らしく人間の味方をするのです」

今度は行商人が笑う。

「それこそ愚問だな！ 私はあの方以外の人間などに味方する気は
ない！」

「……これですから、分ならず屋は困りますな」

老人は溜め息混じりに呟いて、右手を緩く振った。

ビュウウ！

風が渦を起こして行商人に突撃する。

無詠唱の上いきなりの攻撃だったので対処する暇はなく、行商
人は風の直撃を受けて吹き飛ばされた。その衝撃でフードが外れ、
素顔が曝け出される。

行商人は二十代ほどの女だった。白に近い金髪は肩口で切り揃えられ、青い色の目をしている。顔は面長でほっそりしていて、色白の美人だった。顔の右半分に火傷の痕やけどさえなければ。

地面にぶつかつたものの、すぐに体勢を立て直した行商人の女は、怒気で顔を赤く染めた。

「よくも私の顔を見たな！」

まるでホラー映画みたいなことを叫び、中剣を構えた女は風の魔法を使って瞬発力を上げ、一気に老人との距離を詰める。

が、まるで赤子をひねるかのようにあっさりと老人が女を魔法で吹き飛ばし、ついで、雷を落とした。

「ぐあああ！」

感電した痛みに悲鳴を上げる女。

「ほうむ。やはり殺さないのは難しいですな」

呑気に独り言を呟く老人。

相変わらず、言葉の中身が怖い。

「さて、と。殺さずに捕まえてくるという約束でしたからね、あなたは連れ帰ることにします」

老人はすたりとステッキから降り、そのステッキを取って悠々と女の方に歩いていく。

「ふん！ そう上手くいくと思うな！」

女は懐から取り出したさっきのオブジェを地面に叩きつける。

割れた水晶からゴーストが飛び出し、目の前の老人に襲い掛かつた。

老人がそれを手の一振りで始末すると、すでに女の姿は消えていた。

「しくじりましたな。転移魔法てんいまほうの使い手とは、いやはや驚いた」

割と呑気な声は、本当に驚いているのか疑わしいところだ。

数秒程行商人のいた場所を見ていた老人は、そこで流衣の存在を思い出したようだった。ふいっと振り返る。

流衣はぼかんと座り込んだまま老人と女との遣り取りを見ていた

が、老人の琥珀色の目がこちらを向いたのに気付いてビクリと肩を震わせる。

(口封じとかで殺されたらどうしよう!)

もしそうだったら、逃げる暇すらなくあの世に逝っていることだろう。

流衣が怯えたのに気付いてか、老人は宥めるように優しく微笑んだ。シルクハットを脱ぎ、優雅に一礼する。

「これはこれは、少々お騒がせ致しました。もう大丈夫ですよ、一般人の少年」

「は、はい。それは良かったです」

間抜けな返答をしつつ、流衣は急いで立ち上がる。

「ご安心を、私は人間に味方しております故。ああ、申し遅れました。私は黒竜のカルティエ・ブラックナーと申します」

「そつそれはご丁寧にもどうも。僕はルイ・オリベといいます」
何だこの流れは。

少し不思議に思いつつ、頭を下げる流衣。

「今回は損な役回りでしたな。あの女の顔を見てしまったようですし、くれぐれもお気を付けて」

「もしかして危ないんですか、僕」

ちよつと泣きそうになると、カルティエは慌てた顔になった。

「そ、それは！ まあそうですね、その確立は高いでしょう。出くわしたら、逃げることをオススメします」

まあ、確かにそうするだろう。

あまり役に立たないアドバイスだ。流衣は不安になる。あんな人に追われて逃げ切るなんて出来るだろうか？ 否。無理。絶対

無理。

しかしそこで思い直して、カルティエに訊いてみる。

「あの、カルティエさん。もしかして杖連盟の方ですか？」

「え？」

カルティエは目を瞬く。こうしてみると、意外に表情豊かしい。

「最近、魔法道具屋に闇物が出回っているので、魔法道具屋ビジネスの主人であるフラムさんをお願いして、杖連盟に対処を申し込んだところなんです。もし杖連盟の方なら、あんまり仕事が早いからびっくりして」

杖連盟には竜もいるのかもしれないと流衣は考えていた。

「ああ、いえ。私は別件で動いていたのですが……。そうですか、この町の店もそんなに酷い状態なのですね」

カルティエは真面目な顔で考え込み、しばらくして頷く。

「では、杖連盟の方には私からも言っておきます。君は何も心配しなくてよろしいですよ」

そして、カルティエは優雅に一礼した。

「それでは、これで失礼します。さようなら、ルイ・オリベ」

カルティエは言い終わるなり地面を蹴り、二階建ての屋根まで跳び上がった。そして、ひよいひよいと散歩でもするような気軽さで、屋根を跳んで立ち去っていった。

「はあ、ここには色んな人がいるんだなあ」

流衣は感心しきりでカルティエを見送り、ひとまずリド達と合流する為にメインストリートに戻った。

結局、メインストリートではリド達に再会することが出来ず、ウイングクロスまで戻った。

一階の雑談スペースで待つこと三十分。二人はようやく戻ってきた。

オルクスは怒涛の勢いで謝り、リドも若干申し訳なさそうに謝ってきた。

無事で良かったです！と感涙でむせぶオルクスに若干引きつつ、路地裏の一件を話したら、凍りついたオルクスに更に謝り倒された。曰く、使い魔である自分が側を離れて申し訳ない。曰く、そんな不屈き者から守れなくて申し訳ない。曰く、その不屈き者に制裁を

与えられず申し訳ない。

最後の一つについては、そういうことはしないでいいと嚴重に言い含めておいた。冷静なようできて、オルクスは結構気が短いから部屋に戻ってくつろぎながら、朝に感じた寂しさがどこかに吹き飛んでいるのに気付いた。

ある意味、気分転換にはなつたらしい。

流衣はちよつと苦笑して、久しぶりに 知識のメモ帳 を取り出す。

行商人が 悪魔の瞳 と呼ばれていたので、それが何なのか気になつたのである。

悪魔の瞳 とは、魔王信仰者の集まる組織の名を指す。

その歴史は古く、ラーザイナ魔法使い連盟にも並ぶ。

幾ら潰しても何度も復活するので、“不死鳥”という隠語まである程である。

流衣はメモ帳を閉じ、背筋が冷たくなつた。

どうやら自分、とんでもないオカルト組織の人間に目を付けられたらしい。

今後、関係者に遭遇しませんように。

誰にともなく祈つた。

闇物が出回つた事件は、その日から三日程で片付いた。

杖連盟が出張り、魔法道具屋を回って闇物を一掃したのである。

軽く店の方と騒動になつていたが、壊した闇物から出てきたゴーストを全て倒し、店員達が我に返つた為、事なきを得た。

他にも、杖連盟の面々が町中を歩き回って他の闇物を探し出し、そちらも破壊していった。

あの黒竜の老人ほどではないが、早い仕事ぶりである。

ドーリスの町には注意網が敷かれ、怪しい行商人を見かけたらすぐに王国警備隊に通報するようになるというお達しが出る程の徹底ぶりだった。

そして四日目、事態が収拾したのを見て、流衣達はドーリスを出ることに決めた。

「何だ、もう出るのか？」

ウイングクロスを受付で、町を出る前の挨拶に行くと、センリが名残惜しげにそう言った。

普通のギルド団員は一つの町で旅費を稼いでまた旅立つ為、最低でも二週間はいるのがセオリーだったからだ。それに比べ、流衣達はたった一週間程度の滞在である。

「はい、だいぶ生活にも慣れましたし」

流衣は頷いて、ぺこりと頭を下げる。

「一週間程でしたけど、お世話になりました」

「はは、別に世話なんざしてないよ。だが、そう言われるとこっちも嬉しいね」

センリは嬉しげに肩を揺すって笑う。笑い方までもが男らしい女性だ。

そんな風に笑いあって、ギルドを出た。

一応、フラムの店にも顔を出すと、饒別にとお守りくれた。ビーズ細工の花の形をしている物で、持ち主に何かあると勝手に壊れる、身代わり地蔵のような物らしい。

彼らと別れ、町を出て西へと街道を進む。

その先には、東西南北の街道が交わる交易の町があるらしいので、ひとまずそこを目指そうという話にまとまったのだ。

一応、目的地はカザニフなので、そちらに進みつつ、勇者の情報を入れているかなくては。

気合新たに、流衣は道へ踏み出す。

帰る方法の模索を第一目的に掲げつつ、その実、ほとんどあての

ない旅。そんな旅人達を励ますかのように、道には明るい日差しが降り注いでいた。

幕間 1

薄暗い地下通路を、白いマントを着た女が一人、壁に手をつきながらふらふらと歩いていく。

「く……、おのれ、黒竜め……」

右半分に痛ましい火傷の痕を持つその女は、肩で息をしながら表情を歪めた。

隙について逃げ出したまでは良かったが、防御する間もなく雷を受けたせいで身体が痺れ、思うように動かないのだ。

それでも、女は懸命に前に進んでいた。

この通路の先にある場所こそ、女の居場所そのものだったから。けれども、無理をして歩いてきたのがたたり、膝から力が抜け、その場でふらりと身が傾いだ。

が、女が地面に倒れることはなかった。

「お帰り、ユリア」

白に近い銀髪と赤い色の目をした男が抱きとめたからだ。

男が気さくにそう言うと、ユリアは目を丸くした。

「きよ、教祖様！」

驚いたのも束の間、微妙な体勢に頬を赤くする。

「お手を煩わせて申し訳ありません！ 私は自力で歩けますゆえ！」

「それは勘違いだよ。君がふらふらなのは見れば分かる」

二十代後半程に見える、教祖と呼ばれた男はそう指摘して、差し出した手を断るユリアを背負い地下通路を歩き出した。

「あ、あの、教祖様。どうして私がここにいます……？」

バツの悪い思いで身を縮めながら、それでも気になったことをユリアは問う。

「さっき、急に見えてね。ここに来るのが分かったから、迎えに来

「ただよ」

「何でもないことのように、さらりと答える教祖。

「そういえば、教祖が時々、先見することがあったのをユリアは思い出した。いつも先を見るわけではないが、時々、思い出したように先が見えるのだと前に教祖自身が話していたのだ。

「もしも少し早く見えていたら、君を呼び戻したんだけど。すまない、ユリア」

「そんな、教祖様が謝られるようなことはありません！ 一重に私の未熟さが招いたこと。放置して下さっても構いませんでしたのに……」

「全く歯がたたなかつた敵を思い出し、ユリアは気が沈んだ。そして、教祖の優しさに感動している自分と、役立てない悔しさが混在している複雑な心境だった。ユリアが教祖を慕っているのは、この教祖の優しさだったから、尚更だ。

「教祖は 悪魔の瞳 のトップであり、魔王を信仰し、その魔王に力を与える為に世の中を掻き回すような活動を率先して行っている。だが、活動内容に反し、本人は優しい人だった。

「黒竜相手に未熟も何もないよ。私でも互角つてところだろうし」
「教祖はあつさりそう言う。」

「そうなのですか！ 教祖様で互角なれば、私など足元にも及ばない訳が分かりました」

「ユリア自身、転移魔法も使いこなす優秀な魔法使いなのだが、教祖に比べれば実力はずつと下の方だ。ただ、小回りが利くこともあり、あちこち派遣されることが多い程度なのである。

「ユリアの言葉に教祖は薄らと微笑んで、それからふと思い出したように言う。」

「ああ、そうだユリア。君の顔を見ちゃったあの少年んだけど」
「ユリアはハツと思い出し、咄嗟に謝る。」

「申し訳ございません！ 黒竜が割り込んできた為、取り逃がしてしまい……。口封じでしたら、回復次第、参ります」

「いや、そうじゃなくて」

「は？」

意図が見えず、聞き返すユリア。

「見た感じ、とてつもない魔力を持っているみたいだ。魔力量だけなら、私より上だろう」

「きよ、教祖様よりもですか!？」

ユリアには到底信じられないことだった。例え教祖本人から聞かされようと。

特に取り柄もなさそうな、地味な少年だったが……。しかし、確かに、言われてみれば魔力は大きい方だったように思う。

「彼、どうにかこつち側に引き込めたら良いんだけどなあ。サイモンに頼んでみようかな」

「サイモンにですか？ それは、引き込む前に死んでしまうのでは？」

「うーん、ひ弱そうだもんね、あの少年……」

教祖はひとしきり唸って、結論を出す。

「よし、決めた。ひとまず使い魔だけ放して、様子見しておこう。

勇者側と接触しそうなら、サイモンを出そう」

ふふふ、と楽しげに笑う教祖。

「楽しくなってきたねえ。ね、ユリア」

「そうですね、教祖様」

ユリアはそう頷き返しながら、少し見ただけでここまで教祖の目に止まった少年に、軽く嫉妬しつとを覚えるのだった。

十章 騎士見習いとドングリクッキー 1 (前書き)

* 第二幕あらすじ*

ブラッエにやって来た流衣達だが、町に入つてすぐに決闘の場面を見かける。東西南北の道が重なるブラッエで、少年達の道も交差する。

交易の町ブラッエ。この町は、東西南北の街道が交わり、人や物が行き交う、そんな喧騒に包まれた賑やかな町だ。

町の周りは高さ三メートル程の壁に囲まれており、壁の内側には三、四階建ての石造りの建物がひしめきあっている。東西南北に行き交う街道のうち、南北に抜けるメインストリートは市場になっており、通りの二階や三階の建物から日除けの為の色とりどり布が張り巡らされ、黄土色おっとういしよの街並みをカラフルに飾り立てていた。

「ウイングクロスウイングクロスのブラッエ支部ってどこだったっけかな」

東門からブラッエに入ったので、今いる通りはメインストリートに比べれば比較的人数の少ない通りだ。それでも立ち止まっていては邪魔になるくらいではあるので、通りの脇に行き、思い出すように周りを見るリド。

四年前に西から東に旅してきた時に一度訪れた程度なので、記憶が曖昧なのだ。

「ちよつと待って。メモ帳に訊いてみる」

流衣はそう言って、背負ったリュックを下ろして 知識のメモ帳を引っ張り出す。一方のリドは、「何を言ってるんだお前」と言いたげな目を流衣に向けた。

流衣は構わず、メモ帳を開いて、町の地図を出してくれるように頼む。

すると、簡単ながらメモ帳に地図が浮かんだ。

「うっわ、何だそれ！ 魔法書まほうしよか！？」

それを目撃したリドは声を上げて驚き、変わったものには近付かない主義だったので、好奇心もそこそこにメモ帳から距離を取る。

「違うよ。知識のメモ帳 っっていつて、僕に必要なことだけ教え

てくれるメモ帳なんだ。ここに来た時、女神様がくれたんだ。可哀相だからって、お金とかもそうなんだけど」

本人、面倒臭そうだったけど。というのには心の内にしまっておく。へえ、そりゃまた、神様にまで同情されるなんてよっぽどだったんだな」

ちよつとずれたところを感心するリド。

流衣は苦い笑みを浮かべるしかない。

「ま、まあともかく、言葉の意味とか地図なら浮かぶんだよ」
「へ〜」

リドはまじまじとメモ帳を見ながら頷き、首を傾げる。

「それならお前、元の世界に帰る方法教えてもらえよ」

「！」

流衣はぼかんと口を開けた。

どうして今までそのことに気付かなかったんだろつ。最初からメモ帳に頼れば良かったんだ。

それで、ドキドキしながら訊いてみる。

「ええと、僕が元の世界に帰る方法あったら教えて下さい」
すると、すーっと文字が浮かび上がった。

転移魔法と召喚魔法のエキスパートに相談すべし。

もしくは、その分野の魔法書を研究されたし。

「……………」
「……………」
「……………」

流衣、リド、オルクスはそれぞれ無言でその文字を見つめた。

数秒後、リドがぶはつと吹き出し、腹を抱えて笑い始める。

「ぶははははは！ こりゃあ傑作だ！ 確かに“必要なこと”だよ。
ははははははっ」

「……………」

対照的に、流衣の方は無言のままズーンと沈み込んだ。

そう上手くいくとは思わなかったが、それでもあんまりな回答だ。『坊ちゃん、元気を出して下さい！ そのメモ帳は単なる百科事典のようなものであって、知識全てが記されるわけではないのです』

オルクスが必死にフォローし、羽をばたつかせる。
「百科事典か……。それなら専門書じゃないからお門違いだよ、
ハハハ……」

力ない声で空笑いする流衣。

ああ、しょっぱいなあ。現実には塩辛い。涙味だ。……うっ。
早速めげそうになる。

しかし、そんな空気は第三者の声により蹴散らされた。

「おいっ、決闘だつてよ！」

「まじかよ！ 行く行く！」

「それってどこ？」

通りを歩いていたら人達の何人かが、浮き足立って通りの奥へと走っていく。

「何だあ？」

笑いすぎて目尻に浮いた涙を拭いつつ、怪訝そうに人々の行く先を見やるリド。

「さあ……、決闘らしいけど」

流衣もそちらを見つめながら返す。

「面白そうじゃん。俺達も行ってみようぜ」

リドが楽しげに言い、額に巻いた布の先についた飾りをカラんと揺らし、そっちに小走りに駆け出していく。止める間すらない。

「ちょ、ちょっとリド!？」

流衣は慌ててその後を追った。

リドを追いかけて走っていくとウィングクロスのブラッエ支部に辿り着いた。黄土色をした煉瓦造りの厳つい建物に、ウィングクロ

スのシンボルである、十字とその右斜めと左斜めに羽の生えた形を描いた旗が、風にヒラヒラ揺れているのだから間違いない。

その入口から少し離れた位置に人だかりが出来ており、集まった野次馬達はやんやと喝采かっさいを上げている。その声の隙間を縫うように鉄がぶつかり合う高音が何度も響く。

「へえ、なかなかやるな、あいつ」

人だかりの後ろから少し背伸びをし、目の上に手を当てて前方を見やり、感心げに呟くりド。

リドは身長があるのでそれで見えるようだが、あいにくと155cmという背の低さを誇る流衣には背伸びをしても見えない。中三の男子ならその程度だといつかもしれないが、残念ながら流衣のクラスメイトは成長が良く、低い順に並ばせられると大抵一番前か二番目だった。加え、この世界の人の身長は高い方で、地球というヨーロッパ諸国と文化面や建物の造りも似た感じだ。

「え？ 何？ 何がどうなってるの？」

流衣は懸命にぴょんぴょん跳ね、どうにか人だかりの中を見ようと奮闘するのだが、それでもさっぱり見えない。諦め、肩を落とす。

「んーとな、俺とためくらの奴が、おっさんと剣で決闘してる」

同じ姿勢のまま、リドが状況を説明してくれる。

そのまま前を見ていたリドだが、ふいに声を漏らす。

「あ」

「え？」

流衣が思わずリドを見上げると、何の前触れもなく、流衣の目の前の人だかりが突然サツと波を引くように割れた。

ん？

それに気を取られた瞬間、甲冑を身に着けた男が後ろ向きに飛んできるのが見えた。が、流衣がそうだと飲み込んだ時には遅く、不幸にも直撃した。

ゴッ

流衣に聞こえたのはその音までだった。

ギン！ カン！

軽装の騎士服を纏ったリドと同じ年頃の少年と、がたいの良い中年男が互いに切り結んでいる光景はなかなかの見物だった。

それだけなら、大きな町ならたまにある風物詩程度で済んだのだが、今回はそれでは済まなかった。

少年が男を剣ごと弾き飛ばし、その飛ばされた男が野次馬に突っ込み、野次馬が避けたために偶然後ろにいた流衣に直撃したせいだ。まさかの直撃に、地面にひっくり返っている旅の連れとその連れを下敷きになっている鎧の男をリドは啞然として見てしまったが、はたと我に返ると慌てて救出に向かった。

「げっ、おいつ大丈夫かよルイ！」

こんながたいの良い男に普通にぶつからただけでも怪我しそうな程ひ弱に見えるというのに、男は鎧まで付けているのだから、もし打ち所が悪かったりしたら死んでそうで怖い。

「どけよ、おっさん！」

男の肩を押して横へと転がし、額を赤く腫らした状態ですっかり目を回している流衣の頬を軽く叩く。役立たずなことに、流衣の肩に乗っていたオルクスも巻き込まれ、一緒になって目を回しているのだから手に負えない。主人を守る使い魔じゃなかったのか、お前。「あー、駄目だこりゃ。完全にのびてやがる……」
何度呼んでも反応がないので、リドは頭痛を覚えて溜め息をついた。

町に着いて早々これか……。

だが、今回は流衣が悪いわけではない。身長が低いせいで前が見えず、対応しきれなかったのだから仕様がなない。

しかしまあ、とりあえずは生きているようなので、ひとまず安心する。

「すまん……、避けきれたら良かったんだが……」

流衣が気絶する原因になった男が、申し訳なさそうに頬を掻く。その男の向こうでは、軽装の騎士の少年がしくじったというように渋い顔をしていた。

野次馬達は怪我人が出たことでざわつき始める。

「一体、何の騒ぎ？」

と、そこへ、場の空気を一気に緩ませる呑気な声が割り込んだ。

三十代ほどの女が、ひよこりと顔を出したのだ。

女は額に白いバンドをしていて、胸元まである薄茶の髪を無造作に流し、全体的に緩い空気を纏っていた。目の色は右目が緑、左目が金という不思議な色合いと、白を基調とした衣装は上が袖の大きい服でスカートのようにひらひらした裾なのに対し、かっちりした黒色のショートパンツと薄い緑色のハイソックス、黒いショート丈のブーツという、ラフなような不思議なような衣装のせいでますますその印象を強めている。

しかしその服の上には、首と肩、手の甲と腕だけに白を基調とした部分鎧を着け、女性という性別からは少し不釣合いにも思える、身の丈はありそうな大剣を背負っている。無骨な物であるのに、これが妙にじっくり馴染んでおり、それがますます不思議に見えた。

「げっ、師匠……！」

その女を目にした途端、少年はキリッとした精悍な顔を引きつらせた。

こちらの少年もまた、白を基調とした衣装を身に纏っている。裾が膝まである上着は詰襟で首元に銅板の飾りをつけており、ズボンと膝丈までのブーツも同じく白い。手甲と膝から足首までの鉄製の部分鎧を身に着けている他は軽装で、女と同じく大剣を背負い、左腕には表面にクロスに似た紋様が描かれた白色の小さい盾を装着している。

白と銀色で統一されているのに加え、ほとんど白に見える銀髪を短く刈り込み、涼しげな水色の目をしている為に冷たげな印象を覚

える少年である。左目の下にある泣きぼくろもまた印象的だ。

女は場の状況を一瞥で判断すると、右の拳を固め、思い切り少年の頭に振り下ろした。

「ぐあつ」

少年の、呻いてすぐさま両手で頭を押さえて悶える様に、見ていた野次馬達もつられて痛みを想像し、眉をしかめた。

「デイル！　ちよーっと目を離れた隙に何してんだい、あんたは！」
女の怒声が場に響き渡る。

デイルと怒鳴りつけられた少年は一瞬身を縮めたものの、すぐに言い返す。

「でもですね、師匠！　強そうな人を見かけたら、決闘を挑むものです！」

「アホたれ！　決闘すんのはあんたの勝手だけど、こんなギルドの入口まん前ですんじやないよ！　どうせするんなら人気の無いところでしろ！　こんなに騒ぎを大きくしてっ」

女は怒りを抑え切れなかったらしく、声を荒げて言い立て、そこでビシツと流衣を指差した。

「しかも見なさい、あの子！　こんな所であんたが決闘なんてするから、巻き込まれて怪我してんじやないの！」

「うっ、それは確かに釈明のしようもありませんが……」

デイルは視線を横へとさ迷わせる。

「それに、あんたもあんたよ！」

急に決闘相手の男に矛先が向き、男はびくりと身を竦める。それくらい、女の怒りは凄まじかった。

「いい大人が、場所も弁わか弁まえないで決闘に乗るな！　移動するくらいの気構え見せる！」

「ヒイイツ、すみませんでした！」

虎もかくやの咆哮に、男は気を吞まれて頭を下げる。

怒られていないはずのリドまで思わず謝りたくなってしまったくらいだ。

が、そんな説教などリドにはどうでもいい。ここにいたら收拾がつかないと判断し、流衣を背負い、オルクスを小脇に抱えて立ち上がる。

「あんたらさあ、騒ぐのは構わねえんだけど、その怪我人放置するのはどうかと思うぜ？ ま、好きに騒いでてくれよ」

怪我人の具合の一つも聞かないのに苛立ち、声に若干の怒りをこめてそう言うと、三人に背を向けてさっさとウイングクロス支部前の階段を上っていく。流衣とオルクスがこの調子なので、まず宿舎を確保することにしたのだ。

元々さばさばしているリドだが、この一言はきつかった。

弟子のしたことについて頭に血が昇った女は、師匠にあるまじき態度だったと羞恥で顔を赤くした。ここは説教など後回しにし、怪我人の容態を確認すべきだった。

「確かにあの子の言う通りね。ディル、あんた、罰としてあの少年の介抱をなさい！ いいわね！」

「はいっ、それが当然かと！ では行って参ります！」

自分が悪いことは十分に理解していたディルは素直に返事をし、リドの後を追いかけてウイングクロス支部入口への階段を駆けていった。

「宿、その支部で取るから。後で受付で確認しなさいね！」

「はい、分かりました師匠！」

階段の上からのディルの返答を聞くと、女はやれやれと息をつく。

「全く、先が思いやられるわ」

ちよつとだけ弟子の将来に不安を覚えつつ、まだ集まっている野次馬達を手を振って追い払うのだった。

十章 騎士見習いとドングリクッキー 2

目が覚めると、見知らぬ部屋の天井が見えた。

「……………う？」

何だかヒリヒリする額に違和感を覚えつつ、流衣は一つ瞬きをする。

「おお、やっと気付いたか！」

銀髪と水色の目をした、無骨な印象はあるが綺麗な顔をした少年が覗き込むようにして声を上げた。

誰？

その少年を見つめること三秒。知り合いではないと結論づけた流衣は、内心で首をひねる。

「すまなかった、ルイ殿！ 私の決闘に巻き込んでしまい、怪我までさせてしまったて本当に申し訳なく思っている」

いきなり頭を下げられても流衣には身に覚えの無いことなので、目を白黒させるしかない。

え？ え？ そもそも誰なの、この人？

盛大に混乱していると、横から助け舟が出た。

「町に入ったところで、決闘があつたの覚えてるよな？」

やれやれという調子でリドが問う。

「え、ああ、うん。確か人だかりのところにいたら、いきなり男の人が飛んできたんだよね……………」

そこで記憶が途切れていることに気付き、ん？ と眉を寄せる流衣。

「そ。それでお前、鎧つけた男の直撃くらって、氣い失つたんだよ。頭ぶつけてたみたいだけど、大丈夫か？ あと他にも痛むところあったら言えよ」

「いや、おでこがヒリヒリする以外は平気……」
それで額がさつきから痛いのかとすつきりする。

「えと、で、それとこの人が何の関係が……？」

そもそもその疑問を口にする、目の前の少年は一気に渋い顔になった。

「その男を弾き飛ばしたのが私でな」

「ああ、そういうこと」

流衣は納得し、ベッドから身を起こすと、少年に向き直る。

「えーと、なんかよく覚えてないし、そんなに謝らなくていいですよ」

「いや」

少年は首を振る。

「これははじめだ。私があんな所で決闘をしたのが悪かったのだ。謝るのは至極当然のことだ。本当に申し訳ない」

きつちりと頭を下げる少年。

どうやら見た目の冷たそうな印象と違い、真面目な人柄らしい。

「ええとっ、はい。分かりましたので、頭上げてくださいつ。ほんとお願ひしますっ」

この状態は結構辛い。

どきまぎしながらそう言うと、ようやく少年は納得したようで、顔を上げてくれた。

「かたじけない。私はデイルクラウド・レシム。我が師匠リリエノール様につき、一人前の魔法騎士まほうきしになるべく修行しながら旅をしている。デイルと呼んで欲しい。ああ、それと今は修行中の身故、家名を名乗ることを禁じているのでそこは勘弁願いたい」

硬い口調で名乗るデイル。

「僕はルイ・オリベです。ちょっと色々事情あって、リドとオルクスと三人で旅してるんです」

壁に背を預けて立っていたリドが、ちらりとデイルを一瞥する。

「へえ、その後に家名がつくってことは、あんた貴族だったのか」

デイルが看病を申し出た時点で名乗っているし流衣の紹介も終えていたが、それについては何も言わない。

「貴族！」

初めて見た！ 流衣は思わずデイルを凝視してしまう。

「ああ、だが私は三男坊でな。家を継げぬ代わりに割と自由が利く身分故、こうして騎士修行を志せる。それに修行中は一般人と変わらぬから、気にせず普通にしてくれ」

デイルは少し困ったようにそう言った。

「んじゃ、遠慮なく」

「僕も」

リドが軽いノリで答え、流衣も頷く。

そこで初めて、流衣はオルクスがしょげかえっているのに気付いた。

「って、どうしたのオルクス。元気ないみたいだけど」

オルクスは影を背負い込み、布団に羽でのの字をぐるぐると書いている。

「申し訳ありません、坊ちゃん……。わてがついていながら、こんな、うつ……。」「

かくつと頭を下げるオルクス。

「こいつもお前と一緒に気絶したんだ。全く、普段は使い魔がどうこううるさい癖に、ここぞという時に役に立たねーオウムだぜ」

「うつ、赤猿ごときにつ、くうーっ」

リドの辛口がとどめだった。しくしくさめざめと泣き出すオルクス。存外に感情表現が豊かな使い魔である。

「リド、言い過ぎだよ。そんなに言ったら可哀相じゃないか」

打ちひしがれるオルクスを見ていたらすっかり同情してしまい、オルクスを両手で持ってすぐ側に移動させ、よしよしと背中を撫でてやる。完全に子供扱いだ。

それからふと、顔を上げる。

「僕らを運んだのってリド？ 大変だったでしょ、ごめんね。あり

がとう」

何となく、こういう言い方をしているということはそういうことだと感じ取った流衣は、ちゃんとリドの方を見て礼を言った。

思うにリドには面倒をかけっぱなしな気がする。いや、これは気のせいではない。気のせいどころか確実に世話になっている。

「ん、まあお前小さいし、そっちはオウムだしな。運ぶのは楽だったぞ。でもまあ礼は受け取っとく。どーも」

リドはにやりと口の端を上げ、それから少し真面目な顔になる。

「でもお前、軽すぎ。ちゃんと飯食ってんのか？」

「食べてるよ。いつも君の前で食べてるじゃないか」

どうせ小さい上に痩せてますよ。コンプレックスを刺激され、流衣は溜め息をつく。

「そうだけどなあ、何で俺と同じ量食ってそんななんだろうな。ま、魔法使いだし、身体鍛える必要はねえけどさ」

それでももうちつと体力つけるよ、という優しい助言に、ますますうなだれる流衣である。

言うておくが、ここの世界の人間の体力が半端ないのであって、地球の現代日本でなら流衣が標準だろう。いや、それでも標準より下か。

「先程から不思議に思っていたのだが、使い魔を従えていることといい、ルイ殿は腕の良い魔法使いなのか？」

デイルの問いに、流衣はうつと言葉に詰まる。

「全然だよ。まだ新米で、点火の術しか使えないし。それに、オルクスのは色々あって使い魔になっただけで、召喚できるわけでもないし……」

「ああ、そうなのか。何やら複雑そうだな。立ち入ったことを訊いてすまない。それと余計な世話かとは思いますが、初対面の人間に使える魔法の種類を明かすのはやめておいた方が良いでしょう。みすみす手の内を晒す行為は危険が付き纏うものだ」

「うん、そうだね。今度から気を付けるよ」

確かにそうだと思ったので、流衣は素直に忠告を受け入れる。

「なんだか、気絶してたらお腹空いてきたよ。ご飯食べに行かない？」

お腹に手を当てて進言すると、リドも頷く。

「そうだな。まだ昼飯食ってなかったし、今から行くか」

「私も一緒に構わんだろうか？ 実は私も昼がまだなんだ」

デイルの問いに流衣は了承し、ベッドから降りるとマントを着た。その肩にまだしよげているオルクスを乗せ、杖を手に取ると、貴重品の入った小さめの鞆を腰に付けてから部屋を出た。そうして宿舎を出て食堂のある棟むらに向かいながら、初めてここがウィングクロス
のブラツエ支部の中だと気付いた。

「あら、あんた達、仲良くなったのね」

流衣が魚のソテーにフォークとナイフを駆使していると、見知らぬ綺麗な女の人が声をかけてきた。

「ごめんなさいねえ、うちの弟子が迷惑かけちゃって。あら、まだ腫れてるじゃない。ちゃんと冷やしたの？ 他に怪我してない？」

「怪我はこれだけですし、デイルさんが濡れた布で冷やしてくれました。……ええと、ところでどちら様でしょう？」

食堂に入ってからというものの、さっきは大丈夫だった？ と何故か見知らぬ人に声をかけられるので、何だか慣れてしまい、そう返しつつ首を傾げる。自分はさっぱり覚えていないのだが、どうやら流衣のことを覚えているみたいなのだ。

「私は 光弾こうだんの騎士 こと、リリエノーラ・ヴェルディーよ。今はデイルの師匠をしながらクエストしつつ旅してるわ」

リリエはそう言いながら鞆しつぱくから湿布薬を取り出し、流衣の額にぺたりと貼る。そして、その上から包帯を巻きだした。ミントのような薬草の匂いがつんと広がる。

「はい、出来た。今日一日はつけときなさい。その湿布、よく効く

から」

「ありがとうございます……」

手際の良さに感心しながら、礼を口にする流衣。リリエは「どういたしました」とにこりと微笑んで、それからデイルに向き直る。

「デイル、罰その二を言い渡すわ」

「……ふあ？」

突拍子もないリリエの発言に、パンに噛み付いたまま目だけをリリエに向けるデイル。

「ドングリクッキーを作りなさい」

デイルはパンをしっかりと咀嚼そしゃくして飲み込んでから、若干眉間じゃつかんみけんに皺しわを寄せてリリエに問う。

「何故？」

リリエはにっこりと微笑んだ。

「私が食べたいから」

「……」

黙りこむデイル。

構わず、どこか楽しげにリリエは続ける。

「この町って、すぐ近くにあるサルテの森のドングリで作ったクッキーが名物なんですって」

「では、買ってきて食べればいいでしょう」

「それじゃつまんな……いや、罰なんだからそれくらいして当然でしょ？」

「残念なことに本音が駄々漏れてます」

疲労を覚えて眉間に指先を押し付けつつ、デイルは指摘する。

「だって、あんたってば、嫌になるくらい真面目だから修行内容全部クリアしてるし、鍛えがいなさすぎなのよ。これも修行だと思つて、頑張りな」

過分に本音を交えつつ、リリエは素晴らしい笑顔で愛弟子の肩を叩く。

「……私が料理が苦手なことを知っての上での嫌がらせと受け取

りますが、宜しいですか？」

真剣にリリエに訊くディル。

「あればっかりは鍛えようないのは知ってるけど、どんな代物が出るかは楽しみなのよね。あのね、この子すっごいのよ、魚焼かせたら炭になるし、スープ作らせると毒物に変身するの！絶対に食べないけどね、あはははは！」

リリエは流衣達に説明し、ひとしきり笑ってから、すちゃっと右手を上げる。

「それじゃあね、頑張って作って。期限は三日後までだから、じゃあね〜」

そして、悠々とした足取りで食堂を去っていった。

「こりゃまた強烈なお師匠さんだこと」

リドが茶化すと、ディルは重々しい溜め息をつく。

「騎士としては尊敬しているのだがな、どうも軽いところがあつて困る」

「弟子が可愛いんだよ、きつと」

流衣のフォローに、しかしディルは首を振る。

「いや。きつと、私が弟子を取らない主義の師匠に弟子入りする為、一週間あらゆる工作を行ったせいだと思つ」

「師匠が師匠なら弟子も弟子だな」

呆れ返るリド。

「うーん、そういうのより、真面目に反応するから面白いだけなんじゃないかな？」

あれはどう見てもからかうのを楽しんでいた。

流衣はそう指摘してみたが、ディルはまた首を振る。

「どっちにしる困る事実に変わりはない」

……確かに。

流衣はディルが少し不憫になった。

「ドングリクッキーを作れってことは、ドングリを採りに行くんだよね？ っていうことは、今の季節って秋なのかな」

食堂でデイルと別れ、受付のある棟に向かう為、鍛錬場を横切りながら流衣はリドに話しかけた。どこのウイングクロスも大まかな造りは同じみたいだ。

「季節の話なら、今は豊穰たけいじょうの第二だいにの月つきだ。もっというとな、豊穰の第二の月十二日だな」

「ん？ そう言われてもよく分かんない……」

こういつ時こそ百科事典の出番だ。季節や暦は説明されてもよく分からない。知識のメモ帳を開き、時間や年月日について尋ねると、文字が浮かんだ。

ラーザイナ・フィールドでは一般的に大陸暦たいりくれきが使われている。

一年は十五ヶ月あり、一月は三十日で構成される。

一日は二十四時間、一時間は六十分、一分は六十秒となる。

(時間の単位は同じなのか……。僕のいた所より三ヶ月多い計算になるってことなんだ)
流衣はちよつと考え込んだ。

それはつまり、この世界の、というか惑星の公転周期が地球より遅いということなんだろう。太陽は一つだし、月も一つで似た感じだから、惑星という考え方も通用するはず。

そのままメモ帳を読み進める。

季節は四つに別れており、一月と二月、それから十二月、三月、四月、五月は「静謐せいひつ」、三月と四月と五月は「祝福」、六月と七月と八月は「輝き」、九月と十月と十一月は「豊穰」と呼ばれている。

例えば「祝福の第一の月」と呼ぶことで、三月を意味している。つまり、その季節の中の月を番号付けで呼ぶのである。

これは一般的な呼び方で、正確に記述する際は「大陸暦〓年、三月、〓〓日」と記す。

「うう、ややこしいなあ」

頭の中がごちゃごちゃしてきた。

簡単に言えば、春夏秋冬を別の呼び方をしることになるわけだ。

「春、夏、秋、冬、とかそういう言い回しって使わないの？」

少し気になってリドに訊くと、あっさり頷かれる。

「使うけど、何ていうかな、詩とか歌で使うくらいで、日常じゃ使うことはねえな」

日本でいうところの、古典の言葉に括られているのか？

自分の知っている常識が微妙に絡まっていて、ややこしいことこの上ない。どうせなら全部同じなら良いのに。

「ええと、ちなみに今日は大陸暦でいうと何日？」

流衣の問いに、リドは思い出すように斜め上を見る。

「確か、大陸暦1035年の、十月十二日だ。年なんてそうそう使うことねえから、ちよつと自信ねえけど」

普通に毎日を生活するだけなら、季節と月さえ知っていれば生活出来るのだ。

リドは僅かに首を傾げる。合っていたか自信がない。

「そっか、分かったよありがとう」

「ん、なら良かった。ま、付け足しとくと、大陸暦っていうのはルマルデー王国の建国年からの換算だ。うちの王国がラーザイナ・フィールドじゃ一番古いんで、周りも便利がって同じ暦を使ってるだよ。だから一部じゃ使っていない国もあるらしい」

「へ」

「言つとくけど、これは一般常識で、皆知ってるからな。俺が別段物知りなわけじゃねえぞ」

あんまり流衣が感心するせいか、リドが気まずげに付け足した。

「わ、分かった。うーん、覚えておかなきゃいけないことが山積み

「だなあ」

流衣はそう呟き、とりあえず年月日の数え方をマスターしておく為、メモ帳を片手に頭の中で暗誦する。丸暗記が苦手なんて贅沢なことを言っあつしやうてられる中身ではない。

「で、今日はどうする？ クエストか町を見て回るか」

折角、こんなでかい町に来たんだしな、どうせ回るなら一日使った方が楽しいと思うが。

リドがそう付け加え、流衣はちよつとだけ悩む。

町を見て回りたいというのが本音だが、お腹は満たされているから、屋台で買い食いするのは無理そうだし、こんな大きな町なら半日では全部回りきれないだろう。

あ、そういえばドングリクッキーが名物って言ってたっけ。

「サルテの森ってここから近いんだっけ？」

「ん？ ああ、ドングリの。北門を出てすぐ右手だったかな」

リドは顎に手を当てて言い、首をひねる。

「何か簡単なクエストが出るかもな。ひとまずクエストボードで確認して決めるか」

結局それで決めることになり、流衣も頷いた。

十章 騎士見習いとドングリクッキー 3 (前書き)

*この話中、戦闘表現と流血表現があります。

十章 騎士見習いとドングリクッキー 3

どなたか、サルテの森でドングリを十個採集たいしゅうしてきて下さい。
虫に喰くわれていない、新鮮で綺麗なものを求めます。
報酬などは下の通りです。

報酬：銅貨四十枚

依頼主：菓子屋フランソワ

相当ランク：D

「ドングリ十個で銅貨四十枚……？」

クエストボードにあった依頼表の一枚をまじまじと見て、流衣は
咳く。

ドングリって、あんな小さいものを十個だけで菓子製作に足りる
のかという疑問もよぎる。

「ふーん、ま、ここからなら今から出ても夕方には戻れるか」

しかも、何故かリドがひどく真剣な顔で検討しているのも不思議
でたまらない。何故、ドングリ十個を拾うだけでそんなに悩むんだ
らう。

「どうするルイ、これ受けるか？ ちょっと厳しいかもしれねえぞ」

「大丈夫だと思うけど……」

どの辺が厳しいのだろう。だってドングリ十個だよ？

心底不思議でならないが、リドはそれで納得したようで、頷いて
依頼表をクエストボードから剥ぎ取る。

「まずは袋を調達しないとな！」

「は？」

何故に袋？

息巻くりドを見て、ひたすら首を傾げる流衣だった。

その後、メインストリートで袋を二つ購入してから、サルテの森に向かった。

流衣はリドが手に持つ袋が気になって仕方がない。袋といっても、サンタクロースが持っているような、大きな袋が二つだ。

何でドングリ十個相手にそんなに大きな袋を用意するんだろう。不思議だ。

が、その疑問はサルテの森に入っただけですぐに解消された。

「でっか……！」

森の地面に落ちているドングリは、サッカーボール並みだった。試しに一個拾ってみると見た目よりは軽かったが、それでも厚めのマグカップくらいの重さはある。

「ああ、駄目だそれは。見る、虫喰い穴があるだろ？ 依頼には新鮮で綺麗な物ってあったからな、木になってるのが良い」

リドが首を振るので、流衣はドングリをポイとその場に放る。そして、リドにならって頭上を見上げた。

「うわあ、大きい！」

ドングリが大きければ、その木も大きかった。

大きいというか、高い？ うーん、梢が見えない。

その姿勢のまま見ていたら、キラリと何かに光が反射した。

「ん？」

眉間に皺を寄せ、それを凝視する。

誰か白い衣装を着た人が木の上から飛び降りてきた。その人はそのまま降りるといふよりは落ちてきて、流衣達から二メートルほど離れた所にスタツと軽やかに着地した。

「ふう、こんなものでいいか」

両腕にドングリを三つ抱えたその人はそう呟き、そこで顔を上げる。

「む？」

「あ」「

全員の声が重なった。

上から降ってきた人はデイルだった。

そちらもそちらで驚いたようだ。軽く目を瞠って声を上げる。

「おお、奇遇だな。こんな所でも会うとは！」

「僕らはクエストで。ええと、デイルさんは、さっきの罰その二み
たいけど……」

「ちゃんとドングリ採集してんのな、偉いじゃん」

苦笑する流衣と、感心気味に言うリド。

デイルはいやあと後ろ頭を搔く。

「課題をクリアしない方が恐ろしい目を見るのでな」

「あ……怖そうだもんな、あの人」

怒鳴りつけていたリリエを思い出し、リドは納得する。しかし気
絶していた流衣は知らないのできよとんとする。

「お前つて意外と身軽なんだな。騎士なんていうから、剣振り回し
てるイメージしかなかったぜ」

デイルが五メートルくらい上から落ちてきたにも関わらず涼しげ
な顔をしているものだから、リドは少し褒める口調になった。

「鍛えているから当然だ。それと、騎士ではなく魔法騎士だ」

デイルはあっさりそう答え、間違いを正す。

「騎士と魔法騎士ってどう違うんですか？」

首を傾げる流衣。騎士であることに代わりないんじゃないのか？

「魔法騎士は、剣技だけでなく魔法も扱う騎士のことだ。魔法の勉
強もせねばならぬから、努力が増えるな。だが、魔法を扱える利点
は大きい。剣だけでは叶わぬことでも、魔法なら片付くこともある
例えば、練習次第で遠距離から正確に攻撃出来る」

そう言いながら、デイルは森の端に右手をピストルの形にして向
けた。

「光よ矢となれ、ライトブリッド」

光の弾が指先から飛び出し、その先にいたウサギにぶつかった。

ウサギは弾き飛ばされ、その場に倒れて動かなくなる。

「な？」

さらりと問うてくるディルであるが、流衣はショックを受けて固まっていたので反応出来なかった。

「ななな、なんてことするんですか！ 罪もないウサギを的にするなんて！」

あんな白くて可愛いウサギを！

人を襲う魔物ならともかく、動物好きの流衣からすれば酷いことだった。

可哀相すぎて涙目になって怒ると、ディルは驚いたような顔をした。

「ウサギって、あれはキバウサギだぞ？ れっきとした魔物ではないか」

「そうですね、キバウサギという魔物でっ……………魔物？」

ディルの言葉に紛れていた不穏な言葉を拾い、流衣はぴたっと動きを止めた。

何を当然なことを、と言わんばかりの態度でディルが問い返す。

「この森にはドングリを餌にする魔物が棲みついているのだ。大半はああいうキバウサギという魔物だが、危険なものになるとコハクベアなんていう凶暴なやつもいるぞ。知らなかったのか？」

流衣はぐりんとリドの方を向いた。リドはそこで説明していないことを思い出した。

「ああ、言うのを忘れてた。ディルの言う通り、この森にはウシネズミより凶暴な魔物が棲みついてんだ。だからドングリ採集を依頼する人がいるってわけ」

「聞いてないよ！」

今更ながら真っ青になる流衣。

しかしリドの態度は軽い。

「大丈夫だいじょーぶ。お前、もう魔法の威力のコントロールは出来るようになったる？」

「そういう問題じゃないよ、気構えの問題だよ」
「流衣は必死で言い張る。」

「ははは、そんなこと言ってるうちに囲まれたな」

「囲ま……………はっ!？」

さっきのキバウサギの仲間だろうか、流衣達三人の周りを六匹のキバウサギがぐるりと取り囲んでいた。

流衣は冷や汗をたらたら流しながら、気付いたことを口にしてみる。

「あ、あのうリドさん？ 何だかこのウサギ、大きくないですか？」

白い体毛と赤い目をしたキバウサギは、大型犬くらいの大きさがあつた。

「だから魔物だつて言つてんだろ」

リドの返事を聞きながら、ウサギの背中辺りに、魔物の証である、先の細いダイヤの形状に似た黒いシミがあるのを見つけた。

それさえ除けば、身体が大きいだけで、普通のユキウサギと何ら変わりが無いように見えた。つぶらな瞳が愛くるしい。

と思えたのは、残念ながらその瞬間までだった。

「キシヤ ツ！」

キバウサギ達が赤い目を吊り上げ、歯を剥き出して威嚇いかくの声を上げたからだ。

「ひーっ、グロテスク！」

そのあまりの不気味さはB級ホラー映画ばりだった。犬歯に当たる部分だけ長い牙があり、他の歯は三角形をした異様に鋭い歯が並んでいる。もうなんか、ホラー映画というか、エイリアンものみたいな。

そんなどうでもいい評価を下した瞬間、キバウサギの一匹が地を蹴つて飛び掛つてきた。流石ウサギ、脚力が半端ない。

青くなつて固まつてしまった流衣の前にリドが出、ダガーでもつてキバウサギを切り伏せる。

そこへ別のウサギが飛び掛つてくると、それをディルがさっきの

光弾で撃ち落した。

怒った残りの四匹はまとめて飛び上がる。上から一気に潰そうという魂胆らしい。

あんな勢いで踏み潰されたら骨折くらいしかねない。

流衣は涙目だがちがちになりつつも、四匹が固まった瞬間、点火の術を唱えた。

「ふぁ、ファイアー！」

ドゴーン！

小爆発が起こり、丸焼きになったキバウサギが地面にボトリと落ちる。

『すごいです、坊ちゃん！』

褒め称えるオルクスの声を聞きながら、その場に座り込む流衣。

「し、死ぬかと思った……」

何か、前にもこんなパターンがあった気がするのだが、もういや思い出せないし。

「相変わらず弱虫だな」

戦闘が終わるなり座り込んだ流衣を見て、リドは呆れる。

「何とでも言っつてよ。怖いものは怖いんだから仕方ないじゃないか」
流衣がそう返すと、へいへいと肩をすくめるリド。

「一体今のは何だ……？ 点火の術の呪文なのに、ドーガ並みの爆発を起こすなど……」

信じられん、と呟くディル。

「えーと、想像力の問題かなあ？」

ロケットの点火を思い浮かべると言えないので、そうとだけ答えておく。

話ながらだんだん落ち着いてきたので、大きく溜め息をついて立ち上がる。

ディルは理解できんとばかりに変な顔をし、それを見てしまった流衣は思わず笑ってしまう。

「む。もしかして新手の冗談か？」

するとからかわれたと思ったデイルが、真面目くさった顔でそんなことを訊いてくるものだから、ますます笑えてくる。

「ち、違うよ。くくく、そんな変な顔しないでよ、笑っちゃうから」
「もう笑っているぞ」

冷静に突っ込まれて、更に笑う。火に油を注がないで欲しい。

そんな二人の前で、リドがキバウサギの前に座り込んで、鞆からナイフを取り出した。

ぎよっとして笑いが止まる。

「何するの？」

「こいつの毛皮、高く売れるんだよ。折角だからとってこうかと。

ああ、ルイはあっち向いてる。吐くぞ」

それでキバウサギを解体する気なのだと気づき、流衣は急いで背中を向けた。

しばらくの間、色々とグロテスクな音が響いていて、流衣はびびりまくっていた。こっちの人は何てたくましいんだと、弱い自分に嫌気が差す。でもそれに慣れたいとはどうしても思えない。

リドは三頭のキバウサギの毛皮だけ剥ぎ取ると、あとは風で地面に穴をあけ、そこに、まず裁いたキバウサギの死体だけを放り込んだ。キバウサギもまた、ウシネズミと同じく、その血肉は人間にとつては毒だから、食用には向かないのだ。

「デイル、お前も持ってたらず？ 旅してるんなら金があるだろ？」

「いや、あいにくと袋を持参していませんのでな」

「そうかい。じゃ、全部埋めちまうぞ」

「ああ」

リドとデイルは互いにそう言い合って、デイルが最初にしとめたウサギも含めて地面に埋めた。他の余計な魔物を引き寄せない為だ。作業が終わったとみると、流衣は恐る恐る振り返る。

「終わった？」

「おう」

一仕事したというように、爽やかな顔で頷くリド。土をかける作

業すら風を操作して片付けた。

何してても爽やかすぎてすごい。不思議な方向で感心する流衣。いかにも同性から好かれるタイプのカツコイ兄さんのなリドだが、若干感じられる変わり者の匂いのせいか、どうも女つけがない。まあ、カザエ村にはリドと同年代の子供自体がほとんどいなかったが。「点火の術で爆発を起こす魔法使いがいたかと思えば、自由自在に風を操る 精霊の子」と、言葉を使うオウムか。妙な取り合わせとどうか、面白いとどうか」

もう何も聞いても驚かないとばかりに呆れ返るディル。

「偶然だよ偶然。な！」

「うん、そうだね」

流衣は苦笑しつつ、ちらちらとリドが手にしている、キバウサギの毛皮が入っている袋を見やる。

「ねえ、もしかしてキバウサギの毛皮を最初からとるつもりだった

……とか？」

「その通り！」

あくびもなく頷くリド。

成る程。袋が二つ用意されていた理由がここで判明した。

「しつかりしてるなあ」

「まあな！ 伊達に一人暮らししてねーよ」

リドは袋を叩いてにっこり笑う。

「……むう。私もまだまだだな」

え？ 何でそこで悔しそうにするんですか。

ディルの反応も謎である。

真面目に間違った方向に決意している気がするのだが。

「さて、と。ドングリ集めは任せな。ルイはそこに立って、袋を広げていてくれたらいい」

「ん？ うん」

何をする気だろうと首を傾げる流衣の前で、リドは足に風を纏い、ドングリの木の幹にジャンプし、また幹を蹴ってジャンプ、を幾度

か繰り返し、あっという間に枝の上に飛び乗ってしまった。

「私などよりずっと身軽ではないか」

木を見上げ、小さく息を吐くデイル。

リドの身軽さは風の 精霊の子 の影響と、本人自身の身体能力の高さからだろう。あれの一欠片でも自分に備わってあればいいのにと哀しく思いつつ、リドに言われた通り、袋を広げて立つ。

すると、枝の上でそれを確認したリドが、適当にドングリの実を選んで、袋に投げ落としていった。あとは袋に入るよう、風を操って軌道修正すれば、吸い込まれるように袋に消えていくだけだ。選別も兼ねて多めに入れると、登った時と同様、身軽に降りてくる。

「お疲れ」

風を利用し、ふわりと音もなく着地したリドに声をかけると、おう、と返事が返る。

「これでクエストはクリアだな！ 他の魔物に出くわさない内に帰ろうぜ」

「うん」

ドングリの入った袋は流衣が、キバウサギの毛皮が入った袋はリドが運び、デイルとともにブラツエへと戻った。

三人が町に戻ると、日はだいぶ傾いて夕方が近くなっていた。

流衣達はウイングクロスの雑談スペースに置かれたテーブルにドングリを広げ、綺麗なものを十個選び取ると、それを受付に出して報酬と引き換えた。

そして、残りの三つをどうするかとリドと顔を見合わせる。

「ちょっと試してみたいことがあるんだけど、それに使っていないかな？」

ドングリの実物を見てからというものの、ドングリクッキーを試して作ってみたくなった流衣である。パティシエを目指していた兄をよく手伝っていた為か、流衣も菓子作りは得意な方だ。慣れという

のは恐ろしい。」

それに兄が家を出てからは食事の用意は流衣が担当していた。掃除などはどうも苦手なのだが、(掃除機を使っている最中に物を倒したり、バケツの水をひっくり返す確立が高いので)、慣れていないが料理は問題なく出来る。特に興味のあることもなくて帰宅部だったので時間が余っていたというのもあったが、忙しい両親の応援をするということ、兄が家を出る時、兄と約束していたのが大きな理由だった。

「何に使うんだ？」

ひよひよいとドングリを投げ上げては手に戻し、また投げるを繰り返していたリドは、目だけを流衣に向けて訊く。そのリドの隣りでは、デイルがドングリを前に唸うなっていた。手には受付の女性から聞き出したドングリクッキーのレシピが握られている。

「僕もドングリクッキー作ってみたいなって思っ。きつと、これを粉にして小麦粉代わりにすればおいしいのが作れると思うんだよね」

「む？ これにはドングリを潰してペースト状にしたものを焼く、とあるが？」

デイルがガバリと顔を上げた。

リドはドングリを投げて遊ぶのをやめ、ほとほと呆れ果てた顔をデイルに向ける。

「はあ？ お前、そんな単純な作業についてそんなに悩んでたのか？」

デイルは顔をしかめた。

「む。私には単純ではないのだ。まず、ペースト状とはどういう意味なのだ？」

「……そこからかよ」

これだから貴族の坊ちゃんは、と、リドは視線を横にずらす。

「ペーストペーストっていうのは、うーん、どろどろした感じの……。ああ、そうだ、糊状ペーストのものです！」

意味を思い出し、流衣はパツと顔を輝かせる。

「ああ、そういう意味か！　しかし、これが糊状になる理由が分からん」

「僕も流石に理屈まではちょっと……」

困って曖昧に笑う流衣。

「真面目に相手すんなって、実践すりゃ良い話だ」

リドは面倒臭そうにずばんと切捨てる。

「で？　材料買いに行くのか？」

「そうだね。ああ、でも、調理場なんてどこで借りれば良いんだろ
流衣の問いには、通りすがりのギルド団員が教えてくれた。

「あら、あなた達、調理場使いたいの？　それなら宿舎に付いているから、受付に申請出せば良いのよ」

弓矢を背負った女性がにこやかに言う。

「そうなんですか。ありがとうございます」

流衣が頭を下げると、女性はお大事にと言っ立ち去っていく。
あの人もどうやら流衣を見かけた人だったらしい。今日だけで何人の通りすがりの団員に声をかけられたか。

「この人って親切な人が多いんだね。それにフレンドリーという
か」

交易の町だけあって、人に対して大らかなのかもしれない。

「いんや、そりゃお前限定だな」

ふうとリドが息をつく。

「何で？」

「ま、決闘に巻き込まれて怪我してたつても大きいけどな。ちま
ちましたガキがうるうるしてたら、目につくつてもあるな。あと
は大人は頑張ってるように見える子供を構いたがるんだよ」

ちまちま。ガキ。子供。そんな三連続コンボに流衣は精神にダメ
ージを食らう。

「あとはそうだな、動物連れてんのもあるかもな。肩にオウムなん
て乗っけて歩いてたら、誰でも思わず見ちまうさ。結果、話しかけ

てみたくなる、と」

「……………」

言い返せないのが辛い。

リドは全く言葉を飾らないので、ずばずばと指摘してくる。それぐらいはつきり言われる方が流衣としても付き合やすいが、哀しいものは哀しいし、へこむものはへこむ。

「そ、そんなに子供じゃないよ」

どうにかこうにか言い返すと、リドはちらりとデイルを見た。

「デイル、お前、こいつが幾つに見える？」

「十二くらいだろう？」

ズガンと追い討ちが下され、流衣は思い切りテーブルに沈んだが、ふとあることに気付いた。

「ん？ ちよつと待って。ここって確か、一年が十五ヶ月だったよね？」

「ああ、そうだぞ」

頷くリド。

流衣は急いで頭の中で考えを巡らせる。

ということは、自分のいた所より三ヶ月多いのだから、三ヶ月の十五倍分足りていないことになる。すると、あつちでの三年分がこちでは足りてないのだから、ええと……？ 端数を足しても三年と一ヶ月ちょいは足りてないわけだ。

つまり十五歳から三年と一ヶ月ちょいを引いたのがここでの年相応になるわけだから、つまり十二歳ということか！

流衣はポンと手を叩いた。

「分かったよ、リド。僕のいたとこだと十五歳だけど、ここだと十二歳なんだ。あつちは一年がここより三ヶ月少なかったから」

リドは考えてもいない結論だったらしく、琥珀色の目をしばたかせる。そして意味を飲み込むなり、少し興奮気味に頷いた。

「そうだな、そうだよな。どこも一年が同じ日数とは限らねえもんな。すげえな、じゃあお前、十二歳？ ますます普通に子供じゃん」

「でも僕自身は十五のつもりだから、十五歳だよ。これからはこっちの年月日で数えるけど」

「分かった分かった。十五な」

仕方なさそうに返すリドの言葉を聞きながら、流衣は考えを巡らせる。地球での一年よりここでの一年が長いのなら、この人は地球の人よりも遅く成長するってことなんだろうか？ ということはここでの一年よりも地球の一年が短いわけだから、帰るのが遅くなればなるほど問題ありということになる。

「ルイ殿は一体どこから来たんだ？」

はっ、デイルがいるのを忘れていた。

「……すごく遠い所」

としか答えられない。

違う世界と答えられたら簡単なのだが、それを口にするのはやめておけとリドに止められているから言えないし。ああ、どうしよう。困っていると、リドが口を挟んだ。

「こいつ、自分の住んでた場所の名前も知らないような辺境のそのまた辺境に住んでたらしくてさ、転移魔法だかの事故で俺の住んだ言葉^{ことば}交わしの森に飛ばされてきたんだ。で、住んでる場所の名も知らないだろ？ だから帰りたくても帰り方が分からないらしくてな、何か方法がないかと探して旅してるってわけ。で、俺はそれについてきた。ルイの世間知らずは半端ねえし、何せ同じ窯の飯を食って戦闘を共にした親友だからな！」

なんとまあ、よくそんなにすらすら嘘が出てくるものだ。それなのに、完全には嘘ではないというのがまた凄い。

流衣は感嘆すべきか呆れるべきか驚くべきか大いに悩みつつ、ぽかんとリドを見る。舌先三寸とはまさしくこのことなんだろう。

「はあ、それはまた難儀なことだな。私からは頑張れとしか言えんが、帰る方法が見つかるといいな」

デイルはあっさり騙されて、少しだけ同情のこもった視線を流衣に向け、そう励ましてくれた。

心からそう言ってくれたのが分かったから、流衣は胸が熱くなつた。

「……うん、ありがとう」

不覚にも本気で泣きそうになり、俯いて鼻をぐすんとする。

こんな何も知らない、魔物がいて危ない世界に放り出されて、でも優しい人ばかり会えて自分は幸運な方なんだろう。

そう気付いたら、ここに来てから今まで感じていた少し惨めな感じや寂しさや哀しさが少し薄れたような、そんな気がした。

もう夕方だった為に市場が閉まったので、明日の朝から買出しに行くことで話が纏まった。

流衣がドングリクッキーを作ると言い出したので、デイルがそれなら自分にも教えて欲しいと頼んできて、それに面白そうだとリドも乗り、結局三人で行動することになった。勿論、オルクスのことも忘れていない。

そして翌日、食堂で朝食を摂った後、集合場所のクエストボード前の雑談スペースで落ち合い、早速市場に出かけた。

市場には武器や細工物、アクセサリから、何に使うのか分からない変わった物や置物、布や食べ物など様々な物が売られていた。だが、菓子屋やパン屋などは市場ではなく東西に抜ける通りにあるらしかった。

「それでルイ殿、何を買うのだ？」

デイルの問いに、流衣は苦笑する。

「あの、ルイでいいですよ？」

昨日から気になっていたので、呼び方変更を希望する。殿なんて付けられる程、偉くも歳を重ねてもいない。

それに、リドも俺も呼び捨てで構わねえと付け足す。

「む、そうか？ では、私に敬語を使うのもやめて欲しい。修行中は一般人だからな」

デイルも気になっていたようで、そう言う。

「僕が敬語使ってたのは年上だったからんだけど……。まあそう言うなら」

流衣の返事に、デイルは首を傾げる。

「だがリドも年上だろう？ 見た所、私と同じ歳くらいに見えるが」

「俺は十七だぜ？」

「同じ歳だな、私も十七だ」

リドの返しに、ディルはやはりというように頷く。それに流衣は少し考えて答える。

「最初は敬語使ってたんだけど、いつの間にかため口になってただよね」

「そっぴやそっぴだな」

リドも頷く。

「ふむ。まあ、改めてくれるのならそれで構わん」

ディルの言うことに頷いて、流衣はクッキーの材料を思い出す。

「えーと、クッキーの材料は薄力粉と無塩バターと、砂糖と、卵とあとはバニラオイルとかあれば良いけど、まあ香りづけだし無くてもいいかな。それに今回は薄力粉はいらなし……」

そう言いながら市場を眺めて歩いていると、ある実を見つけて目を丸くする。

「あれってカカオ？ 生で見たの初めてだ」

筋の入った黄色い実が籠の中に詰まれているのを見て、流衣は顔をパツと明るくする。

「ここにもチョコレートってあるんだね」

「ちょこれーと？」

リドが片眉を跳ね上げた。

「え？ あれが元になって作られたお菓子だけど。甘くて茶色くて、口の中で溶ける感じの……」

名前が違うのかと具体的に説明してみるが、リドは首をひねるだけだ。貴族なら知ってるかとディルを見るが、ディルも怪訝そうな顔をしている。

（もしかして、チョコレートがない？）

そっぴえば、地球でもカカオは初め薬として用いられていたんだっただ。

流衣は物は試しにと、カカオを売っている店に向く。

「あの、その実なんですけど……」

灰色の髪と灰色の口ひげをたくわえた店員の男は、客を見て笑顔を作った。

「ああ、お客さん、お目が高くていらっしやる。このココの実から作った粉は、シルヴェラント国で不老長寿の薬と云われて重宝されている、珍しい実なのです！」

素晴らしい宣伝文句をのたまう男に、流衣は問う。

「えっと、粉じゃなくてカカオ豆……、黄色い実の中の種の部分だけを売って欲しいんですが」

男は不審げな顔になる。

「わざわざ種を買わずとも、粉でお売りしますよ？」

粉だとココアになってしまうから困るのだ。

前に読んだ本からそう知っている流衣は、どう言えば種で売ってくれるかと考える。

「その実、一つ分だとお幾らになりますか？」

困った末、買う意思があることを示すことにした。商人なら、乗ってくるに決まっている。珍味扱いで売られている薬なせい、客足の無い店なら尚更。

すると男はさっきまでの不審などかなくなり捨て、にこにこ愛想笑いを浮かべた。

「そうでございますね、この実一つですと、銀貨二枚になります」
もみ手をしながら言う男に、リドがひゅうと口笛を吹く。

「へえ、随分吹っかけるな。じゃあ、そっちの粉、その小さい袋一つ分なら幾らなんだ？」

「こちらなら、銅貨五十枚でお売りしております」
どっちにしる高い。

それだけだと客が帰ると思ったのか、男は慌てて付け加えた。

「この実は、南方でしか取れない貴重な木の実なんです！ 運んでくるのも大変だったんですから、この値段になるんです！」

流衣はその男を見て、少し考え込む。

「あの、もしこの実がよく売れるようになる良い方法を教えたら、代わりにまけてくれませんか？」

値切りなんて初めての体験だが、ドキドキしながら流衣は言ってみた。駄目ならそのまま買えば良いしと割り切っている。

「良い方法？」

男の目が輝く。

「ええと、勿論、話を聞いてから判断してくれて構いませんから流衣がそう言うのと、男は頷いた。だが、慎重に付け足す。

「では、値引き分については話を聞いてからで」

「はい」

流衣は頷き、にこっと笑う。

「えと、この粉にミルクや砂糖を混ぜて煮溶かすと、甘くておいしい飲み物になるんです」

初耳だったのか、男は目を瞬いた。

「そんな話は聞いたこともありませんがね？」

「僕のいた所じゃ、常識ですよ。どうやらこの国にはそういう飲み物がないみたいですけど。それに、お菓子も作れるんですよ」

「お菓子も？」

「ココの種をペースト状にしたものに、砂糖を加えるんです。それを冷やして固めると、チョコレートの上出来上がりです。甘くておいしいんですよ。これもこの国には無いみたいですけど」

そう言いながら、これって商売チャンスじゃないかと暗に言ってみる。

すると男はみるみるうちに表情を輝かせた。

「それは素晴らしい情報を聞きました。良いでしょう、銀貨二枚にさせていただきます。言っておきますが、これ以上は無理ですよ？ 私だって生活があるもので」

あまり交渉の上手い者ではないらしく、切実に言う男。

「いえ、十分です。ありがとうございます」

そう言って、男に代金を支払い、カカオの実を一つ買う。

「後で試してみてくださいね」

と男に言い、流衣は店を後にした。

（ほんとなら、ココアバターを混ぜて苦味を減らすんだけど、作り方知らないんだよね）

チョココレートの製法を脳裏に浮かべて、内心で謝っておく。でも、十分にお菓子としては通用するはずだ。

『なかなかやりますな、坊ちゃん』

肩のオルクスがしげしげとココの実を見ながら言う。

「うん、まあ、一か八かだったんだけど。それに南の違う国から来るなんて大変だなと思って」

シルヴェラント国というのがどこにあるのか知らないが、ルマルデー王国のような大きな国まで出てきているのだから、遠いのだろう。それなのに客が少ないので、何となく応援したい気持ちになつてしまっただけだ。

「折角だし、チョコ入りクッキーにしたいな。チョコ作っても良いし」

ああ、楽しくなってきた。

流衣は少し浮かれながら、他の材料を集めるべく、市場を歩き回った。

そうして材料を揃えると、受付で調理場使用の申請を出して、宿舎にある調理場に行った。幸いにも調理道具一式が揃っている。かまど竈とはいえオーブンもあるみたいだ。

まず竈に火を入れておき、材料を吟味する。

「まずはドングリだね」

外の殻を割り、水で洗い、布で包んで麺棒で叩き、小さくする。

「それをどうするんだ？」

部分鎧を取り外し、料理の邪魔になる上着を脱いだディルが袖をまくりながら訊いてくる。

流衣もマントや鞆は外して部屋の隅に置き、袖まくりをしている。あと、調理場に動物がいるのは衛生上問題ありなので、オルクスには部屋の隅でじっとしているように言い含めた。それが気に食わなかったのか、オルクスはまたしよげかえっている。

「出来たら粉にしたいんだけど、こつちには石臼ってあるのかな？」
「それならここにあるぞー」

やっぱり同様に袖まくりしたリドが、部屋の隅にあった石臼をゴロゴロ転がしてきた。それを綺麗な布の上に置き、小さくしたドングリの欠片を上の方から入れる。

「これを回すのは私が担当しよう。良い修行になる」

ちよつと嬉しげに名乗り出るディル。

修行修行って、そればっかだな、この人。

流衣は少し呆れた視線をディルに向けた。それから、リドの方を見る。

「僕達は先にチヨコレート作るつか」

どうやってペーストにするんだろ？ と、大事な部分が抜けている知識なせいで首を傾げつつ、種を取り出して軽く洗ってから、とりあえず潰してみることにした。

ペーストっぽくなったものに砂糖を混ぜて湯銭にかけ、どうにかこうにかこれでチヨコレート？ みたいな物が出来た頃、ディルの方もドングリを粉にする作業が終わったようだった。

あとはクツキーを作る要領で作業を進め、型までは流石になかった。手で丸い形のものを作った。生地の中にはチヨコを混ぜ、チヨコレート味のクツキーにする。残ったチヨコレートは器に入れ、氷室に放り込んでおいた。これで板チヨコが出来るはずだ。

「後は焼きあがるのを待つだけだね」

竈を使うのは初めてだから、竈の前から離れられそうにないが、ひとまず気が抜けた。つと、その前に片付けないと。

「ふう。菓子作るのってこんなに疲れるんだな」

初めて菓子を作ったらしいリドは、やれやれと肩を落とす。リド曰く、「毎日食べればそれで良いんであって、菓子なんて面倒なもんをわざわざ作ったりなんかしない」んだそうだ。

「ああ、そうだな。ルイのお陰で、初めてのまともな料理になりそうだ」

確かな達成感を覚え、満足げに言うデイル。

「うーん、出来るまでは何とも言えないけどねえ」

おいしく出来ていればとは思うが、自信は少ししかない。ドングリを材料にしたのが初めてだからだ。これならいつそ、ナッツの代わりにクッキーに混ぜ込んだ方が良かったかとも思ったりもしている。

流衣は散らかした物を片付けながら、ドングリクッキーが焼き上がるのを待った。

食堂で果実を絞ったジュースを飲んでいたリリエの前に、いきなりドンと布に包まれた菓子が置かれた。

リリエはそれを見てクッキーであると気付くと、素直に驚いた。

「あれま、思ってたより普通に出来たじゃないの」

普通どころか見映えは完璧だ。

が、自信満々のデイルの後ろにルイとリドの姿を見つけて、すぐに理解する。

「なーんだ、その子達に手伝って貰ったわけね」

手伝い禁止つて言えば良かったなあと、ちよつとつまらない気分でもリリエは思った。おかしな作品を作り上げた弟子を、からかってからかってからかい倒そうと楽しみにしていたのに。

「言っておきますが師匠。これは町の者に習った作り方ではなく、ルイのアレンジしたものです。ハクリキコとかいうものの代わりにドングリの粉を使っただですよ」

「あらそうなの」

白と茶色のクッキーを見つめ、リリエは頷く。見れば見るほどおいしそうに見えてきた。

白い方を一つ摘み、口に放り込む。

サクツとしていて香ばしい。

「おいしい！」

茶色い方も食べると、初めて食べる甘みが口に広がった。

甘味が大好きなリリエは、思わず笑顔になった。

「なあにこれ、おいしい！ 初めて食べる味だわ」

目をキラキラさせて、ルイの方を見やる。

「あ、それ、チョコレートを生地に混ぜ込んだんです。後でも構わないので、これも良かったら食べて下さい」

にこつと笑い、流衣は小さな布の袋を置いた。そして、満足げに笑うと、リドとともにその場を去っていった。

「あら、これも初めて見るわ」

茶色いコロコロとしたお菓子を摘むリリエ。

「チョコレートという菓子らしいです。ルイの故郷では普通に出回ってる菓子だとか」

「異国のお菓子？ やった、何てついてるの私」

リリエは顔を綻ばせ、摘んでいたチョコレートなるお菓子を口に放り込む。途端に口の中に広がった甘さに、あまりのおいしさにつかり目尻に涙が浮いた。

「甘い〜っ、おいしい〜っ、幸せ〜っ」

頬に手を当て、身をくねくねさせる師匠を見て、ディルは思わず後ずさった。こんなリリエを見たのは初めてだ。はつきり言って不気味以外のなにものでもない。

「今、何か失礼なこと考えた？」

瞬間、ぴたつと動きを止めたリリエが殺気をこめて睨んできた。

ぶんぶんと首を振るディル。

すると、すぐさまお菓子の方に視線が戻る。

「素晴らしい！ 何ておいしいの！ ねえ、レシピくらい聞いたんでしょね？ 今度作るから渡しなさい！」

「は、はいっ、これですっ！」

デイルの差し出したレシピを奪い取り、リリエはにんまりした。これがあれば材料さえ揃えれば自分でも作れる。

うふふふ。

楽しげに笑うリリエを見て、デイルは不気味すぎて冷や汗が出た。怖い。怖すぎる。

でも機嫌が良さそうではあるので、見ないフリをしつつ胸を撫で下ろすのだった。

次の日。

食堂に朝食を食べに来た流衣達は、がっくりと肩を落として沈み込んでいるデイルを見つけ、顔を見合わせた。

「おはよう、デイル。どうかしたの？」

そのまま素通りも出来ず、デイルに挨拶する。

すると、デイルは笑顔で挨拶したが、すぐさま元の暗い表情に逆戻りした。

「師匠が……」

言いつらそうにそう呟くデイル。

僅かに首を傾げ、リドは呑気な声で問う。

「お師匠さんがどうしたんだ？」

デイルはうつつと声を詰まらせ、一気に暴露した。

「菓子に目覚めたなどと言って、私を放り出していったんだ！」

「『』は？」「」

流衣、リド、オルクスの声が重なった。

デイルは構わず続ける。

「『あんたはもうすでに修行内容をクリアしている。私が教えることはもう何も無い。あんたに必要なのは、経験と知識。一人で旅するもよし、誰か守る相手か仲間を見つけて共に旅するもよし、納得行くまであちこち見て歩いて、そうして腕を鍛え、納得したら士官しなさい』と、そう言い残して、今朝早くに出ていってしまったんだ」

うなだれるディルを見て、リドは茶化す。

「最後まで聞いてると、女房に逃げられた旦那みてえだな」

「もうリド、ふざけちゃ駄目だよ」

流石に可哀相なので、流衣は小さな声でリドを制す。

「あんまりだ。私はどうすればいいんだ。行く先など決めていないのに」

大体、納得というのはどういう意味なのだ。

ディルはぼそぼそと呟く。幽鬼ゆうきのように暗い気配を背負ったディルを見て、食堂にいる他の団員達は見ないフリをして距離を取り始めた。それもそうだろう。朝からこんな陰鬱な光景、誰も好き好んで見たくなどない。

「別に、修行の旅なら適当にふらふらしてれば良いじゃん。魔物退治して回るとかさ」

リドが適当に助言する。

「私は見習いとはいえ騎士だぞ！ 守る相手なくば、どうして騎士と呼べるのだ！」

朝っぱらから熱いことをのたまうディル。

「うっ、熱血かよめんどくせえ」

リドは顔を引きつらせる。

「それなら、護衛の任務を中心にこなすとか……」
「当たり前障りのないことを流衣は言ってみる。」

しかしディルは納得しないようで、首を振った。

「それは傭兵であり、騎士の本分ではない」

流衣はオルクスの方を見る。見られたオルクスはあからさまに目

を反らした。デイルの相手をしたくなかったらしい。

声をかけたの失敗だったかな。流衣は困って、面倒そうに顔をしかめているリドと顔を見合わせた。

「お前達はどこを目指して旅をしているのだ？」

沈みきったまま、ぼそりと尋ねるデイル。

「一応、カザニフを目指してるよ。転移魔法や召喚魔法に詳しい人がいたら、そっちも訪ねるかなあ。あとは図書館なんてあれば良いんだけど」

流衣の言葉に、デイルは、そういえばこの年下の少年は帰る方法を模索して旅しているのだったなと思いつく。

「それならば、カザニフよりもエアリーゼ神殿の側にある魔法学校を訪ねると良い。あそこにおられる先生の一人が、転移魔法の権威だと聞いたことがある」

「それほんと！」

流衣はがばつと食いついた。

少し気圧されて身を引きつつ、デイルは首肯する。

「あ、ああ」

「で、エアリーゼ神殿ってどこにあるの？」

そのままぐるっとリドの方を向く。リドはそれにびくつとしつつ、顎に手を当てる。

「確か北にある神殿じゃなかったっけ？ 魔王が現れたっていう洞窟が、そこから近かったような……」

「その通りだ。まあ、近いといっても、徒歩で二週間くらいの距離だが。もしかしたら、魔王討伐に来た勇者と鉢合わせたりしてな」

デイルはそう言って、クスリと小さく笑う。

そう聞いたらますますそこに行きたくなってきた。流衣は俄然やる気が出てきた。

「そっか、分かった！ じゃあ、そっちに行き先変更するよ。よし、頑張ろう！」

拳を握り、気合を入れる。

デイルはそんな流衣をしばらくじーっと観察し、やがて何かを決意した様子で頷いた。

「……よし、決めたぞ」

お、立ち直ったか。

顔を上げたデイルの目に決意のこもった強い光が浮かんでいる。

流衣は良かったと肩の力を抜いた。

「私も君達の旅に同行する！」

流衣はその場できつとずっこけた。よろよろと身を持ち直し、空耳だろうかどギギギとデイルの方に顔を向ける。

デイルはそれはもう素晴らしい笑顔を浮かべていた。これで通りを歩いていたら、女の子の方が寄ってくるかもしれない。というか笑顔を使う相手を完全に間違えている。

「よし、行くかルイ」

眩しい笑顔を見た瞬間、リドはすぱつと切り捨て、流衣の後ろ襟を掴んでその場を離れる。

慌てたのはデイルである。

「ちよっ、無視をするな、無視を！ いかにもひ弱そうな子供を守るんなら、騎士として十分な理由だ！」

「ひどいよデイル！ それに余計なお世話だよ！」

あんまりな言いように憤慨し、リドに引きずられながら言い返す流衣。オルクスが「何て失礼な真似を！」とリドに叫びながら、リドの周りを旋回する。

「すまん！ 本音を言うと、単に面白そうだったただけだ！」

「そっちもどうかと思うよ！」

もうちよつと真剣に悩みなよ、と、流衣は心の中で突っ込む。

そうして騒いでいたら、うるさいと他の団員に食堂の外に放り出された。

それから、何故かなし崩し的に、流衣・オルクス・リド・デイルの四人で旅することが決まってしまう、諦めるしかなかった。

うーん、謎だ。何でこんなことになったんだ？

時は戻り、流衣達がドングリクッキーを作った日の晩。

リリエは、深夜遅くに使い魔が運んできた手紙を、月明かりの下で見つめていた。

中身はすでに読んでおり、文字の綴られた文面を見下ろしているだけだ。

「ケーネスの町が落ちたか……」

感情の見当たらない冷たい顔で、リリエは呟いた。

まだしばらくは時間があると思っていたが、思ったよりも事態は進行しているらしい。

北に生まれた魔王の影響か、魔物が凶暴化して村が潰れたケースはこれまでに何件か報告があったが、町が潰れたのは初めてだった。リリエは手紙を握り潰した。それは自分の仕えている主君からの召集の手紙だった。

「もう少し猶予があると思っただけどねえ」

リリエがあちこちふらふらと旅をしていたのは、情報収集の為だった。

三百年ぶりの魔王の誕生。裏で暗躍する魔王信仰の信者達。

それだけでも十分頭が痛いというのに、問題はまた他にもあった。魔王というのは、勇者に倒されても、数百年後にまた誕生する。

それは世界に溜まった負の要素が形をなして現れるからだというのが定説だ。だから、魔王が倒されても、闇の眷属である魔物が消滅することはない。

そして、魔王を倒す際、魔王が持っている魔力を五つに分断し、それを五つの聖具に封印する。それら聖具は五芒星を描くように建てられた五つの神殿に預け、神殿の厳重な管理のもと、徐々に清めていく。魔王の骸はカザニフに届けられ、そこでも徐々に清めていくのだ。魔王は一度に清められない程の強大な力を持っている。

が、骸と力に分けるとはいえ、魔王はその時々で宿る対象が異なるので、人型をしているわけではない。巨大な木の時もあつたし、小さな小鳥の時もあつた。魔王になった時点で人語を解すし、魔法も扱うようにはなるが。

先代の魔王は不幸にも人の姿をしていたので、骸は棺桶に納められて丁重に祀られていた。それなのに、邪なことを考えた者がいて、そいつが二年前に遺体から右手を切り取って持ち出したのだ。しかもその直後、事件の騒動の隙間を縫い、西にあるフェルリア神殿からは先代魔王の力を封じこめた聖具が盗み出された。

その二つを探し出し、神殿に納めるのがリリエの任務だったのだが、相手は巧妙らしく、二年かかっても探しきれなかった。

「ただでさえ面倒だったのに、今度は内乱の予兆だって……？」
ふざけるなと低く呟くりリエ。

怒りが収まらないながら、気を鎮め、ちらりと隣の部屋の方の壁を見る。

弟子を取る気はなかったのに、あまりのしつこさに弟子にした少年を思い浮かべ、小さく溜め息をつく。

弟子にしたからには最後まで面倒をみてやりたかったが、残念ながらタイムアウトだ。ごたごたが想像される所に連れて行くわけにはいかない。

まあ、修行はクリアしているのだ。あとは経験と知識を蓄えれば十分に大成する素質がある。

「さてと、どんな話をでっちあげるかねえ」

リリエはにやりと笑み、弟子の驚く顔を楽しみに思っていた。

ブラッエの町の中にある、大理石造りの神殿の奥にある一室に、少女は一人ぼつねんと座っていた。薄い桃色の髪と薄黄色の目をした、まだ十代半ばの可憐な少女である。

少女は深紅の毛で織られた敷物の上で、見るともなしに膝元に転がした大小ばらばらの魔晶石を見下ろしていた。

端からはぼんやりしているようにしか見えないのはそのはずで、少女は目が見えないのである。否、常人のようには、という意味で見えない。

少女の世界は、薄ぼんやりとした灰色に青い光がぼつんと浮かぶ、それで全部だ。

全てが見えないわけではない、魔力の光のみしか見えないのだ。誰もが少女を気の毒に思うが、生まれた時からこうであるので少女にとってはこれが普通であり、自分を可哀相に思ったことはない。誰しもが持つ魔力の光は見えたから、人を確認する分には困らないし、その人の持つ魔力が大きければ大きい程、相手の顔もはっきりと見えた。

魔力を持たない無機物は見えないので、それで少し苦勞する程度のことだ。

少女にとつての“人”とは、青く美しい魔力の光。

それは命そのものの輝きだ。

だから灰色と青色の世界でも、少女にとっては十分美しい世界だった。

「……………まあ」

魔晶石の成す青い光が、点となって浮かび上がり、少女はその意味を読み取って声を漏らす。俗に言う占いといわれるもの、そ

れが少女の特技だ。

「町に出るが吉。まあ。まあ」

少女は両の頬っぺたに手を当てて、どうしましょう、と言葉を漏らす。

目がこうである為、神殿に引きこもってばかりで、出たとしても庭先までしか出たことがない。

町といえば、少女には未開の土地そのものだった。

「どうされました？」

そこへ少女の声を聞きつけた女が顔を出す。少女の護衛をしている魔法使いの女だが、少女はついぞ護衛してもらったことはない。出かけないのだから当然だ。

「私、町に出なくてはいけないわ」

少女が困った顔をして言った言葉に、女は面食らった顔をした。

* * *

「……暑苦しい」

窓の外を見ながら、ぼそりとリドが呟いた。

若干疲労感を覚えつつ、遠い目をした流衣もまた外を見ていた。

そこにあるのは、鍛練場たねんじょうで、部分鎧ぶぶんよろいや上着を脱いだ動きやすい格好をしたデイルが腕立て伏せをしている光景だった。

ほぼ無理矢理押し切った形で流衣達の仲間になったデイルは、相当凶太い神経の持ち主だった。朝食後、受付で調べてきたのか流衣達の泊まっている宿舎の部屋に現れ、三人部屋の方が安いから移動だ！ と叫ぶや、荷物を纏めさせて廊下に追い出したのである。

部屋の移動自体は受付で変更出来るのだが、ただ今清掃中につき、こうして廊下につ立っている羽目になっている。デイルは暇だから修行すると鍛練場に出て行って、ひたすらジョギングしたり大剣で素振りをしたりしていた。

飄々ひょうひょうとしているリドですら少しラツとしていたが、一時間が経

過しようとしている今では諦めモードである。

「ははは……」

乾いた笑いを漏らしつつ、すでに諦めている流衣は空に視線を向ける。確かに、朝からあまり見たくなくらいには暑苦しい。色々騒がしい少年である。

(ん……?)

何気なく空を見上げたただだったが、長閑な光景のびやかに不釣合いなものを見つけて流衣は僅かに眉を寄せた。

宿舎の向かいに、鍛練場を挟むようにして、受付のある棟 本棟があるのだが、その屋根に魔物が座っていた。

大きさにして成長した猫くらいの、丸い体躯に口鼻耳はなく大きな金色の目が一つ、コウモリのような翼が一对生えた魔物だ。シツポは悪魔を思わせる鉤状かぎじょうである。

(ああいうの、ゲームによくモンスターとして出てくるよなあ。名前なんだっけ)

そんなことを思い、目しかないのでどうやって食事するんだろうと少し不思議に思った。

「ねえオルクス、こんな所にも魔物っているんだね」

肩にいるオルクスに魔物を指差しながら言うと、オルクスは首を振った。

『町には魔物避けが施してあります、あれは使い魔の方ですよ。術者が側にいるか、もしくは誰かを監視しているのかもしれないね』

「へへ、何かいかにも使い魔って感じだね、あの子」

『あんなの低級ですよ』

かなり上位にいるオルクスは、ちよつと不満げに言った。

『わてだって、使い魔らしい使い魔です』

……どうやら使い魔としてのプライドに引っかけたらしい。

ちよつと笑ってから、また目玉みたいな使い魔に目を戻す。

するとあつち流衣達が気付いていると気づき、少し慌てた様子で羽をばたつかせて飛び去っていった。

「うわー、間抜けっばいな、あの使い魔」

隣りで、目の上に手をかざしてその使い魔を見送ったリドが、感心を混ぜた声で言う。リドも気付いていたらしい。

「部屋の清掃、終わったわよお兄ちゃん達」

そこで空き部屋を清掃して巡回していた清掃人のおばさんが声をかけ、流衣達は返事をして荷物を取った。

デイルの方をちらりと見て　　なんだか楽しそうに修行しているので放っておくことにして、とっとと部屋に入った。

*

「どうかしたのかい、教祖様」

ふと顔を上げた教祖に気付き、少年は首を傾げた。

「ああ、悪いねサイモン。手当ての途中に」

腕に切り傷をこしらえて帰ってきたサイモンに、教祖は軽く謝ってから治療の続きに取りかかる。

黒い髪と金の目をしたサイモンはカラス族と呼ばれる亜人だ。その証拠に背中に黒い羽が生えている。他は人間と変わりないのだが、耳は人間のそれよりは少し尖っている。黒い衣装を好んでよく着ており、豊穡の月も半ばで徐々に冷え込んできた最近では、厚めの長袖を着込んでいる。どの亜人も共通して、寒さに弱いのだ。

この少年、以前、人買いから大怪我を負いながらも逃げてきて路地裏に倒れていたのを、教祖が拾って子供のように育てている。他にも、そういう境遇の者を何人か面倒をみていた。

そんな事情もあって教祖を慕っている少年であるが、教祖を除いた他の人間には絶対に触れさせないので、治療が必要な際は教祖が出てくるしかなかった。

「何か問題あったの？ 潰してこようか？」

ちよつと慕う度合いが強すぎて、盲目的なサイモンの言葉に苦笑する教祖。

教祖自身は普通のつもりであるのに、何故かこう、いつの間にもやら大物みたいに崇められたりして困惑してしまうことが多い。己の理想の為なら仕方が無いと、最近は諦めつつあるけれど。

「違うよ。クロロがドジ踏んだみたいだね」

「クロロって、あの目玉みたいな使い魔？」

少々表情が欠落しているサイモンは、僅かに首を傾げた。

「そう」

「俺、あいつ嫌いだ。ドジ踏む確立高すぎ」

サイモンの声に陰が滲む。

「そう言わないで。クロロの他に出せる子がいなくてね。見ているとは気付かれていないようだから、大丈夫だよ」

そう言いながら包帯をとめ、出来た、と頷く教祖。

「それで、怪我をしたってことは、勇者は強かったのかい？」

サイモンは眉間に皺を刻んだ。

「こっちに來たばっかだっというから油断してた。妙な剣技を使う奴だったよ。でも、次は負けない」

悔しげに唇を噛むサイモンの頭をぐしゃぐしゃと掻き回す教祖。

「ご苦労様。それさえ分かれば十分だ。もう一つは？」

「あつちも知らないみたいだ。聖具せいぐを盗んだのはお前らかと、神官の奴に訊かれた。知るかって言つといたよ」

「そうか、あつちも知らないのか」

教祖は顎に手を当てた。

それから穏やかな笑みを浮かべる。

「お手柄だよ、サイモン。聖具が行方不明なら、魔王様が倒されることはない。しばらくは様子見、かな」

こっちも搜索は続けるけどね。

教祖が嬉しげにすると、サイモンも機嫌を直した。

どこの誰だか知らないが、聖具を持ち出してくれたのには感謝している。教祖はふつと微笑む。

「さて、では後はゆっくり休みなさい。私は祈りの間に行くてくる

「よ」

「うん。またな、教祖様」

教祖は一つ頷いてから、^ご神体のある祈りの間に向かった。

十一章 竜の子騒動 2

今日は一日を町の散策に当てるつもりでいたから、部屋に荷物を置くなり、町に出ることにした。

リドはこないだのキバウサギの毛皮を売ろうと意気揚々としていた。さっきの件で不機嫌気味だったのが直っており、流衣はほっとする。

いちいち気にしては負けだと、私も行くぞ！ と、置いていかれそうになって慌てて追いかけて来たデイルを見ながら思う。

「修行いいの？」

てつきり鍛練場ですつと修行する気なのだと思っていた。

流衣の問いに、デイルは頷く。

「うむ。一通り鍛練は済ませたからいいのだ」

そう言いながら、デイルはふと家の屋根を見上げる。

「それはそうと、何やら尾おけられているようだが、いいのか？」

「え？」

「何？」

流衣とリドは揃って屋根を見上げた。

さっきの目玉の使い魔が、また屋根に座ってこつちを見ている。

「あ、さっきの間抜けだ」

「え？ 尾けられてるの？ 僕らが？」

デイルは頷く。

「何だ、気付いていなかったのか？ 昨日にはすでに尾けられたぞ。害はなさそうだから放置していたが、心当たりはないのか？」
流衣は考え込む。

「うーん、そう言われると一つだけ心当たりあるけど……」

ドーリスの町で出くわした行商人の女を思い出す。

「それじゃないか？ 俺の方は、この前ぶつ潰したから狙われる理由がない」

盗賊団レッティエータを思い浮かべたリドは、すぐさま脳裏でバツをつけ、流衣に言う。

「うう、やっぱり？ 本気で目をつけられたのかな。ど、どうなるんだろ。口封じとかいわれて殺されるとか……？」

だんだん顔色が青くなっていく。

それにはデイルが笑い飛ばした。

「そんなつもりなら、あんな間抜けな使い魔は寄越さぬだろう。様子見とみていい」

「ほ、ほんとに？ ほんとのほんとに？」

鬼気迫った顔で流衣がデイルに詰め寄ると、デイルは若干、身を引きつつ答える。

「恐らく。まあ、放っておけ。気付いたと思われる方が厄介だ。

ところでその中身は訊いていいの？」

流衣はちらりとリドを見た。リドは肩を^{すく}竦める。

「大丈夫じゃねえの？ 行商人の顔を見たの、お前だけだし」

「うう、確かに」

がっくり肩を落とす、流衣は不運を嘆く。ちよつと路地裏を通っただけであんな人に会うなんて、誰も思いはしないだろう？

それとはまったく事情を簡単に話すと、デイルは難しい顔になる。

「…… 悪魔の瞳^{イビルズアイ}か。転移魔法を使うとなると、幹部だろうか？

ひとまず、出くわしたら逃げるしかあるまい。魔王信者というのは、どこに潜んでいるか分からんものだ。まさしく『不死鳥』。歴史を追っても、何度潰されても別の者がまた組織を立て直し、何度も何度も復活する。しかも神出鬼没である上、どこにアジトがあるのかも謎なのだ」

つまり、とデイルは締めくくる。

「考えても仕方が無い、ということだな！」

すっぱりと気持ちの良い笑顔で言い切った。

が、そんな面倒臭い組織に目をつけられたのかと思うと、流衣はますます不安になる。

『大丈夫ですよ、坊ちゃん！ わてがおります故』

ここぞとばかりに胸を張る、肩のオウム。

流衣は小さく笑う。

「そうだね、オルクスもいるもんね」

頷く流衣。

そこへ何となくオルクスが言ったことを察したリドが、茶々を入れる。

「一昨日、主人と一緒に目を回してたけど、大丈夫なのかあ？」

「うるさいデスヨ、リド！」

切れたオルクスがリドに飛び掛り、ガブツと嘴でリドの指を噛んだ。

「つてえ！」

小さなオウムの嘴とはいえ、気合の入った挟み具合が地味に痛い。声を上げて腕を振り回すリドであるが、オルクスも放さない。

「ルイ、こいつどうにかしろ！」

「わわわわ、オルクス！ やめ……やめなさい！」

口喧嘩や追いかけてくくらいなら止めないが、噛み付くのは流石にどうかと思い、思わず教師みたいな口調で叱ってしまう。

瞬時にオルクスは離れ、パサパサと羽音をさせて流衣の肩に戻り、どこか感動したように言った。

『坊ちゃんに主人の貫禄かんろくがついてきて嬉しゅうございます』

「……………あのねえ」

どの辺が貫禄なのかさっぱりだ。

なんだか頭痛を覚え、額に指先を押し当てる流衣。

リドは噛まれた指を押さえて険のこもった目をオルクスに向けていたが、北から南へ抜けるメインストリートに差し掛かった所でふと片眉を上げた。

桃色の髪をした少女が地面に尻餅をついており、何かを探すよう

に右手を地面にうろろさせている。その少女から少し離れた場所に杖が落ちていたから、それを探しているのだろう。

通行人達はそれを遠巻きに見ながら通り過ぎて行き、誰も手を貸さない。それに焦れ、リドは小走りに少女に近付いた。

「大丈夫かい、あんた」

杖を拾い、少女の右手に取っ手部分をしっかりと握らせる。

すると少女はほっとしたようにそれを握り、恐る恐るという様子で立ち上がった。

「まあ、ありがとうございます。親切な方」

鈴を転がすような声で少女は礼を言い、綺麗な所作で礼をした。

それから、リドと、リドを追いかけてきた流氷とディルの方を見て目を丸くする。

「とても綺麗な青色……。顔が見えるなんて、三人ともすごいんですね」

「失礼だが、目が見えぬ方ではないのか？」

人数を言い当てたので、ディルが怪訝な顔になる。

「私、普通の方のようには見えないのですが、代わりに魔力の光が見えるんです。魔力が強い方でしたら、顔まではつきり見えます」

屈託無く答える少女。可憐な見た目だが、芯の強さを感じさせる。

「親切な方の方は光が螺旋を描いて見えます。これは 精霊の子かしら？ そちらのお二人は魔法使いのような気がします。それにしてもそちらの方、何て深くて綺麗な青色をしているんでしょう。」

大きい魔力をお持ちなんですね」

最後は流氷の方を見て、うっとりと言う少女。

可愛らしい少女に褒められて、流氷は少し頬を赤くする。

「大体当たりだが少し間違っている。私は魔法使いではなく魔法騎士だ」

ディルの訂正に、少女は目を瞬く。

「まあ、そうなんですか。お会いしたのは初めてです」

「正確には、魔法騎士見習い、だろ？」

しつかり更に訂正するリド。デイルはうぐつと渋面になる。

そんな四人の真横を、木箱を六つほど積んだ荷馬車がガラガラと通り過ぎていく。

「あら、あれは……？」

少女が木箱を見つめて小首を傾げる。

「あの荷馬車がどうかしたのかい？」

リドが気付いて問うと、少女は不可解そうな顔をした。

「荷馬車なのですか？」

何がそんなに気になるのかと流衣もそつちを見た。子供が一人くらいなら座れば入れそうな大きな木箱だ。紐でしつかり固定されている。

荷馬車は十字路に差し掛かった。と、そこでいきなり紐の一本が切れ、石畳の段差で荷馬車が揺れた拍子に、一つの木箱が二台から転がり落ちた。

ガシャツと音がして木箱の蓋が外れる。

通行人達は音に驚いてそちらを見、ふいに箱の中を見た婦人が悲鳴を上げた。

「キヤアアアア！」

その悲鳴につられて誰もが箱を見、また悲鳴が上がる。

「きゃあああ！ 魔物だわ！」

「竜だ！ 竜の子だ！」

「何故竜の子供がここに！ 約定違反だ！」

荷馬車を御していた男は慌てて荷馬車を止め、あたふたと箱の方に駆けつける。

そこへ市場の商人の数人が男を問い詰める。

「おいお前、一体これはなんだ！ 竜の子供を町に連れ込むなんて約定違反だぞ！」

「いつ、いやあ、ワシも存じませんで。依頼主からは、狩猟犬と聞かされておったでやんす。これは一体……っ」

荷馬車の主の男は箱の中を見て青くなり、商人に詰め寄られて青

くなりど、どんだん血の気が引いていく。

ざわつく通りに、ピーツと笛の鳴る音が響き渡った。

誰かが通報したらしく、王国警備隊が三人、駆けつけてくるころだった。

「一体何の騒ぎだ！ 道を明ける！」

一番年嵩に見える、茶色い髪と口髭をした中年の男が人の波を掻き分けてやって来る。部下は二十代くらいの若い男二人で、薄茶の髪と黒髪をしていた。三人とも、王国警備隊の青色の制服を身に纏い、頭には同色の帽子を乗せ、腰には警棒と長剣を携帯している。

「……これは！」

事態を確認するや、中年の男の顔色が変わった。

「竜の子を町に連れ込むなど貴様、王国内商業法違反だぞ。全く、門番は何してる！ ロウ、今すぐ門番を連れて来い！ 交代の者も手配しておけ！」

「はっ！」

若い者のうち、薄茶の髪の隊員が敬礼してから北門へと走っていく。

「どういふことが事情を聞く前に、まずこいつをどうにかせねば」
中年の男は忌々しげに箱を見やり、ふと、竜の子を見て目を丸くする。

「なっ、こいつは、フェアラルカ妖精竜じゃないか！ 貴様、何ていうことをしてくれたんだ！」

「ぐうっ、すみませんすみません！ ワシも知らなかったんでやんす！」

激昂した中年の隊員が、荷馬車の主の襟を引っつかむ。荷馬車の主の男は苦しげにうめきながら、ますます顔を青くして謝る。

竜の子がクルルルアー！ と天に向かって大きな声で鳴いた。何度も何度も、誰かを呼ぶように鳴く。

周りの通行人達はそれを目にして顔色を悪くし、我先にと逃げ始めた。

「な……何？ フェアラルカって……？」
門の方に向かって走り出した町の人々を避けながら、流衣は困惑してそれを見る。

「妖精みたいな羽の生えた竜だよ。薄緑をしてて見た目が綺麗だから、愛玩^{あいがん}として飼ってる奴も中にはいる。一時期乱獲^{らんかく}されて、今じや随分数が減ってるやつだ」

リドが口早に説明するが、流衣はきよんとするしかない。

「それで何で皆逃げるの？」

「どの竜もそうだが、子供が産まれにくい分、子をとっても大事にする。妖精竜は基本的に大人しい方だが、唯一例外があつて……」

言いかけたところで、天から低い咆哮^{ほうこう}が轟^{とん}いた。

流衣はそれで大体察した。

「だあああ最悪だ！！」

頭を抱えるリド。

薄緑色の鱗^{うろこ}をした、透明な二対の羽が生えた妖精竜^{フェアラルカ}が一頭、低く唸^{うな}りながらぐるぐると上空を旋回する。全長三メートルほどで、竜というイメージからすれば小さい方だ。

つまり、子育ての時期は凶暴化するってことか。

流衣はリドの説明に付け足した。

子竜はクルルアクルルルと無邪気な鳴き声を上げて、親竜を呼んでいる。箱の中にいる間は声が聞こえなかったが、蓋が開いた今はよく通る声が響き渡っている。あんな小さい身体のどこからこんな声が出るのかと驚く程。

「あ、あの。もしかしてあの木箱全部、竜の子なのではないかしら？」

道端で固まっている少年達に、ふいに少女が不安げに言った。

皆、思わず少女を注目する。

「あそのものの全てに魔力の光が見えるのです。動物は魔力は持ちませんが、魔物なら持ちますし……。竜の子ではなくて、他の魔物の子かもしれませんけれど」

「どつちにしろ大問題だ」

頬を引きつらせたデイルが、苦虫を十匹くらい噛み締めたような顔をする。

「ああ。竜の子は親竜を呼ぶ。親竜が来れば町は大損害に遭う。だから竜の子供や魔物の子供を町に入れるのは禁止してる……っつーのに、あの馬鹿」

リドもまた渋面で、荷馬車の主の男を睨みつける。

「そうこう言ってる内に、最悪なパターンだ」

西の空から飛んで来る魔物を見つけ、ますます表情を強張らせるデイル。

人の大きさ程の猿に羽が生えたような魔物だ。それに気付いた親竜が、魔物に襲い掛かっていく。

「何？ どういうこと？」

目を白黒させる流衣に、リドは心底嫌そうに答える。

「理由その二。竜の血肉には膨大な魔力が宿る。よって、その子供は他の魔物に狙われやすい」

「それって、親竜だけでなく他の魔物もやって来るってこと!？」

「ひいいい、それはまずい。絶対まずい。」

「解決するには、あの子竜を町の外に出すしかあるまい」

デイルが低く唸るように言う。もう周りから、町の人々は逃げました。親竜と魔物が現れた時点で、警備隊の中年男も荷馬車の御者を引きずるようにして逃げている。

そりゃあそうだろう。竜と魔物が起こす騒動など、自然の災害と似たようなものだ。

「他の木箱はどうする？」

「あれも出さないと、まずかろう」

リドの問いに唸るデイル。

「あの子竜だけ、でしたら、わてが転移させることも、可能ですが。流石に、木箱六つは、無理です」

オルクスが口を挟み、デイルはますます唸る。

「じゃあさ、全部荷馬車で運んじやえば？」

「「それだ！」」

流衣の提案に、リドとデイルは声を揃えた。

「デイル、馬を御せるか？」

「ああ、任せてくれ」

素早く役割を分担する二人。

それに少女は目を睜る。

「まさかどうにかする気なんですか？」

「残念なことに残っているのが我々だけなのだ。するしかあるまい」

「だな、このまま放置つてのも寝覚め悪いし」

「……………あの子供が可哀相だから、僕も行くよ。君は逃げてね」

頭上で起こる自然災害並みの乱闘がこちらに降りかからないことを祈りつつ、流衣は少女にそう言った。

ドゴツ、ガツ！

竜と魔物がぶつかり、建物が崩れる音が響く。

両者が戦いに気を取られている今しかチャンスはない。

「気をつけて下さいね！」

荷馬車の方に走っていく少年達に、少女は叫ぶ。それから、どうやって帰ったものかと考える。人の姿がないので、少女の前には灰色の闇が広がるばかり。

「リリエラ様！」

困り果てながらも前に進んでいると、人混みではぐれてから以降、ずっと少女を探していた魔法使いの女が道の向こうから走ってきた。そして、少女の手を取り、避難すべく走り出した。

『坊ちゃん、また血を少し頂いて宜しいですか？』

荷馬車に向かって走っていると、オルクスがそう問いかけてきた。「いいけど、どうして？」

流衣は必死に走りながら問う。

『転移魔法を使うには、人の姿でないと使えないのです。元々わてはオウムの姿をした魔物ではありますが、年月を経て人の姿に化けられるようになりまして。人間界に来るに当たりオウムの姿を常に取っておりますが、これだと制限が多いのです』

そして、主人の血と魔力と許諾の言葉を引き換えに、制限が外れるのだとオルクスは説明した。

『それが秩序だと、ツイール力様はおっしゃっております』

常に強大な力を振るえるような状態は、確かに秩序を乱すだろう。神様だから、そうした秩序には頑迷なのだろうと流衣は思った。

「なるほど。いいよ、えーとリド、ダガー貸して！」

流衣の言葉にリドは眉を寄せるが、今は問いたただす余裕がないので鞘から引き抜いた。

「なんだ？ どうするんだ？」

「こうするの」

流衣は言つて、左手の平をざっくり切った。

リドがぎよつと目を剥く。

「んなつ！ 何やってんだ、この馬鹿！」

「……大丈夫だよ」

痛みに眉をひそめつつ、左手をオルクスの方に差し出す。

走りながらでは大雑把なことしか出来ないのだから仕方ない。

オルクスは以前と同様、ついでにむようにして血を舐めた。それと

同時に、身の内から魔力が引き抜かれる感覚がし、一つ瞬いた後には隣を黄緑色の長衣を着た青年が走っていた。

「まずは治療します。こんなに切らなくても指先程度で宜しいのに」
流衣の左手を痛ましげに見やり、魔法で傷を完治させるオルクス。
それから、宣言する。

「転移しますよ」

声とともに、一瞬後、目の前の景色ががらりと変わった。

流衣は景色の急激な変化に、立ちくらみのようなものを覚えてぐらついたが、すぐさま気を取り直した。リドとディルも頭を振ってごまかしている。

リドにダガーを返し、流衣は子竜の方に行く。

クルルル〜と楽しげに鳴いている妖精竜の子供は、クリクリとした大きな青い目で流衣を見上げた。羊くらいの大きさはある。見た目も重そうだ。

「荷馬車に移動させますね」

どう運ぶか思索していると、オルクスがひよいと身を乗り出して言い、指を鳴らした。一瞬後、子竜の姿は馬車上に移った。

「紐、ギリギリ結べそうだ」

早速、荷馬車に飛びついたリドは切れた紐を検分し、箱が一つ落ちていたので紐の長さに余裕が出来、結ぶことが出来た。

一方で、御者席におさまったディルも声を張り上げる。

「こちらもいつでも行ける！」

その声を合図に流衣とオルクスも荷馬車によじ登る。

「出して下さい！」

オルクスが指示を出し、ディルは頷いて、馬の方向を転換してから、思い切り馬の尻を蹴った。驚いた馬がいなき声を上げ、猛スピードでメインストリートを疾走し始める。

「スピード上げるぞ！」

リドは風を操り、馬の足に風を纏わせて敏捷さを上げ、荷馬車自体には風の抵抗を減らすように仕向けた。グンツとスピードが上が

る。

流衣は荷馬車から振り落とされないようにしがみつきのながら、子竜が落ちないように抱えていた。

驚くようなスピードで疾駆する荷馬車に気付き、乱闘していた親竜が気を取られる。そこを猿に羽の生えた魔物が思い切り顔を引っかき、衝撃で親竜が側の家につ込む。

土煙を上げている家を尻目に、魔物は荷馬車を追って滑空する。

「きつ、来た！」

流衣は魔物を見て、悲鳴に近い声で叫ぶ。

揺れのせいで歯が鳴っているのか震えで鳴っているのかわからないが、怖いことだけは確かだ。

人間とほぼ変わらない大きさの、異様に手足の長いニホンザルもどきが、背中に白い羽を生やして、歯を剥きだしにしているのだ。天使もびつくりな光景である。

流衣は杖の先を魔物に向ける。

「ファイアー！」

点火の術を唱えた。

が、スツとかわされた。

ちよつとシヨックを受けたが、すぐさままた唱える。それもまた避けられ、少しムキになって、連続で唱える。

それでも全部避けられた。なんだか悔しい。

「坊ちゃん、折角丁度いい的があるんです。魔法をお教えしましょう」

「……的って」

にこやかに申し出るオルクスを、流衣は少し顔を引きつらせて見やる。するとオルクスは、家庭教師みたいな雰囲気をしていた。学ぶことを逆らえないような空気というか。

とりあえず不穏な言葉は聞かなかったことにして、ハイ、と返事する流衣。

「イメージするのは雷です。わての後に続いて、詠唱して下さい」

「うん」

流衣は頷いた。

魔物は徐々に距離を詰めつつある。ここらで一度牽制けんせいしておかなくっては、こちらが危ない。

「降り来るは光」

「降り来るは光」

「槍よ貫け！ ガラント！」

「槍よ貫け！ ガラント！」

中学三年生の夏。高校受験対策で夏休みに課外授業を受けにきて、夕方、教室の窓から見た稲光。黒雲。そこから落ちる雷。轟音。

それら全てを思い浮かべて、流衣は思い切り呪文を叫んだ。

言葉と同時に。天から光が落ち、魔物を貫いた。けたたましい轟音が、遅れて周囲にこだまする。

魔物は黒焦げになり、ブスブスと黒煙を上げながら、地面に落下していった。

「相変わらずの威力だねえ」

紐を押さえ、風を操りながらもちゃんと見ていたリドが、愉快気に口端くちたんを引き上げる。

「うつつうつつ当たって良かった」

一歩間違っていたら、町に大きな損害を与えるところだ。

流衣は冷や汗をかきながら胸を撫で下ろす。

馬車はあつという間に町を抜け、門に差し掛かった。速度は緩めず、そのまま通過。驚いた門番がその場を飛びのいた。

やがて、町から離れた所で馬車を止めると、流衣達は大急ぎで荷馬車を飛び降り、森の中に走る。

追いかけてきた親竜が鼻息も荒く荷馬車の側に着地し、翼の巻き起こす強風で木々がざわざわと鳴った。

クルルルア〜ル〜。

子竜は可愛らしく鳴くと、親竜の足元にとことと駆けて行き、親竜の背中によじ登った。そして、満足げに目を細めた親竜とともに

に、空へと飛び立っていった。

それを木の影から見守り、流衣達は揃って脱力した。何とか難は去ったらしい。

「ふう。あとは残る木箱だな……」

デイルが溜め息混じりに呟き、残った三人は顔を見合わせる。でも、誰も開ける気にはなれない。

「とりあえずさ、王国警備隊呼んできて、どうにかして貰おうぜ」
町の外には出したのだ。あとはあちらでどうにかして貰うしかない。

リドの提案を否定する者は、誰もいなかった。

木箱を荷馬車ごと町の外に出した功勞により、町長から表彰されてしまった。

もうこの町は終わりだと頭を抱えていた町長としては、建物がいくつか壊れた程度で済んだので、万々歳だったらしい。町の住人達にも礼を言われたり勇気を褒められたりして、饞別にと売り物の食べ物や衣類などを押し付けられりして、話しかけられる都度どぎまぎしてしまつた程だ。

その後、木箱の中身をあらためたところ、やはり魔物の子供が入っていた。竜の子も二頭混じっていて、杖連盟から派遣された魔法使いが慌てて眠りの術をかけていた。

荷馬車を運んでいた男の話では、南方のとある町まで運ぶ予定の荷だったらしい。男自体には猟犬が入っていると告げられており、魔法が施してあるから餌の心配はいらないので、絶対に木箱を開けるなと厳重に言い含められていたようだ。そのことから、恐らく、密猟品を扱う裏市場に送られる予定だったのだらうと結論づけられた。全部が全部、乱獲されて絶滅寸前の魔物だったからだ。

門番にも話を聞くと、正式な許可証を持っていたから大丈夫だと判断したとの話だった。

こつこつ手合いが一番困るのだ、と、王国警備隊のブラツ工支部の隊長は難しい顔で唸っていた。

余談ではあるが、あの中年の警備隊員は副隊長だったようで、真っ先に逃げるとは何事かと隊長にお小言をくらっていた。確かに、と、駆けつけた部下達の視線の生ぬるいことといったら気の毒になるくらいだ。正論なので、致し方ないとは思っけれど。

ともかくとして、届け先の店を調査することになり、荷馬車の主の男は王国警備隊支部まで連行されていった。

十二章 占い 1

「占いに吉と出ていたわけが分かりました」

騒動後、あの盲目の少女が、ウイングクロスまで流衣達を訪ねてきた。リリエラと名乗った彼女は、ウイングクロスの雑談スペースのテーブルで、職員の出した茶をおいしそうに飲む。

そんな少女の後ろでは、赤茶の髪をひつつめにした二十代前半くらいの女性が静かに立っている。杖や深緑のマントといい、どう見ても魔法使いだ。緑色の目はきつめで、全体的に厳格な雰囲気をしている為か、もっと年上かもしれないと思ったりもした。こちらはエレノアという名前らしい。

リリエラはブラッエの町の神殿ではお偉いさんだったようで、目が不自由なこともあり、護衛付きなんだそうだ。ウイングクロス職員が慌てた様子で茶を持ってくるくらいには、偉い人、らしい。まだ流衣と同じ年くらいなのに凄い。

流衣達三人は向かいの席に座り、なんともいえない顔で視線を交わす。

代表して、リドが口を開く。

「えーと、占って？」

リリエラはにっこりした。

「私、占いが得意です。昔からよく当たるものですから、それでこんな立場にいるんです」

“こんな立場”というのは、次期神殿長という立場である。

「私が町に出て、連れとはぐれてしまい、道端で転んでいなければあなた方はあそこにはいなかったわけで、つまるところ、そういう巡りあわせだったということですね」

「はあ……」

分かったような、分からないような。

因果論を自信たっぷりに語るリリエラを前に、曖昧な態度で笑う流衣。あまり占いは信じていない方なのだ。

あんな胡散臭いものを、クラスメイトの女子達が雑誌を見ながらきやあきやあ騒いでいたのが謎だ。ついでに、流衣の母親も占い信奉者で、毎朝ニュース番組の占いを見て一喜一憂している。血液型占いや星座占いなど、全員に当てはまるとは思えないのだが……。そう思っただけでも、睨まれるのが怖いので口に出したことは一度もない。

「それで、ええと、……どうしてここに？」

一番聞きたかったことを流衣は口にした。

「はい。あまりに面白そうな方達なので、占ってみたくて。特に、あなた」

可愛らしく小首を傾げて、リリエラはニコツと笑う。

弱気な性格が災いして、あまり女子と話したことがない流衣だ。少し顔を赤らめた。リリエラは薄いピンク色の髪なんていう不思議な色合いといい、神秘的な少女である。流衣のいた世界では、地毛でこんな子は絶対ないと断言出来る。

同年代くらいのリリエラと流衣を見比べて、リドとディルとオルクスとエレノアが、流衣が小ネズミならリリエラは子犬かなーなどと思い、ちよつと癒されていたのには勿論流衣は気付いていない。リリエラもだ。

「人間相手では、占う対象が目前にいないと占えないのです。もしくはその方の持ち物や関連物でも大丈夫ですけど」

だからここに来た方が手っ取り早かったのだ、と、リリエラは説明した。

「それで、占ってみても宜しいですか？ お三方」

特に断る理由もないので、三人は頷いた。

「ではまず、魔法騎士さんから」

「うむ、願います」

デイルが頷くと、リリエラは鞆から袋を取り出して、中身をテーブルにばらまいた。

魔晶石がコロコロと転がり、その形を見る。

「……見た目と内面のギャップ。己の道突き進む性。まあ、水難の気が出ておりますわ、もしかしてカナツチかしら？」

その場の全員の視線が、デイルに集中する。デイルは顔を赤くし、横を向く。

「カナツチで悪かったな！」

誰も何も言っていないのに、デイルは憤然と言った。

逆に哀れさを誘う。

リリエラは軽く咳払いをしてから、続ける。

「それから、少し女難も出ておりますわね。騙されないようにお気を付けて。未来のことですと、近い内に親しい者と再会するようです。女難はここにかかるのかしら？」

少し首を傾げるリリエラ。

それで大体デイルは悟った。つまり再会するのは師匠なんだろうと。知人で女難をもたらすような女の該当者は師匠のリリエノール一人しか見当たらない。いや、もしかしたらもう一人あの人かもしれないが……。

該当者を二人思い浮かべ、まあどちらにせよ、会うのならば被害は避けられないと腹を括る。

「そうか。気をつける」

デイルは頷いて、笑いをこらえているリドを軽くねめつける。

次はリドの番だとリリエラが言うと、笑いやんで肩を竦めた。

「俺、占いなんて信じてないんだけどな」

「信じられずとも結構です。私の自己満足ですから」

「……そうかい」

笑顔で言い切られれば、そう返すしかない。

リリエラは魔晶石をもう一度袋に戻し、またテーブルにばらまいた。

「纏う風。自由な気質。全ての物から自由であり、それ故、ええと、『良き縁』？ ああ、その気質さの為、長く続く人間関係を築きにくいようですね。友人は大切になさって」

「言われなくてもそうするさ」

あつさり答えるリド。

くすりと微笑み、リリエラは続ける。

「まあ、これはとても素晴らしいです。バランスの取れた方の方のようですね。どの職についても上手くやれる素質があると出ています。

未来のことは、近い将来、失くされた物を取り戻されるようですよ」「失くした物を？」

リドは軽く目を瞠る。

リドには故郷や家族の記憶がない。そのことだったら良いと期待が胸に浮かぶ。

「はい。ええと、良き方角は北西と出ておりますわ」

「そうかい。そりゃあ都合が良い。目指している方向そのままだ」「相好を崩し、緩く笑うリド。ますます旅が楽しみになってきた。

「最後に、ルイ君、あなたです」

「はっはいっ」

流衣はベンチの上でしゃきんと居住まいを正した。

リリエラは占うと、難しい表情で魔晶石を見つめた。

「……異なる、『世界』？ 来訪者？ 迷子……。輝く光の者と……同じ、国？」

目を瞬くリリエラ。

「あのう、これって一体？ あなた、勇者様と関係がおりなのですか？」

私の占い、外れかしらと首をひねるリリエラ。

「え、いや、あの……、えっと。言っつていいのかな……？」

リドに口止めされていたこともあるし、何より頭がおかしいんじゃないかと言われることに抵抗を感じる。

冷や汗が浮かぶのを背中に覚えながら、おろおろする。

「あの、馬鹿にしない？」

「しません」

恐る恐る尋ねる流衣に、リリエラはきっぱりと言った。
それで流衣は安心し、事情を語った。

聞き終わったリリエラとデイルとエレノアは、揃って表情を驚愕に染めた。

「おまけで、ついてきたと……？　そこはかとなく哀れだな」

あまりにも不憫に思ったらしい。デイルは目頭を押さえて天井を仰ぐ。

「そこはかどころか、哀れすぎます……」

エレノアまで、口元を手で覆ってうつむいてしまふ。若干、涙ぐんでさえいる。

「……あの、居たたまれなくなるので、そういう反応はやめて貰えます？」

個人的に嬉しくなかったので、流衣は疲れ気味に頼む。

リリエラも複雑そうに両手の平を組んでいたが、あまり流衣が落ち込んでいないようだを見ると、口を開く。

「そうだったのですね、驚きました。まあ勇者様が召喚されるのです、こういうこともありますよ。では続きを見ましよう」

同情は何の解決にもならない。

リリエラはさっぱり言うのと、再び魔晶石に目を落とす。

「ええと、気が弱くはありますが、優しい気質な方の方ですよ。」

あら、あなたも女難の気が出てますよ？　デイルさんより強いです。

ええと、紅の王、杖の……宝？　うーん、私にはこれが誰なのか

分かりません。ただ、言えるのは、どちらも運命を強く左右するようです。女難はこの二人だけではないようですね、頑張ってください
い

「うっ、何それ。僕が女難って、ありえない気がするんだけどなあ
……」

残念ながら自分は美形でも格好良くもない。地味なのはよく理

解している。

「僕の兄さんならともかく、僕？」

信じられない。

流衣の兄なら、身内の鬚眉目ひいきめを除いても十分格好良いと思えるから、疑う余地もないのだが。ただし兄の場合、その辺の女子より家事が出来るので、付き合ってもそれが原因ですぐに振られていたみたいであるが。

「はははは、ルイが女難！ そりゃ、多分、女が原因で何か厄介ごとに巻き込まれるってことだな！」

「……笑っているがリド、共に行動するのなら、君も巻き込まれるはずだぞ」

「げっ、まじかよ」

大笑いしていたリドはデイルの突っ込みですぐに笑い止んだ。

リリエラはそれを微笑ましく見てから、続ける。

「未来のことは……」

ふっつと表情を曇らせるリリエラ。

「あなたの求める道は、とても儂いものようです。今はまだ方法はありませんが、何かが邪魔すれば、潰えてしまうでしょう。良き方法については、そのまま進め、とあります。ただし、ええと、『宝』、『道』、『他のもの』、迷うなかれ、あと『後悔』とありますから……。道の他にも宝はある、だから後悔しないように選択に迷うな、ということのようです」

難しい顔で意味を解釈したリリエラは、そう言って顔を上げた。

流衣は先行きに不安を覚えたが、所詮占いだと言いついて聞かせることでそれを払拭する。

「……ありがとう、リリエラさん」

一つ頷いて、流衣は微笑んで礼を述べる。

すると、リリエラもまた嬉しそうに、可憐な笑みを浮かべてくれた。

占いをして満足したりリエラは、またこの町に来た時は訪ねてくるようにと約束を取り付けると、エレノアとともに帰っていった。リエラの去っていった出口を見つめ、デイルが腕を組んで、この世の謎を目にしたといわんばかりの態度で唸る。

「むう。同じリエラでああも違うのか……。世界とは不思議だ」
「お前それ失礼すぎるだろ。まあ俺もそう思うけど？」

リドは一応たしな嗜めつつ、微妙に賛同する。

リエノーラが怒った時のことを知らない流衣は、首を傾げた。

「何が？ リリエノーラさんも綺麗な人じゃない」

「……見た目だけならな」

フツと遠い目をするデイル。

流衣はまた首を傾げる。

「ねえ、占いでこのまま進めって言われたことだし、このまま進むけど良いよね？」

流衣はそう言いながら、知識のメモ帳を取り出して、世界地図を出してもらう。

それにデイルは驚いたが、簡単に説明したら納得し、それからまた不憫そうにあらぬ方に顔を向けた。

「……ちよっとしつこいぞ。」

流衣は少しむかつとしたものの、無視してメモ帳に目を向ける。

「早くてかつ安全に行こうと思ったら、王都を目指した方が良さそうだな」

横から地図を覗いていたリドは、少し考えてそう言った。

地図によると、今流衣達がいるブラツエの町は、東部一帯を治めているレヤード侯爵領の南の方にある町であり、領内で唯一、東西南北の道が重なる町だ。

「このまま街道を西に進むと、シャノン公爵領に入る。六大神殿の一つ、火の神殿ヒノックがあるから、そこを通った方が安全だろう」
デイルが訳知り顔で言った。

その神殿から北西に進んでいくと王領に入り、もうしばらく進むと王都があるようだ。

リドとデイルの言葉に、流衣はこくこくと頷く。どうしたら安全かなど、この国に詳しくない流衣には分かりっこないのだ。

「じゃあ、ひとまず今日は必要な物を揃えて、明日にはここを出ようよ。善は急げっていうしね」

にこつと笑って言った流衣に、旅の仲間二人も笑って頷いた。

日中は買物や、竜の子騒動の為に売れなかったキバウサギの毛皮や、ブラツエに来るまでに拾った天然ものの魔晶石を売りに行き、魔法道具屋で魔晶石を作ったりと路銀を稼いだりで市場に入り浸り、夕方には宿舎に戻って部屋でごろごろしていた。

「うーん、初歩かあー」

ふと思いつて書店に入り、初心者向けの魔法の教本を一冊買ってみた。デイルのオススメのものを選んだ。それ程分厚くなく、手頃な大きさだ。

本を開いて、だらしなくベッドに寝転がって、ごーろごーろと傾いたりする。

しかしここで練習するわけにもいかないの、何となく読んで基礎を固めてみているだけだ。

魔法には、火・水・地・風・光・闇が基本属性として存在する。雷や木や植物、それから氷は基本属性を変化させた特殊属性らしい。ちなみに、今日使った魔法は「落雷の術」という、光属性を雷に変化させる特殊魔法の初歩、らしい。

他にも、召喚魔法と転移魔法があるが、また別の分類になっているんだそうだ。

「それで、闇が、えーと、呪術とか魔物を操ったりとかそういうの……と！」

ひょいと起き上がる。

「んーむむむ。魔法かあ……」

溜め息混じりに自分の手の平を見下ろす。

正直、あまり魔法を使いたくない。自分が使つとんでもない威力になるのだ。それにより引き起こされる害を考えたら、自然と萎

縮してしまっ。

「はー、専門書じゃなくて小説を読みたいなあ。こっちにもきつと面白い本あるよね」

そういえば、ウィングクロスに登録していると、ウィングクロス
の蔵書の閲覧が可能になるんだったなあとぼんやり考える。

流衣が泊まることになった、今日の朝移動させられた三人部屋は
ベッドが三つ並び、他にはクローゼットとテーブルが置かれた簡素
な部屋だ。

ベッドでごろごろしている流衣と対照的に、リドとデイルは何や
らお喋りしながら、自分の得物の手入れをしている。

リドはオルクスとは相性が悪いようだが、デイルとは良い方らし
い。ついでにオルクスもデイルとは相性が良いようで、たまに流衣
の元を離れてデイルの頭にとまったりもしている。大雑把な性格の
デイルはあまり気にしていない。それどころかそのままあれこれ話
しかけたりして楽しげだ。

流衣も、ちょっと暑苦しいなあと思うくらいで、デイルのことは
割合気に入っている。何というか、親しみをもち易い感じだ。兄貴
分的な友達に思えるリドと違い、親しみを持てる先輩といった違い
があるけれども。

流衣はなにげなく窓から外を見て、そこでぎょつとした。

外ではあるが、窓枠に目玉の使い魔がとまっていて、部屋の中を
じーっと見ている。リド達の方を見ていたが、やがて流衣の方を見
た。目が合う。

ぐらっ、どちゃっ。

驚いたらしい。いきなり傾いた目玉の使い魔がそのまま地面に落
つこちた。

ここが一階で良かったねえと生温かい気持ちで流衣は思う。

(もしかして、お腹空いてるのかなあ)

監視してはいるのだろうが、あんまりじーっと見てくるので、そ
んな気がしてくる。

ベッドからぴよんと飛び降りると、昨日作ったドングリクッキーの残りを掴み、窓の方に戻る。

よろよると窓枠に戻った使い魔の前で窓を開けた。またもやひっくり返りかける使い魔に少し首を傾げる。

「君、そんなに中見て、お腹空いたの？ 食べる？」

クッキーを一枚取って、目玉の使い魔の前に差し出す。

金色の目玉がぎよろりと回る。

なんか、よくよく見ていると可愛いような気がしてくる不思議な使い魔だ。たまに通りを横切る黒いゴーレム ミニゲスみたいに、ぶさ可愛いのかもれない。

目玉の使い魔は、クッキーを珍しげにじろじろ見る。コウモリのような黒い体躯に、ぽつんとついた金色の目玉がぎよろぎよろと動く。

「これ、僕がドングリで作ったんだよ。あ、もしかして、口がない？」

目玉の使い魔はじっと流衣を見上げる。

流衣もじっと見下ろす。

口がないのかと結論しかけたところで、いきなりグバツと目の下目蓋の辺りに横一文字に亀裂が入った。

びっくりして思わずのけぞった流衣の前で、三日月型の口が開く。サメの歯みたいな三角の小さな歯がびっしりと並んでいて、驚くことに口内は紫色をしていた。

そして、クッキーごと流衣の左手をバクツと噛んだ。

「！！？」

流衣は思わず手を凝視し、すぐに痛みで悲鳴を上げる。

「いったー！ 痛い！ ちよっ、僕は餌じゃないって！ 食べ物は何クッキーだけだよ！」

思い切り引つ張り、手を抜いたら無くなってたらどうしよう！

と顔を青ざめたところで、声を聞きつけたオルクスが目玉の使い魔に体当たりを食らわせた。

パツと口が開き、手を取り返す流衣。

「ざまを見る、です！」

脳震盪を起こしたのかよろよろしてまたべちゃっと地面に落つこちた目玉の使い魔に、鼻息荒くオルクスが言う。

幸いにして左手は無事だが、噛まれた部分からダラダラと流血していた。それを目にしてちよつとくらつとくる流衣。

「お前、何やったわけ？」

適当に持ってきたタオルを流衣の左手に押し当て、止血しながらリドが眉を寄せる。

「いや、ちよつとお腹空いてるかなって思って、クッキーをあげてみただけなんだけど……」

再度、ふらふらと窓枠に戻ってきた目玉の使い魔を見つつ、そう答える。

使い魔はじつと流衣の手にしたドングリクツキー入りの袋を見つめていたが、いきなり飛び立って袋だけ口でパクツと掠め取った。そして、袋ごと、ゴクツと飲み込む。

そして、啞然としている三人の前でそのまま窓から飛び去っていった。

「……どうやらクツキーを気に入ったらしいな」

窓枠に駆け寄ったディルは、窓から使い魔が去るのを見送りながら呟く。

「袋ごと食べて大丈夫なのかな……」

ぽかんと窓を見る流衣。

「てめえは自分の怪我の心配をしる」

腹に据えかねたらしく、リドから軽く拳骨けんこつを食くらった。

「あだっ！」

頭を手で押さえる流衣。

軽くとはいえ、普通に痛い。

が、それ以上に半眼を向けてくるリドの視線が痛い。

「……俺、お前の保護者じゃないんだけど」

「分かってるよ。リドは友達だってちゃんと分かってる」
そう弁解しながら、じりじりと距離を取る。

あああ、何か空気が微妙に重いというか、暗雲垂れ込めつつあるのは気のせい？

説教モードの兄を思い出して、流衣はひくりと頬を引きつらせる。
「ルイはあれだな、無用心すぎるな。もう少し注意を払わねば、この世界では生き残れぬぞ。もしあの魔物が毒を持っていたら、死んでいるところだ」

大真面目にデイルが言い切った。

「どっ、毒!？」

そついつのもいるのか？ 流衣は目を皿のように丸くし、バツと左手を見る。血が出ているだけで、変色しているわけではないのにホツとする。

「……えーと、手を洗ってくるよ。犬に手を噛まれたと思えば別に平気だって。ああ、そついえば前はよく犬に噛まれてたなあ。可愛いから撫でたら怒るんだもん、酷いよねえ」

流衣はそつ言いながら、小さい頃のことをあれこれ思い出した。
思えば、猫にもよく引つかかれていた。あれつて地味に痛いんだよね。しかもちゃんと消毒しないと危ないし……。

そして、そそくさと部屋から逃げ出した。

オルクスが飛んできて肩にとまり、ちゃんと水で洗い流した後、
治癒ちゆしてくれた。

「ちっ、逃げたか」

流衣が部屋を出て行った後、リドは凶悪な顔で舌打ちした。

「つたく、あの野郎、しょつちゆういらねえ怪我こしらえやがつて、
気を付けるつつてんのに聞きやしねえ」

といつても、別に魔物に襲われたり、盗賊に斬りかかられたりしているわけではない。普段から何かにつまづいては転び、少しよろ

めいては壁に腕をぶつけとそんな調子である。気が付くと青アザが増えていたりするようだ。

あいつは何か？ 五歳のガキか？

あげくの果てには、無視しようと話していた使い魔に餌付けまでする始末。

かなり将来的に不安である。

「ははは！ 本当に面白いな。普通、自分を監視している使い魔に餌を与えるか？ くくくく」

デイルは腹を抱えて笑っている。

「笑うところか？ 先行き不安すぎだろ」

リドがじろつと睨むと、デイルは笑いすぎて目尻に浮かんだ涙を拭いながら、その視線をはねのける。

「笑うところだろう。大体、人様の使い魔に餌付けする発想など、普通の魔法使いでは思いつかんよ。くくっ」

「そんなもんかあ？」

魔法使いではないリドには今一ピンとこない。

「ただの気弱な子供かと思えば、思いもよらないことも仕出かす。

これは、相当な大物になるんじゃないか？」

「けっ、それまで生き残れてりゃあな」

ぶすつとむくれるリド。

本格的にふて腐れたのを見て、デイルは意外そうに眉を跳ね上げる。

「なんだ、私はてつきり、渋タルイについて来ているような印象だったが、もしかして本気で心配しているのか？」

「渋々でついてくるかよ。俺はあいつがどうするのか興味あったんでね。それに、親友だしな」

リドはどっかりとベッドに腰を下ろし、足を組んで頬杖をつく。

「あいつんどこじゃ多分ただの挨拶なんだろうが、『親友の交^かわし』をしたんだぜ。だから親友だ」

これにはデイルも驚いた。

「なに、『親友の交わり』？　なんだ、その言い方だと、もしやルイはこの国での握手の意味を知らんのか？」

ふんと鼻を鳴らすリド。

「言っていないからな。右手なら『親友』、左手なら『婚約申し込み』、両手なら『結婚申し込み』だ」

「だが、握手し返さなければ成立せんだろう？」

「うるせえな、気を許せる友達なんていた試しなかったんだよ！」

つまりは初めて右手を差し出されて、嬉しかったわけである。

この国では、「親友の交わり」をするのは、友人として心から気を許している証明なのだ。そこには相手を絶対に裏切らない、という意味合いが含まれている。

デイルはにやっと笑った。

「リリエラ殿の占い、当たっているではないか」

人間関係が長続きしない。リリエラはそう言っていた。

「違うね。今まで、そんな奴に会ったことすらない。気のおける仲間なんて論外だ。俺はあいつらの仲間であることを否定してきた」

リドの表情が暗くなり、心なしか殺気が混じる。

すると、リドの周囲で風が渦を起こして、ビュウビュウと鳴った。ハツと我に返るリド。

「ああ、大丈夫だ。悪いな」

虚空に向かってリドが話しかけると、風はすっと収まった。

「……何があったか聞かんが、複雑そうだ。しかし本当によく風の精霊に好かれてるのだな。精霊の子には幾度か会ったことがあるが、こんな風に勝手に出てくるのは初めて見たぞ」

「他の奴がどうだかなんて知らねえ。物心ついた時にはこうだった。俺には精霊がついてるからかな、本当の意味で孤独を知らない。それはついてるかな」

リドはそう言って、簡単に自分の事情を話した。

デイルはたちまち難しそうな顔になる。

「むう、君達二人はなかなか複雑な事情を持っているのだな。残念

ながら、私には単純明快な過去しかない」

「へっ、そんな面倒な事情抱えてる奴がごろごろしててたまるかよ。でもな、どこのどいつも何かしら事情を持つてるもんさ。ディルが単純だと思っても、周りがそう思うとは限らねえ。普通の奴なんてのも、この世には存在しねえよ」

飄々と肩を竦めてみせるリド。

どこか達観した言葉ではあるが、それこそ真実だった。

「ふむ……。ところでルイ、そこに立ってないで入ってきてはどうだ？ 廊下は冷えるだろう？」

少し考えるように唸り、いい加減気になっていたのでディルは顔を扉に向けた。

扉の向こうでぎよっと息を呑む気配がし、そろそろと扉が開く。

「う、ごめん。何か入りにくい雰囲気で……」

流衣はどきまぎしながら部屋に入り、綺麗に洗ったタオルをリドに返す。

「これ、ありがとう。助かったよ」

「……………。ちなみにどこから聞いてた？」

無言でタオルを受け取ってから、リドは低い声で問う。

「たちまち拳動不審になった流衣は、わたわたと距離を取ってテーブルの椅子に座ると、そろーっと言う。」

「ええと、『親友の交わし』？ ってディルが言った辺りから……」

「ほぼ最初からじゃねえか！」

「ひええっ、すぐに洗い終わったんだから仕方ないじゃないか！」

理不尽に怒られて、流衣は首を竦めて言い返す。

「ちったあ反省したのか、て・め・え・は」

思い切り睨みつけられてしまい、流衣は身を縮める。

「ちよつと溜め息をついて、ばたつとテーブルに伏せた。」

「あー、駄目だなあ僕。ほんと。前からこうなんだ。ちよつと頑張ると裏目に出たりするし、気を付けてても失敗したりするんだよ……。背だつて低いし、地味だし、運動もそんなに出来ないし。兄さ

んが家を出た後だって約束守って頑張ってみたのに、何であんたはいつもそうなのって母さんには叱られるし……。父さんは何も言わないし」

うじうじうじうじ。

すっかり落ち込んでしまい、流衣は呟く。

口に出しながら、あまりの不甲斐なさに泣けてきた。

平穏な毎日を送れば満足だった。中学を卒業して、高校を出て自分もいつか兄のように家を出て働いて、そして年を取って死ぬのだと、なにげなく考えていた。

それで良かったのに、ちよつと靈感が強いせいで、こんな所にやっ来て。

「お、おい……。ルイ……。？」

いきなりの弱気モードに、ディルが顔を引きつらせる。こざつぱりした性格をしているディルにとって、こういう空気は苦手だまらぬものだった。まず何を言えば良いか分からない。放置しても良心がうずく。

「こんなだから、いつとも同級生には下に見られてて、だから友達って貴重だったんだ。リドは僕みたいなのに手を貸してくれるし、親友だつて言ってくれたりしてるけど……。正直、僕には勿体無いと思うよ？ 君って格好良いし、何でも出来るし……。僕は自分でも駄目駄目だつて分かってるから」

流衣は苦笑して、リドの方を見る。

「だから、僕が知らないせいで『親友の交わり』？ っていうのしちゃって、それで君が面倒だつて思ってるんなら、取り消してくれて良いよ」

僕はちよつと寂しいけど。

流衣は呟いて、肩を落とす。

自分が足手まといで駄目な奴だというのは、自分がよく分かっていた。

どれだけ頑張ってみても、現実には牙を剥く。結局は空回りして終

わり、自分が虚しさを覚えるだけ。

ここに来てからもそれなりに頑張っていたのだ。出来るだけ迷惑にならないように、気を遣って、背伸びして。

何とか上手くやれていたように思うけれど、何かと厄介事に巻き込まれてしまったりして、面倒な奴だと堪忍袋の緒が切れたとしても何ら不思議ではない。

「……ルイ、まさか俺が怒ってるの、お前が面倒だと思ってるからとかふざけた理由だと思ってるんじゃないやねえだろうか？」

低い声が地を這って流衣の元まで届く。

びくつとする流衣。

あれ？ 何故だろう、部屋の気温が二、三度ばかり下がったような気が……。

「え？ 違うの？」

てつきりそれで怒っているのだと思った。

だってさつき、保護者じゃない発言してたじゃないか。

何だか黒い霧を漂わせているようなリドの迫力に、ディルもこそこそとリドから距離を取る。

「ちよつとの不注意で死ぬ、大怪我をする、再起不能になる。俺は本意ながらそういう奴らを近くで見ってきた。お前についてく時言つたよな、野放しにしていると死ぬって。あれは本気で言ったんだ。注意力散漫すぎるんだよ、てめえは」

流衣はぶんぶんと首を振って頷いた。こ、怖い。

「俺はな、自分の身を大事にしろって言ってんだ。分かったか！」

「ハイッッ!!」

びしつと背筋を伸ばして返事した。

何という迫力。怖すぎる。出来るだけ怒らせないようにしよう……。

心臓をバクバク鳴らしながら、流衣は心の隅で決意する。

言うだけ言うと、リドは頭冷やしてくると言って、ずかずかと部屋を出て行った。

シーンと静まり返る室内。

流衣はどつと緊張が抜けてテーブルにへたりこんだ。

「うっ……怖かった」

「ああいう奴程怒らせると怖いと聞くが、まさしく真実だな」

デイルも同意し、ふと恐ろしそうに流衣を見る。

「一番怖いのは、普段大人しい奴だと聞く。まさかルイ、お前、怒ると相当怖いのか？」

「え？ さあ？ 僕、怒る前に哀しくなるから、あんまり怒ったことないんだ。だから知らない」

むかつとするくらいのはたまにあるが、それくらいだ。

「ふうむ、そういう者もいるのだな。私はどうも、怒るとつい手が出てしまうのでな。ああ、勿論女性には手は出さないぞ」

「そうなの？ デイルって落ち着いてるからあんまり喧嘩しないのかと思っただ」

流衣はテーブルから身を起こし、デイルの方を向く。

「それはここ一年半で修行して身に着けたものだ。昔は悪かった。いや、気恥ずかしい」

デイルはあははと笑い、ガリガリと後頭部を搔く。

それからふと真面目な顔になる。

「……リドはあれで心配してるんだろ。君はもう少し、自分を守る術を身につけるべきだな」

「……そうだね。僕は正直、荒事には関わりたくなかったんだけど、旅をするにはそうも言っただけならね」

「いや、そういう方向性ではなくてだな。こつ、用心するようにとだな」

上手く説明出来ないのか、困ったように頬を指で搔くデイル。

流衣は少し考える。

「リドが注意力散漫って怒ってたから、注意しろってことかな」

「そう！ そういうことだ。うむ」

流衣は緩く笑う。

こんな世界におまけで召喚されてしまい、不運だとは思ってたが、出会う人は良い人ばかりだなと思う。そればかりは感謝してもしきれない。

流衣はデイルにも右手を差し出した。

「デイル、僕はこんな感じで駄目駄目人間だけど、友達になつてくれる？」

今回は、この国での意味もちゃんと知った上で。

デイルは目を丸くして、鼻の頭を掻いて困った顔になる。

「うーむ、そういうところが恐らく注意不足ということなんだろうが……。まあ良いか、私としても嬉しい限りだ」

最後にはキリツと眉を吊り上げて口の端を引き上げ、不敵に笑う。そして、流衣と握手を交わす。

「ありがとう！」

流衣は笑顔で礼を言った。

胸がほっこり暖かい。本当に、巡りあわせとは不思議なものだ。

* * *

ラーザイナ・フィールドのどこかにある、イビルスアイ悪魔の瞳 のアジト。自室で読書をしていた教祖は、ん？ と顔を上げた。

右手を体の前に広げると、そこに転移されてきた袋がポトンと落ち、もう一つ、クツキーが一つ床に転がった。

「……………クツキー？」

意図が分からず、集中してクロロの意識に同調し、事情を掴む。

「おかしな子供ですね、本当に」
使い魔に餌を与えるとは。

だがこれで確実にクロロが監視しているのがばれていると分かった。

まあこればかりは仕方が無い。

クロロの間抜けっぷりは教祖の持つ使い魔中、随一だ。

ところでクロロが飲み込んだ物が主人である教祖の元に届いたのは、クロロの能力である。飲み込んだ物を転移させる力があるのだ。偵察にはもってこいな魔物ではある。間抜けでさえなければ。

「ふむ、おいしい」

クッキーを一つ摘み、教祖は小さく頷いた。

しかも作り手である少年が無意識に魔力を込めたようで、食べる
と自分の魔力が回復するのが分かった。

「ますます稀有な能力ですねえ」

教祖は感心して呟く。

こうしてのんびりとした空気のまま、ゆっくりと時は流れていった。

幕間 2

何でこんなことになったんだ？

ラーザイナ・フィールドに召喚されてしまった「勇者」こと、川か瀬達也わたつやは、傍目はためからは無表情ながら内心で首を傾げまくっていた。

高校で少しばかり友達と喧嘩して、それで最近、学校に行きづらく、ああどこか遠い所に行きたいなあなどと思ったのがいけなかったのか。それとも、学年一の美人と噂される女生徒を振った天罰か？
この世界に来て、もうそろそろ二週間になる。

カザニフとかいう大神殿に呼び出され、勇者だから魔王倒してと頼まれ、それしないと帰さぬからとふざけた笑顔で、愛と慈悲の女神とかぬかすツィールカという神様に退路を絶たれ、仕方ないので旅立ったわけだが。

「誰だ、聖具せいぐを盗んだ奴！」

そう、魔王を倒す以前に、魔王を倒すのに必要不可欠な道具が盗まれているので、それを探さなくてはいけなくなったのだ。

とつとつケリをつけて帰りたいのに。

さつき戦闘をしかけてきた 悪魔イビルズアイの瞳 とかいう魔王信仰の信者であるらしいカラス族の少年、名前は確かサイモンと名乗っていたそいつが、怪訝な顔をして「知るか」と言っていたので、つまり魔王信仰の方とは関連がないことが分かった。

寝耳に水みたいな反応だったから、ほぼ確実だ。

ああ、最悪だ。

達也は手にしていたサーベルの剣先をひゅんと回し、鞘にすちゃりと納める。

フェンシング部に所属しているので、少々剣技の心得があったか

らまだ良い。といつても、あれはスポーツであつて実践向きではないのだ。そこはそれ、魔法と機転を利用して戦えばどうとでもなる。ざあああと風が吹きぬけて草の海にざわめきが広がる。だいぶ風が冷たくなつてきた。

「お怪我はありませんか？ タツヤ様」

少し離れた場所から、紺色の旅装束を身に纏つた青年が駆けてくる。二十五歳だという青年の名はゼノ・リユージェル。案内役と護衛役を兼ねてついできた、カザニフでもかなりの腕を持つ神官だ。くすんだ金髪とライトグリーンの目をした彼は、穏やかな空気を纏つた綺麗な顔立ちの男だが、薄い色合いの目が災いして視力が弱いらしく、目の保護の為に黒いサングラスをかけている。そのせいで、どこか胡散臭い雰囲気をしている。それに、亜人のトビウオ族らしく、耳が羽のようにも見えるヒレの形だ。

当初は女性の神官がついてくる予定だったが、達也が頼み倒して男性の神官にかえてもらった。それで急遽選よこばれた人だ。

実を言うと、達也は小さい頃に母親が家を出て行ったトラウマのせいで、軽い女性嫌悪が入っており、学校生活程度ならともかく、四六時中一緒に行動するというのがどうしても我慢ならなかつたわけである。

「怪我あるんなら、リンクが治すよ〜」

ゼノの後ろから、ニメートルはありそうな大きな狼に乗つた少女が、気の抜けるような声で言った。長い銀髪をツインテールにした、青灰色せいがいしよくの目をした少女だ。白いエプロンドレスっぽい神官服を着ている。上着がボレロなので、かろうじて神官服に見える感じだ。手にはジャラジャラと金の腕輪をつけていて、ぺたんとした白い靴を履いている。

名前はリンクスタ・オーグ・エスニルカ。達也は少女自身に頼まれて、リンクと呼んでいる。

彼女はにこにこというよりほわほわしており、天然というよりは不思議ちゃんな女の子だ。

まだ十二歳だというのにカザニフの最高位巫女である託宣たくせんの巫女みこをしている、実は物凄いお偉いさんらしいが、リンクの持つ空気が全てを粉々にしている。

「怪我はないから平気だ」

達也の返事に、リンクはにっこりした。

これできてリンクは神官としても魔法使いとしてもそれなりの使い手で、リンクの乗っている狼はリンクの使い魔だったりする。

神官と魔法使いの違いは、神官は神殿に所属していることが前提で、魔法使いは魔法を使えば魔法使いだ。神官の使う術は聖法せいほうという特殊なもので、魔力と知識があれば使える魔法と違って、才能と修練しゅうれんが必要になってくる。

小さいのに偉いなあと前に達也が褒めたら、リンク曰く、才能があったから普通に使えたとのことで、褒めたのがちよつと虚しくなつた。

「悪魔の瞳 が聖具を知らぬとなると、一体どこにあるのだろうか」

リンクの使い魔が不思議そうに呟いた。

使い魔はルーデルという名のオスの狼型の魔物で、人間好きだったので必死に人間語を練習し、悠長に話せるようになったという面白い使い魔だ。ラーザイナ・フィールドで一番よく使われている一般言語の他にも、巫人が多く住むシルヴェラント国やセナエ国の言語も練習中なんだそうだ。

健気で努力家なルーデルは、その辺の人間よりよっぽど漢らしい。ちなみに、動物型の使い魔ではそこそ高に位にいるらしい。それを呼び出すリンクも凄い。

「こんな時こそ託宣の出番だろう！ リンク、ないのか託宣は！」
達也が詰め寄ると、リンクは困った顔になる。

「むうつ、そんなこと言われても、リンク困るもん。神様が教えてくれないのに、分かるわけないもん」

理不尽に怒られたからか、リンクはすねたように唇を尖らせる。

「ごういつところはまだまだ子供である。

一つ年下の弟の生意気っぷりを思い出して、達也は溜め息をつく。無駄に喧嘩売られないだけマシか。

と、そこでいきなりリンクの体がふらつと傾ぎ、ルーデルの背中に倒れこんだ。

「なっ、リンク？」

ぎよつとしたのも束の間、リンクはすつと顔を上げた。

それを見て、背筋が粟立った。

さっきまでのリンクと表情が変わっており、キリツとした顔になっている。これは、どうやら“来た”らしい。

「……ツイールカさんか？」

リンクへとご光臨あそばされた、愛と慈悲の女神ツイールカはうふふと微笑んだ。

「すぐに分かるとは、なかなかの奴よの。流石、わらわが選んだだけはある」

たまにこうして光臨する女神殿は、憎らしくもそう言った。

達也には大迷惑この上ないのだが、女神は嬉しそうだ。

「こないだも光臨してたじゃないか。たまにレシアンテさんやソールプさんも光臨してくるし、あんたらもしかして暇なのか？」

運命と生命せいめいの女神レシアンテ、知と戦の神ソールプと、この目の前の女神の三柱がこの世界を守っている神様、らしい。あんまり何度も光臨してくるので、達也からすればちつともありがたみのない神達である。

女神はむすつとして、そっぱを向く。

「あやつらのような暇つぶしと一緒にするでないわ。わらわは毎回、用件があつてきておる」

「へえ、そうだったのか」

そういえばそうだったような気もした。

あんまり回数が多いから、忘れていたが。

「そうなのじゃ。今回はの、伏せておくか悩んでおったことを教え

「きたのじゃ」

「もしかして聖具のことか？」

期待して問うと、首を振られた。

「否。あれはわらわにも行方が分からぬ。巧妙に隠されておるようだから。それではなく、実はこの世界に、お主以外にももう一人、お主と同じ所から来ている者がおるのじゃ」

達也は目を点にした。

一拍おいて、声を張り上げる。

「はあああ！？ 勇者がもう一人いるってことか？ だったら俺はいらねいだろっ、帰せよ地球に！」

女神はフンと鼻で笑い飛ばす。

「違っわ。勇者はお主だけじゃ。其奴はたまたま靈感があつての、お主を召喚した時、自分からついてきてしもうたおまけなのじゃ。用無しもいとこじゃてな、少々施しほどこを与えて放り出しておいた」

達也は見も知らぬ同胞に心から同情した。思わずぼそりと呟く。

「えげつない神様だぜ……」

「何か言ったか？」

女神はじろつと達也をねめつける。

達也は「何にも」とごまかした。

「で、何でそいつのことを今になって教えるんだ？」

「それなんだがのう。案外、あやつ、トラブルメーカーの素質そしつがあつたようで、厄介ごとに巻き込まれては解決しておるようじゃ。弱虫で貧相な子供だと思つておつたが、少々見当違いであつたようじゃの。盗賊団を追い払つたり、闇物の流通やみものを止めようとかけあつたりの。悪魔の瞳にまで目をつけられたみたいじゃな」

どんな奴なんだそれは、と、微妙な顔になる達也だが、ふと気付く。

「子供ということは、俺より年下か？」

「お主も子供じゃがの。まあ二つ年下じゃな」

そう聞くと、興味を覚える。

「へえ、名前は何ていうんだ？」

「オリベ・ルイといったかの。ちなみに男じゃぞ。だがしかし、そのまま放り出したらすぐ死にそうだったからのう、わらわ付きの使い魔を一匹、案内役にくれてやったわ」

クスクスと笑う女神。

「……オリベ？」

達也はふと、眉を寄せた。

中学生の時、一年だけ家庭教師に来ていた専門学校生を思い出した。彼もオリベという名字だった。パティシエを目指していた彼は、生活費の一部にするためにアルバイトをしていたのだ。

弟がいると言っていて、確かその弟の名がルイだったような気がする。

達也より二つ年下だと言っていたから興味を覚え、携帯にあった元旦に撮ったという家族写真を見せてもらったことがある。

そこまで思い出して、達也は自分の考えを笑い飛ばした。

ははは、まさかな。そんな偶然あるわけないか。

「もしかしたら会うかもしれないからの、教えに来たわけじゃ」

達也は女神を半眼で見る。

「それはお告げというやつか？ それとも運命を教えたのか？」

女神はクスリと微笑む。それはもう心底楽しそうに。

「さてのう。可能性を提示しただけじゃ。わらわには未来は読めぬ。それはレシアンテの領域じゃ、気になるのなら、次にレシアンテが光臨した時にでも聞くと良い」

そこまで言うのと、ぱたつとリンクの体が倒れた。

ハッと我に返ったリンクは、きよろきよろと周囲を見回す。

「あれ？ もしかしてまたいらしてた？」

「ああ、そうだな。今回はツィールカさんだ」

疲れ気味に言う達也を、リンクは不思議そうに見つめて小首を傾げた。

幕間2（後書き）

あくまで、主人公は流衣ですので、勇者さんはあんまり出てこないかと思っています。出ても第二部からかなあ。

十三章 拾いもの 1 (前書き)

第三幕 あらすじ

デイルを仲間に加えた流衣、オルクス、リドの四人は魔法学校を目指し旅を続ける。途中、ひよんなことから行動を共にすることになった貴族の少年を、王都まで送り届けることになり……!?

十三章 拾いもの 1

暗い森の中を、一人の少年が走っていく。

手には何も明かりは持たず、無我夢中で走っていた。

立ち止まってはいけない。

立ち止まれば捕まってしまう。

殺される。

誰か。誰か。誰か！

突き出た枝が肌を裂き、あちこちに細かい傷を作っても、少年が足を止めることはない。

王都にいる家族に久しぶりに会うつもりだった。

そうして馬車に乗っていたのだ。

ヒノツクの神殿を過ぎ、リーネクラウの森に入ってしまった頃だった。

覆面をした男達の襲撃に遭い、御者や部下を殺され、少年一人のみが逃げる事が出来た。

殺された者は、親しい部下だった。

走り続けていたから、肺が痛い。しかしそれ以上に、胸が張り裂けそうに痛い。

どうして、どうして、どうして。

どうして彼らが殺されなければならず、どうして自分は狙われ、そしてどうして一人で生き延びているのだろうか。

だが少年は知っていた。

自分には生き残る義務があることを。

森を走るうち、やがて広い草原へと出た。

まるで海に投げ出されたかのように、目の前に藍色が広がる。星を散りばめたそれは、夜空だ。

今日は月がなかったが、星明りでも十分明るかった。
少年は背後から馬が迫るような恐怖に駆られ、思わず止めた足を
また動かし始めた。

何てことだろう。神殿に助けを求めるはずだったのに、追っ手か
ら逃れて走るうちに迂回してしまったのだ。

しかし今の少年に残された道は、出来るだけの力を振り絞り、逃
げることだけだった。

必死に走り続け、やがて廃墟と化した村に辿りついた。

その一つの家の瓦礫の隙間に隠れて倒れこみ、疲労のあまりその
まま眠りに落ちていった。

* * *

「えーと、水の魔法の初歩、庭に水遣りみすやする術……」

ヒノック神殿を目指して、広い草原の真ん中をはしっている街道
を歩きながら、流衣は初級魔法の教本を読んでいた。街道は舗装さ
れておらず、土が剥き出しだ。

ただでさえ転びやすいのだから読みながら歩くなと、仲間二人と
一匹に口を揃えて言われたが、歩く以外にすることがないのなら勉
強すべきだろうと思う。

というわけで、読みながら歩いている。

「庭に水遣りって、結構庶民的なんだね」

初歩どころか、初歩のまた初歩と書いてある。

本から顔を上げ、デイルの方を向く。

もう何も言う気も無いらしく、呆れた調子でデイルは言う。

「水の魔法を実用的に使おうと思えば、自然そうなってくる。農業
に水は欠かせんからな」

「じゃあこの国での農業って、魔法の応用が進んでるってこと？」

「魔法を使える者がいるところのみだがな」

へえ〜と流衣は言い、不思議に思う。

「光の魔法の応用は？」

「天候が悪い時だけ使うようだな」

「ふーん、へえ」と流衣は感心する。

「っていうことは、ビニールハウスみたいなハウス栽培もあるってことかな」

何の気なしに呟いたのだが、デイルは首を傾げた。

「はうす栽培とは？」

「うーん、何ていうのかな、室内栽培？ 僕のいた所だと、ビニールっていう透明な素材があつてね、布みたいなものんだけど、それを骨組みに付けて倉庫みたいな形にして、自然光を取り入れるけど中は暖房器具で暖めて、それで冬も栽培出来るみたいなの？」

農業に詳しいわけではないので、曖昧な説明になるが、大体合っているだろうと思う。

「ほお、面白いな。静謐の月でも栽培しようという発想は無い」

興味をひかれたらしく、ちょっと身を乗り出して聞くデイル。

「他にはそうだなあ、それこそ普通の倉庫の中で、照明を当てて植物を育てたりもしてたよ。温度調節と水の管理に気を付ければ、季節も時期も関係なく育てられるかな。多分」

これもあまり詳しくないので、曖昧だ。他にも条件があるかもしれない。

「倉庫の中で！ 確かに、嵐や害獣の被害を心配せずに育てられるな。そうか、光の魔法を応用すれば、そういうことも出来るか……」
デイルはしばらく唸っていたが、やがてポンと手を叩いた。

「なかなか価値のある意見だ。兄上にお教えするか。領民の為にものなるし……」

ぶつぶつとそんなことを呟く。

「領民？」

リドが片眉を跳ね上げる。

はっと我に返るデイル。

「あ、いや、何でもない。……私は修行中の身だ！ 家名は名乗ら

ぬ！」

「わっ分かったよ、訊かねえよ！」

カッと目を見開き、怒鳴るように言いながらデイルに間を締められ、リドも怒鳴り返す。

「が、内心では、こいつもしかして上の位の貴族なのか？ と首をひねっている。それにしても妙に庶民的な気はするが……。」

「デイル、お兄さんがいるの？」

リドと違った言葉に反応した流衣は、興味津々で問う。

家族の話だからか、デイルも相好を崩す。

「うむ。兄上が二人と、姉上が一人いるぞ。一番上の兄上が三年前に家長を継いだのだが、病弱故に二番目の兄上が補佐をしている。」

姉上は一年前、王都に居を構える貴族のもとに嫁がれた」

「っーことはお前、末っ子か？ 弟がいそうな気がしてたが」

意外だとリドは目を丸くしている。

結構、デイルは世話焼きなので、そうなのだろうと思っていたのだが……。」

「残念ながら末っ子だ。前にも言ったが三男でな、家を継ぐことも出来ぬから、こうして魔法騎士を志しているわけだ」

そう言っつて、少し心配げな顔になるデイル。

「一番上の兄上は、それはもう病弱で、吐血が趣味みたいな方でな。いつお亡くなりになるかと冷や冷やしているのだが、案外生き延びておられる。ヴァン兄上も兄上の為に進んでおられるし、私も頑張らねばな」

「吐血が趣味……。」

「なるほどそれで……。」

流衣が呆然と呟き、リドも啞然としつつ納得したように呟く。そんな兄がいれば、世話焼きにもなるだろう。

「まあ兄上達はそんな感じだな。ところでルイ、折角広い草原にいるのだ、庭に水遣りする術、試してみてもどうだ？」

「えっ、あ、そうだね」

「そんな感じ」で纏められたのにぼかんとしつつ、流衣は頷く。もう一度、本に視線を落とす。

「ジョウロで水を撒くの思い浮かべて……」

教本の言葉を呟いて、ジョウロの水を頭に思い浮かべる。杖を側の草原に向け、魔力を引き出して、

「ウォーター」

呪文を唱えた。

すると、杖の先からジョウロのような水が飛び出し、バラバラと水を撒く。

「……ジョウロというか、ホース？」

杖がホースになってしまったようで、見た目的に複雑な気分になる。

「私もその術を試した時はそんな気分だったな。結構がっかりした」

「……うん」

流衣もがっかりした。

気を取り直し、初歩の初歩から初歩に進むことにする。

「えと、初歩は、畑に水遣りする術……？　なんでそう、水遣りから離れないんだ、これ」

「さっすが初級編。下らねえ術ばっかだな」

くくくと笑うリド。

「む。そうは言うが、これが基本になるのだ、後々を考えれば真面目にしておかねばならん。それに下らなくはないぞ。実際に農家の者には歓迎されている」

堅苦しく取り成し、デイルはそれも試すように言う。

「うん、試してみるよ。えーと、広大な畑に水を撒くには、雨を降らすのが手っ取り早い。だから雨が降るのを思い浮かべ、この呪文を唱えなさい、か」

流衣はこくりと頷いて、雨が降るところを想像した。

黒雲がたちこめて、どつと降る土砂降り。夏の夕立。

「ザーダ！」

呪文を唱えると、杖の先からパツと光が空に上っていった。

「んー……？」

流衣は目の上に手をかざし、空を見つめる。

降りそうな予感がしない。

「不発か？」

リドはデイルを振り向く。

「いや、光ったからな、大丈夫なはずだが……」

そう言いながら、三人揃って空を見上げること数秒。どこからともなく黒雲が立ちこめ、晴れていた空が一気に暗くなり、そして、バケツをひっくり返したかのような雨がどーっと草原一帯に降り注いだ。

「嘘ー！」

ぎゃあと声を上げて叫ぶ流衣。

「加減しろよ！」

リドが文句を言うが、雨が激しすぎて何を言っているのかまでは誰にも聞こえない。

デイルは手振りで道の先を示し、草原の奥に集落が見えたので、そこまで走ることになった。

十三章 拾いもの 2

「はあはあ、酷い目にあつた……っ」

集落と思つたのは廃墟だつた。その一つの、屋根のある家に避難した三人はぜいぜいと肩を上下させていた。

「ご、ごめん……」

地面にへたりこみながら、流衣は二人に謝る。

雨で濡れそぼつたオルクスがブルブルと身を震わせ、水滴が飛んで眉をしかめる。

「ちよつ、オルクス。水飛ばすのやめてよ」

「今更ですよ。濡れ鼠ぬねずみなことに、変わりありません」

「そうだけどさあ」

片言に話すオルクスに、流衣は不平の声を出す。

それからふと良い事を思いつき、にこつと笑う。

「オルクス、これでやつと洗えたね！ ラッキーかも」

「全然ラッキーでは、ありません！ もう、これでは、飛べないではありません力！」

オルクスを洗おうと試みて、逃げられた流衣としては不幸中の幸いというやつだつた。

が、案の定オルクスは憤然とする。

「オルクス、もしや水浴びが嫌いなのか？ それは良くない。身綺麗きれいにしておかねば、いらぬ病やまひを拾うぞ。そうすると、君の主人に悪かるつ」

「……………そ、そうかもしれませんガ。わてはオウムですから、濡れるのにはやつぱり抵抗が……。鳥の身で濡れますと、体温調節にも問題がありますシ、何より飛べないというのが……………」

「こによこによと言ひ訳を連ねるオルクス。」

「ま、確かに体温調節って点じゃ濡れるのは困るな。焚き火でも起こせば良いんだが……」

リドは家の中を見回して、薪になりそうな物がないか探す。ついでに、家の奥に、折れた木の椅子や壊れたテーブルが転がっている。

「ルイ、責任持って手伝え」

「はいっ」

マントや服を絞っていた流衣はすぐさま返事して、パタパタとリドの後に続く。

「ああ、この椅子なんか良いな」

「そうだね」

リドは重なつて山になっている椅子の足を掴み、思い切り引っぱった。

ガラガラと音を立てて崩れる山。

ぶわあっと土埃ちほいが立ち込める。

「ゴホッゲホッ、リド、ちょっとは考えてよっ」

「ケホ、わりい」

土埃を吸ってしまい、盛大に咳き込む流衣。同じく咳をしながら謝るリド。

そして二人はガラクタの山を見て、同時に動きを止めた。

山の向こうに、あちこち傷だらけの少年が倒れていた。

流衣は頭のとっぺんから爪先まで、サーッと血の気が引いた。

「ひっ、人殺し！ 殺人事件！ わあわあどうしよう、けけけ警察

！ 通報！ そそ、それより救急車！？」

死体遺棄事件だー！

頭を抱えて叫ぶなり、ひいいとパニックに陥る。

そんな流衣を尻目にリドは冷静な顔で少年の側にしゃがみこみ、

首筋に手を当てて脈を診る。

「落ち着け。まだ葬儀屋の出番じゃねえ」

「葬儀屋！ 葬儀屋に連絡だね！」

パニックっている流衣は慌てて出口に飛んでいこうとしたが、その前にデイルが腕を掴んで引き止める。

「違う、葬儀屋はいらん！ あの少年はまだ生きているらしいぞ」

「へ？」

ぴたつと止まる流衣。

そろりとリドの方に顔を向ける。

「……生きてる、の？」

「死んでるなんて誰が言った」

ぱつさり切り捨てるリド。

しかし流衣はそれで落ち着きを取り戻す。

「な、なーんだ、生きてるならそう言ってくればいいのに」

あははと空笑いしつつ、後ろ頭を掻きながら、さっきの位置まで戻る。

「で、でも、じゃあなんでこんな所で、この人、死体ごっこなんてしてるのかな……？」

「いや、ルイ。わざわざ死体ごっこをしにくるわけなからう。きつと訳ありだな。どちらにしるこの状態は危ない。火を起こして暖かくして、それから治療もしてやらねば。彼が起きてから事情を聞けば良い」

デイルは苦笑混じりに言う。

「俺達も雨が止むまでここで足止めだし。ついでに野宿の準備をしちまうか」

「……ほんとごめん。何すれば良いかな」

良心がグサグサ痛み、眉を八の字にして、流衣は手伝いを申し出た。

パチ……パチッ……

薪がはぜるような音がして、意識が浮上した。

薄らと目を開けると、橙色の暖かな光が、壁にゆらりと影を揺らめかす。

光と影の織り成す陰影に見とれながら、急激に意識が覚醒する。バツと起き上がり、焚き火から遠ざかるように離れる。

人の気配を近くに感じ、自分の愚かさを呪った。

何てことだ、あいつらに捕まってしまったのか？

「大丈夫だよ、怖くないよ？」

焚き火の番をしていたらしい、黒髪黒目の少年が驚いたような顔をして、それから優しく言った。

怯えたのを悟られ、カツと頬に血がのぼる。

「貴方は一体誰です！ あの人達の仲間ですかっ？」

慌てて懐を探り、隠しておいた短剣を探す。

だが、入れておいた場所に短剣が無く、血の気が引いた。

「あ、あの。あの人達ってどの人か分からないけど、ちよっと落ちて着いて。ああ、そくだ。こんな時こそあれだ」

少年は困ったように首を傾げ、ややあつて何か思い出したように傍らの荷物を探り出す。

ここで初めて、少年の他にも二人の少年がいて、焚き火からやや離れた位置で毛布にくるまって寝ているのに気付いた。

雨音が家中に響いており、かろうじて形を保っているだけの扉の隙間から覗く空は暗い。どうやら深夜のようだった。

焚き火の上にはヤカンが吊るされ、シュンシュンと音を立てて水蒸気を吐き出している。

少年が武器を出すのではと警戒しながら、何をやる気なのかと様子伺う。少し落ち着いてきて、逃げている途中で作った怪我が一つ残らず消えていることに気付く。

「……私の怪我を治してくれたのは、貴方ですか？」

「僕は流衣だよ。ええと、ルイ・オリベ。この子は使い魔のオルクス。君の怪我を治したのはオルクスだよ、僕は何もしてない」

「……………」

自分と肩に乗っている黄緑色のオウムを紹介してから、困ったように話す流衣を見て、怪訝に思う。

使い魔がしたことなら、主人の功績だろう？ 何故、そこで自分のことだと言わないのだ？

「驚いたよー、雨宿りでここに入ったら、君が怪我だらけで倒れて。僕、死体遺棄事件かと思ってパニックっちゃって、危うく葬儀屋まで走るところだった」

流衣は苦笑いながら、ココアの粉と砂糖を入れたコップに、ヤカンの湯を注ぐ。それをスプーンで簡単に掻き混ぜて、私の方に差し出した。

「はい、これ飲んで。あつたまるから」

「……………何です、これは」

木製のコップを受け取り、初めて見る飲み物を前に不審げな態度を隠さず、流衣を見返す。

「ココアっていう飲み物だよ。この国には無いみたいだけど、僕がいた所だと結構人気のある飲み物なんだ」

静かな口調ながらゆっくりと紡がれる言葉に、だんだん緊張が取れてくる。

この少年は敵ではないのだと、ようやく分かってきた。敵なら、まず名前は名乗らないだろうし、仲間も起こすだろう。それにこの口振りだと、どうやら異国の人間のようだ。言われてみれば、鹿の角のような色合いの肌といい、黒髪黒目といい、初めて見る人種である。

なかなか飲み物に口を付けようとしない私を見て、流衣は不思議そうな顔をした。それから合点がいったような顔になる。

「もしかして怪しい飲み物だっと思ってるのがかな。初めて見るだろうし、そう思うよね。えーと、それなら悪いけど、一口飲ませてもらうね」

そう言って、私の手からコップを取り上げ、一口飲んでみせた。

そして、どうだとはかりにっこり笑ってコップを返す。

「良かった、丁度良い甘さになってる」

「……甘いものなのですか？」

わざわざ毒味までしてくれたのだ、安全なんだろう。

私は思い切って一口その不思議な飲み物を飲んだ。

途端、口の中いっぱいにはほろ苦さと甘みが広がり、驚く。

「……おいしい。こんな物、初めて飲みました」

「そっか、良かった。甘いのが苦手な人と、駄目っていう人もいるんだよね。君、昼間見つけた時からもう半日も寝たままだっし、お腹空いてるでしょ？ 三日前に町を出たばかりだから、パンが余ってるんだ。これも食べなよ」

そう言いながら、流衣は丸い白パンに干し肉と野菜を挟んで、私に差し出した。

「……かたじけない。ありがたく頂くことにします」

もう警戒しないことにした。この少年は間違いなく善意で行動してくれている。

私がパンを受け取って食べ始めると、流衣は安堵したように緩く笑う。

こんな所で倒れていた見ず知らずの私を、本気で心配してくれていたのだ。

「私は、ヴィンスといいます」

だからだろうか、私は名前を名乗っていた。勿論、本名ではなく、愛称ではあるのだが。どこに追っ手がいるか分からない状況で、容易に名を名乗るわけにはいかなかったから。それでも最大の譲歩だった。

パンを食べ終わり、ココアなる飲み物を飲み終えた私に、流衣はお休みとだけ声をかけ、何も聞かなかった。

この粗末な家に漂う空気は温度によるものだけではなく確かに暖かく、傷は癒えても疲労していた私が眠りに落ちるのはすぐだった。

なかなか目が覚めない少年の容態が気になり、結局一晩中焚き火番をして起きていた。

グインズと名乗った少年は夜中に一度起きたが、何かを警戒している様子だった。でも、パンを食べてくれたからほっとした。そしてまた眠ってしまったから、そのままにしていた。

事情はいつ聞いても良いし、精神的にも参っているような人に問い詰めるのも可哀相だ。

朝日が差してくると、簡単に朝食を作った。干し肉と豆を使った塩味のスープとパンだけだ。鍋やヤカンはデイルが持ち歩いていた物で、軽い食器類はそれぞれの持ち物である。

ブラツエを出てからデイルの背負った布製の鞆かばんが重そうだったので大丈夫かと尋ねたら、普段から重い物を担いで旅することにより、耐性と筋力の増加が得られるのだと、やけに誇らしげに語られた。つまり修行、らしい。

師匠であるリリエノラからそう言われて、重い荷物はデイル担当だったらしい。

師匠が、と聞いて、それは間違いなくリリエの陰謀だろうと思っただが、本気で信じているデイルが不憫なので言わないでおいた。

「お早う、二人とも。よく眠れた？」

朝日が出て、もそもそと起き出したリドとデイルに声をかける。

「あれ、もう朝？」

少し寝ぼけているリドがぼーっと訊いてくる。

「うん。朝御飯作っておいたから、冷めないうちに食べてよ」

流衣は気にせず、木の椀にスープを注いでいく。

「……もしやルイ、一睡もしてないのか？」

焚き火番の交代を頼まれた覚えがなかったので、デイルが怪訝そうにする。

「そうだよ。別に平気だよ、一日の徹夜程度なら」

面白い本を夢中で読んでいたら朝になっていた、ということが多かったので、徹夜が一日くらいは流衣には何ともない。むしろテンション

ンが上がる方だ。

「お前、ただでさえ体力ないんだから、ちゃんと交代しろよな」

「どうせ心配で眠れなかったから、良いんだよ。でもありがとう」
気を遣うリドに礼を言うと、はーあと溜め息をつかれた。

……何だろう、なんでそんな諦めたみたいな顔をするんだ？

それから、話し声で目が覚めたらしいヴィンスに声をかける。

「おはよう、ヴィンス君。あ、二人とも、この人、ヴィンスっていうんだって。ヴィンス君、こっちの二人はリドとディルだよ」

「……………」

ヴィンスは反応に困った様子で、無言で二人を見つめる。

そんなヴィンスに構わず、軽く挨拶してから、焚き火の周りに座る二人。

まだ無言でどうしたものかと考え込んでいる様子のヴィンスを、リドが不思議そうに見やる。

「どうした？ こっち来いよ。飯食うだろ？」

「あ、はい……」

そんなリドに面食らったようだが、ヴィンスは一つ返事をして、焚き火の方にやって来て座った。

明るい朝の日差しの中で見ると、ヴィンスは相当綺麗な顔をしているのが分かった。白っぽい金髪は長く、首の後ろで一つに纏めており、目はサファイアみたいな青紫をしている。あちこち薄汚れているのさえ気にしなれば、気品さえ感じられる容姿だ。白いブラウスの首元にはスカーフっぽいタイをしているし、紺色のズボンも質の良い物に見えた。それに旅には不向きそうな、皮製の靴を履いている。

「ヴィンス殿は、もしや野盗にでも遭ったのか？ 随分と旅に不向きな格好をしているが……」

朝食を頬張りながら、さりげなくディルが訊く。

「まあそんなところですよ、賊に襲われたのは間違いないのですが……。どうやら助けて頂いたようですよ、巻き込みたくありませんの

で、これ以上は訊かないで頂けますか」

質問を拒否するヴィンス。

流衣達は顔を見合わせる。

「まあ、そう言うんなら良いけどな。あと、これ、預かつといた。悪いな、妙な勘違いされて刺されても面倒だったからさ」

さばさばと言って、リドはヴィンスの懐から抜き取っていた短剣をヴィンスに返す。

ヴィンスはそれを目にしてあからさまにほっとした顔になる。

「いいえ、返して下さったので十分です。これは父の形見ですし、大切な物でしたので……」

「そうかい。で、どうするんだ？」

リドの問いに、ヴィンスは意図を問うようにじっと見返す。

「何をですか？」

「あんだ、どつが良いとこの坊ちゃんなんだろ？ で、賊に襲われて逃げてきたから供もないし、多分金も持ってない。無謀も良いとこなんじゃねえかと思うんだが」

ぼんぼんと問題点をぶつけるリド。

それに、デイルが堅苦しく同意する。

「うむ、確かに無謀だな」

「初めてこいつと会った時みただげ。森の中で、武器も防具もなくさ迷ってるんだもんな。てつきり猛者なのかと思ったら、ただの世間知らずなだけだったし」

「うつつ、そこまで言わなくても良いじゃないか！ 大体、好き好んで世間知らずしてるわけじゃないんだよっ」

流衣が言い返すと、それにオルクスも同調する。

「そうですね、リド！ あの時は、急いで町に向かうところだったんデス！ それをあなたが、いきなりダガーで脅してくるから、予定が狂ったんデス！」

「片言オウムには言っただねえだろ！？ あんな怪しい格好した奴が森から出てきたら、誰だっただけで問いただすっての！」

ギリギリと睨み合うオルクスとリド。

「ちよつ二人とも、今、朝御飯食べてるんだから喧嘩よそうよ」

はあ、と溜め息をつく流衣。怪しい怪しいとは言われていたが、そこまで言われるとへこむ。

いきなり始まった喧嘩を、目を丸くして見ていたヴィンスだったが、はつきりと言う。

「私は、多少ですが魔法の心得がありますから、大丈夫です。それにヒノツクまで行けば、どうにかなりますから」

流衣はパツと顔を明るくする。

「それなら僕らと同じ方向だね！　じゃあ問題ないじゃん、僕らと行けば」

流衣の言い分に面食らった後、ヴィンスは慌てて言い足す。

「しかし！　あなた方を巻き込むわけには……っ」

が、デイルが手の平を突き出して制止したことにより、言葉を切る。

「ここで会ったのも何かの縁えん。気にせず共に行かれればよい」

「おっ、デイル、良いこと言うじゃん。まっ、俺の言いたいことも、そついうところだな」

リドがにやにやしてデイルの肩を小突く。

盛り上がる三人の前で、一人ヴィンスだけは途方に暮れたような顔でそれを見ていた。

十四章 体質

ヒノツク神殿と聞いていたから神殿しかないと思っていたら、そうではないらしい。

ヒノツクはそもそも一つの町の名前であり、火の神殿への巡礼者で賑わっている神殿都市なのだ。

ラーザイナ・フィールドにある六大神殿は、全てそんな感じで賑わう都市なんだとか。

有名な寺の下に町が出来るのと似たようなものかなと、流衣は考えた。

火を祀っているだけあって、町のあちこちに篝火かがりびが設けられている。

賊がまた襲ってくることを懸念していたが、半日かけてここに来たのに、そんな人には出くわさなかった。まあ、別に会いたくとも思わないから万々歳であるが。

「宿に入る前に、まずは君の格好をどうにかしないとな」

雑踏の中、白い騎士服を翻ひるがえして先頭を切って歩きながら、デイルがヴィンスに言った。

ヴィンスは少し困った顔で自身の服装を見下ろす。

確かにデイルの言う通りだ。服を変えた方が良い。森の中を走っていたせいで、あちこち切れて糸が出ているし、薄汚れている為に見すばらしく見える。

後ろ頭を手で支えるようにして歩きながら、リドもそれに同意して、呑気な調子で言う。

「じゃあ古着屋探すか」

「そうだね……。あっ、あれじゃない？」

なんだかりドに会った頃の自分のようだ。

既視感きしかんに苦笑しながら、流衣は町の一角を指差した。
ドーリスの町の古着屋みたい、服の海が出来ている。というよ
り山か？

「あれだな。よし行くぞ！」

「えっ、ちよつと待っ！？」

たじろぐヴィンスの腕を掴み、ディルはヴィンスをずると引きずるようにして古着屋に連行していく。

「はー、あいつも大変だね」

ディルに絡まれて可哀相に、と、特にそんなことを思ってもい
いだろうに呟くリド。流衣は軽く笑い、そんな二人を追いかけた。

「おおー！」

「すっげえ」

「見違えたな！」

流衣は拍手し、リドは感心し、ディルは褒めた。

ちゃんとした服を着たヴィンスは、どこから見ても良家の子息だ
った。本人の希望により、黒に近い青色を中心にした服装になった。
白っぽい金髪がよく映えている。

しかし本人は目立ちたくないようで、灰色のマントをその上に着
て、フードを目深に被ってしまった。勿体無い。

「なんだか王子様みたいだね」

「え！？」

キラキラしているヴィンスを見て、思わず言葉を漏らすと、驚い
た顔をされた。

「もしかして言われたことないの？」

そっちの方がびっくりだ。

「え、あのー、まあ、言われたことはありますけど、ええーと」

ヴィンスは、なにやら視線をうろつろさせて拳動不審になっ
てい

謎な反応に首を傾げつつ、まあいつか、と流す。

「そういえばヴィンス、君はウィングクロスに登録しているのか？」

「いえ……」

「そうか。では、ウィングクロスの系列の宿にするか」

ヴィンスに確認を取り、デイルは一つ頷いて歩き出す。まるでどこにその店があるか分かりきっている風だ。

「デイル、この町にも来たことあるの？」

流衣の問いに、デイルは頷く。

「勿論だ。あちこち旅していたからな」

そして、屋台や人の波でごった返す通りを、人の隙間を縫うように歩いていく。

流衣は興味をひかれて屋台や店を眺めながら、三人の後に続く。

そうして眺めているうちにふと、屋台の一部の商品に黒い霧もやが纏わりついているのに目がとまった。

霧が蛇の形を取り、鎌首をもたげてこちらを睨んでいる。

背筋がぞくりと粟あわた立たった。

慌てて目を反らし、急に気分の悪さを覚えて口に手を当て、小走りに三人を追う。

『大丈夫ですか、坊ちゃん』

目聡く気付いたオルクスが問うてきたので、流衣は頷く。

「平気だよ。何だか気持ち悪くなっただけ」

『あれは瘴やみ気きといわれるものですよ。世界に漂う負の要素ともいいます。前に闇物やみものからゴーストが出てきたでしょう？ あれは瘴やみ気きが魔物に変貌したものです。あれほどの瘴やみ気きをどこで集めてきたのかわりませんがね。坊ちゃんをあてられやすいようですから、出来るだけ近付きませんように』

オルクスの忠告に、流衣はただ頷いた。

たくさんの人がいて、様々な色で溢れ、夕闇に篝火の灯が浮かび、ざわざわと声が巡る。それら全てがごっちゃんになり、ぐるぐると回っているようで、ますます気持ち悪い。

何となく、混沌とはこういうことではないかと、頭の隅で思った。

ウイングクロス系列の宿では、四人分のベッドとテーブルと椅子と箆^{たんす}が置かれただけのシンプルな部屋に泊まることになった。

「！」

部屋に入って、その箆の上^{たんす}に置かれた置物を認めるなり、流衣はバツとその場から壁際へ飛びのいた。

黒い霧が渦を巻き、鳥の形の銅像を取り囲んでいる。蛇のように見えたそれは、小さな虫の集合体のようにも見えた。

ぶわりと鳥肌が立つ。

ついで、背筋がぞくりとし、悪寒を覚える。

「……ルイ？」

突然顔色を変えた流衣に気付き、柳眉^{りゅうめい}をひそめるヴィンス。そうしている^{して}と人形のようにも見える。

「闇物が」

流衣の反応と、精霊の騒ぐ声とで判断したリドが、ぼそりと断定する。警戒心を露にし、置物を睨みつける。

「むっ、これは気持ち悪い見た目だな」

魔法使いとしても技量のあるディルだ、あの霧が見えているらしい。が、流衣のように気分が悪くはならないようで、平然とした顔で眉を寄せている。

「闇物を知っているのですか？」

ヴィンスは、まさか、と驚いた顔になる。

「あんなこそ、知ってんのかい？」

リドは怪訝な顔をする。

意外だった。貴族の子息にしか思えないこの少年が、あんな不穏な物を知っていることが。

「杖連盟から話は聞いています。そうですね、これがその“闇物”

……」

「どうでもいいけど、それ、どっかにやってくれ」

流衣は置物から一番遠い場所まで避難し、吐き気を抑えながら言う。

「うわ、大丈夫かよ？ 顔色悪いぞ」

そんな流衣の顔色を見てぎよつと目を見開くと、すぐにリドは表情を曇らせた。そして素早く決断する。

「宿の備品だが……誤って壊したことにするか」

言い終わるなり、風の刃を作りだした。

ヒュウツと風が唸り、置物を両断する。ぱきつと音を立てて置物が割れ、鈍い音を立てて床に落ちた。

すると中からもくもくと黒い霧が立ち上り、ゴーストの形を作った。

ゴーストは目を鋭く尖らせ、攻撃したリドに襲い掛かる。

対するリドはゴーストの爪を難なく避けると、接近したまま右腕に風を束ねる。可視できる風の渦を、ゴーストの顔めがけて一点集中で放ちぶつける。風の刃で弾かれた前回であるが、これなら少しはマシだろう。

案の定、額を打たれたゴーストはぐらつと後ろにのけぞった。

「光よ矢となれ、ライトブリッド！」

そこに間髪入れず、こうたんデイルが光弾をお見舞いする。

光の弾で頭と胴体を続けざまに射抜かれたゴーストは、悲鳴を上げて消えていった。

リドは額に浮かんだ汗を袖口で拭う。いきなり襲い掛かってきたものだから、背筋が冷えた。

「ふーっ、やっぱ闇って感じだから光魔法が有効なんだな」

「ふむ、そうだな。効いて良かった。しかし、これが話に聞く闇物か」

唸るように呟くデイル。

「ん？ 俺ら、この話したっけ？」

デイルは首を振る。

「前に師匠が話していたのだ。『世間には魔物が封印された闇物なんていう面倒臭い物が出回ってるから、見かけたら駆除しときなさいよ』……と」

「相変わらず、おつかねえお師匠さんだな」

横を見つつ身を震わせるリド。しかしその「おつかない師匠」の弟子であるデイルは苦笑するしかない。

「あ、あなた方は一体……」

グインスはあんぐりと口を開けて二人を凝視する。

闇物であることを見抜き、それを壊したかと思えば、出てきた魔物を退治する。そのあまりの素早さに感動する以前に呆気に取られていた。

リドは軽く肩を竦め、それについては無視することにした。部屋の隅で口元を押さえてうずくまっている流衣の方が気になったのだ。以前も魔法道具屋を巡って気分が悪そうにしていたが、今回は前より酷い。

「あの闇物は壊したんだけどな、まだ気分悪いか？」

「うん……。なんか、ドーリスの時より、闇が濃いつていうか、ドロツとしてる感じがして……」

流衣はぼそぼそと答える。座っているのに頭がぐらぐらしてきた。リドはデイルの方を振り返る。対処法が分かればと思ったが、デイルも分からないらしく首を振るだけだ。

仕方がないので、あまり聞きたくない相手に訊く。

「おい、オウム。どうすりゃ治るんだ？」

オウムと呼ばれてオルクスはムツとしたように目つきを尖らせたが、すぐに首を振った。

「どうしようもありません。これは体質の問題です。坊ちゃんは、瘴気にあてられやすい体質の方のようデス。たまにいらっしやるんですよ、そういう方。純粹、とでも申しましょうか。それに、坊ちゃんは、どちらかといえば神官向きな、優しい方ですし」

「……………」

半分は褒め言葉で構成された返答を聞き、リドは片眉を跳ね上げる。確かに、そう言われれば純粹なのかもしれない。思えば、流衣は自己嫌悪はしても、嫌悪の対象を他人に向けることはない。誰に対してもどこか平等で、それはある意味、純粹といえるかもしれない。かかった。

「休ませて、治るのを待つしか、ありません。聖水でもあれば、少しはマシになるでしょうが」

「いいよ、もう寝ることにするから」

流衣は壁に手をつけてよろよろと立ち上がり、そのまま一番近いベッドまで行く。そしてリュックサックを放り捨ててマントも外し、靴を適当に脱ぎ捨て、そのまま布団にくるまった。

冗談でなく気持ち悪い。こんなの、インフルエンザにかかった時以来だ。ああ、目が回る。

「……神殿都市のくせに、ドーリスより酷いのか」

苦々しく歯を噛み締めるリド。あんな物をばらまいている 悪魔^{イビル}の瞳^{スライ} に対し、初めて嫌悪感を覚えた。

「私が神殿まで行って聖水を買ってくるから、リドは水か何か貰ってきてやってくれ」

「ああ、分かった。宜しく」

デイルは早速出かけて行き、リドも階下に降りて水を貰いに行く。残されたヴィンスは、寝込んでしまった流衣を見て、静かにしているしかないとそのまま椅子に腰掛けた。

通達は回ってきていたが、ここまで根深いとは。

まさか神殿都市であるヒノックまで、悪魔の瞳^{スライ}の手が回っているとは考えもしなかったが、これは早急に手を打たねばならない問題だろう。

ヴィンスは考えに沈みこんで、打開策を考える。

やはり杖連盟から魔法使いを派遣した方が良い。もしくは神官を

派遣して貰うか。

光魔法が有効だと先程リドが言っていたし、そのように解決させればいい。

(しかし一体、この方達は何者なのでしょう?)

偶然、ヴィンスを助けた旅の三人組。

一人は使い魔を連れた異国人の魔法使い。もう一人は、さっき見て分かったが、風の精霊の子。最後の一人は、魔法騎士のような感じだ。剣を携えた魔法使いなら間違いないはず。

不思議な三人組だ。

その上、あの使い魔のオウムは喋った。言葉を解す使い魔は、カザニフの託宣の巫女の狼くらいしか知らなかったが……。

しかし不思議と、怪しいとは思えない。きっと、三人の持つ空気が明るいせいだろう。

(明日辺り、神殿長にお会いして、相談するしかありませんね……) 王都までの足も無くなってしまったし、方法はそれしかない。どのみち、自分の住む屋敷まではここからでは遠すぎる。

それから、首を傾げる。

(それにしても、あの輩達は何故私を狙うのでしょうか?) 今までも狙われなかったといえば嘘になるが、命を奪う方向ではなかった。

(私が王都に行くと、何かまずいということでしょうか?)

内心で問いをぶつけてみるが、さっぱり分からない。

(姉上なら真相をご存知のはず。はあ、私はまだまだ未熟のようです……)

若干十五歳の少年貴族は、そう思って深く落ち込んだ。未熟で当たり前前の年齢であるのに、貴族としての誇りと意識がそこまで思い至らせないのであった。

朝、目が覚めると気分の悪さは消え去っていた。

ぼさつとしている髪の毛を手櫛で適当に整えながら、洗面をする為、部屋を出る。

まだ日が昇ったばかりなのか、三人とも寝ていた。オルクスも枕元で丸くなっていた。

体調が回復しているのは聖水が効いたからなのかもしれないな、と心の隅で呟く。

神殿で神官が聖法という術を水に使った物らしく、瘴気を清める作用があるらしい。昨晚、デイルが買ってきた聖水を飲んだら少しはマシになったのだから確かだ。それでも完璧に治る程ではなかったが。

(お腹空いた……)

洗面所で顔を洗い、タオルで水気を拭いながら流衣はぼつりと思う。

そういえば、昨日はあまりの気分の悪さに夕食を抜いたのだ。

部屋に戻る途中の廊下から窓の外を見ると、まだ日は地平線に滲にじんでいる程度だった。道理で少し薄暗いはずだと気付く。だが、顔を洗ったらすつきりした。

もう、地球でいうところの秋の半ばであるから、朝は空気がひんやりしている。昨日はマントを脱いだけだけの格好で寝てしまったのもあり、今の格好ならそこまで寒くはない。

部屋は二階にあるので、窓から見下ろすと庭が見えた。そこにある井戸を、まだ日も昇ったばかりだというのに、桶を持った女の人が行ったり来たりしている。水汲みをしているらしい。

流衣は部屋に帰っても静かにするのが億劫だったので、硝子窓を開けて、窓辺に肘をつけてその光景を眺めた。

徐々に活気付いていく町。

綺麗だと思った。

石造りの街並みは、コンクリートで出来た街並みよりも、どこか有機的だ。温かみがある。

ここに来て、そんな風に町を眺めたのは初めてかもしれない。

何もかもが初めて見るものばかりで、感動するよりも不安で仕方がなかったから。オルクスとリドに会わなかったら、きつともっと緊張していたはずだ。

ふと、扉の軋む音が聞こえ、そっちを振り返る。

ヴェンスが廊下をきよろきよろと見回しており、パツと目が合った。

「おはよ」

声をかけると、丁寧に戻される。

「お早うございます」

ヴェンスは言葉遣いが丁寧だ。やっぱり、絶対どこかの貴族のお坊ちゃんに違いない。

ヴェンスはそーっと扉を閉めてから、静かにこっちにやって来る。「もう具合は宜しいのですか？」

「うん。昨日はごめんね、気を遣わせちゃったみたいで」

小声で話しかけてくるヴェンスに、流衣も小声で返す。

まだ他の客が寝ている時間だからという配慮だ。

「構いませんよ、それくらい。あなた方には随分お世話になっていますし、旅費まで出して頂いている身ですから」

困ったような顔で笑うヴェンス。

「別に気にしなくていいのに。困った時はお互い様っていうじゃない」

「それはあなたのお国の言葉ですか？」

きよとんとするヴェンス。

「うん、そうなるのかな。困った時こそお互い助け合うものだって意味かな」

「良い言葉ですね。とても気が楽になりました。それなら、あなた方が困った時に手を貸せば良いのですね」

「それだと貸し借りの話になるんじゃない？」

「借りっぱなしは御免ですから」

緩やかに、けれどきっぱりと言って微笑むヴィンス。

この人は意外と男らしい性格みたいだぞと、流衣は考えを直す。

ヴィンスの綺麗な顔立ちは、どちらかというと女性的で優しげな印象だ。穏やかとはいえ、はきはきとした口調で話すから、女の子に見えることはないが。

「そういえばルイ、昨日、何か拾っていましたよね？ あれって何だったんです？」

思い出した様子で訊いてくるヴィンス。

流衣は少し考える。

「それって、道端で拾ってた石のこと？」

「そうです。硝子質の石ばかりでしたが、もしかしてルイは硝子職人がらすしよくなんですか？」

「僕が？ まさかあ」

硝子質の石イコール硝子職人の図式になっているらしいヴィンスに、流衣はつい吹き出してしまう。

「あれ、天然ものの魔晶石まじょうせきだよ。集めて、次の町に来たら売るようにしてるんだ。ちょっとは路銀ろぎんの足しになるから」

「そうなんですか？ へえ、面白いですね。そういうものって道端に落ちているものなのですか……」

意外そうに頷くヴィンス。それから大真面目に言う。

「外は知らないことばかりですね。こうして歩いてみて、もっと知る必要があると感じました。屋敷から出ても、馬車から外を見る程度でしたから」

「やっぱり、ヴィンス君ってお坊ちゃんか何かみたいだね。馬車から外を見る程度かあ、それだと退屈そうだなあ」

「ええ、そうですね。今まで、それが普通でしたから疑問にも思いませんでしたが……。自分で歩くだけでこれだけ世界が異なっている。素晴らしいことです」

そう言って、ヴィンスは好奇心に目を輝かせる。

見たと同じ年頃なのに、出歩いたことがないというのは不思議だ。小学生の頃は、子供は風の子だといって、冬でも昼休みは外に追い立てられていたのに。あ、でも貴族だったら習い事とか勉強とか、他にも剣術や馬術とか色んなことを学ばされて、外を駆け回る余裕なんてないのかもしれない。

だがやっぱり馴染みがないので全く想像がつかなかった。所詮、流衣は庶民の子供である。

「あ、そこにいたか」

ここで、ひよいと部屋の扉が開き、リドが顔を出した。

その扉の隙間から、何かが弾丸のように飛び出し、流衣の肩にぶつかる。不意打ちに、よろめいて背中を窓にぶつけた。

「いたっ、何！？……ああ、何だ、オルクスか」

『何だではございません！ 起きたらいないのですから、驚きました！ 世界の破滅並みに驚きました！』

ガンガン頭の中に響く声に、流衣はくらっとする。

「ごめんってオルクス。顔を洗いに行ってたんだよ。あと、声のトーンを落として、頭がくらくらする」

『すみませんっ』

トーンを落とし損ねた声で、オルクスが謝った。まあいいけど。

「あ、そうでした。私も洗面に出てきたのでした」

流衣と話していたせいで用件を忘れてたらしい。今更になって思い出したヴィンスは、そう言っって洗面所の方に歩いていった。

「そいつがギャーギャー騒ぐもんだから、それで目が覚めちゃったよ」

リドも洗面所に向かいながら、あくび混じりに言う。片手をひらりとさせ、気だるげな足取りで歩いていく。

それを見送っていると、洗い顔をしたディルも顔を出した。

「ふむ。確かに何事かと思っただぞ。……だが、だいぶ顔色も良くなっただようだし、一安心だな」

「……ありがとう」

「うむ」

軍人のように背筋をびしっと伸ばしたディルは、きびきびとした足取りで、二人と同じく洗面所の方へ去っていく。

流衣はそれを見送ってから、ふとオルクスの方を見下ろす。

「……オルクスも顔洗いに行く？」

「結構です」

水嫌いな使い魔は、きぱっと返事した。

十五章 ヴィンスの正体

服装を着替え、風呂にも入って身綺麗にしたヴィンスを見て、デイルは彼を見たことがあるような気がしてならなかった。

“会った”とはいわない。

会って話をした人物なら、覚えておくようにしている。デイルの家の位の高さがそうさせた。三男とはいえ、公の場での言動や行動によつては家名に傷がつくからだ。それに顔と名前を覚えるのは割合得意な方でもある。

それでも覚えていないというならば、どこかで見たということなのだ。

もしかしたら、社交界で見かけたのかもしれない。三男である分、例えば家が高位だろうと、デイル本人の身分は低くなるから、身分の高い人間から声をかけられるか、父や兄達に紹介されない限りは話かけることもない。

きつとそうなのだろうとデイルは思った。

どう見たってヴィンスは貴族だ。立ち居振る舞い、食事の仕方、話し方、全てにおいて洗練されている。それこそ宮廷の礼儀作法を弁えていると感じる程。

気になつても、今のデイルは修行中の身。一般庶民と変わらないつもりだから、深く足を踏み入れないようにしておく。

それにヴィンス本人が目立ちたくないようであることだし。

ところで、フードを目深に被って用心深く辺りを見回しているのは逆に悪目立ちすると、教えた方が良いのだろうか？

* * *

火の神殿ヒノツクは、ギリシャにある神殿みたいな形をしていた。ただし素材は大理石ではなく白い煉瓦で、四角い形をした、建物の外周が回廊で囲まれている、そんな形。土台も重厚でちよつとやそつとの振動では崩れたりしないだろうという安心感を覚えた。

出入り口の扉前にある階段脇では、二つの篝火が燃えている。

開け放たれた扉の脇には臙脂色をした詰襟つめえりの服の神官が二人、槍やりを持って立っていて、おかしな挙動をする者がいないかじつと観察している。が、取り立てて何かを質問される訳ではなく、居心地の悪さを覚えながら入口から中へ入った。

中に入ると、玄関口の両脇に台が置かれており、そこに幾つもの小さな口ウソク並んでいた。そのうち、幾つかには火が灯ともされている。

この神殿に参拝する時は、ここで火を灯ともしてから祈り場に行くのだとデルに言われ、見様見真似みようまねで火を付けて、奥へと進んだ。また入口があり、そこから燭台しよくだいが二つ置かれた祭壇らしきものが見えた。

祈り場に入ると、教会を思わせる造りになっていた。一番奥に祭壇があり、そこに至るまでの通路の両脇には長椅子が並んでいる。

そこに何人かの参拝者がいて、祈りを捧げている。ほとんどが一般人だが、若干、神官らしき者が混じっている。白い衣装を着ているから、何となくだ。

流衣は一番後ろからついていき、きよろきよると物珍しげに祈り場を見回す。

八百万の神がいるとか、正月には三社参りするとか、成仏を願うなら仏教とか、そういう漠然とした信仰感を持っていても、熱心に祈るといふことから縁遠い典型的な日本人である流衣だからとかく珍しいのである。宗教に関係するものなど、良くて観光名所扱いだし。

「神官殿、リシャウス神殿長殿にお会いしたいのですが……」

ヴィンスは祭壇の燭台の口ウソクを取り替えている神官に、静か

に声をかける。

「神殿長とお約束をされておいでですか？」

このメインカラーなのか、臙脂色の上着とスカートという格好の女性神官は、やんわりと聞き返す。

「いいえ、急用でどうしてもお会いしたいのです。ヴィンスが来たと伝えて頂ければ、伝わるかと思えます」

「畏まりました。では、確認して参りますので、そちらにて少々お待ち下さいませ」

女性神官は言い、近くの長椅子を手で示すと、右手奥の小さな扉からどこかに出て行った。

一応神殿まで来たものの、この後ヴィンスが無事に過ごせそうか気になるので、確認してから別れようとディル達とも話し合っていたので、共に長椅子に座って待つ。

しばらくすると、さつき女性神官が出て行った扉がけたたましい音を立てて開いた。

「殿下　っ！　ご無事だったのですかっ！！」

そこから現れた、がっしりした体躯の三十代くらいの男がやおら叫び、どたたと走ってくる。ヴィンスを力いっぱい抱きしめた。

「ああ、殿下！　貴方様の乗った馬車と護衛達が死体で見えさるからというもの、私は気が気ではありませんなんだ！　夜も眠れず、吉報を祈るばかり！　ああ良かった、良かった！！」

金茶色の髪を後ろで一つに束ね、赤茶色の目を涙で潤ませた男が野太い声で叫ぶ光景は、なかなか見ていて圧巻だった。

抱きしめられているヴィンスが苦しげに唸っているのが哀れだが、圧倒されて誰も何も言えない。というか非常に暑苦しく、近寄りたくない。

「リシャウス、やめて下さい！　皆さん、呆れて見てるじゃないですかっ！　というか苦しいんですよ、いい加減離せっ！」

仕舞いにはぶち切れたヴィンスが鉄拳をお見舞いする。

「ぐぶっ！」

鳩尾に右ストレートを決められたリシャウスという名らしき男は、低く呻いてヴィンスから離れ、げほげほと咳をする。

それに対し、どこかござっぱりした印象のヴィンスは「ふう」と溜め息をつき、ずれたマントを直している。どこか手慣れた感がある。

「ああ、お騒がせしてすみません。この人、昔、私の教育係をしていました……。過保護気味なんですよね」

困ったように微笑むヴィンスはやはりどこか儂げにも見えるのだが、本当にさつき鉄拳を見舞った人物と同一人物なのだろうか？

流衣達三人はドン引きで固まっている。

「ごほつげほつ。うーむ、相変わらず良い拳の持ち主でいらっしやいますな。このリシャウス、殿下の成長ぶりに感激もひとしおです」

咳をしながら、それでも嬉しそうにするリシャウス。

流衣達はますます身を引く。怖い！　そしてそこはかたなく気持ち悪い！

「この人の戯言は無視されて結構ですよ。リシャウス、彼らが私を助けて下さったのです」

「おお、それは失礼致しました。私は当神殿の神殿長をしております、リシャウス・ソラツレと申します。こんな所で話もなんです。どうぞこちらへ」

ヴィンスの言葉に、リシャウスはたちまち好意的な目を流衣達に向けた。まるで山賊の親分ばりの迫力で、にかつと歯を見せて笑い、先に立って歩き出した。

「ここは私めの自室にございます。ささ、殿下はあちらへどうぞ。お客人方もそちらへお掛けください」

テーブルと丸椅子、寝台やクローゼットや箆笥といった、生活用品しか置かれていない殺風景な部屋に客を通すと、リシャウスはヴ

インスに上座をすすめ、後は適当に促した。

言葉こそ丁寧だが、すごく扱いに差を感じる。

そして一旦部屋を出ると、茶菓子を携えて戻ってくる。

「は、殿下が私の部屋においてになったのはいつぶりでしょう。」

かれこれ、二年とんで七ヶ月と十二日ぶりでしょうかね。」

のほほんとのたまうリシャウス。

かれこれとかいう割に、無駄に細かい。

「……いい加減にしないと、燃やしますよ。」

頬を引きつらせたヴィンスがぼそりと脅しをかける。

他三名もまたドン引きだったが、内心では、ヴィンスがこういう態度に出るのも分からなくはないと思った。正直、ものすごくうざい。これを過保護で片付けるのは、きっとヴィンスの心が広いからだ。多分。

「すまぬが、先程から“殿下”という聞き捨てならん言葉が飛んでいるが、まさか……」

少し頬に汗を浮かべ、デイルが恐る恐る口を開く。

それに、リシャウスが笑顔を浮かべ、恭しく答える。

「左様。こちらにおいてになられます御方は、先の国王陛下のおかたご子息にあらせられ、現女王陛下の弟君でいらっしやいます、ヴィンセント・クロディクス・シャノン公爵閣下でございます」

「二年前までは王城で暮らしていたので、リシャウスは私を殿下と呼ぶのですよ。やめるように言っているのですが、一向に聞いてくれないので困りものです」

ヴィンスがさらっとそんなことを言った。

「……っていうことは、王子様？」

本当に王子様だったってということか！

ぼかんとする流衣の横で、デイルとリドがバツと床に膝をついて頭を下げた。

「馬鹿、お前も頭下げろ！」

「うわっ」

啞然としていると、リドに引つ張られて流衣も頭を下げさせられる。

「存ぜぬとはいえ、度々の非礼、お詫び申し上げます！」
「デイルがびしつと言いつつ。」

「構いませんよ。身分を隠していたのは私の方ですし……」
困った顔で、顔を上げるように促すヴィンス。

それに応えて顔を上げ、デイルは片膝をついたまま、右手を拳の形にし、左胸の前に構える。

「申し遅れました。私はレヤード侯爵家が三男、デイルクラウド・レシム・カイゼル伯爵と申します」

「レヤード侯爵家の方だったのですか？」
「はっ」

短く返事するデイル。

(うわあ、騎士っぽい……)

修行修行と熱血ぶりをかましているだけかと思っただが、こうしていると騎士にしか見えない。

そんな感心を覚えつつ、ふと首を傾げる。

レヤード？ どこかで聞いたような。それもここ最近……。

「しかし私は未だ修行中の身、家名を名乗るのを禁じていたのです。身分を名乗らなかつたこと、どうかご容赦頂きたく願います」

「ええ、気にしてませんよ。そんな風に畏まられると困ります。旅の間のように、普通にして下さい」

ヴィンス本人の許可が出たので、さつきと同じように席につく。
が、デイルとリドの態度はどこかきこちない。

「それでどうして王子様が盗賊に襲われて、こんな所にいるの？」
思った疑問をそのまま口に出したら、デイルが青ざめた。無礼な

口を聞くなどでも言いたげだ。

しかし当のヴィンスは普通に返す。

「それが私にもよく分からないのです。王都に向かっていたところ、何者かの襲撃に遭いまして。供の者を皆殺されてしまい、逃げてい

たら、あなた方に助けられたというわけですね」

身分がばれてしまったからか、今まで拒否していた事情をさらさら語ってくれた。

「私の方は、通りがかった旅人による通報からの伝達でそれを知り、探し回っていたのですよ。ところで、あなた方の紹介をお願いしても宜しいですか？」

デイルがもう一度名乗り、リドも名乗る。その後に、流衣も口を開く。

「僕はルイ・オリベっていいいます。こっちは使い魔のオルクスです」「オルクスと申しマス。どうぞ宜しく」

羽を広げてお辞儀をする仕草をするオルクス。
リシャウスは片眉を跳ね上げる。

「人語を解す使い魔ですか？ リンキスタ様以外にそんな使い魔を呼び出した例は存じておりませんが……。しかもオルクスと？ 愛と慈悲の女神ツイールル力様に仕えている、五匹の使い魔の内の一つと同じ名とは。面白い偶然ですな」

「それはそうデス。わてがその魔物です」

あっさりオルクスが答えると、事情を知らないヴィンスとリシャウスの目が点になった。

「は？」

おかしな空耳を聞いたというように、リシャウスがぼかんとするので、オルクスは付け足す。

「ですから、わてが、第三の魔物だいさんオルクスです」

誇らしげに胸を張るオルクス。

「なっ……なっ……」

口をパクパク開閉するリシャウス。

「諸事情がありまして、今は女神様の元を離れ、坊ちゃんの使い魔ヲ、させて頂いております」

駄目押しにオルクスが続ける。

流衣は何かまずかったかなと冷や冷やししながら、苦笑って、二

人を見やる。

「何だ？ このオウム、そんなにすげーのか？」

神様の使い魔については深く知らないリドが至極不思議そうに問いかけ、爆発が起こる。

「すごいも何も！ 本来なら口をきいただけでも十分歓喜に値する魔物ですよ！ なんでこんな所にいらっしやるんですか？ っていうか貴方一体何者なんですっ！」

「ぐえっ、な、何者って言われても……っ」

リシャウスは感情を高ぶらせるあまり、流衣の方にテーブル越しに身を乗り出し、襟首を掴んで問い詰めてくる。

そのせいで息が詰まって、苦しさに眉をひそめると、オルクスが怒った。

「坊ちゃんに、何をするんデス！ 地獄に落としますよ！」

「申し訳ありません！ ですから地獄は勘弁して下さい！」

流石は神官職。オルクスの脅しは痛烈に効いた。

リシャウスは顔色を変え、手を離れた。

急に手を離されたせいで椅子にどさつと落ち、ついでむせて咳をする流衣。

「大丈夫かよ、おい……」

「げほっ、うう、大丈夫」

隣の席にいたリドが背中をさすってくれ、そう返す。

うう、何て感情的な人なんだ。

目の前に出されていた茶に手を伸ばし、一口飲んで、喉の乾きを鎮めると咳が止まった。

「あの、まあ、色々ありまして……」

ごまかし笑いを浮かべると、リシャウスには納得いかないと首を振られる。

「どう色々あるところなんです！ きっちり教えて下さい！」

掴みかかれはしないものの、リシャウスの目がギラギラしているのに気付いて背筋に冷たいものが浮かぶ。羨望と嫉妬と知的好奇

心とがごつちやになつたような輝きだ。

リシャウスの眼光に気圧され、ちよつとだけ涙目になりつつ、怖いので白状することにした。

ほんと、この人、苦手かもしれない。

「ははあ、やはりツィールカ様は慈悲深い神様でいらっしゃる。ますます信心増すばかりです」

話を聞き終えたりリシャウスは、ほーっと感嘆の溜め息を漏らし、その場で祈りを捧げた。

「そうです。良い事を言うじゃないですか」

その一言でオルクスはリシャウスへの印象を変えたようだ。一番の主人を褒められると嬉しいのだろう。

「慈悲深い……のかもしれないけど。うーん、物凄く面倒臭そうにしてたけどなあ」

一方で何となく納得のいかない流衣である。まあ、何もしないで放り出されなかったことについては感謝しているのだが。

「ちなみに、ツィールカ様はどのような姿形をしておいでなのですか？」

好奇心に目を輝かせ、ヴィンスが首を傾げる。

「ピンク色の長い髪をしてて、赤目で、白い布を巻きつけたみたいなワンピースみたいな服着てて、あとはとにかくすごく綺麗だった」

流衣が答えると、リシャウスの興奮も最高潮に達する。

「素晴らしい！ 流石は愛と慈悲の女神様！」

「リシャウス、いい加減、落ち着いて下さい。気持ちは分からなくはありませんが、あなたはこの神殿の長でしょう」

敬愛するヴィンスにたしなめられ、リシャウスはハッと落ち着きを取り戻す。

「殿下のおっしゃる通りですな。いやはや、つい興奮してしまいました。申し訳ありません」

居住まいを正し、軽く咳払いを一つするリシャウス。が、まだ物足りなさげにちらりとオルクスを一瞥し、振り切るように口を開く。「神様方のお話をもっとお聞きしたいところですが、それよりも、目の前に異界人がいるというのが驚きですな。こたびの勇者様は異界人と聞き、楽しみにしていたのですが、まさか同郷の、それも巻き込まれた方にお会いするとは……」

リシャウスは物珍しげにじろじろと流衣を観察する。流衣は視線が痛くて首をすくめ、居心地悪く椅子の上で身じろぎする。

やがてリシャウスの顔が好奇心から不憫めいたものに変わった。

「こんな子供だというのに、見知らぬ土地に一人きりとは……。さぞかし辛いことでしょうな。使い魔を与えることにした女神様の気持ち分かるような気がします」

おまけで召喚されてしまった流衣を哀れがるのではなく、子供が知らない土地に放り出されたことに心を痛めているらしいリシャウスを、流衣は意外に思っただけで見た。てっきり、おまけでなんて……と不憫がるかと思ったのだ。

見た目はごつい男だが、心根は優しいのだろう。神殿の長を務めているだけはあるのかもしれない。

少し苦手に感じていたことを、内心で謝っておく。

「リシャウスの言う通りです。もし自分の立場だったらと考えると、恐らく途方に暮れていたでしょう」

同意し、神妙な顔をするヴィンスを、流衣は苦笑混じりに見返す。そりゃあ最初は相当落ち込んだが、女神ツィールカから事情の説明を受けたし、言葉も通じる上にオルクスを案内役に置いていってくれたので、そこまで大ダメージを受けずに済んだといえる。

そう考えてみると、ツィールカの慈悲による施しがどれだけ大きなものか、初めて気が付いた。巻き込まれて迷惑としか思っていなかったのだが、施しがなかったらどれだけ大変だったかを考えるとゾツとする。

「え、えーと。まあこんな風にどうにかやっていけてるし、僕はだ

丈夫なので……。それより、ヴィンス君がこの後どうするのか気になって仕方ないんですが」

リシャウスは、そうだったと相槌を打つ。

「そうでしたな。申し訳ない」

居住まいを正し、軽く咳払いを一つ。が、まだ物足りなさげにちらりとオルクスを一瞥し、振り切るように口を開く。

「それでは殿下、どういたしましょうか。このまま王都に行かれるというならば、こちらから護衛を出しましょう。領地に戻られるにしてもそう致しますが」

ヴィンスは秀麗な顔を悩ましげにひそめる。

「……リシャウスは、私が狙われた理由は知らないのですか？」

「一つ心当たりはございますが、確証がありませんので口に出来ません。恐らく、女王陛下にお尋ねになるのが一番かと」

「やはりそうなりますか」

はあ、とヴィンスは軽く溜め息をつく。

「あまり姉上の手を煩わせたくはないのですが……。未熟な身なのが悔やまれます」

「何をおっしゃいます、殿下。殿下は十分やっておられますよ。まだ十五、未熟で結構ではありませんか。それに女王陛下は、殿下に頼られると喜ばれますしな。かくゆうわたくしめも、こうして頼りにされること、とても光栄に存じております」

「……貴方にそう言われると、嬉しくないのは何故なんでしょうね」

ふーっと溜め息をつき、こめかみをグリグリ押さえるヴィンス。自己主張の激しい教育係がものすごく煩わしい。良い歳した大人が、目をキラキラさせないで欲しいと思う。

「ははは、またまたご冗談を」

「……………」

ヴィンスは、ちよいと目を反らす。

「では、王都まで参ります。護衛を数名貸して下さい。それから、

この方達にお礼をして欲しいのです。王都の屋敷に着きましたら、ちゃんと返しますから」

「そんな！ 殿下の大事は私の大事。むしろ私から出したいくらいです。否、出します。というわけでお返しは却下します」

清清しく笑うリシャウスを見て、ヴィンスも緩く笑って肩を竦める。

何だかんだ言っても、教師と教え子で仲は良いようだ。何となく信頼関係のようなものが垣間見える光景だった。

「では、後はこちらで処理致します。殿下は、今日は神殿にてお休み下さいませ。お客人方も……」

「いえ、我々は失礼します。気遣いには及びません」
デイルが素早く断った。

「左様ですか。では、こちらで少々お待ち頂けますか。ささ、殿下、お部屋に案内致しまする」

「ええ」
ヴィンスは頷いて立ち上がり、そこで流衣達を見てにっこり笑った。

「私を助けて頂き、本当にありがとうございます。短い間でしたが、とても楽しかったですよ」

そして、そう一言残して部屋を退出していった。

パタンと木製の扉が閉まると、皆、どっとその場にへたり込む。

「……はは、まさかシャノン公爵様とは……」

額に冷や汗を浮かべて呟いたのはデイルだ。

「僕、あの神官さん苦手……」

げっそり呟いたのは流衣。

「おう、俺も苦手……。ていうか、レヤード侯爵って東一帯治める領主だよな？ デイル？」

重い溜め息をついてから、リドは思い出したように問う。

デイルは複雑そうに眉尻を下げる。

「そうだ。だが私は三男故、身分としては伯爵の地位を貰っている。

出来れば名乗りたくなかったのだが……。態度を変えられると哀しくなる」

沈んだ声で呟く。

流衣は首を傾げる。

「え？ でも修行中は一般人なんですよ？ じゃあいつも通りで良いよね？」

普通に言っと、デイルは目を見開いた。

「いつも通りにしてくれるのか？」

「くれるも何も、僕、敬い方と分からないし。僕のいた国、身分制度が無いからさ」

「そうなのか？ それでどうやって国が成り立つのだ？」

心底不思議そうに問われても、流衣にもさっぱりだ。時代の流れで変化しているのだから。

「貧富の差はあるけどね。でも僕はそれが普通で、こっちの方が良く分かんないや。王子様って言われてもピンとこないし」

「王族には頭はすぐさま下げた方が無難だぞ。無礼とか難癖つけて斬り殺す奴もたまにいるらしいしな。それは貴族も同じだけど」

リドの言い分に、デイルは苦笑する。

「だが、理由もなしに殺すのは犯罪に当たる。そういう暴挙を成す輩がいる場合、王国警備隊に名乗り出れば解決するぞ」

「そうなのか？ 噂とはいえ、結構信憑性あったけど」

「たまにしているのも事実だがな。ときどき暴君もいることだし、村人が王都に直訴しに行くこともある。そういえば、南の方の領地には暴君がいると聞いたな。まあそれが家臣であるならば、領主に告げれば解決する。領主が腐っていなければ、だが」

その辺の事情に詳しいデイルがすらすらと答え、居たたまれない顔になり、ふうと息をつく。

「そうなんだ、分かったよ。はあ、ややこしいな身分制度……」

前途多難な気がしてきた。

「で、いつも通りで良いんだよね？」

デイルはしつかり頷く。

「勿論だ！」

そんなデイルをリドはにやにやと見、オルクスはパサツと羽音をさせてデイルの頭に乗る。

「わては元々、敬う気なんてゼロですがね。女神様と坊ちゃん以外、皆、ただの人間ってだけですから」

ふふんと胸を反らすオルクス。

「そんなこと言って、デイルのこと気に入ってるじゃないか。リドもただの人間じゃなくて、喧嘩友達でしょ？」

流衣が口を挟むと、オルクスはちよつと慌てた。

「いいえ！ ご安心を、坊ちゃんが一番ですから！」

「……………何だ、その、浮気を疑われた亭主みたいな返事は」

リドは呆れ混じりに半眼で突っ込む。

「うん、ありがとう」

リドの突っ込みに軽く吹き出しつつ、礼を言う。

「坊ちゃん……………！」

主人に礼を言われてご満悦なオルクスは、バサバサと翼を羽ばたかせる。

「すまぬが、頭の上で暴れないでくれ」

そうデイルが申し出た時、また扉が開いた。

十六章 お礼

リシャウスは、オルクスがデイルの頭に乗っているのを見て、少し羨ましげな顔をしたが、すぐに扉を閉めて席についた。

「お待たせしました」

「いえ」

デイルが返事をする。

背筋はピンと伸び、軍人ばりの態度な上、受け答えもきびきびしているデイルを見て、リシャウスは感心げな顔をする。

「ははあ、流石はレヤード侯爵家の三男でいらつしやいますな。ああ、今はフィルフ殿が継いでおられるから、弟君とはなりますが。まだお若いのにご立派でいらつしやる」

「もしか兄上と面識がおありなのですか？」

「ええ。王城で開かれたパーティーでお会いしまして、少しお話した程度ではありますが。病弱だと伺っておりましたが、長身で聡明な優しい方で素晴らしい御仁でしたよ。流石は“東の百合”と噂されるご嫡男です」

デイルはそれを聞いて吹き出した。肩を揺らして笑いながら謝る。「いえ、申し訳ない。そのあだ名を兄上が随分嫌がっておいでな女性ならともかく何故私が百合なのだろうとおっしゃっておられて

……くくく」

確かに。流衣も内心で不思議に思う。

「でも、あのような外見では仕方がないと思うのですがね」

リシャウスは顎に手を当て、少し楽しげに笑う。

「お前の兄貴、一体どんな奴なんだ？」

リドが怪訝な顔を向けると、デイルはゴホンと咳払いをして笑いを鎮めてから答える。

「ああ、いやなに、兄上は病弱故、屋敷に引きこもりがちであるから、そこらの女子おんなこより余程色も白く、しかも線も細いのだ。加え、身内から見ても綺麗な顔をしていらっしやるし、佳人かじん薄命はくめいとはよくぞ言ったものだと思うぞ」

そこまで言つて、何を思い出したのかデイルはまた吹き出した。

「そ、それで姉上が一度、兄上に女装させたことがあつてな。くく、もうこれが笑えぬほど様になっていて、姉上はもう二度と女装させまいと申ししていた。自分が惨めになるからと」

「デイルのお兄さんとお姉さんつて色々と強烈だね……」

吐血が趣味の兄と、兄に女装させる姉。どんな人達なんだろう。

一度会つてみたい気もする。

「師匠も強烈だったしな」

当たり障りなく流衣は言つと、リドもそう付け足す。

「？ だから、どの辺が強烈なの？ 普通に綺麗な人だったじゃない」

流衣の問いにはデイルが渋面になる。

「リリエノーラ様は、見かけだけ美人だと言つただらう。容赦ないし我侘だし気分屋だしで、私は迷惑をこうむりまくっている。武芸や考え方や信条は尊敬しているが……」

「カイゼル伯爵殿は、ヴェルディー將軍の弟子なのか？ 彼女は弟子を取る気はないと聞いていたが……」

デイルは目を丸くする。

「ヴェルディー將軍？ 確かに師匠はリリエノーラ・ヴェルディーという名ですが、私が知っているのは 光弾 の騎士という呼び名です。たまたま城下で喧嘩を見かけて、あまりの強さに敬服して弟子入りしたのですよ」

今度はリシャウスが目を丸くする番だった。

「何と！ 彼女が女王陛下の側近である近衛騎士団団長と知らず、弟子入りしたのですか？」

「……側近っ？」「……」

流衣達は声を揃えた。

「私はてつきり、身分関係で考えて師匠に選んだのかと思いました
が……。いやはや、こういう偶然もあるのですな。しかし、よくヴ
エルディー將軍が弟子入りを認めましたな」

流石、王子様の教育係を勤めていただけあって、王城内の事情に
精通しているらしい。リシャウスは心底感心している。

「いや、一週間ほど様々な策を使って弟子入りを申し出たら、諦め
て許可して下さったのです。ははは、お恥ずかしい」
何故か照れたように後ろ頭を搔くディール。

リシャウスは褒めたわけではないと思うのだが。

「……ふうむ、ヴェルディー將軍の弟子ともなればさぞかしお強い
のでしょうか」

リシャウスの言に、ディールは首を振る。

「いえ、私はまだ修行中の身。腕はまだまだです。それと、私のこ
とはディールと呼んで頂きたい。修行中は身分は名乗らぬことにして
おります故」

「ああ、そんなことを申ししておりましたな。分かりました、ディール
殿」

ディールの申し出を受け、リシャウスは首肯する。

「ところでお三方、お礼を差し上げたいと思いますので、宝物庫の
方までおいで頂けますかな」

リシャウスがそう切り出して腰を上げると、流衣達は顔を見合わ
せた。

「お礼なんていらないですよ。僕ら、倒れている人を町まで連れて
きただけですし。ね？」

流衣がリドにふると、リドも頷きあつさりとした返事を返す。

「ああ、それに余計な物貰っても旅の邪魔になるだけだしな」

「私も修行中の身、贅沢は禁じているのです」

ディールもまた堅苦しく言う。

それにはリシャウスも啞然とし、気が納まらないと憤然とする。

「何をおっしゃいます！ 一人孤独に震えておいでの殿下の手助けをして頂いたのです！ ここで礼を尽くさねば、このリシャウス、一生の恥となります！！」

「わわわ分かりましたから、間を詰めないで下さいーっ！」

「ずんずん近付いてこれられ、流衣は椅子に座ったまま震え上がった。この人、自分が強面だと気付いていないのだろうか？」

リドとデイルも顔を引きつらせてぶんぶん頷いている。

皆、この人と距離が開くなら喜んで何でも受け取ると、心境が一致した。

そもそもヴィンスは孤独に震えてなどいなかったのだが、そんなことを突っ込む勇氣は誰も持ち合わせていない。

流衣の返事にリシャウスはとても満足げな顔になり、にかつと笑う。

「お分かり頂けて結構。では、ついてきて下さい」

客を脅すなよ、と三人はげんなりしつつ、リシャウスの後について部屋を出た。

「さて、何を差し上げましょうかな。折角ですし護符付きの物が魔法効果付与の物を差し上げたいですな。他にも、ああ、何にしよう」
先を歩きながら、リシャウスはぶつぶつと呟く。

白煉瓦造りの建物に満ちる静けさを残らず破壊している感じで、重い足音をさせて歩いていく。

通りすぎる神官達はそんな神殿長に呆れた視線を向け、会釈して通り過ぎて行く。呆れていても、目にはどこか親しみがこもっていた。

「そういえば、闇物の件、殿下より承りましたぞ。この町にもそんなに出回っているとは気付きませなんだ。後はこちらで対処します故、ご安心なされませ」

ふと思い出した様子で、肩越しに振り返ってリシャウスは言った。

それは良かったと返しつつ、宝物庫の前に辿り着いた。

どうやら神殿の一番奥まった所にある倉庫らしく、扉の取っ手には鎖が巻きつけられていて更に大きな鍵がつけられていた。扉もここだけは鉄製という嚴重な構えである。

「ここは六大神殿中の一つですからな。巡礼者からの寄贈品などが自然と集まるのです。余程高価でない限りは売って活動資金に当てさせて頂いているのですがね。芸術品から武器まで、このように一通り揃っているですよ」

鍵を開けて、ガチャガチャと鎖を外し、リシャウスは重厚な扉を手前に引く。

彼の言った通り、宝物庫の中には芸術品から武器まで様々な物が揃っていた。

「この物を一つ売れば、一財産にはなりますよ。さあ、中へどうぞ」

リシャウスに促されるまま、宝物庫へと入る。

「さてさて、どれを差し上げましょうかねえ。旅のお邪魔にならず、役に立つ物。うーむ……」

リシャウスは宝物庫の中をあちこち見てから、腰に手を当てて唸った。

「皆さん、何か希望はありますか？」

振り返ったの問いに、宝物庫の中の、骨董としても美術品としても価値があるだろうそれらに啞然と固まっていた庶民二人。流衣とリドはぶんぶんと首を振った。ディルの方は見慣れているのか特に気圧された風もなく、落ち着いた態度で返す。

「そちらで決めて頂いて結構ですよ」

「そうですね、困りましたな。うーむ、ディル殿はやはり光系の魔法が得意なのですかね？」

「ええ、あとは氷系統ですね」

「ということ、水の魔法強化が宜しいか……」

リシャウスは柵の方に行つてごそごそと引き出しの中を見て回り、素敵な笑顔を浮かべて振り返る。

「これなんていかがでしょう？ 昔、水の精霊が加護を与えたという獣人が作った人形です」

その手には、人魚の形をした手の平に乗る程度の人形が乗っていた。

デイルは頬を引きつらせる。

「い、いや、リシャウス殿？ 人形など、私は男ですし幼児でもありませんし……」

「美術品としても価値あるものですが……。ではこれは？」

リシャウスが次に取り出したのは、型に糸をぐるぐる巻きつけて出来ている人形だった。

「これは漂着した船から発見されたという人形です、セイレーンの加護があるとか」

「あの？ 何故そう人形ばかり？ そもそもそれは呪われた類では……？」

「いえいえ。漂着しても残ったのですから、縁起が良いと云われている品ですよ！」

「……………」

いや、どう見ても怪しげな空気を纏まとっているだろうその人形、とデイルはますます顔を引きつらせ、バツと手近な所を見回して、適当な物を引つつかんだ。

「ああ！ これが良い。良い文鎮ぶんちんになりそうだ」

取とつてつけたような言い分を口にして、デイルはそこにあった虎と目石らめいしのような天然石製の卵を褒める。卵の形をしたその石は両手で包めるくらいの大きさで、手にしてみるとずっしり重い。

このまま妙な品物を押し付けられるくらいなら、こっちの方が断然良い。

「おお、それは巡礼者の方が下さった品ですな。ノックス鉾山の中

で見つかった石だとか。そんな物で宜しいので？」

「ええ、勿論です。こ、こんな素晴らしい文鎮は見たことがありません！」

後半は棒読みであったが、リシャウスはそれで納得した。

「流石は貴族ですな、文房具にこだわりを持たれて。本当に素晴らしい！」

にこにこ褒めるリシャウス。

……というかそれは文鎮で合っているのか？

流衣はそう思ったが、口には出さない。だって飛び火しても怖いし。

「では次は……」

そう言ってリシャウスがリドを振り返った瞬間、妙な物をすすめられる前にと、リドは部屋の隅にかかっている外套がいとうを電光石火の勢いで指差した。

「俺、あそこにある外套にして良いですか？ 最近冷え込んできたから、丁度上着買おうと思ってたところなんですよ」

それは嘘ではない。

実際、リドは外套もマントも着ていないから、そろそろ古着屋かどこかで買おうと考えていた。

「あそこにあるのは、魔法効果が付与された衣服ですな。リド殿は、どういう物が宜しいですか？ 身軽さを増すとか、防護ほごしの加護入りとか、あとは魔法属性強化もありますか？」

「それなら、風の属性強化がいいです」

リシャウスは服掛けにかかっている外套をあれこれ手に取ってみて、リドを振り返る。

「この中の物がそうですね。好きな形の物を選んで下さい」

「はいっ」

きぱつと返事をし、リドはそつちに向かう。

風の魔法属性強化が付与された外套は左から五着のようだった。どれを選ぶのだろうと、流衣もついてって横から見ると、

「あ、その黒いの良いんじゃない？」

ダブルボタンの外套が、軍人みたいでカッコイイ。リドだったら赤い髪が映えて格好良さそうだ。

が、流衣の言葉にリドは首を振る。

「いや、黒い上着なんて怪しいだけだろ。俺は魔法使いみたいな全身真っ黒ローブは趣味じゃねえや」

「……もしかして、黒イコール怪しい人って思ってるの？」

何となく、学ランを全力で怪しいと否定していた理由が見えた気がした。

「当たり前だろーが。黒とか暗い色の服なんざ着てる奴は、闇に紛れる為にそういう服を着ている奴が多いからな。いちいち余計な詮索されても面倒だ」

リドはそんな答えを返しながら、一着を引き出した。

明るめの黄土色の地に縁取りふちどりが黒という、色合いが見た目にも綺麗な物だ。こちらもダブルボタンだが、それ以外には余計な飾りはない。リドは指で素材をつまんで分厚さを見て、気に入ったのか満足げに頷く。

「うん、これなら静謐せいひつの月つきでも平気だな。リシャウスさん、試着して良いですか？」

「勿論です」

リシャウスが許可をくれたので、リドは腰に吊っているダガーや鞆をまとめて外して床に置き、外套を着た。

「お、ぴったりだな。首も苦しくねえし」

詰襟だったので、首元の布を指でくいくい引っ張ってみたりするリド。

「しかもすっげえ軽い。これ、素材なんなんですか？」

リシャウスは壁にかかっていた小さな冊子を取り、パラパラとめくる。どうやら冊子は宝物品リストらしい。

「モフルーの毛で織られたものですね。軽いのは、風の魔法効果付与がかけられている為です。あとは、ええーと、熱を和らげる効果

付きですな。暑さにも寒さにも対応が効くようです」

「モフルーすか、そりやまた高価な……」

これ選んだの失敗だったか？ リドは外套を見下ろす。そこまで値の張らなさそうな物を選んだというのに……。

「モフルーって何？ ウイング・ドレイゴン 羽竜とかそういうの？」

流衣の問いにリシャウスが答える。

「モフルーというのは、黄土色の長い毛が特徴の山羊です。山羊といっても、牛並みの大きさはありますが。見た目がモフモフしてるんですよ、それでモフルー」

「うわあ、モフモフですか、可愛いんでしょうねえ。羊みたいにモコモコしてる感じかな？」

目を輝かせる流衣に、リシャウスはわははと豪快に笑って否定する。

「まさか、可愛いなんてとんでもない！ 気性の荒い動物ですんで、飼育するのが大変なんですよ。木の柵なんか、突っ込まれれば粉砕ふんさいしますしな！」

「え？ 壊れるんじゃないか？」

「そうです。粉碎です」

流衣はゾツとした。何ていう凶暴な。

「しかしその毛で織った布は素晴らしいのです。ほら、その外套のように、布なのに僅かに光沢をもっているでしょう？ モフルーの布で織った布は、市場じゃ高値で取引されるものです。貴族の皆さんがこぞって手に入れられようとするので、自然と値も高くなりま
すしね」

「へえ、でもそれでもよく飼育出来ますね？ むしろ毛を刈る前に重傷を負いそうですけど……」

「魔法使いが眠らせますから、そんなことは起きません。あとは、紫色の物を見ると興奮するので、紫色を徹底的に排除するしかないですね。残りは飼育者がちょっと特殊つくくらいですか」

リシャウスはそう言って顎をしゃくる。

特殊？ 不思議に思ったが、リシャウスがそこでリドに話しかけたのでそれ以上は聞けなかった。

「どうです、サイズもぴったりなようですし、このまま着ていかれ
ては？」

「はい、ではありがたく頂きます」

リドは丁重に礼を述べ、外套の上に、ダガーの鞘が取り付けられているベルトをつけ、皮製の工具入れのような形をしている腰に巻く形の鞆もまた付け直す。

「では最後にルイ殿ですな。見た所魔法使いのようですし、魔力の上がる効果付与の物が良いでしょうかね」

恐らく善意からだろっリシャウスの何気ない一言に、流衣は猛然と首を振って断る。

「いいえっ、そういうの以外でお願いします！」

鬼気迫った調子で言い募ると、リシャウスは気圧されて身を反らす。

「さ、左様ですか？ 変わった方ですな……」

目を白黒させつつ、宝物庫内を見回すリシャウス。そこへオルクスが流衣の肩から飛び立ち、リシャウスの肩に乗った。

「我が主人は、瘴気に当てられやすい体質でシテ。なにか、対策になるような、物はありませんか？」

女神付きの魔物に肩に乗られ、感動して目を輝かせるリシャウスだが、問いを受け、冊子をめくって調べ始める。

「それはまた難儀な体質ですな。稀に、そういう体質故、どうにかしたいと神官を志す者もおります。そういう者でしたら、修練を積み、聖法の術三・浄化を身に付けるよう勧めるのですが……」

そうひとしきり唸っていたが、やがて表情を明るくする。

「ああ、一つ良い物がある」

リシャウスはどたとと宝物庫の奥に行き、そちらの小さな引き出しが幾つも付いている棚の前で、ガコガコと引き出しを開け始めた。やがて「あったあった」と呟きながら、手にした箱を持ってく

る。

手渡された箱を開けると、中身は直径三センチほどの丸いペンダントだった。といっても、表面は鏡、裏面には神殿を示す紋章。三本の線の下に上が平らな楕円の形がある。が掘り込まれた銀製の物だ。ペンダントというよりは、メダルに近い感じだ。

「これは、百年前に存在していた、浄化を得意とする神官が身に着けていた、と云われている首飾りですな。その方の力が宿っているのか、邪気を弾くものだそうです。実際に弾かなくとも、弱めるくらの効果はありましよう。名は『まがえ魔返しのしずく雫』というそうです」

流衣はまじまじとペンダントを見て、恐る恐るリシャウスの強面を見上げる。

「良いんですか？ そんな凄い物を頂いて……」

「ええ、良いのです。ここにありましても宝の持ち腐れ。殿下のこどもでも感謝しております故」

「ありがとうございます！」
流衣はぺこっと頭を下げ、箱を落とさないようにしっかりと手に持った。

これであの気分の悪さが減るのならば助かる。オルクスの気配りの良さに感謝だ。

「オルクスもありがとう」

『どういたしまして、お役に立てたのなら結構です』

オルクスは誇らしげにそう言っつて、流衣の肩に戻ってくる。

リシャウスはそれをまた羨ましげに見てから、真面目な表情を作った。

「さて、お礼は致しましたところで、少し皆さんにお話があるので
す」

三人はリシャウスの方に注目する。

何の話だろう？

「殿下の話ですと、貴方がたはお若いながら腕の立つ様子。もし都合が悪くなければ、王都までの道中、殿下の護衛をお願いしたいの

です。勿論、こちらからも腕の立つ者を四人程付けます。あまり目立たない方が良いでしょうからな」

そこでリシャウスは言葉を切り、少し苦笑する。

「実を言いますと、殿下には親しい友人があまり多くはおられぬのです。貴族でなら何人かおられるようですが……。歳の頃も近いようですし、宜しければ、話し相手になつて頂きたいのですよ」

「でも、デイルはともかく、僕なんて自分でも怪しいって思うんですけど……？」

貴族であるデイルと違い、流衣とリドは一般人だ。流衣なんて異世界からやつて来た人間だし、リドは故郷や家族を覚えていないから身元不明である。

「第三の魔物様を連れておいでで、怪しいも何もありません！ それに、偶然見つけた怪我人を放置せず、その上、町まで連れてこられるような方々です、信用するには十分ですよ」

にっとなつりリシャウス。

この人の笑顔だと、にっこりとか微笑むなんて単語は使えない。

少し笑っただけで豪快になつてしまふ。

「ふうむ、私は面白がつて君達の旅に同行している身、判断は君達がしてくれ」

デイルがばいと判断を投げ、リドもキャッチしたボールをあつさりとルイに投げ渡す。

「あーそれ言うなら俺もだな。どうする？ ルイ」

二人ともずるい。流衣はちよつと恨めしく思いつつ、頷く。

「どつちにしる同じ方向だし……、良いよね？」

それでも自信がないので二人に問い返す。

「それでこそルイだな！」

「……どの辺がそれでこそ？」

何故かデイルが嬉しげに肩を叩いてきて、軽くよろめきつつ、流衣は返す。何だろう、リドといい、そんなバシバシ肩とか背中とか叩かなくてもいいじゃないか。……まさか叩きやすい高さにあるの

だろうか？

「それはありがたい。ではどうぞ宜しく頼みます。殿下は明日にでも出発されたい様子。明日の早朝、神殿前にて集合で宜しいですか？」

特に異存はないので、三人とも頷いた。

それなら今日中に食料や必要な物を買に行かなくてはな、と流衣は予定を考え出した。

十七章 卵

神殿を出て、店の集中している通りを歩きながら、適当に食料や水を調達したり、魔法道具屋を探して魔晶石を作って路銀稼ぎをしたりして一通りの用件を片付けた頃、前触れもなくデイルが笑い出した。

「はははは！」

唐突に笑い出したデイルを、リドは不気味そうに見る。

「何だ、どうした？ 拾い食いでもしたのか？」

「ははははっ、そんな意地汚い真似はせん！ はははは、なんだ、くすぐりたい！」

そこで流衣はデイルの上着の、ちょうど脇腹の辺りが少し膨らんでいて、そこがモゾモゾ動いているのに気付いた。

「そこ、上着の中に何かいるみたいだよ？」

「何？ ははははっ、おかしいな、ここにはさっき文鎮を入れたはずだが……」

ははははっ、とまた笑いながら、上着の中に手を突っ込んで、デイルは動いているそれを引つ張り出す。

いや、だからあれって文鎮なの？ と問おうとした流衣であるが、出てきたものを見て動きを止めた。横でリドが息を呑んだ。

「ピギヤッ」

可愛らしい鳴き声を上げたそれは、リスくらいの大きさの小さな

『竜リウですわね』

何気なくオルクスが呟き、流衣はあわあわとそれを指差す。

「なっとなな何でどうして」

数秒固まって真っ白な体躯に水色の目をした竜の子供を凝視して

いたデイルだが、すぐさまズボツと上着の中に押し込み直した。むぎゅつと潰れた声があったが気にしない。

町の人に見られでもしたら大騒動だ。

動作は冷静だが、しかし頭の中はパニック寸前である。

「どうやらあの石、竜の卵だったみたいですね」

オルクスがさらつと言い、デイルは愕然とした顔になった。何でと言いたげに青い顔で口を開閉させるが、シヨックが大きかったのか声になっていない。

「ああ、大丈夫ですよ。竜は、卵から出て、最初に見たものを、親と認めますから、デイルが親です。よって親が町に奇襲をすることは、ないでしょう」

「そういう問題じゃない！ いや、そういう問題か？ いやしかしだな！」

軽く混乱気味に頭を抱えだすデイル。

「ひとまず、宿に帰るぞ！」

リドがそう提案し、デイルと流衣はひたすら頷いて、三人揃って宿屋まで猛ダツシュした。

「落ち着こう。何でこんなことになったんだ？」

宿屋に駆け込むなり、奇異の視線を向けてくる宿の主人の目を無視して部屋まで走りこむと、きつちり扉を閉め、鍵までかけてから、デイルはゼーゼー肩を揺らしながら口火くちびを切った。

残りの二人も似たようなものだったが、どう見てもデイルが一番うるたえている。

恐らく一番落ち着いているだろうリドは部屋のカーテンを閉めると、左から二番目のベッドに座り、パンパンと手を叩いた。

「はいはい、ここに集合ー」

その抜けるような声に従い、流衣とデイルも靴を脱いで、同じベッドに上って座る。

リドはポスポスと三人の真ん中の布団を手で叩く。

「ほら、ここにそいつ出せ」

「う、うむ」

デイルは促されるまま、子供の竜をそこに置いた。

が、その竜はピギャピギャ鳴いて、デイルの膝元まで戻ってしま
う。

「うわ〜可愛い」

動物好きである為、その仕草だけで表情を崩す流衣。

「まじでデイルのことを親と思ってんだな」

感心気味に眩き、リスくらいの大きさの竜の子の背中をツンと指
でつつくりド。

「うお、硬い。さすが竜、こんなチビでも鱗ウロコ生えてら」

「やっぱり竜なのか……」

表情を強張らせ、デイルはどうしようかと途方に暮れた顔になる。

そこへオルクスが竜の子の側に降り立ち、じろじろと竜の子を観
察し始めた。

「うーむ、この竜、どうやら小型竜ミニドラゴンの子のようデスな。成長しても

体長七十ケルテルの、小さな竜ですヨ」

「ケルテルってどれくらい？」

「これくらいが十ケルテルだな」

流衣の問いには、デイルが長さを手で示して答えてくれる。ほぼ
十センチくらいと変わらないから、大体七十センチということらし
い。

「でもさ、何でそんな竜の卵が神殿の宝物庫にあったんだ？ しか
もリシャウスさんのあの言い方だと、普通の石だと思ってたみたい
だったぞ？」

「竜の卵は、見た目はその辺の石と、変わりませんからね。大きけ
れば、竜の卵と、判別できるでしょうが、あんな小さな卵です、偶
然卵の形をした石が出たのだと思ったのでしょ」

ギョピ〜？ と小首を傾げている竜の子を見て、流衣は複雑な気

分になる。

「親の竜はどうしてるのかな？ 心配してるんじゃない？」

それにはオルクスが首を振る。

「いいえ、小型竜は子供の面倒をみませんから。この竜が卵から孵るには、魔力が必要になりマス。鉱山のあるような、大きな山には、大抵、魔力の溜まり場が存在しますから、そこに産んでいったのでしよう。あとは、自然と孵って、自分で生きていきます」

オルクスはそこで息をつき、また続ける。

「しかし孵化する前に、人間に見つかった為に、孵化する為の魔力が足りなかったのでしょうか。そこでデイルが懐に入れていたものですから、デイルの魔力を吸い取って、孵化したのでしょうか」

デイルは眉を寄せた。右手の平を見つめ、むむつと唸る。

「確かに、言われてみれば、魔法を使っていないのに随分魔力が減っているな」

それから困りきった様子で頭をガシガシと掻く。

「しかし困ったな。知らぬとはいえ孵ってしまったわけだし、放り出すわけにもいかぬ……。かといって子供の竜を連れていては、魔物を引き寄せてしまうし……」

「それなら、使い魔として側に置いておきなさい。竜は親には忠実な生き物、きつとあなたの役に立つでしょう。魔物については、仕方ありませんね、今後坊ちゃんと行動を共にするのでは、迷惑となりますし、わてが封印してさしあげます」

ただし、大人に成長したらもう引き寄せませんから、その時は解除しますからね、と、オルクスは言う。

「かたじけない」

デイルは申し訳なさそうに頭をうつむかせる。

オルクスは流衣に血と魔力を貰う許可をとり、流衣は前と同じようにリドからダガーを借り、指先を軽く切ってオルクスに手を差し出した。その後はいつも通りだ。

そして、パツと空気から溶け出すようにオルクスが青年の姿をと

った。先に、流衣の指の切り傷を治してから、オルクスは静かな声で呟き始める。

「わて、愛と慈悲の女神ツィール力様にお仕えする、第三の魔物オルクスが命ずる。悪しきもの引き寄せしその性、光よ、壁となりて困い、風よ、その響きを断ち、悪しき魔より遠ざけよ」

オルクスが一言を呟く度、竜の子を光が包み、風の膜が張られ、幾重にも重なり合っていく。

「祝福よ、ここにあらん」

パチン、と両手を合わせたところで、光と風が掻き消えた。

それで封印は終わったらしく、オルクスは疲れた様子で肩を下げた。

「ふう、この封印は制約ぎりぎりです。疲れました」

それと同時に、何故か流衣の方もどつと疲れを感じた。少し不思議に思いつつ、ひとまず労うことにする。

「お疲れ、オルクス」

「いえいえ、それよりいつもより多く魔力を頂いてしまいました、申し訳ありません」

そう謝った瞬間、すーっと青年の姿が掻き消え、オウムの姿に戻った。

「あれ、今日は戻るの早いんだな。いつもは三十分くらいはそのままじゃねえか」

リドの問いに、オルクスは面倒そうに返す。

「言ったでしょう、疲れると。そういちいちこんな封印してられませんかよ。坊ちゃんにも負担がかかりますし」

それで自分まで妙に疲れているのか。

流衣は納得して頷いた。

「でもこれで封印終わったんでしょ？ 良かったじゃない、魔物引き寄せなくなっただし、この子も放り出されずに済むし」

一件落着だ。流衣は竜の子供を見下ろした。

それにしたってこの竜の子、可愛い。

白い体躯のトカゲに、藍色の羽が生えている。水色の目がクリクリしていて可愛らしい。

蛇みたいな生々しい爬虫類は苦手であるが、これなら普通に可愛がれる自信がある。

「ほんと可愛いねー、何食べるんだろ、この子」

流衣は、竜の子の頬辺りを指先でツンツンと突きながら、笑顔でオルクスを振り返った。その時、がぶつと竜の子はその指先に噛み付いた。

「!!!?」

びっくりしてそつちに目を戻した瞬間、魔力をこっそり引き抜かれるような感じがした。

一瞬目の前が暗くなり、身が前へと傾ぐ^{かし}。

「大丈夫かつ?」

ハツと我に返ると、デイルが左肩を支えてくれていた。

ますます肩に疲労感を覚えつつ、頭を軽く振って、奇妙な浮遊感を追い散らす。

「な、何だろ、今の……」

竜の子はすでに指を放しており、右手の人差し指には噛み痕がくつきりついてダラダラ流血していた。流衣は仰天して目を丸くするが、何か言う前に、オルクスがキーツとわめき散らした。

「こんのクソガキ、坊ちゃんの魔力を喰らいやがりました！ なんていう恩知らず！ リド並みに腹の立つクソガキですね!!」

「悪かったな！ 腹の立つクソガキで！」

リドが不満げに横から口を出す。

流衣はそんなリドに苦笑しつつ、流血中の指をどうにかしようとして靴を振り返る。一番窓際のベッドが流衣の使っている所だったので、そちらに行こうとベッドを下りる。

「!」

しかし膝に力が入らず、そのままずるっと滑って床にぺたんと尻餅をついた。

「えっ？」

座ったまま、ポカンとする。

何だ、今のは。

「あわわわ、坊ちゃん、じっとしてて下さい！ 急激な魔力の消費に、身体が追いついていないんです！」

「そうなの？ ええと、どうしよう」

座り込んだまま、困り果てる。

「って怪我してるじゃないですか！ あんのクソガキヤ、ただじゃおきません！！」

今になつて噛み痕に気付き、オルクスは更にヒートアップしつつ、怪我を治癒してくれた。

その後、すぐさま竜の子に飛びかかろうとするのを、慌ててオルクスを抱え込んで止める。

「ちよつ、待った、ストップ！ あんな小さな子なんだから仕方ないでしょ！ 落ち着いて！」

「落ち着けませんー！！」

「そこを何とか！ オルクスは冷静な大人の魔物でしょ！」

何でこう、いつも喧嘩を止める役になるのだろうか。

争いごとの空気は苦手なのに、血の気の多い使い魔を持つと苦労する。

「……ってことはなんだ、このチビ助、魔力を食べるってことか？」

とても満足そうに目を細め、丸くなって寝る体勢に入った竜の子を見下ろし、リドは首を傾げる。

流衣に両手で押さえ込まれてブスツと膨ふくれながら、不機嫌な声で答えるオルクス。

「そうですね。正確には、魔晶石を食べます」

「……それは相当な出費になりそうだな」

魔晶石は高価な物だ。

晶石を買って、ダイヤルが魔力を入れてもいいが、それでは量もたかが知れている。

今後のことを考え、頭痛を覚えるデイル。

「だったら、天然ものを拾ってあげればいいよ。僕の鞆に、いっぱい入ってるし」

ヒノツクに来るまでに拾っていた天然ものの魔晶石が鞆に入っている。一度宿に戻ってきてから売りに行くつもりだったから、まだ売っていなかったのだ。

「むむむ、かたじけない。私にも天然ものが見えれば良いのだがな。面倒ばかりかけて、本当に済まない……」

心底バツが悪そうにうなだれるデイル。デイルも魔力は高い方だが、小石程度の天然ものまでは見えないらしい。

流衣は小さく笑い、それから自身もバツの悪い顔になる。

「ところで、あの、手を貸してもらっていいかな？ 足に力が入らなくて……」

「ああ、すまん！ そうだったな！」

「それならこれで良いか？」

デイルが手を貸そうと右手を差し出した瞬間、リドは風をひよいと操った。

「うわっ！？」

ふわっと風が収束し、流衣の周りを包み込んだ。

驚いたことにそのまま身体が浮き上がり、またベッドの上に戻る。

流衣はぼかんとリドを見た。デイルも啞然と口を開いている。

「なんだよ、んな顔で見るなよ」

居心地が悪そうに身を引くリド。

デイルはしみじみと感嘆して言う。

「リド、君はそんなことまで出来るのか？ 結構万能なんだな」

「まさか空も飛べたりするの！？」

流衣は目をキラキラ輝かせ、リドの方に身を乗り出す。

「落下を弱めるとか、それくらいしか出来ねえよ。そこからベッドくらいの高さなら、物も浮かせられるけどな、あんまり重いと無理だけど」

「すっごー！　すごいよリド！　超能力者っぽい！」
空中浮遊だ！

風を使うわけだから、種も仕掛けもあるけど。

「チヨウノウリヨクシャ？　また意味の分かんねえことを……」
意味が分からない単語を聞き、リドは眉間に皺を刻む。

「んなことより、そのチビ助の名前でも考えろよ」

リドはそう言って、話の矛先をずらした。

褒めているのだからもうちょっと喜んで良さそうなものだが、
リド的にはあまり騒がれるのは好まないようなので、流衣もその流
れに乗る。

「飼い主が決めた方がいいと思うな。何か良い名前ある？」

「む、名前か。急に言われてもな……」

腕を組んで真剣に考え込むディル。

リドはにやりと笑って提案する。

「俺はチビって名前が良いと思うな」

「……それはまたどうして？」

流衣は嫌な予感を覚えつつ、理由を訊く。

「小さいから」

「……………」

流衣は黙り込み、そのままディルを振り返る。

「ディルは？」

「おいつ、無視すんなよ！」

リドの突っ込みはこの際聞かなかったことにする。これでは竜の
子が可哀相だ。

ディルはひとしきり唸ってから、満足げに言う。

「ピギヤだ」

「……はっ？」「……」

他二名と一羽は耳を疑った。

今のは名前なのか？　そうなのか？

「ええー…と、ちなみにどうして？」

「ピギヤと鳴いていたからだ。それとも、ヒノック神殿にいたからヒノックとか……」

大真面目にそんなことを呟いている飼い主を前にして、流衣は危機感を募らせた。

この二人に任せてはいけけない。

これでは竜の子が可哀相すぎる。

「白いから雪とかスノーとか、ノエルとか、色々あるじゃないかつ。何でそんな名前になっちゃうのさ」

流衣が抗議すると、デイルはパツと顔を輝かせた。

「それ良いな、ノエル。どういう意味だ？」

「え？ 僕の世界じゃ、十二月二十五日がクリスマスっていう、ある宗教の聖なる日なんだけど、その日に生まれた子供に付ける名前だよ。外国の場合だけどね。雪っぽい色してるから何となく思い出しただけ」

「聖なる日に生まれた子につける名か、良いな、気に入った！ それにしよう」

デイルはバシツと自分の膝を打った。

その前で、小さな竜の子はスヤスヤと眠っている。

ピギヤという名前よりはマシだろう。

適当に言った名前が採用されたのに驚きつつ、流衣は妥当なところだと判断する。

……しかし、リドとデイルは世間慣れしていて何でもこなせるといふのに、ネーミングセンスに問題があるとは思わなかった。人間、完璧な人はそうそういないものらしい。

夜が明けてすぐの石畳いしだたみの街並みには、ひんやりとした空気が漂っていた。

まだ空は仄かに明るい程度だが、白く滲んだ空は快晴だ。

流衣はそんな朝の空気を胸いっぱい吸い込み、眠さにしよぼつく目をこすりながらリド達とともに神殿へと向かう。歩いているうちにだんだん頭がはつきり起きてくる。

火の神殿ヒノツクの玄関口まで来ると、そこにはすでに神官が五人待機していた。二頭立ての馬車が一台置かれていて、馬を配置したり荷物を運び込んだりしている。他にも鞍くらの置かれた馬が四頭用意されている。栗毛色の馬だ。

そのうちの一人、リシャウスは流衣達の姿を認めて破顔し、右手を上げる。

「お早うございます、皆さん」

三人はそれに挨拶を返しながら、荷馬車の方へと駆け寄る。

「もはや遅れてしまいましたか？」

「いえいえ、まだ準備中ですから大丈夫ですよ」

遅刻を心配してのデルの問いに、リシャウスは首を振る。

「待っている間、紹介をしておきましょう」

リシャウスはそう言って、他の神官四人から一人を手招く。

臙脂色の男物の神官服を身に付けている細身の女性が一人、流衣達の方にやって来る。ウェーブのかかった長い茶色の髪を後ろの方でバレッタを使ってまとめ、同色の柔らかいブラウンの瞳をした彼女は、顔立ちも優しげだ。他の神官達が武器を携えているのに対し、彼女だけ何も持っていない。

「彼女はアンジェラ・リーベルです。今回の護衛のリーダーとなり

ますので、何か質問や気になることがあれば、彼女にご相談下さい」
「アンジェラです、どうぞよろしく」

アンジェラは右手を左胸に当て、ふわりとお辞儀をする。

彼女は二十代前半くらいのも、動物に例えるなら栗鼠っぽい感じの雰囲気をしている上品な女性である。それに砂糖菓子みたいな甘い空気をしていて、成人した女性に使うのもなんだが可愛らしい人だ。

「ルイ・オリベです」

「リドだ」

「デイルクラウド・レシムと申す」

三人もそれぞれ名乗り返す。

挨拶が済むと、リドは怪訝な顔でアンジェラに疑問を投げた。

「気を悪くしないで欲しいんですが、どうしてあなたがリーダーなんでしょうか？ 武器持ってねえし、言っちゃ悪いけど、ちょっと叩かただけで折れそうな感じがしますけど」

アンジェラの方はそれを聞くと、花を撒き散らすような笑顔を浮かべた。

「嬉しいこと言ってくれるわね。ふふふ、でもね、大丈夫よ」

「そーそー、アンジェラは俺らの中じゃ一番強いからね！」

馬の面倒を見ていた、ゆるくウェーブのついた茶色い長い髪を首の後ろで一つに束ねた男が、振り返ってそう言った。二十代半ば位の青年だ。あははと金茶色の目を細めて緩く笑う様子は、軽い性格のように見える。この人もまた臙脂色の制服を着ており、馬車の側面に槍を立てかけていた。彼の武器なんだろう。

彼の発した言葉とともに、アンジェラの笑顔にピキリとヒビが入った。笑顔のまま、だんだん眉間に皺が寄っていく。

「おい、やめとけエドガーさん。また姉さんに半殺しにされても知らないぞ？」

荷馬車の後部に荷物を詰め込んでいる短い黒髪の男が軽口を叩く。目が細すぎて閉じているように見えるが、多分開いているはずだ。年齢は二人よりは低めで、二十歳前後というところか。

身長はエドガーと呼ばれた男より若干低いくらいだが、175センチくらいはあるだろうと思う。彼もまた、馬車の側面に槍を一本立てかけている。

「……………自爆ね」

階段口に立っていた女が、そんな二人にぼそりと呟く。

彼女も黒髪の青年と同じくらい年齢に見えるが、種族も服装も若干違っている。本来、人間の耳が生えているはずの場所に黒い獣耳。猫耳だろうか？　が生えている。他は人間と変わらない姿形だ。

少し青みがかって見える黒髪をショートにしており、目は紺に近い青色で、ちょっと吊り目がちだ。上着は同じ臙脂色の制服なのだが、臙脂色のショートパンツをはいている。そして、そのすぐ裾につくつかないかギリギリの高さまでの黒いハイソックスをはいていた。ただし靴はアンジェラと同じ、臙脂色の布製のブーツである。更に、何故か彼女だけ、白い毛糸のマフラーを首に巻いている。

まだ秋なのに、と、流衣はまじまじとマフラーを見てしまう。そしてたらじろつと見られた。まるで「じろじろ気安く見てんじゃないわよ、クソガキ」という目で。被害妄想でなければ、多分。

気のせいか四人の中で一番気性が荒そうだ。腰にスローイングナイフが幾つも装着されたベルトと、中剣を提げているのからも然り。「ふふふふ、やだわ、先輩ったら。私、そこまで強くありませんわ」アンジェラはどこか黒い笑みをにこにこ湛えながら、楚々とした足取りでエドガーの側まで歩いていき、そしてエドガーの前に立つなり閃光のごとく身を翻した。

次の瞬間、ゴツという鈍い音がして、エドガーが地面に倒れた。素晴らしい速度で上段回し蹴りを放ったアンジェラは、ふわりと静かに両足を揃えて立つ。

うふふ。頬に手を当てて、可愛らしく微笑むことも忘れない。

「私が強いんじゃないわ、先輩が弱すぎなんですわ」
流衣達はその光景に度肝を抜かれた。

この場合、正確にはアンジェラが強すぎなのでは？

「ててて、ひどいよアンジェラ。出発前に蹴り入れなくても」

あんな強烈な蹴りを側頭部にくらいながらも、しばらく地に沈んただけで身を起こすエドガー。

「……アンジェラさんも凄いが、起き上がるエドガーさんも凄いな」
デイルがぼつりと呟く。

確かに。

流衣は頬に冷や汗をかきつつ思う。

「ははは、この通り、我が神殿一の手練を集めましたからな。まあ心配はいらぬでしょう。ちなみに、今蹴倒された男がエドガー・ライサンで、そっちの彼がアンジェラ君の弟のリッツ君だ。で、あっちの亜人の女性はビィ・ホルテンス。彼女は亜人らしく寒さに弱くてな、旅の間は少し気遣ってあげて欲しい」

……本当にすごいのは、あの光景を笑って流せるこの人かもしれない。

朗らかな笑顔で紹介までしてのけたリシャウスに対し、流衣は初めて畏敬の念を覚えた。

「分かりました」

デイルは三人の中で代表して返事をし、それから苦笑する。

「ところでリシャウスさん」

「はい」

「昨日、頂いた石なのですが。あれ、どうやら竜の卵だったらしく、そう言っつて、デイルは昨日と同じように上着の中に入れていたノエルを取り出す。他の所だと潰しそうだし、表に出すわけにもいかないかららしい。」

ノエルが出てきた瞬間、場の空気が凍りついた。

「ぬあつ、りゅ、竜の子ーっ！」

パニックに陥りかけたリシャウスに、オルクスが冷静に言う。

「大丈夫ですよ、わてが封印をかけておきました。ノエルはデイルを親と認めていますし、使い魔として飼わせることにしたのです」

「オルクス様！ そんなことが出来るのですか！？」

ぎよつと目を剥くりシヤウス。

迫力が増して怖い。

「制約ギリギリでしたがね、疲れましたが出来ました。だから心配はいりませんよ」

「さ、左様でございますか。流石は第三の魔物様でいらつしやる…」

ポケットから取り出したハンカチで額に浮かんだ冷や汗を拭ぬぐいつつ、感心しきりで頷くりシヤウス。

「まあ、ではそちらのオウムが、昨日伺ったお話の使い魔様ですか？ お会い出来て光栄でございます、どうぞ宜しくお願い致しますね」

アンジェラは一礼してから、両手を組んで祈りまで捧げる。気付けば、他三名の神官も祈りを捧げている。

「オルクス、すごいんだね……」

流衣は呆然と肩の小さな友人を見やる。

本当に僕なんかの使い魔でいいのかな、と、少し心配になる。

「どういたしました」

しかし流衣の心境などお構いなしに、オルクスは嬉しげに黒い目を細めた。

「どう見てもただの小うるさいオウムなのにな」

リドは信じたがたそうにオルクスを見やって言う。

「いちいちうるさいのはそつちでしょうガ！」

すぐさま反応し、言い返すオルクス。

「はいはい、喧嘩しない喧嘩しない」

朝からこれだと疲れてくる。

睨みあいが始まる前にと、急いで宥める。

「皆さん、お早うございます」

と、そこへヴィンスが現れた。腰に長剣を携え、どういつ訳か臆脂色の神官服を身に着けている。

ヴィンスが挨拶した途端、その場の全員が地面に膝をついて頭を下げたので、流衣も慌てて同じようにした。

「お早うございます、殿下。よく休まれましたか？」

リシャウスの問いに、ヴィンスはにこりと頷く。

「ええ、手厚いもてなし、ありがとうございます。これから王都までどうぞ宜しくお願いしますね」

「はっ！」

リシャウス以下全員が声を揃える。

流衣だけは何もいけず、口パクだ。

「貴方がたも、護衛を引き受けてくれたということで、嬉しいです。不謹慎とは思いますが、少し楽しみです」

ヴィンスは楽しげにそう言うと、馬車に乗り込んだ。

中は四人がけになっているらしく、側控えの護衛なのかエドガーが乗り込む。

アンジェラは用意されていた馬に乗り、リッツは御者席に陣取り、ビィは徒歩のまま前の方に向かう。

「貴方がたはこちらの馬をお使い下さい」

そう言われた流衣は、途方に暮れた顔で馬を見つめた。

リーネクラウの森は穏やかな日差しの降り注ぐ、明るい森だ。豊穰の月も半ばである為、木々には実がなり、黄や茶色へと色を変えつつある草花にも小さな花や実がついている。鳥達のさえずりが響き、長閑な気分になる。

「ごめ……すみません、護衛なのにこつちにおいて……」

エドガーの隣りにちょこんと座り、流衣は目の前にいるヴィンスに謝った。

馬車の中は四人がけになっていて、座席はふかふかでクッションが備えつけられている。座席間がきつきつというわけもなく、足もゆったり伸ばせる。

本物の馬車に乗ったのは、当たり前であるが人生初だ。

「仕方ないですよ、馬に乗れないんですから……」

ヴィンスはクスクスと笑いを零す。

そうなのである。

現代っ子で、しかも平凡なサラリーマン家庭で暮らす流衣に乗馬など出来るはずもなく、馬車に同乗させてもらうことにしたのだ。

デイルは貴族の教養で馬には乗れるらしいし、リドは盗賊団にいた頃に牛馬の面倒をみさせられていたらしく、世話も出来るし乗ることも出来るんだとか。そうなのかと驚くやら複雑やらな気分になっていたら、農家に生まれればたいい世話も出来るし乗れるものだと教えてくれた。使える移動手段が徒歩かそれらしい上、税物を納めるのにも牛に荷馬車を引かせるのに使う為、操れるように親から教わるものらしい。

が、それでも操作できない人もいるわけで、大きな町なら乗り合い馬車があったりするし、まあ乗れなくても問題はないんじゃない

かと言われた。

そうと分かつてても、当たり前のように出来る人を前にすれば出来ないことに落ち込むのも道理である。

「もはや、ルイはお国じゃ身分の高い方なんですか？」

「え？ まさか！ 僕の国にはそもそも身分制度がない…… ありませんし」

流衣はぶんぶん首を振って、そう答える。

「身分制度がないのですか？ ではどうやって国を動かすのです？ ヴィンスが目を丸くし、デイルと似たようなことを聞き返してきた。

「えーとね、僕の国は選挙で選ばれた人が国会っていう会議で話し合って決める形かな。他にも色々細かいんだけど、ええと、上手く説明出来ない……」

「つまり代表者が話し合いで国を動かしている、ということですか？」

「うん、まあそんな感じ…… です。でもえーと、何で？ 僕が身分高いって思ったの…… ですか？」

同年代相手に敬語を使いにくく、つつかえ気味に敬語を使っていたら、ヴィンスはまたクスクスと笑う。

「普段通りの話し方で宜しいですよ。そうですね、そう思ったのは、『馬に乗れずば馬車に乗るべし』ということかと思ひまして」

「？」

首を傾げる流衣に、横からエドガーが説明する。

「馬に乗れないなら馬車に乗ればいいって、馬術が苦手な昔のお偉いさんが言ったんだよ。つまり馬車に普段から乗れるような身分を指すってこと」

「ああ、そういうことですか」

「なんだか、『パンが無いならケーキを食べれば良いじゃない』と言っていたマリー・アントワネットを思い出す文句である。馬車云々の方が、必死の言い訳みたいで面白いが。」

「えーとね、そもそも僕の国じゃ、馬を見かけることなんてそうないんだよ。見れてもテレビに映る競馬とか、動物園や遊園地なんかに行かないと見れないし……。普段は自転車かバスか電車を使えば事足りるから。父さんや母さんがいれば車も出してもらえるし、遠い所に行こうと思えば飛行機を使えば……。あ、ごめん、分からないよね？」

ぼかんとしているヴィンスとエドガーに気付き、流衣は苦笑する。「競馬はともかく、ジテンシャやバスとは？ それにヒコウキとは？？」

「ええとね……」

質問してくるヴィンスに、こういう物だと必死に説明する。実物がなければ分かりにくいというか、そもそも理解してもらうのは不可能だ。

仕舞いには、「鉄が空を飛ぶなんて、素晴らしい魔法使いがいたものですね」と感心されてしまい、誤解を解くのは諦めた。

もういいや、そういうことにしておこう。

「ところで、ヴィンス君ってどうして神官服着てるの？」

話が一通り終わり、気になっていたことをぶつけてみる流衣。

「こちらの方が、良いごまかしになるかと思ひましてね。それに動きやすいですし」

にっこりと微笑むヴィンス。

理由が動きやすいからというのは、なんとも勇ましい。長剣を腰に佩いているということは、剣術にも覚えがあるのだろう。

とても同じ年頃とは思えない。

感心していると、急に馬車の揺れが止まった。

さっそく賊が出たのかと馬車の中に緊張が走る。エドガーが柄えを半分から取り外した短槍たんそうを握り、御者席との連絡用の穴を覗き込んでリッツに問う。

「……どうした？」

「急に霧が出てきたんだ」

言われてみれば確かに、霧が立ち込めていた。エドガーは眉間に皺を寄せる。

そこへ馬の足音が近付いてきて、馬車の横に並んだ。アンジェラだ。

「霧生みの時間のようです、問題はありませんのでご安心を」

「分かりました、ありがとう」

ヴィンスが答えると、アンジェラは馬首を返し、後方へと戻った。馬車の隊列は、徒歩のビィが先頭で斥候、右と左をリドとディル、しんがりリーダーであるアンジェラが務めている。

「霧生みの時間って何ですか？」

エドガーの方を向き、流衣は首を傾げる。

「リーネクラウの森はな、普段は穏やかな森なんだが、一日に朝と夕の二回、どこからともなく霧が出るんだ。一時間近くはそのままで、また何事もなかったみたいに消えるんだよ。不思議だろ？」

「そうなんですか……」

流衣はそう呟き、窓から外を覗いた。

が、流衣の目には普通の森が広がっているように見える。

霧？

不思議に思い、もう片方の窓からも覗いてみる。やっぱり、どこにも霧なんて見えない。それに、馬車が街道から反れて森の方へと進んでいく。

「あの、どうして森の中に行くんですか？ それに、霧なんて見えませんが……」

「何？」

エドガーは窓から外を見た。やはり霧が漂い、街道が続いている。俺にはこっちが街道で、霧が漂ってるように見えるが」

流衣はそう返されて不安になった。自分がおかしいのだろうか？

「わてにも霧は見えませんか？」

オルクスがそう口を出すと、今度はヴィンスが怪訝な顔になる。

「どうということなんでしょう？」

「……………」

エドガーは無言で考え込み、すぐにリッツに馬車を止めさせた。アンジェラを呼び、エドガーは流氷とオルクスを振り返る。

「さっきと同じことを言ってくれ」

「？ 一体どうしたっていうの？」

再び馬車の横に並んだアンジェラが、窓から顔を覗かせ、片眉を跳ね上げて訝しげにエドガーを見る。

流氷も首を傾げつつ、さっきと同じことを言う。

「どうして森の方へ行くんですか？ あと、霧なんて僕らには見えないんですが」

そうはつきり言うと、どこか遠くでパキンと何かが割れる音が響いた。

驚いて周囲をきょろりと見回す流氷。

流氷の目には何の変化もなかったが、他の人間達にはパツと霧が霧散して見えた。しかも、気付けば街道から僅かに反れた森の中にいる。

「何です、これは」

「どうということだ？」

ヴィンスとエドガーはそんな周囲の変化に驚き、アンジェラは顔に似合わない舌打ちをする。

「ちっ、やられたわ。どうやらあちらさんには閻属性の魔法の使い手がいるみたいね」

アンジェラは窓を閉めさせると、周りに命令を飛ばす。

「リッツ、馬車を街道に戻して！ 他の皆は馬車が街道に戻り次第、飛ばすわよ！ 馬車の中の皆さんは椅子から落ちないように物にしがみついて！」

すぐさまリッツは馬車を返して馬車を街道に戻し、ビィが自分の座っている御者席の隣りに座ったのを確認してから、思い切り手綱を振り下ろした。

馬はいなき声を上げ、街道を疾走し始める。

「しがみつくて、一体、ど、どど、どどどっ」

ガタガタと揺れる車内で、しがみつく所などない為、とりあえず壁に張りつきながら、流衣は言う。

「口は閉じておいた方がいい、舌を噛むぞ」

エドガーの親切な提案に、流衣はすぐに従った。確かに、この状態なら確実に噛む。

よく分からないが、危険が迫っているのだということは空気で分かった。

一体、襲撃者はどんな人達なんだろう？

流衣の声とともに、霧が弾け飛ぶように霧散したのには驚いた。

これがどういう事態なのか今一判断がつかないが、恐らくあの霧は襲撃者の罠だったのだらうと仮定する。

馬車の左横を馬で並走しながら、周囲に気を配る。

(来る！)

リドは風切り音を確かに拾い、左手を見る。

ほぼ反射で風を操り、飛んできた矢の軌道を反らす。

ズドッ！

矢は見当違いの方に飛び、地面に深々と突き刺さった。

「精霊、頼む！」

街道を疾駆しながら、リドはいつも側にいる風の精霊に頼む。

勿論よ、私達の可愛い子

大切な子

風の精霊達が返事をして旋風を起こし、射手めがけて攻撃する。茂みの中で男の悲鳴が聞こえ、ドサリと何かが落ちる音がした。攻撃された拍子に、射手が木から落ちたようだ。

「他にもいないか探してくれるか？」

リドが虚空に呼びかけると、精霊達の幾つかはヒュウと風音を鳴らし、リドの側を離れて四散する。

そして精霊達はすぐに戻ってきて、サワサワと囁くような声で言う。

先の方、百エナ・ケルテルに

魔法使いが一人いるわ

嫌な感じ！

闇の匂いが濃いよ！

そう騒ぎ立てる精霊達にリドは礼を言い、馬のスピードを落とし、アンジエラの馬に並ぶ。

エナ・ケルテルはケルテルの百倍の長さの単位だ。

「アンジエラさん、百エナ・ケルテル先に魔法使いが一人いる。精霊が言うには、闇の匂いがするらしい！」

「分かった、私が相手をするわ！ あなたはしんがりで後方からの追っ手がなか見て、周りに伝令をお願い！」

「了解！」

リドの返事と同時に、アンジエラは馬のスピードを上げ、ぐんぐんと前に進んでいく。

そして馬車の前に出ると、魔力を練り始める。

前方、杖を構えている黒ローブ姿の魔法使いを目にとめた瞬間、叫ぶ。

「火、荒ぶりて敵を滅せ！ ドーゴ！」

空気を震わせる爆発が起こり、黒煙が巻き起こる。

その煙の中を駆け抜け、あっという間に魔法使いを振り切った。

どういう意図での襲撃か問い詰めたいところだが、今回の任務は原因追求ではなく護衛である。いちいち立ち止まる必要はない。

アンジエラはまた馬のスピードを落とし、リドの横に並んで走る。

「追っ手はどうかしら？ 風の精霊の子さん？」

「三騎追ってきてる。でも、このまま振り切れれば問題なしかな」
「分かったわ、ありがとう」

アンジェラの言葉とともに、リドは最初の持ち場に戻る。
そして、ひたすら街道を駆け抜けた。

完全に追っ手を振り切ると、安全そうな所まで進んでから馬車の速度を落とし、夕方の霧生みの時間とともに野営をすることになった。

ヒノックから、リーネクラウの森を抜けてすぐの所にある町は、徒歩で五日。馬車で移動しても四日はかかる道程だというのもあったし、それに何より馬が疲労しているので休ませなくてはいけない。振動がひどくて少し車酔い気味で、流衣はよろよると馬車から降りて眉を寄せた。

(うっ、まだ地面が揺れてる気がする)

そう思ったが、馬に乗っている人達の方が大変だろうと思いい、何も不平は漏らさず、馬に水を与えているリドとデイルの方に向かう。地面に小さな穴を開け、そこにデイルが魔法で水を出して水場代わりにしている。魔法って便利だ。

「二人ともお疲れー」

そう声をかけると、それぞれ気軽に片手を上げる。

「よお、そっちもだいぶお疲れみてえだな。ははは！」

リドが流衣を見て笑い飛ばす。デイルの方は苦笑いする。

「馬車酔いか？ まああれだけ揺れれば酔いもするか。私はどうも馬車は苦手だな、こっちの方が気が楽だ」

うっ、一目で看破された。

よくあるっばいので気にしないことにする。

「ギョピッ！」

そこで、デイルの上着の合わせの部分、左脇腹の方からノエルが顔を出して可愛らしく鳴いた。そういえば、まだノエルが小さいからいいが、成長したらどうする気なのだろう。流石に上着の中に放

り込めないと思う。

「どうやら腹が空いたようだな」

デイルが呟き、ノエルの頭を指でツンと小突く。

「すまぬがもう少し辛抱しろ。他にも仕事があるのだ」

「ピギヤアー」

ノエルは不満げに声を上げ、じ　　と流衣を見つめる。

その目がやけにギラギラしているので、流衣は思わずデイルから距離を取った。

流衣は昨日の一件以来、不意打ちで魔力を喰われてはたまらないのでノエルから距離を取っている。触らないようにもしていた。

だから嫌われるような覚えはないのだが……。

というか、この目って嫌うというよりどっちかというところ。

「チビでも魔物の子ってか？　完璧に捕食者ほしよくしゃの目だな！」

「やっぱり　！」

リドがケラケラと笑いながら言った中身に、流衣は頭を抱える。

「よっぽどルイの魔力が美味かったのだな」

デイルまで笑い出す。

「いやいや、それって褒め言葉じゃないよね？　僕、餌じゃないよ

！？」

思わず杖を握り締め、じりじりと間合いを取る。

「全く生意気なクソガキですね！　幾ら生まれて初めて食べたのが坊ちゃんの魔力とはいえ、餌認定とは恥知らずな！」

オルクスがプリプリと怒り出し、ノエルに負けず劣らずのギラついた目でノエルを睨みつける。

睨まれたノエルはオルクスの方が格が上だと分かるのか、ビクツとして上着の中に逃げ込んだ。

「こらこら、チビちゃんを脅かさない。町で宿泊中の就寝前とかなら魔力あげても構わないけどさ、今はなあ」

「坊ちゃん！　そんな風に、甘やかしてはいけませんっ。子供といふのは、何事も、しっす躰が大事なのですッ！」

「オルクス、もしかして子持ち？」

「いるわけないでしょう！ 番つかいもないのにつ！」

思わず流衣が問いかけると、オルクスは憤然として羽をばたつかせた。

「だあもう、キーキー甲高い声で叫ぶんじゃねえよ、うるせえな」

リドは耳を押さえて文句を言う。なまじ耳が良いので、頭にガンガン響くのだ。

オルクスはリドをキツと睨みつけたが、流衣が遮ったので口を閉じた。

「オルクス、皆疲れてるんだから騒がないであげて。君だって疲れてる時に騒がれたら気分良くないだろ？」

『ぐむむ、坊ちゃんがそう言うなら』

流衣の頭に響く声に切り替え、オルクスはそう返した。

「こちらは一通り片付いたし、あっちの手伝いをしよう」

馬のブラッシングも終え、適当な木の枝に手綱を括りつけて馬が逃げないようにしてから、デイルが言った。

エドガーやアンジェラが焚き火を起こしたり、ヴィンス用なのか一人分の敷物の用意をしたりしている。リッツは馬の世話、ビィは周囲の警戒に当たっているようだ。

流衣達もそちらに行き、雑用を手伝い始めた。

雑用といっても、流衣は料理以外はてんで駄目だ。

だから夕飯の支度を買って出て、調理用ナイフで芋の皮を剥く。流衣の前ではアンジェラが同様に根菜類の皮を剥いている。

リドとデイルとエドガーはというと、野営用のテントを組んでおり、ヴィンスは興味を覚えてそちらを手伝おうとしてエドガーに丁寧に断られていた。

（あ、こっち来た）

断られて残念そうに肩を落としたヴィンスが流衣達の方にやって

来て、焚き火の側の敷物に座る。じーつとアンジェラの手元を見ているので、アンジェラが苦笑した。

「駄目ですよ、ヴィンセント様。貴方は手伝わなくて宜しいのですから」

「分かっていきます、それぞれに仕事があり、私の今の仕事はじつとしていることです。ですが面白そうですから、少しくらい手伝っても良いではありませんか」

つまらなさそうに少しむくれるヴィンス。

そうしてみてもうやく流氷と同じ年頃だと思えた。

「駄目です」

しかしアンジェラはぴしゃりと言い放ち、ヴィンスの我俣を跳ね除ける。

「デイルだつて貴族ですのに……」

「彼は修行中で一般人です。よつて臍履する必要はありません」

「……………」

ヴィンスは小さく溜め息をついた。

流氷はクスクス笑いながら、しゅるしゅると芋の皮を剥いていく。あつという間に三つを剥くと、残りにも手を伸ばす。芋はじゃがいもに似ていて、全部で十個ある。

「ルイ、あなた、とても皮剥きが上手なのね。もしかして料理人でもしていたの？」

「いえ、兄が料理好きでよく手伝っていたら自然と覚えただけです。僕に出来る家事はこれくらいですね。他のは相性が悪くて」

あまりこれといった取り柄もありませんし。

アンジェラにそう返すと、アンジェラは目を瞬いた。

「でも今日はあなたのお陰で助かったわよ？ そんな風に言うものじゃないわ」

「はあ、まあこうして役立てるのもここに来てからですね。元いた所じゃてんで駄目駄目で……。ところで、あれって何だったんですか？ 僕には霧とかは見えないのに、皆見えていたみたいだったか

ら

「流衣はふと思い出し、今がチャンスかと訊いてみた。」

「あれはね、闇属性やみぞくせいの魔法よ。幻影の術といったかしらね」

アンジェラは剥き終わった人参みたいな野菜を切るのを止め、そう言う合間に、水を入れた鍋を焚き火にセットしていた。てきぱきと器用だ。

「幻影ですか、なるほど」

「ヴェンスが納得したような声で呟く。」

「それで、多分、あなたの方が術者よりも魔力が大きかったのか、それともあなたの“目が良い”のか、どちらかの理由で、あなたには効かなかったし術を解くことが出来たんだと思うわ。私達にも効いたとなると、相手は結構な使い手ってことね」

「そうなんだ……」

「じゃあ自分の方が魔力が大きかったからだろうなと流衣は頷く。」

「その“目が良い”っていうのはどういうことなんです?」

「魔法と現実を見極める才能があるってことよ」

「ふうん……?」

「よく分からなかった。」

「説明しようがないし、分からないならそれで良いわ。元から“目が良い”なら、そうと気付かなくてもそれで十分だし、術にかかったかが分からなくても、不利に追い込まれるだけでどうとでも逆転可能なもの。まあ、今回みたいに森の中に誘導されるのは痛いのだけど」

アンジェラは切り終わった根菜類を鍋の中にゴロゴロ転がす。

「流衣も皮を剥き終わったので、まな板を借りて切り分け、鍋に放り込んだ。」

あとは鍋が煮立ったところでアンジェラが味付けすれば、スープの完成である。鍋はアンジェラが担当し、流衣はパンを切り分けていく。

流衣は切りながら、ふと疑問を覚えた。アンジェラの口振りとい

い、不快げな表情といい、闇属性の魔法は悪いものようだ。どう
いう理屈なんだろう。魔力と言葉で使えるなら、闇属性の魔法だっ
て誰でも使えるはずだ。

「オルクス、闇属性の魔法って使える人が限られてたりするの？」
「こそこそとオルクスに問いかけると、オルクスはさらさらと返す。
『いいえ、そういうことはありません。ただし、闇属性の魔法だけ
は精霊に働きかけるのではなく、魔王、つまり負の要素に働きかけ
る為、使い手にも悪影響があるのです。そういう害がある分、魔法
としても強力なのですが、なにぶん使い手だけでなく対象にも大き
な害になりますし、中身が呪術関係や魔物の使役が多い為に、一般
的に闇属性の魔法使用者は好まれません。』

彼らに呪いをかけられた場合、聖法の術一・解呪かいじゆを使える神官に
頼まなければ解くことも出来ません。ですが解呪するにもリスクが
ありますので、その神官も命がけとなります』

それほど危険なのか。嫌われるのも頷ける。

『杖連盟　ラーザイナ魔法使い連盟は、闇属性の魔法使用をギル
ド団員に禁じています。もし使えば脱退処分ですし、悪ければ捕縛
されて魔法使いの為の牢獄に投獄し、国の法に照らし合わせて処分
しますね。』

三年に一度の議会への参加さえすれば、どんなに魔力の少ない魔
法使いでも登録可能ですが、入る前に、そういった細かい掟を守る
ことを約束させられるのですよ。代わりに、ウイング・クロスのよ
うな様々な特典があります。まあこちらは有事の際には手を貸す
ことが義務付けられているので、ウイング・クロスのような旅人支
援組織ほど甘くはありませんがね。

ああ、だいぶ話が反れましたが、どれだけ禁じても闇属性の魔法
使用者はどこにでも生まれますし、杖連盟と敵対している闇魔法使
いの裏ギルドもあるそうですよ。そういった魔法使いを取り締まっ
ているのも杖連盟ですね』

「どれだけ嫌われてるのはよく分かったよ」

流衣は神妙に頷いた。

聞いていると、魔王崇拜の 悪魔の瞳 と同等の危ない香りがある。

そんな話をしているうちにパンを切り分け終わったので、皿に乗せていく。

やがてスープも出来たので、簡単な夕飯を摂ることになった。

食事を終わると、エドガーが何かを槍の先で地面に書き始めた。

何してるんだろつと見てみると、二重円を書いて、その周りに文字を書き、真ん中に魔晶石を一つ置いた。それと同じものを、馬車や野営地を含んだ範囲に他に四つ描き、呪文を唱え始める。

「光よ、悪しき魔を遠ざけよ。ライト・クラウン」

魔法が発動すると、一瞬だけパツと魔法陣が光った。

『魔物避けの结界ですよ。この陣の中にいれば、魔物に襲われる心配はありません。出れば別ですが』

オルクスが説明してくれ、そうなんだと陣をまじまじ見つめる。

形としては単純なものだ。知っていたら後でも使えそうな気がし、鞆からノートと鉛筆を取り出してメモを取る。学校の鞆を持ってこの世界に来てしまったから、文房具なら入っていた。鞆は邪魔だから売り払ってしまったけど。幸い、美術の授業があった日だったから鉛筆や鉛筆研ぎも入っていたので重宝している。

「メモしてんのかい？ 勉強熱心だな……。つて、何だ、それ！」

「何ってというのは？」

仰天したように声をひっくり返させるエドガーを見て、流衣は首をひねる。何を問いたいのか謎だ。

「それだよ、それ！ インクではないよな？ どうやって字を書いているんだ？」

流衣の手から鉛筆を取り上げて、手の中で鉛筆をひっくり返したり、先の方を見つめたりするエドガー。すっかり興奮している。

「鉛筆っていう文房具ですけど……、ここには無いんですか？」

鉛筆くらいなら、この世界にもありそうだ。ボールペンは無さそうだが、もしかしたら万年筆ならあるかもしれない。

「文房具？ この国のは、この羽ペンとインクが主流だ。こうやって持ち歩くのさ。で、どうやって書いてるんだ？ 作り方なんて分かるか？」

懐からキャップ付きの十センチ幅程度の小さな羽ペンと瓶入りのインクを取り出して見せながら、矢継ぎ早にエドガーは問うてくる。ということは、万年筆は存在しないようだ。流衣はエドガーに若干気圧されつつ、素直に答える。

「えーと、炭を固めた物を木の中に入れて使ってるんだと思います。炭素ってことは分かるんですけど、僕の国では普通に買える品なので、作り方を聞かれても詳しいことは分かりませんよ？」

「炭！ ああ、確かに燃えさしなんかで地面に文字を書くことは出来るが……」

エドガーは目を丸くし、鉛筆を握りしめたままぶつぶつと呟きだす。

困った流衣は、エドガーをじつと見て、結論を出す。

「良かったら、それ、あげましょうか？」

「いいのか！？」

「はい。僕、まだ他にも持ってますから……」

流衣は頷いて、鉛筆の芯が潰れたら刃物で研ぐようにと教えておく。きつと分からないだろうと思ったのだ。

エドガーは未知の文房具を前に感激し、代わりにならないかもしれないがと、流衣が取った結界についてのメモを見て注意事項などを教えてくれた。五角形になるように陣を配置しなくてはならないとか、最後に魔晶石を置くとかそういったことだ。

「教えてくれてありがとうございます」

流衣は言われたことをメモして、ぺこりと頭を下げる。

「こっちこそ、エンピツくれてありがとう。また分からないことあ

「つたら、いつでも聞いていいぜ」

エドガーは人懐こい笑みを浮かべてそう言い、ポンと流衣の背中を叩いた。

「やっぱり叩きやすい位置にあるのだろうかと複雑な気分になりつつ、焚き火の所まで戻る。」

「そこではデイルがノエルに天然ものの魔晶石を与えていた。」

「ノエルは天然ものの魔晶石の小石をパクツと食べ、ガリゴリとまるでスナックでも頬張るような音を立てて咀嚼している。」

「これくらい歯が丈夫なのだ、噛み付かれただけであれだけダラダラ流血するのも頷ける。」

「流衣は昨日のことを思い出してそう思った。」

「ノエルは貰った分を食べ終わると、ギューピュー！ と声を上げて、次の餌を催促する。」

「魔晶石 正確には魔晶石中の魔力 を食べて、その石はどう

なるんだらうと不思議に思うが、それはオルクスが説明してくれたので解決した。小型竜の胃袋は溶鉱炉（溶鉱炉）並みの温度を持つらしく、そこでいらなくなった晶石を溶かし、玉の形にして定期的に吐き出さらしい。今は全長十五センチくらいの細長い体軀だし、小さいので一日に一度はそうやって玉を吐き出す。朝、起きるとノエルの顔の近くに玉が転がっていたので確かだ。」

「食欲旺盛だな、どこにそんなに入るんだ？」

「その様を薬草のブレンド茶 リドの手製だ を飲みながら隣から眺めていたリドが、不思議そうに言っつてノエルの頬を突く。」

「ピギヤア！」

「食事の邪魔をされ、ノエルが怒って鳴いた。その拍子に、小さな炎がポツと口から吹き出る。」

「咄嗟に手を引いたものの、リドはびっくりしてノエルを凝視する。」

「今、火い吹きやがったぞ、このチビ！」

「そりゃあ竜ですから」

「何を当たり前なことを、と、オルクスが呆れたように突っ込む。」

「こんなに小さいのに火を吹くんだね」

流衣は相変わらずノエルから距離を取り、デイルの隣ではなくリドの隣に回って座る。

「ふむ。マッチいらずで便利というわけだな。よし、今はレッド・ブレスと命名しよう」

「ピギヤツ」

デイルの言葉に、ノエルは嬉しげに鳴く。

流衣は首を僅かに傾ける。

「火を吐くから“ファイア・ブレス”じゃないの？」

「発音しにくいではないか」

「……そういう問題なんだ？」

まあ、別に良いけど。デイルは技名だとまあまああのネーミングセンスを発揮するらしい。そのままではあるけれども。

まじまじとノエルを観察していたオルクスが、ふと口を開いた。

「どうやらノエルは頭は良いようですし、もう少し成長すれば、人に化けられるようになるかもしれないね。竜だけは、人型をとるに足る魔力と知恵さえ付けば、それも可能ですから。悔しいことに」

人型をとれるようになるまで随分時間もかかった上、労力もかかったオルクスからすれば、羨ましいことこの上ない。

ツィールカに仕えている第二の魔物が竜なのだ。ツィールカの元で一番上位にいる使い魔は、動物型ではなく人の姿をした光の精霊である。こちらは第一の精霊と呼ばれていた。ちなみに、動物型での第一の魔物は猫であり、知と戦の神ソールヴに仕えている。

ただ、人間界における竜の厄介なところは、凶悪な類の竜まで人の姿を取れることである。基本的に、人型を取れる程に強力な竜は人を好まないのだから、関わることを避けて山奥や僻地に棲みついている。刺激さえしなければ問題はない。

人間に飼育されているタイプの竜は、そもそも人型をとれる程の知恵が付かないのだ。魔物の間では、羽竜の頭は鶏並みとまで酷評されているくらいである。まあ、それでもその辺の動物よりは余程

賢い生き物ではある。自我が芽生えるか否かの違いだ。

「そうしてくれると、町に入る時も便利なのだがな……」

ガツガツと天然物の魔晶石を食べているノエルを見下ろし、ディルは小さく息をつく。

流衣は小さく笑い、その前に成長すれば問題ないのではないかと思っただ。それからふと思いついて、腰に巻きつけている小さめの鞆から初級魔法の教本を取り出す。

日も落ちて暗いが、焚き火があるから読むぐらいは出来るだろう。

「風の魔法の初歩は、微風の術……」

続きを開いて、読み進める。

微風？ どこに使うんだ？

流石に護衛中という状況も考えて実験はやめておき、次を見る。

次は強風の術だった。微風が「フォーサ」という呪文で、強風が「フォーザ」だ。覚えやすい。

まあ、夏に涼しい風を起こしたい時には便利かも？

流衣はそう思うことにした。

魔法の初級編の本が小さくてペラペラなパーバツクなのは、基礎になる魔法が少ないからだ。中級からは応用なので量も増えるのだろう。

次のページを捲ると、火の魔法初歩が載っていたが、こちらは点火の術だけだったので飛ばす。その次は、地の魔法の初歩である。

「これを覚えれば、あなたも自給自足は完璧！」 テンション高いな……」

一体どんな人がこの本を編集したんだろう。

色々で紹介文句が間違っていると思う。某電話受付ショッピング番組じゃあるまいし。

しかしここはぐつと抑え、先を読む。

「植物の生長促進の術？ そんな反則な魔法があるの？ 農家の人、大喜びじゃないか！」

ディルに向けて言うと、ディルは苦笑した。

「その術は、せいぜい種から発芽させる程度のレベルにしかならん。地の 精霊の子 を雇った方が余程助かるな。彼らが植物を育てると生長が異様に早い上、質も良いのだ」

「緑の指の持ち主ってそういう人のことなんだろうね、そっかあ、そっちも反則的だなあ」

流衣は特殊能力者多いんだな、この世界、と、世界の不思議を見た気分だ。

「何ですか、緑の指みどりゆびって」

肩のオルクスが不思議そうに言い、地球での言葉だしこっちじゃ言わないのだと気付く。

「ある人が面倒をみると、枯れかけてた植物でも元通り綺麗に育てることが出来る人のことだよ。そういう人が育ててる庭っていつも緑に溢れてるんだって。本で読んだだけで、僕は会ったことないな」

確か、世界の名作関係の本で小さい頃に読んだ気がする。意外にこの言い回しを知らない人も多いのだが。

「確かに、それなら緑の指だな。地の 精霊の子 や水の 精霊の子 は良いよ、農家に生まれれば大事にされるし、領主なら領民にも好かれるしな」

リドが溜め息混じりに零す。

「風の 精霊の子 も十分すごいと思うよ。夏の暑い日に便利だよ
ね」

「お前が言うところありがたみが一気に減るな」
「ますます溜め息をつかれた。失礼な。」

そのリドの隣りでは、ツボに入ったのかデイルが肩を震わせてクツクツと笑っている。

それを軽く睨みつけるリド。

デイルの足元では、ガツガツと魔晶石を頬張っているノエルが不思議そうにピギヤ？ と首を傾げた。

「嫌ですねえ、しんみりしちゃって。あなたのその力は、神様達に祝福された証ですよ？ もっと誇りを持ちなさい！ そしてツィー」

ル力様を崇め奉るのです！」

「あれやれといった調子にオルクスが言い、最後には傲慢な口調で諭した。」

「……何でてめえが女神仕えの使い魔なのか本気で謎だ」

「忠誠心に厚い結果じゃない？」

「ぼそつと疲れたように呟くリドに、軽く笑って流衣は言う。」

「一応言っておきますが、聞こえてますよ！」

「ギラン。オルクスは黒光りする目でリドをねめつけた。」

「またぎゃいぎゃいといったものように言葉の応酬を始めるリドとオルクス。」

それを横目に眺めながら、平和だなあとのんびり思っ流衣だった。

十八章 襲撃者 4 (前書き)

*この話中、戦闘表現があります。

朝日が昇るとすぐ、野営地を片付け、一行は出発した。夜のうちに追っ手が距離を詰めているとも限らないので、警戒した結果だ。

だが心配は杞憂のようだった。追っ手は完全に撒いたようでそれ以降は魔物以外の襲撃には遭わず、三日をかけてリーネクラウの森を抜けてポロツクの町に辿り着いた。

この町はこぢんまりとした田舎町で、二メートルほどの高さの堀に町を取り囲まれている他は、灰色の石材といい殺風景な所だ。灰色の四角い家並みの中、赤色の屋根の四角い塔がぽこんと真ん中に突き出しているのが特徴といえれば特徴か。町に入ると、その塔からちよとど昼時の鐘が鳴り響いていた。

こぢんまりとしてはいても、ヒノックへ通じる街道があるのでそれなりに人数は多く、街道の通るメインストリートにはばらばらと行き交う人が見受けられる。

流衣達は町一番の宿にヴィンスを送り届けると、ウィングクロス
の支部に向かった。そちらの宿の警護は神官達が担当するから、明朝までは自由にしていて良いとお達しだった。

ウィングクロスに宿舎を取り、大きな荷物を部屋に置くと、その足で流衣達はすぐにまた町へと出かける。この町は川魚がおいしいのだとデイルが言うので、美味しい食堂に連れていってもらうことになったのだ。

そうしてやって来た 小鳥屋こひらや という名の食堂は、昼時が少し過ぎた頃だというのにガヤガヤと騒がしかった。

一つ断っておくが、名が 小鳥屋 だからといって別に小鳥を売っているわけでも、小鳥がいるわけでも、小鳥を食材にしているわ

けでもない。

「いらつしやい、三名様ね？ えーと、あつちのテーブル空いてるからあつちへどうぞ」

茶色い髪をポニーテールにした、小鼻に浮いたそばかすが愛嬌のある給仕の少女がはきはきと言つて席を指差す。

そして彼女はすぐさま空の食器が積み重なつた盆を持ち、テーブルや椅子の隙間を縫つて調理場の方に消えていく。くるくると動き回つていて、目にも爽やかだ。

流衣達は五人がけの丸テーブルに座り、メニューを広げた。

「僕、これにしよう。ブルーフィッシュの塩焼きセット」

流衣はすぐにメニューを決めた。久しぶりに焼き魚が食べたかつた。ここの食事はおいしいのだが、どこかこつてりめで、薄味派の流衣にはちよつと重たいものが多い。だから時間がある時に調味料を探したりして、調理場を借りて自分で作るうと画策中だ。

じゃあ俺はこれー、と、リドが魚の唐揚げを選び、デイルは散々悩んで魚のグラタンにした。

給仕を呼んで注文し、しばらく雑談していると、急にカウンターの方に女性が進み出た。パチパチと拍手が巻き起こる。

色とりどりの衣装を身に纏つた女性はキャラメル色の髪と青い目をしていて、豎琴のような物を抱えている。女性はにこやかに客を見てから、優雅に一礼した。

「こんにちは。わたくし、こちらで歌わせて頂いております、リメラン・スクレドニと申します。この通り、吟遊詩人しております。宜しければ、皆様方のお食事に彩りを添えたいと思つのですが」

リメランは艶やかに微笑み、客達はいいぞいいぞと喝采を飛ばす。「では一曲。歌の名は『風を追い越して』です」

ポロン、ポロン、ポロン……

豎琴の音が軽快なリズムを響かせ、リメランが女性にしては少し低めの声音で明るく歌いだす。

昼間にぴつたりなアップテンポな曲だ。

歌の中身は、旅人が馬を駆って風をも追い越し、果てしなく旅を続けていくというものだった。

「いやあ、いいねえリメランの歌は。何度聞いても心が楽しくなる」「ああそうさ、俺はここ最近、いつも励まされてるよ」

「移動劇団が明日発つんだろ？ それじゃあ今日までか、聞けるのは」

客達がざわざわと話していて、流衣の耳は何となくそれを拾った（移動劇団なんてあるのか。じゃああの人はその人ってことなのかな）

運ばれてきた料理を咀嚼しながら、そう思っリメランを見た。吟遊詩人なんて見たのは初めてで、珍しい。

しかし初めこそ関心を覚えたものの、だんだん意識が料理に移っていく。

「うわ、おいしいなあ。絶妙な塩加減だ。どうやって焼いてるのかなあ、網かなあ」

頬をほころばせてつい呟くと、リドの目がキラんと光った。

「そんな美味しいのか？ つと隙あり！」

フォークが魚をかすめ、魚の肉片を横取りされる。

「あつ、ひどいよリド！」

流衣も負けじとリドの皿にフォークを伸ばしたが、届く前に皿ごと避けられた。

「俺のはやらん。お、確かに美味しい」

「ずっー」

流衣はむくれて恨みをこめてリドを見やる。しかしリドは涼しい顔だ。

仕方が無いので、ちらりとデイルの方に視線を移す。彼はピシッと背筋を伸ばした姿勢で、行儀よく食べているが食べ方は早い。そしてそのまま黙々と咀嚼して、ちらりとこちらを一瞥。

「言っとくが、私のはやらぬぞ」

「見ただけだよ」

先に断られた。まだ何も言っていないのに。

ますます膨れ面になりつつ、これ以上食べられないうちにと、自分の分を急いでかきこむ。

おいしいな。ブルーフィッシュかあ。干物でも売っていないかな。干し肉があるのだから干し魚だってあるはずだと思う。

食事はおいしいし、BGMには素敵な歌がついてきて、何だか色々と得したような気分になる。

カラン。

店の扉についた鈴が乾いた音をたてた。新しい客の来訪を告げたその音を境に、店内の陽気な空気は重いものへと一変した。

黒いローブ姿の者が三人いて、フードを目深に被っている。体格的に見て恐らく男だろう。一番背の低い老人らしき者は杖を持ち、背の高い者は手ぶら、もう一人は背中に弓矢を背負っている。三人は、首から同じ形のネックレスをかけている。文字のような形の不思議な記号だ。

何故か店内が静まり返り、息をするのにも緊張を覚えるような張り詰めた空気に、流衣は居心地の悪さを覚えて何となく肩を強張らせる。どうしたのかと不安を込めてリドを見ると、リドもまた他の客同様、眉を寄せて厳しい表情をしていた。ディルの方は苦々しい顔だ。

「ネルソフよ……」

誰かが不安そうに口にした言葉が、流衣の耳に届く。

「闇魔法使いがどうしてこんな所に……」

不安と嫌悪と恐れを含んだ言葉が客達の間でさわさわと交わされる。

そんな中、給仕の少女が意を決した様子で前に進み出てきた。

「いらつしゃい、三名様で良いかしら？」

例え気に食わない相手だろうと客は客。何か問題を起こされたわけでもないで、こうした対応をせねばならない。

「ああ」

三人の中で一番背の低い男がしわがれた声で返事をする。どうやら老人のようだ。

給仕は開いているテーブルに男達を案内し、すぐさま逃げるように踵を返す。

居心地の悪い空気の中、今までいた客が、一人、また一人と徐々に店を後にする。

「……ネルソフって？」

流衣はこそそとディルに問う。

ディルは男達の方を気にしながら、囁くような小さな声で答えた。「閻属性の魔法を使う魔法使いの裏ギルドのことだ」

「そうなんだ、ありがと」

流衣もまた声をひそめて返す。

オルクスが説明してくれていたから、それで十分伝わった。

ちらりとネルソフの男達の方を見ると、まるでそこだけに影が落ちているかのような暗い空気を漂わせている。

ふと、先程の老人の足元の影に目がいった。気のせいか揺らいで見えた。それどころか蛇みたいなもののがたくっている。

不気味な光景にゾツとして、慌てて目を反らす。あれが閻の魔法なのかもしれない。

食事を終えると、リドがすつと立ち上がる。

「出るぞ」

流衣とディルに反論はなく、頷いて立ち上がり、代金をテーブルに置いて店を出た。

「今しがた出て行った少年達を一瞥し、老人はフンと鼻を鳴らした。」「 気付いたか？」

一番のつばの男に前振りもなく問う。メニューを見ていた男は何をだと問い返す。

「さっきの童、ワシの“影”に気付いたわ」

「それはまた目の良い子ですね」

軽薄な響きをもった声で、もう一人の男が言う。言葉使いは丁寧なのに、軽い感じしか覚ええない。中肉中背のどこにでもいそうな男だが、雰囲気は得体の知れないものだ。

のっぽがウヒヒと愉悦に目を細める。

「そりゃ面白い。爺さん、狩るんなら俺に行かせてくれよ」

三人の中で、こののっぽの男が一番厄介だった。場も弁えずにそんなことを言い出すのっぽに、自然、老人と丁寧口調の男は眉をひそめる。

「左様なことをこのような場で言うでない。それに、ワシは面白いと言っただけでどうこうする気などはない。今は仕事であるしな」
「そうですよ、グドナー。我々には遊んでいる暇はありません。誰かさんの術の悪さに、標的に逃げられたのですからね」

丁寧口調の男が嫌味っぽく言い、グドナーと呼ばれたのっぽは顔を醜悪に歪ませる。そして嫌味を返す。

「はん、木から落ちてのびてた奴に言われたくねえや」

「何ですって……?」

丁寧口調の男の目が氷のように冷たくなる。

静かに臨戦態勢に入った二人を、老人が止める。

「どうやらさつきワシの言ったことをもう忘れたようじゃな。こんな所で口にするなと言ったのだがのう?」

老人の目が冴え冴えと冷たい光を灯す。闇の中、鈍く光る猛禽類の目のようなそれに睨まれ、男二人は怯えたように身を竦ませて大人しくなった。

老人はそれでようやく眼光を緩め、メニューに視線を落とす。

「さてのう、何を食すとするかのう」

まるで何もなかったかのように、老人は呑気に呟いた。

十八章 襲撃者 5 (前書き)

*この話中、戦闘表現があります。

急に悪寒を覚え、流衣は身を震わせた。

風邪でも拾ったのだろうかと思ひねりつつ、店の主人であるおばさんに代金を渡す。

「どうしたの、お客さん。風邪かい？ もう随分寒くなってきたからね」

おばさんは代金を受け取り、金を確認して「銅貨四枚ちょうどだね、まいど」と呟く。

「そうですね、朝方冷え込み始めましたもんね」

流衣が微笑気味に答えると、屋台で野菜や果物を売っているおばさんは品物を一瞥し、一つ手渡してきた。

「風邪ならこれがいいよ。刻んで、お茶に混ぜてお飲み」

おばさんが勧めてくれたのは生姜しょうがだった。

「ありがとうございます、ええと、お幾らですか？」

「おまけだよ、おまけ！ お大事にね！」

快活に笑っておばさんは言った。この人の笑い声だけで風邪が吹き飛びそうな感じがした。

「ありがとうございます。おばさんも、風邪には気を付けて下さい」
人の良い笑みにつられるように流衣も笑い返し、大事に生姜を靴にしまいこんだ。

デイルは物凄い光景を目撃し、単純に感心していた。

野菜屋 果物屋か？ から出た流衣を見ながら、主人であるおばさんが可愛いと呟いて表情を緩ませ、その近隣の店の店員らしき女性が揃って微笑ましい顔になったり、手にしていた物を落とし

てばかんとしていたりした。皆、どれもこれも大人の女性で、可愛いと零している。

揃いも揃っての可愛い呼ばわりに男として同情を覚えるが、当の本人だけは気付いていないのがある意味滑稽だ。というかなんだ、流衣は年上キラーか？

そう思っている間に、流衣は別の店の商品に気を取られてふらふらとそつちに行ってしまう。

(なんだか、リドが心配して怒るのも頷けるな……)

ただでさえ見た目が頼りないというのに、好奇心でうろろしているのだから、なかなか不安要素が多い。古来から生半可な好奇心は身を滅ぼすと云うが、これはそういうことなんだろうか。

故事を脳裏に覚えながら、さりげなく見守る立ち位置まで行く。

これはいい訓練になるかもしれない。護衛相手に気を遣わずに護衛する修行。

リドは自作ブランドティーのストックが切れたと、薬草や野草、ハーブを買いに市場を走り回っていてここにはいないので、デイルは流衣と行動を共にしていた。どう考えても、リドと流衣なら流衣の方にいないと危ないだろう。さっきだって、通りを横切ろうとして誰かにぶつかっていた。

それはともかくとして、リドが鞆から取り出していた茶が、リドのブランドとは知らなかったので驚いた。聞けば、一人暮らしをしていたのもあって家事も一通りこなせるのだとか。

デイルはどうしても料理が下手だから、一人旅になったら、食堂の無い所ではパンや干し肉や乾燥芋で凌ぐしかないのです、流衣もリドも料理が出来て羨ましいと思った。美味くはなくとも、せめて口に入っても大丈夫なものを作れるようにくらいはなりたい。何故、魚が黒くならないのだろう？ 今日焼く魚を見ていて不思議に思った。

貴族であるから普段は料理をする必要がないとはいえ、騎士になり士官すれば野営の仕事もあるだろうし、実力主義の我が国の王国

警備隊や近衛騎士団では、下っ端は料理当番をさせられると聞いている。誰かに教わりながらなら、見た目は悪けれど普通のものは作れるのに、一人で作るとどうして駄目なのだろう。大いなる謎である。

「デイル？」

延々と答えの無い問いを繰り返していると流衣に名を呼ばれ、ハッと我に返る。

「いかん。本気で悩んでしまった。

「どうした？」

「それはこっちの台詞だよ。どうしたの、難しい顔しちゃってさ」「手にいつの間にか買ったらしい香辛料や調味料の入った瓶を抱え、流衣がとても不思議そうに見上げていた。肩に乗ったオルクスも、僅かに首を傾げている。

「いや、他愛のないことだ。忘れてくれ」

「そう？」

流衣はやっぱり不思議そうにしつつ、思い出したように言う。

「ああ、そうだ。デイルって防寒着とかって買わないの？ 幾ら騎士でも厚着くらいするんでしょ？」

「勿論だ。体調管理も仕事の一つだからな」

だがこの騎士服には熱遮断ねつしゃだんの魔法効果にかけてあるから、マントでも着れば十分だ。

そう返すと、流衣は元々大きい目を更に丸くした。

「そうなんだ！ リドの外套もそういうのにかけてあったっけ。便利だね」

「で、それがどうした？」

「さっき白い毛糸のマフラー見かけたから、何となく似合いそうだなと思っただけだよ。デイルって真っ白けだし」

「ふむ、確かにその通りだ。師匠にな、弟子になるからには白で統一しろと指示された結果だ」

白を基調とした衣装を身に纏っていたリリエノールを脳裏に思い

浮かべる。

「リリエノーラさんも白い衣装だったね、そういえば。何か意味あるの？」

「清廉さと高潔さの象徴のようなものらしいぞ。ここまで白ければ人目にも付くし、それにより自分を律するのだとか。師匠の師匠からの受け売りだそうだ」

「難しいこと考えるんだね」

今一よく分からない様子で、ふうんと流衣は気の無い声を漏らす。オルクスの方は「それでこそ騎士です」と感銘を受けていたので、そちらに頷く。

「そうだな。そして師匠に弟子入りしたことを誇らしくなる。あの性格さえなければ、ますます尊敬出来るのだが……」

他人をからかうのが趣味としか思えない。

リリエノーラの愉悦を含んだ色違いの目を思い出して、そう内心で呟く。何故かリリエノーラが楽しげにすると、色違いの目のせいも神秘的にしか見えないし、人間界に迷い込んできた魔女のようにも思う時があった。どこか達観したところのある人で、現実に冷めているようでもあり、その中で敢えて理想を追求しているかのような不思議と一本通ったところがある。

「完璧な人なんてそういないと思うよ。それにそこが長所なのかも。無駄に完璧より親しみやすい気がするなあ」

恐らくフオローしようと言ったのだろう、少し曖昧なその言葉はデイルの固定観念にヒビを入れた。

目を丸くし、二つ年下の友人を見やる。普段から軽く突っ込みはすれど声を荒げることはほとんどなく、自己主張もあまりしない彼は、ときどきハツとさせられることを言う。

「完璧でないことが長所か。そのような考え方もあるのだな」

完璧であることが最良なのだと信じていた。そうあるべく努力しているが、完璧でなくともそれでも良いと流衣は言うのだ。何とも不思議だった。

「僕みたいな駄目駄目人間が言うんじゃ説得力ないと思うけどね」
流衣は苦笑し、でも自分のような者からすればそう思う、と付け足した。

やっぱり少し控えめで、きっぱりと言い切ることはしない。

「そう卑下するものではない。人には人それぞれの長所があるものだ」

どうやら性格やドジさ加減が災いして、あまり周囲から良く扱われていなかったらしく、そのせいかどうも流衣は自分を卑下しがちだ。そのせいか年上女性からの好意的な目 例えそれが人形や置物に向けられる類のものとはいえ にも気付かないのだから、友人としては気になるところではある。

が、口下手なディルでは上手く励ますことも出来ず、結局固い言い回しにしかならない。

自分が嫌になるのはこういう時か。内心、溜め息をつく。

「そうかなあ、そうだといいな。ありがとう」

やはり長所があるとは思えないのか、肯定するよりも希望を口に
して、それでも流衣は礼を返す。

そういう所が長所だと思っただが、それを言っても否定するのだ
ろっ。

ディルはそう思い、ちょっとだけ肩を竦めた。

いつもなら町に出向いて買ったハーブと、自分で摘んだ野草や薬
草を使って茶を作る。町に来れば大体のハーブと薬草は揃うが、流
石に野草までは売っていないようだった。

店を数軒回ってそう結論づけ、リドは空を仰ぐ。青い空には白い
綿雲が浮かび、風に流されていく。今日は上空の風が強いらしい。

それで朝から風の精霊達が楽しげに歌っているのかと思いつつ、
ブレンドティーについて思考を戻す。あの配合率が一番好みだった
が、変えるしかなさそうだ。それに、薬草も生で売られていた。干

している時間はないから、まとめてフライパンで煎ってしまうしかないか。

闇の匂いがするわ。

嫌だわ、汚^{けが}らわしい。

楽しい歌が唐突に消え、精霊達のささやきが広がる。「嫌だわ」嫌だわ」精霊達はそう繰り返し、潔癖な言葉で空気を震わせた。なにげなく通りを見回せば、昼に食堂にいたと思しきネルソフの連中が三人、通りを歩いてくる。

三人。

その数字が、何故か不吉な影を心に落とす。

何故その数字が気になるのだろう。

リドは無意識に緊張を覚えながら、三人とすれ違つう。

一瞬、一番背の高い男の目が不気味に歪み、リドは後ろ首の毛がチリチリするような殺意を感じて、思わずその場を飛びのいていた。秋空をつんざく音がした。リドが寸前まで立っていた場所に、小さなクレーターが出来ていた。石の焦げる匂いが鼻をつく。

ゾツと背筋を冷たいものが滑り落ち、リドは琥珀の目に険を込め、男をねめつけた。

「いきなり何しやがる。随分なご挨拶じゃねえか。そもそも誰だい、あんた」

言外に攻撃される理由が分からないと仄めかしながら、じりつと距離を取る。周りの通行人達は悲鳴を上げて逃げ去り、四人の周囲から波を引くように人影が消える。一般人の喧嘩ならともかく、ネルソフに好んで関わりとうとする輩はいない。

「見つけた。見つけた。林檎色の髪。こないだいたよなあ、俺は覚えてる」

引きつるような醜悪な笑いを漏らす背の高い男。

リドは眉を跳ね上げる。

「こないだ？ 一体、何のことだ？ 人違いだろ」

「人違いだそうですが？」

どこか軽薄な響きのある丁寧口調の男が、背の高い男を見上げる。いい加減にしろ、というような嫌悪感が声に含まれているような気がした。

「すみませんね、この人、ちょっとおかしいんですよ。気が立ってましてね」

「俺のどこがおかしい！ 俺は獲物は間違えない！ おいガキ、あのガキの居場所はどこだ？」

背の高い男が唸るように言い捨て、またも視線をリドに戻す。

当のリドは呆れ果てた。あのガキってどのガキだ？ 訳が分からないが、ネルソフを相手にする程馬鹿ではない。呪いをかけられちゃたまったもんじゃないからだ。

「あのガキは、あのガキだ。シャノン公爵とかいうガキだ！ この名前なら分かるだろう！」

黙りこくって見返すと、背の高い男は苛立ったように言う。リドは瞬間合点した。こいつらは襲撃者なのだろう。しかし驚愕はポーカーフェイスの下に隠し、僅かに驚いた顔を試みる。

「そりゃあここはシャノン公爵領だしな、聞いたことくらいあるよ。何が言いたいんだい、旦那？」

「ぶざけやがって！ 知ってようが知らなかるうが、もうどうだっていい！ 殺してやる！」

どうやら沸点が異様に低い男だったらしい。幾らなんでも理不尽だと思っただ瞬間、男はぶつぶつと呪文を唱えた。

またチリリと首筋の毛が逆立ち、リドは身をひねって後ろへ跳ぶ。ズガッ、ガッ、ガッ！

中空から落ちてきた黒い色の雷が地面に穴を穿っていく。すたりと離れた地点に着地してから、リドは素早く周囲に視線を投げた。どう逃げるか。

「ほお、すごい。初撃といい、グドナーの攻撃をかわすか」

一番背の低い、恐らく老人と思われる男が感心混じりに息を漏らす。

「感心してねえで止めてくれ！ 人違いだと言ってるだろ！」

「否。グドナーの鼻は利くでな、小僧。こいつがそう言うならそんなのじゃよ」

食堂では何も言わなかった癖に、ぬけぬけとよく言う。

リドは顔を歪めた。

「そうかい、そっちがそうなら俺も黙っちゃいない。応戦させてもらおう！」

腰のダガーをすらりと引き抜く。

口ではそう言ったものの、そもそもまともにやりあう気はない。

リドは魔法使いでも神官でもないのだ、ネルソフ相手じゃ逃げるが勝ちだ。

足に風を巻きつけ、瞬発力を上げる。

襲いかかってくる黒い雷を走ってかわす。

どうやら戦う気なのはグドナーとかいうのっぽだけのようで、老人ともう一人は傍観に徹するようだ。これなら逃げるチャンスは見つけられそう。

間を与えずに落ちてくる黒い雷を必死で避けながら、左腕を振ってグドナーに風の刃を叩きつける。

「！」

グドナーは驚いたように身を揺らしたが、また何か呟いた。見えない壁に風が弾かれる。

しかし一体、閻属性魔法を扱う魔法使いというのは何なのだ？

リドは厳しい顔になる。

魔法使いは杖を持っているものだと思っていたのに、杖を持っているのは老人だけだ。丁寧口調の男は弓矢を背負っているし、グドナーは今のところ素手である。

「あつ、いた！ 良かった！」

そこへ明るい声が割り込んだ。

流衣の声だ。

その声をきつかけに、リドとグドナー両者の動きが止まる。ネルソフの三人は新たな一般人の登場に立場を決めかねている風に、じつと声の主の方を見た。

リドはそれに気付いて、何て間の悪い、と、背中にじつとり嫌な汗が浮かぶのを意識の隅で把握する。

通りの向こうから小走りに駆けてくる音がする。同時にカチャカチャと金具の当たる音もしたから、デイルも一緒なのだろう。

「通り魔が出たらしいんだ、早く避難し……」

どうやら現状を分かっているよう、流衣は若干慌てたような声で注意を促そうとする。その隣で、不穏な空気を察したデイルが怪訝そうに眉をひそめる。

リドは内心で舌打ちし、ふと、そこでグドナーが歪んだ笑みを浮かべるのに気付いた。ハツとするが遅く、グドナーの起こした黒い雷が宙を駆けて流衣達の方へ急襲する。

パン！

硝子の割れるような甲高い音がした。

デイルが咄嗟に大剣を抜き、刀身で魔法を跳ね飛ばした音だった。後方に追いやられた流衣が目丸くし、何事が起こったのかとパチパチと目を瞬く。肩に乗っているオルクスはみるみるうちに厳しい色を浮かべた。

「いきなり何をするのだ。不意打ちとは卑怯であろう。そもそも、貴公はどなたか？」

ネルソフの男達をざっと一瞥。知人ではないと判断したデイルは、不可解さに眉間に皺をぐつと寄せる。

何となく穏やかでない空気を察し、流衣もまた顔を強張らせる。

「もしかしてこの人達が通り魔……？ 危ないよ。逃げた方がいいよ」

青くなつて逃亡を訴える流衣。

そんな二人の様子を見て、流石におかしいと思つたらしい。老人は低い声でグドナーを制する。

「待て。どうやら本気で勘違いなようじゃぞ。白服の騎士が確かにいたが、あちらの小僧はおらなんだ」

「はん、そんなこと知るか。俺は一度始めた試合は最後までする主義だ」

グドナーは口元をひん曲げる。

最後までというのが、恐らく死ぬまでという意味だろうと察し、流衣はますます顔色を悪くする。一目で、グドナーが全うな道を歩んでなさそうな雰囲気を感じ取った。相手を傷つけることが快樂であるかのような歪んだ目をしている。

「ワシに逆らう気か」

底冷えするような声が出た。

低く、冷たい、しわがれた声。

場の空気を凍りつかせるのには十分だ。

グドナーは喉を引きつらせたような悲鳴を漏らした。老人の暗い目がグドナーをギラギラと見つめ、グドナーは怯えた様子で首を振る。

「まさか、そんなことはしない！」

「ならば言う事を聞け。ワシは同じことを二度も三度も言うのは好かぬ。また同じようなことを言わせれば……」

老人の目が鋭く光り、グドナーは頬を引きつらせる。

それを見て溜飲が下がったのか、フツと表情を緩ませる老人。

「ふん、良かるう。まあ、お主が勘違いするのも頷ける。あの中にいた奴も、其奴のような赤い髪だったからのう」

灰暗い灰色の目がリドの方を向き、リドは内心ドキリとした。が、やはり顔には出さず、飄々と言つてのける。

「勘違いと分かってくれてありがたいね」

「フン、肝の据わったガキじゃな」

少し面白そうに、老人は目を細める。そして、黒服の男二人を連れ、無言でその場を立ち去った。謝罪の言葉はなかった。

ネルソフの三人の姿が見えなくなった頃、ようやくリドの肩から

力が抜けた。

これだから黒服は嫌いなのだと苦々しく思う。しかし何故だろう。自分がここまで黒服、それも黒い外套やマントを嫌う理由が分からない。忘れた記憶の中に原因があるのだろうか？

「一体、何だったのだ？」

事態を飲み込めないでいるデイルの問いに、リドは首を振って答えない。代わりにこう呟いた。

「公爵様の所に行こう」

襲撃者が町にやって来ている。それだけで警戒には十分に値する。それに敵の正体も知れた。

アンジェラに話して対策を立てて貰う必要があった。

十九章 奇策

「闇魔法使いがついているとは思っていたけれど、まさか襲撃者全員がそうだななんて。……ですがそれなら殿下の部下の方達が皆殺しにされたのにも納得がいきますわ」

リドの話を聞くと、しばらく黙り込んで考え込んだアンジェラは、厳しい顔になり冷静な声で言った。

「ヴェインスの部下は戦闘経験も豊富な、いわば精鋭も混じっていたのだ。それなのに突然の襲撃程度で全滅したから、何かおかしいと思っていた。」

一瞬、仲の良かった部下のことを思い出して沈痛な表情になったヴェインスであるが、すぐにその表情を消して不可解さに眉を寄せる。「ネルソフを雇ってまでして、一体何故私を狙うのです……？」

自分が王子の時ならともかく、今は臣下くだに下った身である。確かに王弟おつていという意味では尊ばれてはいるが……。それにしたって解せない。

「これは噂に過ぎないのですが、ヴェインセント様」

アンジェラは言うべきか逡巡しゆんしゆんした後、意を決して口を開く。

「一部の反女王派が反乱を起こすかもしれないらしいのです。まだ明確な確証までは得ておりませんが……」

「反乱……！？」

ヴェインスは目を丸くした。寝耳に水とは、まさにこのことだ。

「何故です？ 姉上が二年前に王座に就かれ、徐々に力も増しつつある今にですか？」

「今だから、だと思いません。完全に力をつける前に叩こうとしているのでは？ あくまで確証はないので推測ですが……」

ヴェインスは秀麗な眉をひそめ、顎に手を当てて思案する。

「推測で構いません。その、反乱分子に心当たりは？」
アンジェラは曇った表情で答える。

「西から南の貴族です。中には女王派もありましょうが」

「その可能性はどれくらい確かなのです？」

「……限りなく黒に近い灰色、といったところですよ」

ヴィンスは沈黙し、嘆かわしそうに溜め息をつく。

「なるほど、そういうことですか。叔父上が関係しているのですね……」

「恐れながら、おっしゃる通りかと」

アンジェラもまた居たたまれない思いである。

前国王陛下の弟君であり、現女王陛下と王弟殿下の叔父にあたるその人は、西の一角を治める強力な力を持つ領主である。女王が継ぐに当たって、色々と反対していた人でもあった。

「反乱分子がヴィンセント様の御身を拘束する気なのか、命を奪うのか、わたくしには分かりかねますが、このアンジェラ・リーベル率いる一隊で、必ずや王都までお連れ致します」

左胸の前で右手の拳を握る敬礼をし、アンジェラは誓いを述べる。

「ありがとうございます」

ヴィンスは感銘を受けて軽く目を睜り、それから静かに目を閉じる。アンジェラや、アンジェラを寄越したりリシャウスの忠誠の気持ち胸に響いた。

一枚の絵のような光景に、流衣は感動していた。

これが中世のありようなのかもしれない。実際に目にするところになに深く胸を突かれるのだなど、安堵にも似た息を漏らす。

（けど、まさか反乱か……。ということはそのうち内乱が起きるってこと？）

今一それがどういふ事態になるのか深刻さが分からないのだが、折角戦争のない平和な時代に来たと言っていたのにという残念な気

分になる。

「それで一体、どのように対応されるおつもりです？」

全く空気を読まないオルクスの一言が、場の穏やかな雰囲気吹き飛ばした。

少しは気を遣えよとリドは目を眇め、デイルもまた苦笑している。流衣もほぼ似たような複雑な表情になる。

「町まで来ているとなれば、あの馬車を使えばばれてしまうこと請け合いですね。もしかすると町の門で待ち伏せされているかもしれない」

アンジェラはぶつぶつと呟き、考えを巡らせる。

「かといって徒歩で進めば容易く追いつかれましょう。先輩は何か良い案はございません？」

エドガーは急に話を振られて面食らう。

「急に言われてもな……」

皆、それぞれ唸って考え出した。

「リドやデイルの髪の色や服装は見られているし、変装した方がいいってことだね。うーん、変装、変装かあ……」

流衣はぶつぶつと呟き、ふと、食堂にいた吟遊詩人を思い出した。

「あ、変装つていえば、移動劇団が明日出発だって言ってたな……」

変装といえは衣装、衣装といえは劇。そんな連想の果て、流衣はぼつりと小さく呟いた。

「それだ！」

エドガーがいきなり声を上げた。いきなり近くで叫ばれ、流衣はびくりと肩を揺らす。

「それがとは……？」

アンジェラは眉を寄せ、エドガーを一瞥する。

「だから、移動劇団だよ！そこに団員として紛れ込むんだ。馬車も細工して、ついでに俺らの衣装も全部変えちまえば良い。髪色がばれている奴は染めればいいし」

その提案に、アンジェラの顔が喜色に輝く。

「確かにとても良い案だね。ようは、ヴィンセント様がヴィンセント様だとばれなければいい。つまり男に見えないで、女に見えれば良いということね!」

『へ?』

激しい論理の飛躍に、部屋にいた男性陣は揃って固まった。一番石化したのは、名指しされたヴィンスである。

「……あ、あのうアンジェラ? それはどう……」

「大丈夫ですよ、ヴィンセント様! 貴方様のような美しい顔立ちなら化粧と髪型次第で女の子に見えます! 大人でなくて良かったですわ!」

アンジェラは一人舞い上がり、両手を組んで、うふふふと花を舞い散らす。

「じよ、冗談ですよね?」

ヒクヒクと頬を引きつらせ、ヴィンスが嘘であってくれと言わんばかりに恐る恐る問いかける。

「嫌ですよ、大真面目に決まっているではありませんか! 素敵ですわ、なんて楽しそうなんですの。ああ、腕が鳴ります!」

完全に乙女モードに移行してしまったアンジェラは、浮き浮きと袖をまくり始める。

それから、にこにこエドガーを振り返る。

「ヴィンセント様のことは私にお任せ下さい。先輩は移動劇団の所まで行って、話を付けてきて下さい。報酬はあなたの采配で決めて頂いて結構です」

「は、はあ。じゃあ行ってくるよ」

エドガーはヴィンスに若干同情の目を向け、それから微笑みを撒き散らしているアンジェラを不気味そうに見てから部屋を出て行った。

「うふふ、まずは衣装を揃えなくてはね。どうしようかしら、町娘

風で良いかしら。ああ、でもきつと貴族の令嬢にしか見えないの
でしょうね」

「ぼわわんとアンジェラは夢見がちに呟く。

内容さえ無視すれば、とても可愛らしく目に映る。そう、内容さ
え無視すれば。

「じゃあ俺らも髪染めの染料を探しに行くか。あと、デイルも衣装
買う必要あるな。大剣も目立つし、布か何か探して包めよ」

「うむ、そうだな。しかし面白いな、変装とは初めてするぞ」

「僕もした方が良いのかなあ」

流衣達は互いにそう言い合って、そそくさと部屋を後にする。

「ちよつ、酷いです、一人にしないで下さい！」

まな板の上の鯉な状態に陥っているヴィンスは必死で呼び止めよ
うとしたが、余計な飛び火が来るのを恐れた少年達の行動は早く、
間に合わなかった。

残ったのは、戦々恐々と長椅子で顔を青くするヴィンスと、夢見
がちに微笑み続ける護衛のリーダーたる妙齡みよつれいの女性の二人。

はつきり言って、かなり不気味な光景だった。

* * *

かくして、奇策は実現し、ヴィンスとその護衛一行は移動劇団ス
カイフローラに紛れ込むことに成功した。

花形のヒロイン役を演ずる吟遊詩人リメランがアンジェラの友人
であったことと 判明した時は互いに驚いていた 、団長のク
レメンスがヴィンスに同情したことにより、すんなり決まった。

劇団の裏方と共に馬車も見た目を改造し、舞台セットの一部でつ
いてきているように見える物にまでなった。質素な緑色の馬車がピ
ンク色に塗られているので、何となく、近づくのに抵抗を覚えてし
まう程の変わり様だ。凄い。何がって、そりゃあ勿論ピンクで塗っ
てしまうそのセンスがだ。

ヴィンスは勿論、護衛一行は皆、それぞれ服装や髪色を変えて変装している。

流衣もまたそうだ。マントを脱いで若草色の厚めの上着を着、頭に青色のバンダナを巻いただけではあるがパツと見では同一人物か分からないだろう。勿論、杖も手にしていない。魔法使いという印象を取り除いた結果だ。

リドは鮮やかな赤色の髪が目立っていたので、髪を焦げ茶色に染めた。それだけで、何だか品の良いお坊ちゃんに見えて驚いた。飄々とした態度で隠れてしまいが、顔の素地は良い方なのだ。服装は緑色のロングニットの上着と、白い長袖のＴシャツ、あとは元の通りの灰色のズボンとブーツである。額に巻いていた鉢巻を外し、代わりに白色のキャップ型のニット帽を被って、前髪を目元まで引き下げている。どこから見ても別の人間にしか見えない。二本付けていたダガーは一本に減らし、腰の横ではなく後ろに来るように吊る念の入れようだ。

それから、デイルはというと、銀髪を黒く染め、楕円形の銀色フレームをしたダテ眼鏡をかけ、生成り色のシャツと臍脂色の布製ベスト、黄土色のズボン、黒い革靴という、いかにも学生さんといった感じの服装で纏めている。本人も、学者志望の学生をコンセプトにしたと言っていた。何だかとても楽しそうだった。一般人の服は着やすいのだなと感心していて、やっぱり貴族のお坊ちゃんだと思ったりもした。

流衣達の格好を見て、一人だけ女装させられたヴィンスが物凄く怨念を一杯にこめた視線を向けてくるのを、流衣達は見ない振りをしていた。茶色い女物の鬘を被り、町娘のようなエプロンドレスに身を包んだ姿はどう見ても美少女だ。だから睨まれても別に怖くはないが、いつとばつちりがきて女装の憂き目に遭うか知れないので、極力目を合わせないように心がけている。

まあそれはともかくとして、流衣は劇団の食事当番を手伝っている。理由は、元々捨て子を拾ったりして結成している劇団らしく、

料理がまともな味をしていなかったせいだ。唯一まともな食事を作れそうな団長は味覚オンチだし、女性であるリメランならどうかと思えば、ゆるゆるな空気が手伝ってか料理する以前に辺りを散らかして作業が進まない。それで見かねた子供達が作っていたわけである。

味がするようないような、おいしくもまずくもない、そんな妙な味のするご飯を一食食べて、これは料理ではないと憤然としたアンジェラが改善に乗り出した。流衣も助っ人で引っ張り込まれ、三日経った今では何故かほぼ一人で担当している。でも、劇団の子供達が野菜の皮むきを手伝ってくれるのでとても助かっている。子供達は子供達で、これを機にまともな料理を覚えるつもりらしい。「ルー兄。今日の夕ご飯なあに？」

まだ六歳の女の子、茶色い髪を二つ結びにしたジェシカが緑色の目をキラキラさせて訊いてきた。ジェシカはルイという発音が上手く出来ないようで、ルーと流して呼ぶ。

「んー、まだ決めてないな。ジェシカは何が食べたい？」
「味のしないご飯以外なら何でもいいよ！」

ここにここにここ。
あんまり無邪気な笑顔で言い切るものだから、不意打ちのせいで流衣は目頭が熱くなった。

なんて不憫なんだ。思わず、目蓋を押さえて天井を仰ぐ。
そんな流衣を見て、ジェシカはきよとんとする。

「どうしたの？」
「ううん、ちょっと目にゴミが入っただけ……」

流衣はジェシカの頭を撫でながら、苦い笑みを浮かべる。小さい子がこんなことをさらりと言ってしまふから、余計に料理に気合が入ってしまう。

「じゃあミートボール入りのトマトスープと、グリニ草のキッシュにしようかな」

「わあ、おいしそう！」

グリニ草というのは、ほうれん草みたいな味のする野菜だ。
ジェシカは目を輝かせる。

流衣の作る料理は元いた世界の物ということもあり、食べたことのないものも多いみたいで割りと好評だ。

移動劇団は細長い箱型をしたステージに車輪がついていて、それを牛が引つ張って旅をして回るので、割とゆっくりめで移動する。他にも居住スペースらしき箱が二つあり、その内の一つの裏口の所にこの手狭な調理場はある。移動しながらも料理できるが、大体が休憩で馬車を止めた時に料理をするので、あまり意味はない。それに、外で簡易炉　煉瓦を適当に積んだだけのもの　で調理した方が随分楽だ。

じゃあスープレの前にキツシユを作るかなと考えを巡らす。

昨日の昼間にシャノン公爵領から王領への入口となる門を抜けたので、今いるのは王領の端っこの方の森の中だ。あと四日も進めば森はなくなり、草原に出るらしい。まあ草原というか、平野部分はほとんど王の財産となる穀物類を育てる畑らしいが。

今はちょうど三時くらいだろうか。森の中を流れる小川を見つけたので、そこで移動を止めた。今日はここで一泊するのだそうだ。

「あれ、薪切れてる」

竈かまどに火を入れようとして、薪たきぎのストックが無いことに気付いた。

こういう場合、どうしたら良いのだろう。ジェシカに訊こうと振り返ったところで、調理場に、金髪灰色目の少年と、黒茶の髪を伸ばして後ろで一つにまとめた、緑色の目をした少年が駆け込んだ。

「ルイー、今日のおやつは？」

金髪の方であるランスが間延びした声で訊く。ランスはとても活発そうな外見をしていて、将来、この劇団の主演になりそうな感じだ。見目も悪くない。

「駄目だよ、ランス。ルイさん、年上なんだから呼び捨てにしちゃ」
反対に、もう一人の少年　サジエは物静かで、頭が良さそうな

顔をしている。ただちょっとばかり痩せぎすで、ちゃんと食べているのか確認したくなる感じだ。

サジエの小言を聞いて、ランスがフンと鼻を鳴らす。

「どう見たって同い歳だから敬語使う気しねーの」

「ハ、ハハ……」

流衣は苦笑したまま、頬の筋肉をヒクヒクと引きつらせる。

ランスの言う通り、十二歳というランスは、流衣とそんなに身長が変わらない。成長良すぎだろう、詐欺だ。

サジエもランスと同じ歳のはずだが、ランス程身長はなく、小さい方だ。140センチくらいか？日本でならまあ普通くらいか。流衣の記憶が正しければ、高くて165センチくらいだったはずだ。小学生なら、女子の方が身長はあったような気がする。

「こおら二人とも、失礼なこと言わないっ！」

まっすぐに薄紫色の髪を肩口で揃え、リボンのついた黒いカチューシャをした利発そうな少女が現れ、ランスとサジエの襟首を掴んだ。淡い青色の目は大きめだが僅かに吊っていて、気の強そうな感じの少女だ。着ている質素なワンピースも薄紫色をしている。

「放せよ、馬鹿力！ほんとのことだろ！」

「ひどいよルディー姉さん！俺は悪いこと言っていないのに！」

ランスとサジエはじたばた暴れる。しかしルディーはどこ吹く風で、しかもびくともしない。ランスの言う通り、ルディーは少々怪力だ。

そんな彼女は、流衣より一つ上だ。団長やリメラン、他の大人に代わり、元孤児であるせいで作り方を教わったことすらない料理に挑戦して、味のない料理を作っていた張本人である。町の食堂で食べ物の見た目をそのまま真似てみたらしい。他にも、他の子供も手伝っていたみたいだ。

「ランスって今日もバカだね」

ジェシカがおませな口をきき、ランスが眉を吊り上げる。

「んだと、ジェシカ。っーか、兄ちゃんって呼べって言ってるだろ

！」

「ランス、らんぼうだしガサツだし、ソンケーできないもん」

「なんだって!？」

正直にジェシカが口にした言葉に、ますます怒るランス。が、ルディーに首根っこを押さえ込まれているので、さっぱり迫力は無い。しかし剣幕だけは伝わり、ジェシカがキヤアと声を上げ、流衣の後ろに隠れる。

「くおら、小さい子を怖がらせないの！」

ポカリとルディーがランスの頭に拳骨を落とし、ランスは頭を抱えて「理不尽だ」と呟く。

「ねえねえルー兄、今日のおやつって何？」

ジェシカはそれを見て満足したのか、流衣の服にしがみついたまま、上を見上げて問うてくる。

「今日はアップルパイを作ってみたよ」

この国のお菓子というと、クッキーやマドレーヌみたいな焼き菓子とゼリーのことを指すらしく、ケーキやプリンやパイクッキーは存在しないらしい。シチューに入れる用に生クリームはあってもお菓子里に使うことはなく、それと同じでパイに野菜を入れることはしても果物を入れることはないらしい。不思議な話だ。

だからだろうか、流衣の料理よりお菓子の方が評判が良い。

そもそも、料理だけで手一杯だった劇団の調理場でお菓子が作られたことはなく、何となく気分転換に作ったら評判が良かったのでおやつに出すようにしているだけだ。

流衣は夕飯の支度の前に、おやつを出しておくかと考えを切り替え、ルディーに頼む。

「ルディーさん、運ぶのを手伝って貰ってもいいですか？」

「勿論よ」

ルディーは少年達からあっさり手を放し、袖まくりをしながら流衣の方にやって来る。

流衣はというと、調理台の方で冷ましていた大きなアップルパイ

を示し、一つを流衣が抱え、もう一つをルディーが運ぶ。

「ランス、あんた、テーブルを拭いてきて。サジエとジェシカは取り皿とフォークを運んでちょうだい」

「……はい」「」

ルディーの指示に、子供達の声が重なる。途端、ルディーの眉が吊りあがった。

「返事はハイでしょ！ もう一度！」

「……はいっ！！」「」

……完璧に母親だ。

ルディーには出来るだけ逆らわないようにしよう。流衣は目の前の光景に感心しつつ、そつと心に誓った。

アップルパイを切り分け、団員やヴィンスや神官達に出すと流衣はすぐさま調理場に引っ込んだ。

気分転換に菓子作りをするのは好きだが、食べる方にはあまり執着はない。たまに甘味を食べたくなることはあっても、普段は朝昼晩にご飯をしっかりと食べられればそれで十分満足だ。それに味見で少し食べているから、おやつまで食べる気にならないのもある。

「リドー、おやつ作ったんだけど食べるー？」

調理場を抜け、裏口から外に出、箱型のステージや住居の屋根を見上げて目当ての人物を見つけると、流衣は口の両側に手を当てて叫んだ。

ディルは社交的な性格らしく、大勢でわいわいと食べるのが好きみたいだが、リドはそういう所が苦手なようで、気が付くと一人で離れてしまっている。移動劇団では大体において屋根の上で昼寝している。気が向いた時だけ出てきたりと、まるつきり猫みたいだ。

案の定、住居の一つの屋根で白いニットのキャップを顔に被せて昼寝をしていたリドは、眠そうに目をこすりながら半身を起こす。

「なんだあ？」

流衣はもう一度、同じ内容を繰り返した。

「ああ、もうそんな時間か。いつの間に止まったんだ？」

昼食で一度移動を止めた後に屋根に上り、それからずっと寝ていたらしい。移動を止めたのにも気付いていなかったようだ。

リドは一度大きく伸びをしてから、高さなど物ともせず、パツと屋根から地面へ飛び降りる。

流衣が布に包んだアップルパイを渡すと、リドは不思議そうにパイを見て、その場で噛り付いた。

「おっ、美味しいなこれ。へえ、林檎入れてんのか。変な食感だな」

「そういうものだよ。シナモンは入れてないけど」

流衣はシナモンがどうしても苦手で、アップルパイには入れないことにしている。

そしてそう言いながら、はたと気付く。

「ああ、しまった！ 今日の晩御飯をキツシュにするんなら、おやつにパイはまずかったかな」

別物とはいえ、丸いグラタン皿に入れて焼くのだから見た目が少し似ている気がする。

「別に平気だろ、ここの奴らは食える物なら何でも歓迎だろうさ。というかキツシュって何だ？」

サクサクとパイを頬張りながら、リドはそんなことを言う。

「うー、食べられる物なら何でも良いなんて張り合いないなあ」

任されたからにはおいしい物を作ろうと頑張っているのが虚しくなるではないか。

だが、事実そうだろう。ジェシカが、味のしない料理以外なら何でも良いと言っていたのを思い出し、確信する。

流衣は軽く頭を振り、簡単にキツシュの作り方を説明した。

「へえ、美味そうじゃん。聞いた感じじゃ、パイと全然違うと思うが」

「一度にたくさん作れるし、おいしいし、人数多いから便利かと思

うんだけど。うーん、そっか、違うように思うんなら大丈夫かな」
出来るだけ、朝昼晩で見た目の違う物を出せるように努力はしている。

だが、団員は十五人と大所帯だし、そこにヴィンスと護衛が加わっているのだから二十三人になるわけで、とてもじゃないがいつペんに作れる程の腕がなくて四苦八苦しているのだ。せいぜい作っても四人前の生活をしてきたのだ、こっちは。お陰でスープ率が高いのだが、それくらいは許して欲しい。

神官やリドもときどき手伝ってくれているとはいえ（デイルは手つきが危なっかしくて怪我しそうで怖いので丁重にお断りしている）、そもそもレパートリーがそんなに無い。ここはこの国の人に料理を教わるしかないのかもしれない。

「頑張ってるなあ。適当にほどほどにすりゃあいいのに。それだと疲れっだろ」

真面目に悩んでいると、リドが呆れたように言った。

「手の抜き方が分からないんだよ。まあ、リドみたいに昼寝ばっかしてたら疲れないと思うけど」

少し皮肉を混ぜてみたが、さらりと笑みとともにかわされる。

「そう見せかけて、屋根の上から見張りしてんだよ。働き者だろ、俺」

「……さっき爆睡しといてよく言う」

流衣がリドの肩を小突くと、リドはけらけらと声を立てて笑う。

そして、最後の一口を口に放り込む。

「ごっそさん。寝起きに小腹空いてて助かったぜ」

「中で皆と食べれば良いのに」

リドがおやつは皿ごと持って出て外で食べるものだから、諦めて最初から手渡しするようにしてみたが、そういうのは自分から壁を作っているように見えてどうだろうと思う流衣である。

「食事なら中で食べてるだろ？ 菓子まで中で食う必要ねえだろ」

流衣は諦めて溜め息をついた。

本当にマイペースというか自由というか。

リリエラの占いは大当たりだ。確かに、この調子なら人とすぐに打ち解けるのは難しいかもしれない。本人がそれで困っていないよ。うなので良いのだろうけれど。

「あ、そうだ。薪切れてるんだけど、そういうのってどうすればいいの分かる？」

「そういうのは大概、出入り口に丸太が置いてあるはず……」

折角だし、リドも暇そうだし、訊いてみる。今一、ここの調理場は勝手が違うのでどこに何があるのかわからない。他人の台所だからというのもあるが、作りが少し違うのだ。

リドはすたすたと裏口から調理場に入り、入って右手の木箱の蓋を開けた。言った通り、丸太が何本か入っている。

「一応、使っていいか確認してくるか。こっちは任せとけ」

「うん、よろしく」

リドは調理場の奥にある食堂に行き、確認してから斧や台や丸太を持ち出し、鼻歌混じりに薪を作り始めた。

(そうなんだよなあ、リドって木こりなんだよね)

旅していると忘れそうになるが、リドは木こりを生業にしているのだ。

軽快に丸太を薪に変えているのを見ながら、真面目に考える。

あれくらいしていたら、体力もついて背も伸びるのだろうか。ランスの言ったことを無意識に気にしていたのか、そんなことを思った自分を笑い、流衣は根菜類の皮むきをしようと水場の方を振り返った。

幕間 3

ポロツクの町から、急に標的の足跡を見失った。

「どこに行ったんだ！」

グドナーの愚図めが苛立ちげに足を踏み鳴らす。

いちいち小うるさい男ですね。こちらまで苛立ってくるではないですか。

丁寧口調が口癖になっている男は、眉間に皺を寄せ、極力視界にグドナーを入れないようにして、周囲を見回した。

ここにはポロツクの町を抜ける門がある。

「あ奴らも馬鹿ではないということなんじゃろう。フン、どうせ行き先は決まっておる。先回りして待ち構えておればよい」

冷やりとする声で老人が呟いた。その声に冷水を浴びせられたみたい、グドナーの煮えつきもおさまる。

「でもよ、爺さん。王都周辺は警戒が厳しいぜ？」

珍しくも割とまともな意見を口にするグドナーを、老人はちらりと一瞥する。

「その前にワシらの拠点の一つがある。仕事も楽になろう」

老人の言う事は最もだった。

丁寧口調の男も頷く。

「確かにあなたの言う通りです、蛇使い殿」

老人は答える代わりにフンと鼻を鳴らす。

この居丈高な態度、とても勘に触れますが、自分では逆らっても死が待っているだけなので何もしません。グドナーだってそうです。本当は誰かを殺めたくてうずうずしてるのでしょように、この人が怖くて大人しくしていざるを得ないのでから。

その答えのように、老人の足元の影の中で、蛇が鎌首をもたげた。

一瞬、目が赤く光ったのを見逃さない。

背筋にじわりと嫌な汗が浮かぶ。自分達の小さな反抗心など、容易に踏み潰されてしまう。今では逆らう気すら起こらない程に。

「これで失敗でもしてみろ、依頼主は怒り、マスターもお怒りになる。それだけは避けねばなるまい」

こんな老人でも、自分達のように恐れる存在がいる。それは勿論、自分達にも当てはまるのだが。

二年前だ。

二年前、突如ふらりと現れた男が、いきなりそれまでのネルソフのギルドマスターを殺害し、逆らう者を容赦なく叩き伏せて新しくその座に就いた。

それまでは組織としては強くとも協調性など一欠けらもなかったのに、今ではこうして三人で組まされて行動させられる程である。

「ええ、でなければ私達は明日を見る前に、首が胴体から離れていることでしょう」

「……ああ」

丁寧口調の男の言葉に、グドナーも頷いた。

三人の間に、葬式にも似た重い空気が落ちる。

「……では急ぐとするかの。我らの明日の為に」

老人が厳かに^{おしと}呟き、残りの二人は沈黙で答える。

悲鳴のような音を立てて風が吹き、木々は不吉な音を立ててざわめいた。

二十章 霧の徘徊する町 1 (前書き)

* 第四幕 あらすじ*

追っ手の目から逃れ、劇団に潜り込むことに成功した護衛一行だが、通りがかった町フォウナン・トール工では奇妙な事件が起きていた。はからずも流衣も巻き込まれてしまい……。

二十章 霧の徘徊する町 1

この町ではたまに人が消える。

旅人や身寄りの無い者を狙った泥棒や人攫い、そんなものは人目につかない場所などでは日常茶飯事として起きる犯罪事象ではあるのだが、そういうものとは違う。

ときどき、どこからともなく霧が出て町を覆い隠し、その間にどこかで必ず子供が一人消える。それは大抵、五、六歳の子供で、性別は決まっていなかった。

最初は浮浪者、次は孤児院の孤児、そして今では町の子供や旅人の子供など見境がなくなってきた。

事態を重く見たラーザイナ魔法使い連盟 通称杖連盟は調査に乗り出したが、分かったのは霧が闇魔法の一種であることと、転移魔法をかけあわせた術であることと、そして恐らく術者は相当に腕が良いということだけだった。

お陰様で、大変迷惑なことに、その女は疑われていた。彼女は腕の良い魔法使いで、通り名が 霧の魔女 であつたので。

本当に迷惑なことだ。だが、証明する手立てがないのも事実。「腹立つな、本当に」

時計塔の一階のテーブルに頬杖をついて文句を零すと、白い髪と赤目をした、訳あって五年前から見た目が変わらなくなった息子がやれやれと息を吐いた。

ああ、腹が立つ。犯人にも腹が立つし、目の前の息子にも腹が立つ。

こっちは美貌を保つのに必死に努力しているのに、息子ときたら不老なのだから。しかも自分に似て綺麗な顔をしているのがまたムカつく。喧嘩売ってんのか。

「売ってませんよ、いい加減慣れて下さい」

息子が呆れた声で口答えした。

むかつ。

「お茶！」

どんつとテーブルにコップを置いたら、息子は嫌そうに半眼はんがんでこちらを見た。

「八つ当たりしないでくれますか。……ほんとに大人気ない人ですね、あなた」

「何か言ったかい？ 愚息ぐそく」

じろつと一瞥したら、息子は仕方がないなあというように肩を竦め、調理場の方に向かった。

ほんとに腹が立つ。

誰か犯人を捕まえて、ついでに息子も家から連れてってくれないものか。

一重に自分の精神の安定の為、女は心の底からそう願ひ、重苦し溜め息をつくのだった。

* * *

雨が降りそうだ。

四角柱の背の高い時計塔は、灰色の空を背にして建っていた。フオウナン「トーエの町の門に入る前からも見えていたその塔の屋根は青色で、ほぼ平坦に近い三角形をしている。鈍い鉄色てついろをした雲は低く垂れ込め、今にも雫が落ちてきそうだ。

コンテナのような、バスのような、そんな細長い形の車輪のついた箱型の居住スペースを牛がゆっくりと引っ張り、ガタガタと揺れる車内から、流衣はぼんやりと空を眺めていた。

白い鳩の群れが時計塔の周りを旋回し、ゆっくりと町の中心部にある時計塔前の小さな広場の方へ降り立っていく。

しばらくすると移動劇団いどうげきだんは、町の外れにある広い空き地に着いた。

どの町もそうらしいのだが、町には、旅一座や楽団、行商などの大所帯になる者達の為に宿泊スペースが設けられている。簡単にいえば、町の中にある野宿用の広場といった感じだ。設備の良い所だとテントが並んでいたり、コテージもあつたりするらしい。勿論、安いとはいえお金も取られる。

小さい町だから、移動劇団スカイフローラは一日だけ公演して、明後日の朝には町を発つ予定だという。

急ぎの旅とはいえ彼らには協力してもらっている身だし、移動劇団が公演もしないで通り過ぎるのは不自然すぎる為、特にヴィンスから不満が上がることはなかった。女装だけはやめたいという不満ならあつたが。

劇団に紛れ込んだのが功を奏したのか、今の所ネルソフの襲撃には遭っていない。だからのんびりとした平穏な日々が続いていた。

移動劇団スカイフローラは一番奥まつた所にある空きスペースに、箱型のステージや居住部分などの馬車を停車させる。

そして、真つ先に団長のクレメンスが馬車から降りる。クレメンスは禿頭とくとうと黒いカイゼル髭ひげが印象的な初老の小男で、右目にモノクルをかけている。まるで外国被れの小洒落た喫茶店のマスターみたいな、白シャツと黒いベスト、黒いズボンに茶色い革靴、という格好をしている。少し強面ではあるが、いつも微笑んでいて人の良さが滲み出ているので怖い感じはしない。それもそのはずで、クレメンスは子供好きで、食べていける状況ならば率先して捨て子を拾ってくるのだ。劇を愛し、子供達を育む、いわば劇団のお父さんである。

クレメンスは宿泊スペースの管理人を探しに行き、場所の確認と注意事項を受け、使用料を支払うと、団員達に注意事項を伝えてから解散にした。公演は明日なので、今日は自由に過ごしていいとのことだ。

団員の大人の何人かに、外食するから今日の夕飯はいらないう言付けをされ、流衣は人数を確認してメモしておく。幾ら自由に

してもいいとはいえ食事はするわけだから、流衣には役割があるのだ。だが、夕飯の支度をするにはまだ時間もあるので、折角だから町の散策に出ようと思う。ついでに材料の買出しもしておこう。

ちなみに、今回の劇団に紛れて共に行動するに当たったの劇団への報酬は、団員分の食費とプラスアルファで纏まったらしく、今の所、リシャウスから経費として渡されているお金から払っているらしい。そちらの分はアンジェラが管理している。

流衣が買出しをしてくる旨を告げたら、アンジェラはリッツを呼んだ。

「リッツ、買出しに行くそうだから、一緒に行ってきた」

「ええー、エドガーさんに頼めば良いじゃないか。俺、まだ馬の世話を終えてないんだ」

リッツは馬が気になるのか、ちらちらと馬の方を見ながら答える。御者席についていることといい、リッツは馬好きなのかもしれない。

「駄目よ。先輩だと、無駄な物まで買うんだから」

アンジェラは流衣に向き直り、にっこり笑う。

「荷物持ちと思って、扱き使っていいからね」

「はあ……」

言うだけ言うと颯爽と身を翻すアンジェラ。姉の強さを見た気分だ。

「ちえ、姉さんには参るよ。扱き使うの上手過ぎだ」

リッツはやれやれと首を振る。慣れっこで諦めたといった感じだ。流衣は申し訳なさ全開で謝る。

「すいません、僕一人でも良いんですけど」

「いやいや、財布の管理してんのがこっちなんだから仕方ないさ。

それにどう見ても、君一人じゃ荷が重い。俺がいてもきついな」

二十人近い食料の多さは伊達じゃない。

「じゃあリドとデイルにも頼みます」

「いや、それはやめといた方がいい。ネルソフに目え付けられてるし、出来るだけ人目に付かないように、二人には言ってる」

「そうなんですか」

それは知らなかった。

「じゃあ私が手伝う！」

居住スペースの箱の表口から、ぴよこつとジェシカが顔を出した。ここにこしながら流衣に纏わり付いてくる。すっかり懐かれたらしい。

「ははは、ありがたいけど、チビちゃん一人じゃな」

リッツは笑い、かといって純粋な好意を跳ね除けるのも悪いと思いい、躊躇したように困った顔になる。

「ジェシー、偉い！ 私も行くわ。勿論、ランスとサジエもね」

裏口からルディーが顔を出した。両手にランスとサジエを引きずって。

「放せよ、男女！」

「何で町に来たのに手伝いしなきゃなんないんだよー！」

少ない小遣いで菓子屋を覗くつもりでいた二人の少年は、必死で抵抗している。

「あんた達、今後も味のする料理を食べたいんなら、材料を買うのも見ておかないと無理でしょ！ あんた達はまたアレに戻りたいの！？」

ルディーの一喝に、ランスとサジエは揃って顔色を変えた。確かにルディーの言う通りだ。大人達は食べられればいいとあまり気にしていないが、子供達にはあの味は耐えられないのである。

「分かった、手伝いマス！」

「当然だよ、ルディー姉さん！」

二人はがらりと態度を変え、びしつと言い切った。

『坊ちゃんー！』

そこで、流衣達が出かけると聞きつけて、今はピンク色に塗られたられている馬車の方からオルクスがすっ飛んできた。

流衣が動物は調理場に立ち入り禁止宣言をしたので、一人しよげ返りつつ、普段はヴィンスや神官のいる馬車にいたのだ。元々人数

分の余裕しかないスペースなので、移動中は神官も馬車の方にいるしかない。リドが屋根の上を定位置に決めてしまったのも、その狭さ故である。

「あ、オルクス。朝ぶり」

流衣は右手をオルクスの方に伸ばす。すると、右手の人差し指の甲に、羽音をさせてオルクスが舞い降りた。

「お久しぶりです。坊ちゃんはほとんど調理場にこもってらっしゃるから、わては寂しゅうございます!」

ここぞとばかりに主張するオルクス。

流衣は苦笑する。

会う都度、この台詞を聞かせられている。

「うん、ごめんね」

そしてその度、流衣もそう返す。

流衣はひょいとオルクスを肩の方に移動させる。ジェシカがオウムさんと目をキラキラさせて見上げているのが微笑ましい。しかし、劇団に来てすぐ、散々子供達に構われてオルクスは子供が苦手になったようで、今では寄り付こうともしないので、触らせてあげるわけにもいかない。

「それじゃ行くか」

リッツが言い、皆頷いた。

フオウナン「トーエは中規模な町で、ポロツクよりは大きい町のようだ。

前にもこの町に来たことがあるらしいルディーの話だと、週末の昼時だけ小鐘演奏こかねんそゆうがあり、その時は町中に鐘の音ねが響くらしい。塔の一番上辺りにオルガンが置いてあって、その鍵盤を叩くと、天井に付けられている小鐘が振られて音が鳴るらしいのだが、ルディーも見たことはないのだとか。

ここでは一週間は六日だ。光・火・水・木・風・地の曜日があり、

光の曜日「始まりの光」で、地の曜日は「眠りの地」と呼ばれているのだとか。日本でいうところの日曜日が地の曜日らしいが、地の曜日に休みをとるのは貴族やお金持ちくらいなもので、一般人はほぼ毎日働いて、時々休みを取るくらいだそう。そうしないと食べないから、らしい。

流衣はリッツ達に先に断り、魔法道具屋に寄らせてもらうことにした。

(ここにも出回ってるのか……)

三つある魔法道具屋のうち、二つに闇の靄が見えた。リシャウスに貰ったペンダントが効いているのか、前みたいに気分が悪くなることはないが、あまり良い気はしない。

「ルディーさん、そっちじゃなくてあっちが良いと思います」

大きな店の方に興味を覚えて入っていかうとするルディーを引きとめ、流衣は小ぢんまりした店の方を指す。

「ええー、あんな小さな店にするのかよ」

ランスが不平な声を上げる。ルディーも似たような顔をしているが、流衣は首を振る。

「あの店はちよっと」

どう悪いのか、見えない人に説明するのは難しいので、強引に言い切られる前にと小さい店の方に向かう。

チリリン。

ドアに付けられていた鈴が鳴る。

見た目の通り、小さな店だった。駄菓子屋みたいな小ささだ。カウンターの上で丸くなっていた黒猫が来訪者を煩わしげに見、ニャアと奥に向けて鳴く。

「おやまあ、いらっしやい。久しぶりのお客さんだこと」

背中が曲がった小さな老婆が杖を突きながら顔を出す。

老婆はにこやかに問う。

「何をお探しかしら？」

話し方といい雰囲気といい、とても上品な老婆だ。ただし、全身

真っ黒のローブを着ていて、小さな鼻にちょこんと丸眼鏡を乗せ、少しふくよかな、どう見ても御伽噺の魔女そのものである。

流衣は魔晶石を作りたいという旨を申し出て、一つ試作してくれたら考えると言われたので、自分の持っている晶石を魔晶石に変えて見せた。

「あらまあ、うちを選ぶなんて変わってると思ったら、目の良い方だったのね」

老婆は少しだけ驚いて、またにっこりと微笑む。納得したようにしきりに頷き、幾つかの晶石を示した。

流衣がそちらから三つを魔晶石に変えると、老婆は黒猫に魔晶石の入れた袋の手紙を託す。すると黒猫が店を出て行き、五分くらいで戻ってきた。

「はい、こちら代金ね」

流衣は代金を受け取りながら、首を傾げる。

「その猫って使い魔なんですか？」

「ええそうよ。あら、お客さん、何か落としましたわよ」

これで変装の分のお金にはなるかなあと思いながらお金を財布に入れていたら、鞆からポトリと物が落ちた。前にフラムに饞別で貰った身代わりのお守りだ。

それを見て、老婆は目をキラキラさせた。

「まあまあ、それをよく見せて。まあ、フラムのお守りじゃないの、間違いないわ」

「フラムさんとお知り合いなんですか？」

「ええ、そうよ。昔、同じ師匠に弟子入りしていたの。いわば兄妹弟子ね」

老婆はカウンターでまた丸くなった黒猫の背中を撫でながら、懐かしげに言う。

「最近、妙な物が出回っているのをご存知？ ええそう。あれを見分けて取り込まれない職人は随分減ってしまったわ。お店を見分けられる魔法使いもそうね。皆、平和呆けしているのかもしれないわ

ね

にこにこしながら、老婆は痛烈な毒を吐いた。後ろでリッツがたじろいだ空気を感じる。

「あなた、フラムの店を選ぶなんてなかなか見る目があるわ。彼、師匠の弟子の中で一番の腕だったのよ。あら、私はどうかって？嫌だわ、私は二番目よ。おほほほ」

老婆は素敵に微笑みながら、二番目だと豪語した。

ひとしきり笑い、やがて満足したのかふと微笑みを下げ、真面目な顔を作る。

「お連れさんもよく聞いて。杖連盟からの注意なんですけど、最近、この町ではたまに人が消えるの。消えるのは子供だけなのだけれど、あなた達も十分気を付けなさい。霧が出てきたら建物の中に逃げるのよ」

「霧……ですか？」

流衣は目を瞬いた。

最近、よく聞く単語だ。

「そうよ。ああでも、この町に住んでいる　霧の魔女　は良い方だから、何かあれば頼るといいわ」

疑問符を飛ばしまくる流衣に、老婆はやんわりと微笑んだ。

「小せえのに強烈なババアだったな……」

「“お婆さん”でしょ！　汚い口きかない！」

ぼそりと呟いたランスに、ルディーは鉄拳を振り下ろす。ランスは唸り声を上げて頭を抱える。

「でも変なの。霧から逃げろっていうのに、霧の魔女は良い人なんてさ。意味分からないよな」

サジエの言い分に、流衣やリッツは頷く。

確かに。矛盾しているように思える。

「霧と霧の魔女は関係ないとか？」

リッツが僅かに首をひねる。相変わらず、目が細すぎて開いていないのか分からない。この人の目の色ってどんな色してるんだろう。流衣は不思議に思う。

「それにしたって、きっと普通じゃないとは思ってたけど、君も大概すごいな」

「はい？」

「やたら頷かれて言われても、流衣には謎だ。」

「どの辺がですか？」

「さっきの魔晶石、あれを見れば大体分かる」

流衣はちよつとたじろぐ。

「ああいうことってしない方が良いですか？ 作ったのを売った方が目立たないのかな」

「そうだな。腕の良い魔法使いに買ったとでも言って、売った方が目立たないだろうな」

リッツが同意したことで、流衣は考えを直す。自分ばかり利益が出るのが何となく申し訳ない気がしてあの形を取っていたが、目立つのは嫌だ。妙に期待されて、勝手に失望されたりするのがどうしても苦手だ。それなら、最初から何とも思われない方が良い。

その後、流衣は書店にも立ち寄りさせてもらい、中級の魔法の教本とレシピ本を買ってから、適当に買出しを済ませて劇団の方に戻った。

レシピ本を捲って選んだ煮込み料理を作ろうと、調理台であるテーブルの横にある椅子に座って根菜類の皮むきをしながら、流衣は町で聞いた話を思い返した。

霧の魔女というのは、時計塔に流衣と同年代くらいの息子と住んでいる魔法使いのことらしい。彼女は、以前は町の金持ちの商人のところ嫁いでいたのだが、生まれた息子が災厄であるという占いを受けて屋敷を追い出されたのだそうだ。妾めかけの陰謀らしく、町の者

の間では割と有名な話らしい。そして魔女はそれを恨んで、ときどき霧に紛れて人をさらい、魔法の実験台にするのだと町の人は言っていた。わざとらしい身震いつきで。

（結局、魔女は悪い人なのかな？）

前の旦那を恨んで、どうして無関係の人を攫って実験台にするのだ？ ストレス解消にはなるのかもしれないが、それならその旦那や占い師や妾の誰かを実験台にした方がすっきりしそうな気がする。そもそもその話が正しいのか分からないが、町の人は人攫いの原因がその魔女にあると思いきこんでいるらしいのは分かった。

「何これ！」

突然ルディーの声が割り込んで、流衣はびくりとした。危うく指に向けてナイフを走らせかけた。危ない危ない。

「な、なんですか？」

いつの間そこにいたのだろう。ルディーはレシピ本に目を釘付けにしており、パラパラと本を捲っている。やがて感嘆の息をつく。

「こんな物があるのね……」

「レシピ本のことですか？」

何にそんなに驚いたのか、ようやく合点する。

「ええ、そうよ。こんなのがあって知ってたら、あんな料理にならないかったのに！」

物凄く悔しそうだ。歯がギリギリ鳴っている。

女の子がそんなことをして良いのだろうか。

「ルディーさん、あんまりすると歯が欠けますよ」

そつと注意すると、ルディーはパツと顔を赤らめた。

「あら嫌だ、私ったら。おほほほほ」

ごまかし笑いをするルディー。流衣は曖昧に笑い、レシピ本のページの一本を示す。

「今日はこれを作ろうと思うんです」

「そつなの？　ねえルイ君、これってどう見れば良いの？　教えてくれる？」

「はい、いいですよ」

初めてレシピ本を見て読み方を教えるようせっついてくるルディに、流衣は考え事を放置してそつちをまず片付けることにした。

どうも嫌な町だね。

リドは相変わらず居住スペースの箱型の荷台（なのか？）の屋根にいて、あぐらをかいて頼杖をつき、頭の中でぼつりと呟いた。

天気が悪さがそう思わせるのだろうか。それにしただって妙な感じだ。

風の精霊達も今日は静かだし、どうも調子が狂う。いつもはざわざわしていてうるさいくらいなのに。流石に寝ている時は静かにしているようだが、元来、風の精霊というのはお喋り好きなのだ。

（ま、他の精霊がどうだか知らねえが……）

頭の片隅で呟き、気に食わないオーラを出しながら、ランスとサジエとジェシカが地面に棒切れで絵を描いているのを見るともなく眺めていると、表口の方から黒髪の背の高い少年が出てきた。

「デイル！」

呼びかけると、デイルは辺りをきょろりと見回し、けれど声の主が見つからず、首を傾げた。まるで空耳かともいうように、頭を振ってそのまま出て行くこうとするので、もう一度呼ぶ。

「こつちだ、こつち！」

二度目でようやく分かったらしい。

デイルは眼鏡のレンズ越しに屋根を見上げ、リドに気付くや呆れた顔になった。

「またそんな所にいるのか」

ついでに呆れた声も加わった。

リドは屋根から飛び降りた。軽い足取りでデイルの方に近づく。

「どっか行くのか？」

「いや。あんまり暇なのでな、その辺のスペースで鍛練たんれんでもしよう

かと」

言われてみれば確かに、デイルは右手に木剣を持っていた。

「いいねえ、俺も暇してたんだ。手合わせしようぜ」

リドがにやりと笑うと、デイルも不敵な笑みを浮かべた。

「ではそうしよう。だが風は無しだぞ」

「そつちも魔法は無しな」

リドも返しながら、ベルトから鞞こぶちの付いたダガーを引き抜いた。

鞞付きのままなら平気だろう。

それぞれ木剣とダガーとを構え、向き直った所で、流衣がとぼとぼと裏口から出てきた。肩を落として溜め息までついている。

リドとデイルは顔を見合わせ、ひとまず武器を下ろす。

「どうした、湿気しつけた面つらして」

リドが声をかけると、レシピ本を取られたという謎の返事が返ってきた。

話を聞くに、調理道具の使い方やレシピ本の見方をルディーに教えたところ、ルディーが面白がって一人で作ると言い出し、野菜の下準備だけ手伝わせて流衣を調理場から追い出したとのこと。そういう訳で溜め息をついているらしい。

「良いじゃん、面倒な仕事が減ったと思えば」

「僕は楽しかったんだよ」

恨みがましい顔をする流衣。それから、初めてリドとデイルの手に気付いて、バツの悪そうな顔になった。

「ごめん、もしかして試合中だった？」

「今から始めるところで、まだ始めていないぞ」

デイルが返すと、あからさまにほっとした顔になる。

「じゃあ邪魔しないから続けてよ」

流衣はそう言って、ジェシカ達の方に行ってしまう。するとジェシカが流衣の上着の裾を引っ張り、自分の描いた絵を自慢し、それを流衣が褒めた。しかしランスが難癖をつけたので、軽くジェシカと言い合いに発展し、そんな二人を慌てて宥める凶へと変貌してい

った。

どこに行っても流衣は仲裁役になってしまつらしい。

するとその騒ぎを聞きつけたのか、オルクスがピンク色の馬車から飛んできて、流衣の肩に止まり、満足げにふんぞり返った。

一部始終を見てデイルは愉快そうにクツクツと笑っていたが、やがて笑いを納め、先程と同じように木剣を構える。リドも気を取り直して構える。

すつと息を吸い込みながら、デイルと対峙する。見た所、隙は見当たらない。騎士見習いは伊達じゃないらしい。

向き合っているだけでは時間が過ぎるばかりなので、リドの方から思い切つて打ち込んだ。

カァン！

甲高い音がして、木剣がダガーを受け止める。

普段あんな馬鹿でかい大剣を振るっているだけあり（といつてもまともに振るっているのを、未だ見たことがないが）、剣が重い。成る程、デイルは馬鹿力の持ち主らしい。

そのまま二、三回剣を交え、すぐさま離れる。

今度はデイルが打ち込んできた。

真正面からの突きをかわす。するとそのまま下段に振り抜かれた。「つと！」

上へ飛び上がり、トンボを切つて後方へ着地する。

リドは身軽でスピードはあるが剣の腕は自己流だ。正統な流派でこられると厳しいものがある。

「はああ！」

気合のこもった声とともにデイルが追撃、木剣を上段へ一閃する。リドは一閃される寸前にダガーを空へと投げあげ、しゃがんで木剣をかわす。

そしてそのままデイルの後ろへ滑り込み、落ちたきたダガーを左手で掴んでデイルの首めがけて真横へ振り抜いた。

ガン！

完璧なフェイントだったが、それすらもデイルは受け止めた。

リドは舌を巻いた。バツとデイルから距離を取る。

「あれを止めるのかよ。どんな運動神経してんだあ？」

「馬鹿をいうな、冷や汗ものだ！ 剣士との決闘ではあんな攻撃はされん！」

デイルは焦ったように言い返してきた。

リドはペろりと舌を出す。

「だって俺、剣士じゃねーもん。我流だしな」

「我流であれか……」

デイルは木剣を両手で構えたまま、歯噛みする。

「殺らなきゃ殺られるとここで生きてたもんでね。端から実戦で育ちやあこうなるんじゃないの？」

リドはこんこんとダガーの鞘の背で右肩を叩きながら、軽く返す。

全くの自然体であるが、それなりに警戒はしている。

「ふ。私とて修行で実戦は積んでいるつもりだ」

デイルは息を吐き出すように笑い、また剣を構えてリドへと突っ込んできた。

「突撃型なら槍の方が良いんじゃない？」

今度は避けることはせず、真正面から受け止める。

ギリギリと剣の押し合いをしながら、リドはそう問う。

「魔法があるから槍でなくともフォロー出来るのだ」

デイルも木剣を押しながらい、そこで誰かが合図でもしたかのように二人は離れる。

そして、木のぶつかる甲高い音を立てながら、連続で打ち合う。

初めは軽い訓練程度のもりだったのに、だんだん白熱してきた。素早い剣撃の応酬に、横で絵を描いていた流衣達もいつの間にか息を詰めて見守ってしまっているくらいだ。

ランスとサジエは拳を握り、「いけ」「そこだ」と応援し始める。ジェシカまでも「カツコイイ」と目を輝かせている。

やがて勝負がついた。

デイルが右へと腕を振り切り、リドのダガーを弾き飛ばした。

* * *

「あーあ、負けちまった」

肩の高さへ両手を上げて、リドが残念そうに言った。

流衣はランス達とともに盛大に拍手する。手合わせのはずなのに、熱のこもる戦いっぷりだった。

「これって、デイルさんの方が強いってこと？」

軽く興奮気味に両手を身体の前で握り、サジエが好奇心たつぷりに問う。

リドは弾き飛ばされたダガーを拾い上げ、土を払い、ベルトへ差す。

「さてねえ、実戦だったらどうか。元々俺は二刀使いだし、風もあるしい？」

口の端を僅かに持ち上げ、リドは好戦的にデイルを振り返る。デイルも負けじと言い返す。

「私とて魔法がある」

「でも大剣相手じゃ、俺みたいな短剣の方が有利だぜ？」

「……近づけなければ意味がなかるう」

一瞬言葉に詰まってから、デイルは短く息をついてそう言った。

不利なのは十分理解しているのだから。

「あはは、でもどっちにしろ、僕だったらどっちが相手でも瞬殺だろっね」

全くもって敵わない自信ならある。そんなちよつと情けない気分で、流衣は半笑いする。

一秒もつたら奇跡なんじゃないかと思う。本気で。心の底から。

「君は後方支援型だろっ？」

「そーそー、どう見たって前線タイプじゃねえって」

真面目にデイルが返し、それに頷いてリドも軽く、でも真面目に

言った。

いや、そこで真面目に返されても返す言葉がないのだが……。軽く笑い流して欲しかった流衣からすれば、ますます苦笑いになっってしまう。

「それに俺らがルイに剣向けることはまずねえし、安心しろって」
右手をひらひらさせてリドは軽く言う。

「そうだな。剣を使わない相手には決闘は挑まぬから安心しろ」
デイルもうんうんと頷き、微妙にずれた言葉を付け足した。
「う、うん。ありがとう？」

礼を言うところだろうかと首を傾げつつ、一応言っておく。

「なあなあ、もう決闘しないのか？」
ランスがうずうずした調子に訊く。

「決闘ではないぞ、手合わせだ。どうするリド、私は構わぬぞ」
精悍な顔で爽やかに言うデイルを、リドは暑苦しげに眉をひそめて見る。

「デイルみてえな体力馬鹿と一緒にすんなよ。俺は一回戦だけで十分だ。はあ、やっぱちっとなまってるな」

そう言っつて、リドがぐるぐると肩を回したりしていると、ますますデイルの笑顔が素晴らしい輝きを放った。

「それなら私とともに修行をするか！ 遠距離走、腕立て伏せ百回、腹筋百回、背筋百回で、あとは……」

嬉々として修行メニューを並べ立て始めるデイル。リドの顔が引きつった。

「……何でそんなのを毎日して、脳ミソまで筋肉にならねえんだよ？」

「ふむ、勉強も怠らぬこそ騎士の務めだ！」

「お前は一体騎士を何だと思ってるんだ！」

何事につけて「騎士の務め」を持ち出してくるデイルに、リドはたまらず突っ込んだ。

「むっ、何とは奇異なことを。騎士たるためには限りの無い体力を

持つことが必要なのだぞ。また、民衆の誰しにも認められる為には公正さと寛容さと礼節が求められ、その為には勉学も欠かせぬし、兵法を学ぶことも必要であって……」

デイルはしかつめらしく、ああだこうだと説明を始める。止める隙が見つからないくらい熱弁っぷりだ。普段の、どちらかといえば口下手に思える端的な口調とは程遠い。話し方は相変わらず固いけれども。

延々と続く話を聞きながら、流衣はだんだん眠くなってきた。

隣にいるランス達も微妙な顔をしていて、今にもここから逃げ出したいように見える。

「あーデイルさん？ 悪いんだけど、そこら辺でやめてくれる？」
訊いたことを物凄く後悔した顔で、リドは無理矢理言葉を割り込ませる。

「む、残念だな。もっと聞きたければいつでも言ってくれたまえ」
デイルはにつこりと笑った。爽やかな笑みのはずなのに、どこことなく暑苦しい。

流衣達は乾いた笑みを浮かべ、曖昧に頷く。

「ん……？」

急にデイルの姿が白く霞んで見え、流衣が疲れ目だろうかとずれたことを思った刹那、瞬く間に視界が白い霧で覆われた。

「霧……？」

「朝でもないのに、何だいきなり」

リドが怪訝に呟いた声と、デイルの不思議そうな声が霧の向こうから聞こえた。

霧はあつと言う間に濃くなり、一寸先にいる人影すら見えなくなる。

霧が出てきたら建物の中に逃げるのよ。

魔法道具屋の老婆の声が、急に頭によぎった。

「霧だ！ 建物の中に逃げなきゃ！」

サジエが一足先に気付いて焦った声で叫んだ。流衣は咄嗟とっさに、側にいるだろうジェシカの手を掴む。

「ジェシカ、中へ入ろう」

「うん……」

ジェシカの不安げな声が下の方から返る。

流衣は記憶を頼りに、劇団の調理場のある裏口へ向かう。が、三歩もいかないうちに、息を呑むような音がして、ジェシカの動きが止まった。

「ジェシカ？ どうしたの？」

流衣がジェシカの手を軽く引つ張るがビクともしない。

それどころか硬直して後ろの方を見ているのに気付く。

何だろうと思っ、流衣もそちらに目を向ける。しかし見えるのはせいぜいジェシカの頭くらいで、それより向こうは霧のせいで見えない。

「ジェシカ……？」

どうしたんだろう。早く建物の中に入りたいのに動かないのに焦れ、流衣は少し腰をかがめてもう一度ジェシカの名を呼ぶ。

「キヤアッ」

ジェシカがいきなり引きつった悲鳴を上げて腰にしがみついていた。突然のタツクルにたたらを踏み、怪訝な顔になる。

一体どうしたっていうのか。流衣はさっぱりな状況にお手上げの状態じょうたいで、ジェシカの方を見ていた顔を何気なく上げる。

「！」

流衣は腰を抜かしそうになった。

すぐ目の前の空中に、白い仮面が浮かんでいた。右側が笑顔、左側が目を閉じていて、左側の目蓋の下に涙の雫が青くペイントされた仮面だ。加え、真ん中に鼻の凹凸おぼつこつも含めた黒いラインが引かれている。

が、よくよく見れば仮面が浮かんでいるのではなく、黒いドレス

を着た女の人がこちらをよく見ようと顔を突き出しているだけだった。不思議なことに、この濃霧のつむの中でもドレスの黒はよく見える。ごてごてとしたゴシック調のドレスだ。まるで喪服みたいな。そこまで気付いて、ふと疑問を覚える。こんな女の人がいつからそこにいたのだろう。こんな人が近付けば、嫌でも気付きそうなものだが……。

「あの……？」

しかも何だか不躰にじろじろ見てきて、その上ジェシカへと紫色のマニキュアの塗られた青白い右手を伸ばすので、ちょっと不気味になって問う。

「ジェシカに何か？」

流衣の問いに、女の手がぴたりと止まった。

彼女は小首を傾げる仕草をした。ひつつめに結い上げられた金茶色の髪が揺れる。

「あなた、私が見えるの？」

「え」

くぐもった声がそう問いて、訊かれた内容に遅れて気付き、流衣は背中の毛穴がバツと開いて冷や汗が吹き出た。

その問いかけてまさか、もしかしていやもしかしなくてもそっち系ですか。

めまぐるしい勢いで頭が結論を叩き出す。

「あ、あのっ、成仏して下さい！」

流衣は裏返った声で一方的にそう叫び、女の人に背を向け、脱兎だつとの如く逃げ出した。勿論、ジェシカを腕に抱えて。もうなりふり構ってはいられない。幽霊なんてそんなまさか。怖すぎる！

恐怖の余り、ほとんど当てずっぽうで調理場の裏口へと走ったのだが、どういいうわけか幾ら走っても辿り着かない。

（え？ あれ？）

しかもおかしいことに、近くに木や茂みもあつたはずなのに、何にもぶつからない。

「ルー兄い」

ジェシカも異常事態に気付いたようで、泣きそうな声を出して首にしがみついてくる。

「ぐえっ」

その衝撃で、流衣は思わずうめき声を出した。

子供の力とはいえがっちり首をホルドされ、ひたすら走っているのもあって酸欠で目の前がクラクラしてきた。

しかし立ち止まる勇氣はなかった。後ろからヒタヒタとついてくる足音がして、きつと止まったら捕まるのだと思った。

捕まる？ 捕まってどうなるのだ？

そこで今までの人生で聞いてきた怪談が走馬灯のように頭を横切り、流衣はますます恐ろしくなって足を速めた。必死だった。死に物狂いとはこういうことなんだろうと頭のどこかで冷静に呟く自分がいて、そんなことを考えている暇があったらもつと早く走れよこの足！ とそんな自分に腹を立てる。

どれくらいそうしていたのか、突然横から腕を掴まれ、どこかへ引きずり込まれた。

流衣とジェシカは揃って悲鳴を上げた。

* * *

どこからか霧が湧いてきたかと思えば、消えるのもいきなりだった。

サジエが建物の中へ入ろうと言っていたのを覚えてはいるが、呆気にとられていたので中へ入るどころではなかった。

「？」

きょろりとデイルは周囲を見回す。

ランスとサジエは調理場に逃げ込んでいて、戸口から外を覗いており、リドもまた啞然とした顔で事態を把握出来ていない様子だった。

「あれ？ ジェシカは？」

調理場内を見てから、ランスが声を漏らした。

「ルイもいねえぞ」

リドの声に、ほんとだ、と呟くサジエ。

どうしたの？ というルディーの能天気な声が場違いに響く。

「あの数秒でどこへ？」

まるで狐につままれたようだ。

ディルは答えを求めてその場にいる人達を順に見る。

やがて事態を聞いたルディーが昼に聞いていた話を披露して、場に何ともいえない沈黙が下りた。

「ぎゃーっ！ すみません！ 何したか知りませんがごめんなさい！ だから迷わず成仏して下さいいいっ！！」

「うわああん、ルー兄、怖いよおっ」

引きずりこまれて地面に放り出されるや否や、流衣はすぐさま謝り倒した。パニックに陥ったジェシカが泣き出し、ますます力を込めて首にしがみついてきて、流衣は幽霊よりも逼迫した身の危険を覚えて声を漏らす。

「ぐっ、苦しいジェシカっ。死ぬ……っ、首絞めないで……！」

「ふええええ」

「大丈夫だよ、おチビちゃん。怖くないからね」

てつきり女の人かと思っていたが、予想外にも男の声だった。しかも声の感じだと子供のような感じだ。

それでジェシカの恐慌が収まり、流衣も解放されて激しく咳き込んだ。

ほ、ほんとに死ぬかと思ったっ。

喉に手を当ててゲホゲホ咳き込みながら、命の危機を脱したことに安堵する。

「……お、お兄ちゃん、ユーレーじゃない……？」

緑色の目の縁に涙を浮かべ、流衣にしがみついたまま恐る恐る問いかけるジェシカ。流衣の聞きたいことも概ね同じだったので、流衣も無言で少年を見上げた。

少年は流衣とそう年が変わらないように見えた。白い髪は短く切られ、紅茶みたいな綺麗な赤色の目をしている。着ている服は白い簡素な麻のシャツと、ふくらはぎまでのかっちりした黒いズボンで、裾には金属のボタン飾りが付いている。そして黒い布製のペタンと

した靴を履いている。室内履きにも見えた。

今までピンク色の髪や青みがかった黒髪というものを見たので、変わってるなあくらいに認識で少年を見た。総合理科の資料集に載っていた、アルビノのトカゲや金魚が頭に浮かぶ。

「違うよ。もう大丈夫、よくここまで逃げ切ったね」

見た目が優しい少年は、落ち着いたトーンの声で呟くように言った。よく聞かないと聞き漏らしそうな小さな声なのに、不思議とよく響く。

少年の声がすとんと胸に落ちて、流衣は肩の力が抜けた。そこで初めて周囲を見回す余裕が生まれる。

「ここは……？」

灰色の石造りの部屋だった。というか部屋、なのだろうか？ 流衣とジェシカの真後ろには分厚い木の扉があり、二人から見て右手の奥から上へと階段が伸びていて、一度踊り場で九十度に曲がって更に上へ続き、その先に部屋があるのか四角い穴がある。今いる一階部分には、食器棚やクロスのかかった四人がけの四角いテーブルや椅子、調理場がある。一番奥には別室があるのか扉があった。

テーブルのある所にだけ広い赤色の絨毯じゅうたんが敷かれている。ランプなどは見当たらないのに、何故か明るい。

「時計塔だよ。僕はエルナー・フォーン。霧の魔女の息子、といえれば分かるかい？」

やんわりと名乗られて、流衣とジェシカは再度震え上がった。

「霧の魔女！ ぎゃーっ、すいません、ほんと成仏して下さい！」

「うわああんっ」

「うるさいガキどもだねえ。誰が成仏だって？」

二階から、長い金髪を複雑に編みこんだ三十代くらいの女性が降りてきた。カツカツと黒いハイヒールを鳴らし、黒いレースで縁取りをした青紫色のドレスの裾を揺らしながら。お世辞ではなく、真正銘の美女だ。

「あ、あれ？」

流衣は混乱した。さっきの女の人は金茶色の髪をしていたし、喪服みたいな黒いドレスだった。

「お前も勘違いをしている人間の一人のようだね。先に言っておくけどね、あたしは人攫いの霧とは何の関係もないよ。確かに水の魔法は得意だし、霧を出すのも容易だが、あの霧と私の霧とではそもそもその質が違うのさ」

淡い緑色の切れ長の目に少し物騒な光をたたえ、魔女は言った。

「まあそこにお座り、お若いの。それからお嬢ちゃんも」

魔女に促されるまま、座り込んでいた床から立ち上がってテーブルの方に行く。流衣は困惑していたが、ジェシカは大丈夫だと分かるや好奇心いっぱいには部屋を見回している。小さい子って怖いもの知らずで良いなあ。

「あたしはナターシャ・フォン。通り名は霧の魔女だ。お二人さんは？」

「ルイ・オリベです」

「ジェシカ・スクレドニだよ」

ジェシカがにこりとはにかんで名乗る。

「あと、こっちはオルクスといいます。……って、あれ？」

流衣は今になって初めてオルクスが肩にいないのに気付いて、辺りをきよるきよると見回した。そういえば、ジェシカが首にしがみついていた時も静かだった。

「オルクス？」

「僕の使い魔で、オウムの姿をしてるんです。おかしいな、霧に飲まれる前はいたんだけど」

「霧の中ではくれたのではないか？ あれはただの幻影の術ではなく、転移も少し織り込まれているものみたいだからね。霧の中ではくれたのなら、今頃は町のどこかに放り出されているだろうよ」

「あ、だから時計塔に？」

ナターシャの言葉に、流衣はパツと閃く。

「まあそういうことになるか。あたしはあんた達が逃げているのに

気付いて、この子に術に干渉させたただけだよ。時計塔周辺はあたしのテリトリーだからね」

「へえ……？」

よく分からないが、テリトリーの中のことは手に取るように分かるとかそういう話なのだろうか？

ジェシカと揃って目をしばたかせていると、エルナーが紅茶を淹れたティーカップを四人分並べた。お茶菓子のクッキーも籠ごと真ん中に置き、ナターシャの隣の席に座る。

ナターシャは紅茶をおいしそうに一口飲んでから、出し抜けに訊いた。

「で？」

流衣もお茶を飲んでいたので、飲み込んでから聞き返す。

「で、とは？」

「どっちが狙われたの？」

ナターシャの問いに、流衣は迷わず答える。

「ジェシカの方です。僕はたまたま側にいて、女の人がジェシカに触ろうとしたのと、あと、不気味だったんでジェシカを抱えて逃げ……」

ジェシカもこくこく頷く。クッキーを頬張っているので口を開けないみたいだ。

「女か。どんな奴だった？」

流衣はあつたことを隠さず話した。

「通り話を聞きだすと、ナターシャは大笑いしました。」

「あははは、なるほど！ それで『成仏して下さい』ね！ それは勘違いするわ、お気の毒様！」

きゃらきゃらと、女の人特有の甲高い笑い声を上げて笑う。やがて落ち着いてくると、目尻に浮いた涙を拭ってから、ふうと息をついた。

「こんなに笑ったのは久しぶりだよ。ああもう、お腹が痛い。別にそいつは幽霊じゃないよ。恐らく、子供か、もしくは対象にだけに

しか見えないようにしてたんだろ。生きてる術者さ」

「そうなんですか！ 良かったあ」

「うん……でも怖かった……」

ジェシカがぼつりと呟く。

「僕も怖かった。幽霊じゃないのを抜いても不気味だったし。仮面といい、真つ黒いドレスといい」

「闇属性の魔法を使う魔法使っていうのは確かだけどね。あたしや杖連盟も調査してるってのに、なかなか尻尾を出さなくて困ってたところだよ。あんた達のお陰でだいぶ情報を得られた。ありがとう」

にっこりと満足げに微笑むナターシャ。

その様はとても綺麗なものではあったが、礼を言われた中身については複雑な心境だ。

「あの、子供か対象にだけにしか見えないなら、どうして僕は見えません？」

「術者より魔力が大きいこと、目が良いこと、そのどちらかが条件になる。あとは解呪の得意な神官ってところだが……」

ナターシャはじろじろと流衣を観察し、断言する。

「どう見たって神官には見えないから違うんだろ。どうだい？」

「はい、合ってます。僕はまだ成り立てですけど、一応魔法使いですから……」

ここでジェシカがきょとんと目を瞬いた。

「え、そうだったの？ あっ、でもさっきお婆ちゃんがそんなこと言ってたね」

「うん、でも他の人には秘密だよ」

流衣が口元に人差し指を当てて言うと、ジェシカは頷いた。

「大丈夫だよ。お父さんとの約束だもん。それにジェシカは口がかたいんだよ」

にこっと可愛らしく笑うジェシカ。

ナターシャは柳眉を片方、僅かに持ち上げた。

「訳ありかい？」

「いえ、今、ある人の護衛をしてるんです。といっても、僕は単についていってるだけな感じで、ほとんど友達がしてるんですけど。それで途中で、その、襲ってきたのがネルソフだって分かって」

「ネルソフねえ。十分、厄介事の匂いがするよ」

テーブルの上に両肘を寄せ、指を組んで、気に食わなさそうに嘆息するナターシャ。それだけで一枚の絵のようで、流衣はどぎまぎした。こっちの人は、流衣にとっては外国人だからか皆綺麗に見えるのだが、この人は取り分け美人に見える。

その彼女の息子もまた、見た目は変わっているが綺麗な顔をしている。静かに淡く微笑んでいるが、流衣みたいに気弱な印象はなく、まるで夜の月の光を連想させる澄んだ空気を持っていた。母親が太陽なら、息子は月というところか。

「ところで、あの仮面の人はどうして人を攫ってるんですか？」

「知るわけないだろう、そんなこと。知ってるのは、子供ばかり狙うってことだけだ。それも丁度その子と同じ年頃の子ばかり」

「わたしみたいな子？」

ジェシカは不思議そうに、大きな目をしばたたかせる。

ナターシャはジェシカをじっと見つめ、急に席を立つと二階へ行き、またすぐに戻ってきた。

「折角逃げおおせたんだ。これをあげよう、お嬢ちゃん」

ナターシャはミサンガのような紐で編んだ腕飾りを、ジェシカの左手首に巻きつける。

「身を飾りし者を、魔から遠ざけ、固き守りあれ」

そして紐を結びながら呪文を呟いた。

結び目が出来た一瞬だけ、ミサンガに青い光で呪文が浮かんだのが流衣には見えた。

「これって魔法道具ですか？」

「ああ、そうだ。魔除けのお守りさ。お嬢ちゃん、この町出るまではなくとつけておくんだ。守れるかい？」

ジェシカの目を覗き込み、ナターシャは大真面目に言う。ジェシカはこくりと頷いた。

「うん、ジェシカ、ずっと付けてる。ありがとう、魔女さん」

「良い子だ」

にっこ笑い、ナターシャはジェシカの頭を撫でる。意外に子供好きなのかもしれない。

「さて、そろそろお帰り、お二人さん。お仲間が騒ぎ始めてるかもしれないからね」

「はい。助けてくれてありがとうございました。それと、お茶、ご馳走様です」

流衣は丁寧な頭を下げる。ジェシカもそれを見て、真似して頭を下げた。

「ありがとう」

ナターシャはふふつと微笑み、エルナーに言い付ける。

「エルナー、念の為だ、送って行っておやり」

「分かりました。では行って来ます」

エルナーはフードのついた白色の外套を取つてくると、それを着てフードを目深に引き下ろし、流衣達とともに外へ出た。

「お兄ちゃん、どうしてお顔隠しちゃうの？」

流衣と手を繋いで歩きながら、ジェシカがとても不思議そうに訊いた。

「僕にとって、外は優しい所ではないから」

エルナーは僅かに眉尻を下げ、淡く微笑んだ。フードの下の顔は、頭の位置がエルナーよりずっと下にあるジェシカにはよく見える。

ジェシカにはエルナーが悲しそうな顔をしているように見えた。

「泣いちゃ駄目だよ、ジェシカも悲しい」

「泣いていないよ？」

「でも、お顔が悲しそう」

エルナーはまた微笑んだ。

「ジェシカは優しいんだね、ありがとう」

そんな二人の遣り取りに心温まる思いがしながら、流衣は首を僅かに傾げる。

「やっぱりアルビノだと紫外線に弱いのか？」

「え」

エルナーがびっくりしたような声を出した。

それで流衣は幾らなんでも不躑^{ぶしつけ}過ぎたかもしれないと慌てる。もしそのことでハンデを抱えている人だったらあまりにも失礼だろう。

「あ！ その、ごめんっ。悪気はなかったんだ。ただ、そうかなって思っ……」

エルナーは首を振る。

「そうじゃないんだ……、確かに僕は日の光には弱い。あまり浴びすぎると肌が火傷するし、目だって視力が落ちてしまう……。けど、そうじゃなくて」

そう言いながら、戸惑ったようにこちらを見るエルナー。

「？」

流衣は首を傾げる。エルナーが何を言いたいのか、察したくても分からなかった。

「もしかして本当に知らないのかい？ 異端児^{いたんじ}のこと……」

「異端児？」

何となく不穏な響きのする言葉だ。流衣は繰り返して呟きながら、やっぱり分からなくて首をひねる。

「異端児っていうのは、僕みたいな、生まれつき色素が薄く生まれた子供のことをいうんだ。失くした色の代わりに、膨大な魔力を宿して生まれてくる。でも、大きすぎる力は歓迎されないのを見た目の不気味さから、忌^いまれるんだよ」

「……ごっごめんっ、嫌なこと言わせちゃって」

良心がしくしくと痛んだ。言いたくないだろうことを説明させてしまったらしい。それも本人の口から。

霧の魔女の子供が災厄であると占い師が言い、それで屋敷を母子ともに追い出されたという話を思い出した。

「僕、アルビノってというのは突然変異っていう認識しかなくて……。人で見ただのって初めてだったけど、この人って色んな人がいるから、そういう人なんだと思ってた。大変……。だよ。大変なんてものじゃないかもしれないけど」

エルナーは優しく微笑んだ。

「小さい子は知らないからともかく、あなたみたいな歳の人に訊かれて驚いただけだよ。だから気にしなくていいんだ」

「……ありがとう」

エルナーは何て優しいんだろう。流衣が無知なばかりに、不躰で失礼なことを聞いてしまったようなのに、気にしなくていいとまで言つてのけるなんて。

感心しきりしていると、急に、えへへへ、とジェシカがはにかんだ。

「お兄ちゃん、ルー兄となんだか似てる」

流衣は首を傾げた。

「ジェシカ、全然似てないよ。僕はこんなに綺麗な顔してないよ？」

「違うよルー兄。見た目じゃないの。そりゃあお兄ちゃんはキレイだけど、そういうんじゃないの」

「……………」

二人から綺麗綺麗と連呼され、エルナーは複雑そうに口を閉ざす。男の子への“綺麗”は褒め言葉ではないのだろうか？

「あのね……………」

ジェシカが笑顔满面で付け足そうとした時、空の上から黄緑色の塊が飛来し、突撃してきた。

「うわっ！」

びっくりして受け止めたものの、何となくその正体にすぐに気付く。

「…………オルクス？ ああ、良かった！ 今から劇団に戻るところだったんだけど、どこではくれたか分からなかったから……………」

『全く、不届き千万な霧です！ 明確な悪意を感じます！ 使い魔であるわてを引き離し、一体どうするつもりだったのやら！』

オルクスはカンカンに怒っていた。

「引き離しつていうか、うーん、単にはぐれただけじゃ……」

流衣がそろーつと言ってみるが、頭に血が上っているオウム殿には通用しなかった。

『いいえっ、あれは悪意です！ そうに決まっています！ ああ、最近、とんとお側でお守りすることが出来ず、わての勘が鈍っていたのやもしれませんっ』

「……オルクス？ オーイ」

『かくなる上はあの術者、絶対にひっ捕らえてふんじばって王国警備隊に突き出してやらねば！』

「術者つて、……見たの？」

流衣はびっくりした。思わずオルクスを両手で目の高さまで持ち上げる。

『見ましたとも！ その後、いきなり振り飛ばされて地面に落ちてしまいました……。むむむ、あの術者め、やりおりますっ』

いや、それは普通に自分が振り落としてしまっただけだから。

そうか。ジェシカを抱えた時にオルクスが落ちたのか。あの時は必死だったからなあ、さっぱり気づかなかった。

いつの間にか立ち止まっていたらしい。オルクス相手に唸っていたら、ジェシカとエルナーがじつとこっちを見ているのに気付く。

はっ、そうだった。劇団員にはオルクスは使い魔とは言っていないのだ。変に思われたのかも。

「ルー兄、オウムさんと仲良しなんだね」

「……うん、まあ」

良かった、ここにるのがジェシカで。ジェシカは、仲良くしていればそれで満足というところがあるのだ。

「確かにそうだね。相性が良くないと心を通わせることは出来ないから」

何と、とは言わず、エルナーも微笑ましげに呟いた。

(そうなんだ)

新事実には驚く流衣。流石は魔女の息子だけあって、使い魔事情にも詳しいらしい。

「坊ちゃん、あの術者ですが、なにやら血の匂いがしていましたよ。とつちめてやりたいのは山々ですが、坊ちゃんは近付かない方が宜しいかと。わての制約を解除して頂ければ、一人で駆逐くくに参りますか？」

物騒な声で物騒なことを言いだすオルクスを、流衣はまじまじと凝視した。ちよつと言葉に詰まっつてから、何とかひねり出す。

「駆逐つて、君、虫じゃないんだから……」

「霧に乗じて人をさらい、しかも血の匂いをさせている者が害虫ではないと？」

「……………」

きつい返しに、流衣は黙り込んだ。どうやらオルクスは相当ご立腹みたいだ。意趣返しをしないとおさまらないのだろう。……ほとんど勘違いで怒っているのに。

「あの人を捕まえて、王国警備隊に連れて行くこともできるってこと？」

「坊ちゃんがそうお望みなら。ですが、あれは王国警備隊では荷が重すぎましよう。杖連盟に突き出した方が賢明かもしれませんね」
流衣は数秒悩み、結局は頷いた。

「うん、分かった。劇団に着いたらにしよう」

「畏まりました」

意が通り、満足して恭しげに返すオルクス。

怪訝の目を向けてくるエルナーには、劇団に着いてから、杖連盟に連絡してもらおうように頼んだ。

結論から言えば、連続誘拐事件の犯人である術者は杖連盟に拘束

された。

術者の家である屋敷にいる所を、不意をついたオルクスが強制的に一緒に転移し、杖連盟に送られた結果だ。

術者の女性は、町外れの屋敷に一人で住んでいる未亡人との話だった。

杖連盟から派遣された魔法使いと王国警備隊の隊員が屋敷を調査した所、彼女の屋敷の庭には幾つもの墓があった。それは、死んだ子供を蘇よみがえらせるべく、闇の魔法に手を染めた結果だった。さらった子供の命と引き換えに使う術だったらしい。

あと少して蘇生が上手くいったのに。術者の女はそう泣き叫んでいたという。

昨日の一騒動でフォウナン「トーエから憂いは消え去り、出歩くのを忌避していた町の者が出てきたのもあり、翌日の劇は大盛況だった。

何となく、腹の辺りに感じる居座りの悪さを除けば、とても平和で楽しい光景である。

「……はあ」

舞台袖から劇の様子を眺めながら、一人重く苦しい溜め息をつく流衣。

なんだか、微妙な気分だ。何でだろうと考えれば、何てことはない、嫌な事件の現場にオルクスだけ行かせて片付けてもらったのがつつかえているのだった。

「坊ちゃん、気になさらなくて宜しいですよ。主人に代わり仕事を果たすことこそ使い魔の本分です」

「でも、それ以前にオルクスは僕の友達でしょ？ 友達に嫌な仕事押し付けたみたいで、やっぱり嫌だな」

何となく偽善みたいで、そんなことを言う自分に吐き気がする。でもやっぱり口から零れてくる言葉は止まらない。

「……ごめん」

「……坊ちゃん、わてはあそこに坊ちゃんを連れて行かずに済んで

良かったと思っっていますよ。大体予想はしていましたが、酷いものでした。

それにわては魔物です、人間とは違うのです。あれが何であれ、わてには命の粹を終えたモノでしかありません。あそこには魂すら残っていないかった。あとはレシアンテ様の領域です」

オルクスはちよこんと流衣の膝に止まり、流衣を覗き込むように見上げてそう諭した。

「レシアンテ様って？」

『運命と生命を司る女神様です。人は死すればその魂はレシアンテ様の御許にいき、かの方の花園で浄化という名の安息を得、かの方の手によりまた生を得る。尊いお方です』

「……そっか」

遠回しにはあるが、慰められた心地がした。

墓の主はレシアンテという女神のもとに行つたのだと、そう言われたような、そんな気がして。

「駄目だなあ、なかなか慣れなくて」

物騒さ加減にも、死が身近に感じられるという事態にも、何もかもに慣れない。

『ごういうことに慣れる必要はありませんよ。トラブルや魔物に注意することだけは慣れて欲しいですが』

ここぞと押し込まれた言い分に、流衣はふっと笑みを零す。

「そうだね」

流衣が小さく頷いた時、舞台が一幕を閉じたのか、客達の盛大な拍手が鳴り響いた。その音は晴れた青空に吸い込まれ、穏やかな昼下がりに彩りを添えた。

二十一章 たゆたいの水路 1

どれくらい前のことだっただろう。

もう随分長くここにいるので忘れてしまった。

光といえば天井から零れる僅かな光。水はとても澄んでいて綺麗だけれど、ここは暗い所だ。

彼女はまどろみながら、昔のことを思い出す。

赤い髪をした人間の王様。城のすぐ側にある銀鏡湖^{シルヴァーレイク}で、明るい日差しの中、笑っていたあの人。

お前の髪と目は、日の光のようだね。

そう言ってくれる彼が大好きだったから、ここのお役目を引き受けたのだ。

懐かしい湖。

帰りたいなあ。彼女は小さく呟く。

もう彼はいない。人間だから、寿命が尽きて死んでしまった。

彼がいないのだから、帰ったって良いはず。

帰りたいなああと、また呟く。すると言葉は泡になって水面に浮かび、空気に触れて弾けて消えた。

彼女は水路の奥を睨みつけた。

あんなのが棲みついたせいだ。帰れないのは。

彼女は頬を膨らませ、奥にいるだろうあの魔物に負の念を送った。

* * *

「……というわけで、僕は不老になってしまつて。母ときたら、そのせいでやたらと家から厄介払いしようとするんだよ。今回だつてそうなんだ。あなたのお陰で疑いが晴れたから手伝えと言っている

のは建前で、本音は僕を追い出したいだけなんだから。本当に困った人だよな」

「はあ」

フォウナン「トーエ出発後、昼食時の休憩で、焚き火を起こしてその横に座ってパンを食べている流衣の前に座って、先刻からぺらぺらと事情と母親への文句を連ねていたエルナーに、流衣は気のない声を出して頷いた。

どうしてここにエルナーがいるかということ、朝から今までのことを説明した方が早い。

フォウナン「トーエを出発する時、霧の魔女の言いつけでネルソフ対策にと送り込まれたらしいエルナーも同行することになった。劇団の人達は同行を渋っていたが、杖連盟の証明書まで見せられて渋々了解したようだった。

エルナーは荷物を積んだロバを引いて、一人てくてくとついてきていたが、流石に昼食になると一人は嫌だったようで流衣達の方にやって来て座ったわけである。

そして、前にネルソフから呪いをかけられそうになり、その際に抵抗したせいで「成長の止まる呪い」というものがかかってしまい、見た目は十六歳だけれど実は二十一歳だという話を披露して、そして最終的に母親への文句に繋がったわけだった。今は呪いを解く方法を探している最中らしい。あまりに呪いが強すぎて神官でも解くのは難しいので、呪いを弱めてから神官に頼もうとしているのだから。

不老なんて夢のような呪いであるが、エルナーからすれば、見た目がすでに異端児なのに、不老なんて化け物にまではなりたくないんだそうだ。しかも、事故で元ある呪いからこのような形に変化した呪いなので、呪いのかけ方は存在せず、解く方法も存在しないので大変らしい。そうだろう、不老の呪いなんてものがあるのなら、不老を望む者によって、そこら中、不老だらけになってもおかしくはない。

「ええと、じゃあ、ナターシャさんもその呪いに？」

どう見たって三十代にしか見えなかったナターシャを思い出し、流衣は問いかける。エルナーが二十一なら、ナターシャは四十代くらいということになるからだ。

エルナーは虚を突かれた顔をして、まさかと首を振る。

「あれは、母の努力と根性と、美容にかけたお金によるものだよ。呪いでもないのにあそこまで若作りだと、逆に化け物みたいだよね」
そして、エルナーは邪気のない笑みを浮かべ、にこりと言いつつ切った。

穏やかな笑みとともに吐かれた容赦のない毒に、流衣は頬を引きつらせる。

とても静かで優しそうな人だと勝手に思っていたが、流石はあのさばさばとした女性の息子だけあって毒舌でもあるらしい。それとも、母親に対してのみの容赦の無さなのだろうか？

「うーむ、女性の美容へのこだわりは物凄いからな。私の姉上もそうだから、分からないこともない」

デイルは軽く唸り、何を思い出したのか少し身震いしてからそう言った。

「ふうん、そんなもんなのか。女の知り合いはそんなにいねえから、よく分かんねー」

もそもそとパンを頬張り、もごもごと言うリド。エルナーはそんな二人を穏やかな笑みとともに見つめ、話を続ける。

「まあ、僕個人としては嬉しくないけれど、呪いを受けて良かったこともあるんだよ。この呪い、あんまり強すぎて、他の呪いが効かない体質になってしまったね。お陰でネルソフ対策によく回されるんだ。今回もそうだね。ま、探しているネルソフメンバーがいるから、ある意味ちようど良いんだけど」

エルナーは小さく溜め息をついて、静かに三人を見た。

「あなた達は聞いたことがない？ 蛇使い って呼ばれてるネルソフの老人を」

「僕はないなあ。二人は？」

流衣が話を振ると、それぞれ首を振る。

「いや、俺もねえや」

「私もない」

「そっかあ。そうそう見つかるわけないか……」

ふうと息を吐くエルナー。

「その爺さんがどうしたわけ？」

「僕に呪いをかけた人でね。その人を見つけて血の一滴でも奪えれば、呪いを弱めることが出来るんだよ。一番手っ取り早いからずつと探してるんだ」

リドの問いにそう答え、術者が死ねば呪いも解けるのだが、もし命を奪おうものならネルソフからの報復が待っているので、そっちは御免らしい。折角呪いが解けても、他のメンバーに呪われたのは堪らないからだ。

「蛇使いかあ……」

流衣はパンを頬張り、咀嚼しながらそう呟く。

ふと、あのネルソフの老人の影の蛇を思い出し、まさかねと首を軽く振るのだった。

エルナーが加わった後の旅は普通に平凡で平和で、フォウナン

トーエの次の町を過ぎた。流衣達はその町を抜け、王都手前の町ブレイメンに向けてガロガロと車輪の音を鳴らして進んでいた。

「ここ数日、この辺は盗賊が多く出ているそうだよ」

食堂のテーブルについている流衣に、向かいに座ったディルがそう言った。調理場はすっかりルディーに占拠されており、流衣はこの所、暇を持て余している。ついでに言えばレシピ本も取られたまんまだ。でも返してくれなんてルディーの剣幕が怖くて言い出せない。

また買えばいいやと内心しょげかえりつつ、流衣はディルに視線

を向けた。ディルもまた暇を持って余しているうちの一人だ。移動中はあまり手伝うことはないらしい。リドも暇過ぎて屋根で昼寝をしていることだろう。

「盗賊？」

「うむ。まあ普段から王都の手前は盗賊が出没しやすいが、どうも組織だつて動いているようだぞ」

ふーんと返ししながら、流衣はカザエ村を襲つてきた盗賊団を思い出した。

「それつて、レツディエータ？ だつたかな、あの盗賊団みたいな感じ？」

「そうだ。しかし意外だな、西部では有名な盗賊団なのに知っているのか？」

流衣はこくりと頷いた。

「リドの住んでる村を襲撃してきてさ、リドがほとんど一人で追いつつたんだ」

「まあ確かに雑魚（ink）は倒したが、親玉はこいつがやつつけたんだぜ」

今日はこの荷馬車の屋根で昼寝をしていたのか、話が聞こえたらしくリドが窓から顔を出した。足を屋根に引っ掛けているのか、逆さまになっている。

流衣はそれを啞然と見て、すぐに顔色を青くする。

「ちよつ、リド！ 幾らなんでもそれは危ないよー！」

わたわたと両手を振り、かといつてどうすればいいやらでその場で慌てていると、リドは一度窓から姿を消し、次に足が見えたと思つたら窓から滑り込んできた。

「平気だつて、俺、身軽だしな」

「そういふ問題！？」

裏返つた声を上げる流衣。リドはそれが面白かつたらしく、けらけらと笑い、窓枠に座つてディルを見た。少し声を小さくして言う。「ちなみに、俺、昔はその盗賊団にいたんだ。前にも話した通り、誘拐されて。十三の時に逃げ出したんだけどな、まさかあいつらが

東部の辺境にまで来るとは思わなかったぜ」

「……実戦がどうか言ってたのはそのせいかな？」

デイルは軽く目を見張って、思い出したように問う。

「まあな。あいつら追い払えやし、親玉は辺境警備隊に捕まったし、言う事なしだ。騎士様ウチウチにや問題あるかもしれねえけどな」

そうしてリドは飄々ウチウチと言いながら、僅かに琥珀色の目に物騒な光をたたえ、どこか面白そうに笑みの形にする。

ピンと見えない糸が張られたように、空気に緊張感が生まれた。

流衣は思わず息を呑んだ。はらはらと二人を交互に見る。

デイルは目を眇め、面白くなさそうに眉を寄せる。

「……なんだ、それは私を試しているのか？ 君がケリを付けたのなら、それをとやかく言う権利などあるまい。盗賊稼業は確かに良いことではないが、被害者だと自分でも言っただろう」

途端にリドは物騒な気配を引っ込め、にっと歯を見せて笑う。

「さっすが、話分かるじゃねえか」

対するデイルはますます不愉快そうに眉間に皺を刻む。

「こういう問いかけはやめてくれ。私は駆け引きは苦手なんだ」

「そうかい？ 俺はなかなか好きだけど」

更に楽しげに笑みを浮かべるのを見て、デイルは軽く溜め息を漏らす。流衣も息をついた。

「僕もそういうの苦手だよ。心臓に悪いなあ、もう。喧嘩なんて始まって、僕、止められないからね！」

流衣がへたれ感満載でそう言うと、リドは片眉を跳ね上げる。

「うーん、さっきのは別に喧嘩するつもりだったわけじゃないんだが。まあいつか、お子様には分かんねえよな！」

「おこ、お子様！？ 僕が？ だからもう十五だつて言ってるでしょ！」

気持ち良いくらいにすっぱり言い切られ、流衣は必死で言い募る。
「はいはい」

リドはどうでも良さそうに右手を軽くひらつかせた。必死で言い

張る子供を大人が適当に宥めるみたいな態度で返されて、流衣はがくつと肩を落とす。完全に子供扱い……。そこまで子供に見えるのだろうか？

と、その時、突然馬車の振動が止まった。

何だ、と訝しく思った瞬間、何か丸い物が窓から放り込まれた。

「えっ！」

石か何かかとそれを凝視した時、パァンと玉が弾け、煙がぶわりと立ち込めた。

二十一章 たゆたいの水路 2

「じほじほつ、何事？」

煙に咳き込み、目が痛くて勝手に涙が出てくるのにパニクリながら、事態を飲み込もうと疑問を漏らす。そうしながら、頭の隅で催涙弾もどきかという推論が浮かんだ。

白い煙で視界がきかない中で動けずにいると、突風が起きて煙が吹き飛ばされた。

『坊ちゃん、ご無事ですか？』

声がしたのでそちらを見ると、オルクスが窓辺に止まっていた。

どうやら風を起こしたのはオルクスらしい。勿論、羽ばたいた程度で風が起るわけもないから、魔法だろう。

「盗賊の襲撃デス」

オルクスの言葉に、まさしくその話をしていただけに血の気が引く思いになる流衣。しかし怖がる以前に、目が痛くてたまらないのでそれどころではなかった。袖口で目元を拭いながら、どうにか食堂内を見渡そうとすると、少し離れた所で鈍い音と誰かの苦鳴が聞こえた。

「リド？ デイル？ 大丈夫っ？」

「おう、平気平気」

「こっちもだ」

手をパンパンとはたきながら、リドとデイルが言った。その足元には盗賊と思われる黒服の男が二人転がっている。

驚くやら呆れるやらで流衣は声を失っていたが、ふいに後ろでバチツと何かが弾ける音がして、何かが倒れる重い音がした。

「？」

反射的に振り返ると、流衣の背後にも黒服の男が倒れていた。

「え」

固まった流衣の肩にオルクスが降り立ち、ふんぞり返る。

『他愛もない。ご安心を、わては高レベルの使い魔。ボディーガードだってこなせるのです！』

「……ど、どうも」

本当に頼りになる使い魔だ。本気で自分つきで良いのだろうかと心配になる。流衣の側にいると、自然と雑用が増えそうだし。

「まったく気配消していきなり背後に立つなよな。驚いて肘入れちまったよ。誰だこいつ」

こつちが大丈夫だと見るや、リドは文句を言いながら、自分が倒した黒服の男の脇腹を爪先で軽く小突いた。そんなリドに、デイルはあっさり返す。

「さつきオルクスが言ったではないか。盗賊なのだろう？」

「分かっているっつーの。俺が言いたいのは、何でただの盗賊がここまで用意周到なのかってこと。気配の消し具合なんて暗殺者アサシンばかりじゃねえか」

「確かに、君の言う事にも一理ある」

デイルはふつと真面目な顔になり、床でのびている男達を見下ろす。

「三人とも、こつち！」

人相改めをしておこうかとデイルが男のフードに手を伸ばしたところで、窓からひよいとエルナーが顔を出した。そして小さな声でついてくるように催促する。三人は顔を見合わせたものの、非常事態なので年長者に従うことにした。

武器を荷馬車の奥に置いている為、デイルはさつき倒した盗賊の武器をベルトごと拝借し、腰に据えつけた。短剣と長剣を帯びていたので便利だったのだ。流衣は杖がなくても特に支障はないし、常にダガーを一本帯剣しているリドはそもそも武器を調達する必要はない。護衛についてからは貴重品は身に着けるようにしているから、ここで出て行っても問題は無い。

デイルが拾い上げたのを確認してから、流衣は窓から外へと脱出した。その際、窓枠から転げ落ちたのはお約束というやつだ。

「あでっ」

かろうじて顔は打たなかったものの手の平と膝を強打してしまった流衣は、顔をしかめて痛みがりながら、何故そこでこけるんだと呆れ顔の友達二人の後ろについていく。

そのまま道端で停まっているピンク色の馬車まで来ると、黒服の盗賊五人と神官達が戦っていた。

「俺ら、あっち見てくる」

手を貸さずとも大丈夫だと判断し、リドはデイルと共にその場を離脱し、劇団の他の馬車の方へ駆けて行った。

置いてかれた流衣は、びくびくしながら周囲を警戒する。

ひとまず木陰に隠れて様子を見守っていると、馬車の方で戦闘していた盗賊の一人が、他の者より少し距離を置いた場所で何かを呟き始めた。その右手に黒い文字が浮かんで回転し始めるのを見るや、エルナーが盗賊とアンジェラの直線上に飛び出した。

盗賊の投げた黒い文字の螺旋らせんが飛び、エルナーはそれを右手の平を突き出して受け止める。文字は手に当たると空中で音も無く砕け散った。

「呪いがっ！」

その盗賊が思わず叫んだ瞬間、エルナーは雷の術を使って盗賊を昏倒する。その頃には、他の盗賊はアンジェラやビイの手によって地に伏せられていた。アンジェラの鋭い回し蹴りが決まる瞬間を目撃し、痛そうだと思う流衣まで顔をしかめた。というか、この二人凄いな。容赦が一切ない。敵にだけは回したくない人達だ。

場が沈静したのを把握すると、流衣は大急ぎでエルナーの方に駆けつける。

「大丈夫？ 今、呪いって聞こえたよ？」

「うん、平気だよ。呪いは効かない体質だから」

小さく微笑むエルナー。

そうだった、そういえば呪いが効かないんだつたと流衣は頭の隅で呟く。

「おかしいわ。ただの盗賊が闇の魔法を使うだなんて……」
前に拳を突き出すという構えを解き、アンジェラが不可解そうに呟いた。眉間に皺を寄せ、昏倒させた盗賊の一人の懐を探る。

「……これはっ」
じやらりと鎖のこすれる音とともに出てきたのは、文字をかたどったネックレスだった。

「ネルソフ！」

ほとんど息のようなかすれた声だった。アンジェラは忌々しげに舌打ちする。

「ちっ、王都手前でこれか。腹の立つ！」

優しげな表情を苛立ちに染め、荒い口調でアンジェラは吐き捨てた。

と、その時、中空を切り裂いて黒い雷が馬車を直撃した。

ピンク色の馬車の屋根が吹き飛んだ。それとほぼ同時、馬車内に待機していたエドガーがヴィンスを腕に抱えて馬車から転げ出た。

「何やってるんですか先輩っ！ 避けるくらいして下さいよ！」

「無茶を言うなっ、無茶を！」

げきを飛ばすアンジェラに、一応ヴィンスは庇ったらしいエドガーは噛み付いた。爆発の余波か、服が煤すすけている。しかし目立った外傷は見当たらないようだった。

「劇団に扮してたなんてな、愉快な奴らだぜ」

街道の反対側の雑木林から姿を現した黒服の三人の男が現れ、そのうち、グドナーが喉の奥で低く笑って言った。

そして、グドナーは少女に扮しているヴィンスを見て片眉を上げた。ひどく不思議そうに、傍らの中肉中背の男に問う。

「おい、シーリー。ターゲットは男じゃなかったか？ お姫さんなんて聞いてなかったけどな」

「馬鹿じゃないですか、あなた。他の人も変装してるんですから、

公爵だつて変装してますよ。まさか女装の趣味があたりとは知りませんでしたかね」

シーリーと呼ばれた丁寧口調の男は、小馬鹿にするような視線をグドナーとヴィンスに向けた。

「趣味じゃありません！ 失敬なっ！」

思わずヴィンスが反論すると、シーリーは口元を歪める。

「ほら、自分から変装してるって教えて下さいましたよ。決定ですね」

しまった！ とヴィンスが身を引く。まさかそう来るとは思わなかった。

「公爵とはいえまだ子供じゃな。あれくらいでムキになりおる」

二人の後ろに控えていた老人が、ふんと鼻を鳴らした。それから、ゆっくりとした足取りで前に進み出た。

「シャノン公爵閣下、宜しければワシらと共に来て下さらんかの。

なに、貴方には危害を加える気はない。丁重にお連れしるとの依頼じゃからのう」

「失礼ですが」

アンジェラはヴィンスを後ろに追いやり、前に出た。顔は微笑んでいるが、茶色い目は笑っておらず、どこか殺気立っている。

「公爵様はともお忙しくていらっしやいますの。あなた方にお付き合ひしている時間なんてありませんわ」

おまけにふんわり微笑めば、老人が楽しげに口元を僅かに引き上げた。

「『何者だ、何が目的だ』とは訊かないのだな。前に閣下の側にいた輩はそんなことばかり叫んでいたが？ まあ最後は静かになったかのう」

「……っ」

ヴィンスの眉が吊り上がり、怒りの為に頬が紅潮した。護衛の神官達の雰囲気もこの一言で鋭いものに変化する。

「……それはご期待に沿えず申し訳ないわ」

一段と低くなった声で、嫌味っぽくアンジェラが口を開く。

「でも、私達の使命は“公爵様を無事に王城まで送り届けること”
ですの。あなた方の意図なんて、正直、知ったこっちゃありません
わ。早々に目の前から消えて頂けます？ お怪我をされたくないで
しょう？」

ものすごく黒い笑みとともに紡がれる敵愾心満々な言葉に、老人
もすっと目を細めて冷たい空気を纏う。

「どうやら、お主らもあの小童こわっばどもの後を追いたいらしいのう。

グドナー、好きに遊んで良いぞ。ただし公爵には手を出すな」

「へへっ、分かっているよ爺さん。楽しくなってきた」

獲物を見据えた狩人のように目を光らせ、グドナーは陽気に返す。
殺気だった場にそぐわない声音だった。

「ビィ、リッツ、あなた達は公爵様をお願い。王都まで逃げれ
ばどうにかなるわ」

アンジェラが小さい声で指示を出すと、リッツは槍を構えたまま
で驚いた顔になる。

「えっ、姉さんはどうする気だ？」

「ここまで喧嘩売られて、私が黙ったままでいると思うの？」

「……いつもなら十倍返しだな」

地を這うような低い声での返答に、今までの過去を振り返ってリ
ッツは頬に冷や汗を浮かべた。アンジェラは気合を入れるように右
手の拳を左手の平に打ちつける。パン！ と景気の良い音がした。

「こっちは任せとけ。なーに、時間稼ぎしたらとつとずらかるさ。
お前の姉さんは俺が守ってやるよ」

エドガーは軽いノリでそう言いいきり、安心させるように口の端を
持ち上げる。

「馬鹿にしないで下さい、先輩。守られるの間違いでしょう？」

アンジェラに殺気だった視線を向けられ、エドガーは顔を引きつ
らせた。

「さあ行って。あなた達もよ」

アンジェラが流衣とエルナーに言い、しかしエルナーは首を振った。

「僕は残るよ。今日はついてる。ずっと探してた標的を見つけた」

「え？」

流衣は目を丸くしてエルナーを見た。エルナーは微かに笑みを浮かべる。

「あのお爺さんだよ、僕が探していた 蛇使い ってた人だ」

「そうなの？」

流衣は困惑しつつ、ネルソフの老人を見る。老人の足元の影で蛇がのたうち、赤い目が光った。何となく思っていたが、本当にあの老人がそうだとは思わなかった。

「僕がいるから悪いようにはならないはずだ。安心して逃げるといい」

「分かった。気を付けて」

ここに残っても足手まといになるだけだ。

流衣は後ろ髪を引かれるような心地を覚えながら、それを振り切ってヴィンス達とその場を離れた。

追いかけてこようとした 蛇使い の前にはエルナーが立ちふさがり、他の二人の前にはアンジェラとエドガーが立ちふさがった。

苛立ったグドナーが初撃を放つや、戦闘が始まった。

二十一章 たゆたいの水路 3

「こっちは片付けたぜ」

コンテナみたいな舞台の馬車の横を通り過ぎようとしたら、上からリドの声が降ってきて、ついで、リド自身も飛び降りてきた。リドの声を追うように、馬車の前方からデイルが出てきた。他に盗賊の被害がないか調べにいった後、そのまま着替えたのかいつもの白い騎士装束に身を包み、大剣と荷物とを背負っている。

「こっちも済んだ。といつてもすることは無かったがな。荷物だ」

「どつという意味？」

馬車の横の地面に、縄で縛られた黒い服の盗賊が転がっている。それを横目に見ながら、流衣は首を僅かに傾げる。荷物を受け取って背負い、杖を手にしていると、デイルが言いづらそうに頬を掻く。

「女性が強いな」

「は？」

流衣だけでなく、リドも変な顔をした。一体、いきなり何なんだ？ その時、ガイン！ という景気の良い音がして、後方の馬車の扉から黒い服装の盗賊が叩き出された。

「あんた達、何ぼさつとしてんの！ さつさと公爵様をお連れして逃げなさい！」

びっくりして振り返った流衣が見たのは、フライパンを手にしたルディーが後方の馬車の横で眉を吊り上げて立っている光景だった。フライパンで目一杯殴られたらしい盗賊は地面でのびている。何となく、デイルの言葉の意味を掴んだ。

ルディーが立っているのはちょうど住居スペースの表口がある所で、そこからわらわらとランスとサジエが出てきた。ランスは頭に

鍋を被り、右手に箒を持っており、サジエはザルを被って麵棒を両手で握って身体の前に構えている。

「そつだよ！ とつと行けよ！」

「お前らが逃げないと、俺らも逃げられないだろっ！」

サジエが言い、ランスもまた乱暴な口調で促す。何とも彼ららしい言い分だ。

「たくましい連中だな」

リドが呆れたように呟き、ヴィンスもおかしそうに小さく笑って言った。

「ふふ、では期待に沿うことにして、行きましょう」
皆、その一言に頷く。

去り際、流衣はランス達を振り返って声をかける。

「ランス達、気を付けて」

「けっ、こんなの日常茶飯事だっ！ 心配される程のもんじゃねえ！」

「そつだぞ！ お前らこそ気をつけるよっ！」

ランスが居丈高に返し、それに便乗してサジエも叫ぶ。

流衣は二人の声を背中であきながら、ヴィンス達の後に続いて雑ぞう木林きはやしへと走りこんだ。

「ひとまず、ここを抜けて王都に入るしかありません。この林なら、馬も追いつきにくいでしょう」

ビィを先頭にし、雑木林の中を走りながら、リッツがヴィンスに言った。ヴィンスは頷く。

「ええ、そうですね。とりあえず、奴らから離れるのがせんけ……
つっ！？」

妙な所で言葉がぶつりと切れた。突然、ヴィンスの右足が地面に沈んだのだ。ぎょつと目を見開いた刹那、一気に足元が崩落ほうらくした。

「っ！？」

「ヴィンス君！」

「公爵様！」

咄嗟に、流衣とデイルはヴィンスの両腕をそれぞれ掴んでヴィンスが落ちるのを阻止する。

「落とし穴？」

ビィは足を止めて振り返り、ヴィンスの足元に出来た小さな穴を見て胡乱つらんげ気に咳く。

ピシィッ

その瞬間、何かに亀裂が入るような不吉な音が周囲から聞こえた気がし、六人が立っていた地面がぐぼつと抜け落ちた。

「え」

流衣はヴィンスの腕を掴んだまま、声を漏らし、悲鳴を上げる暇もなく他五人とともに地下へと落ちていった。

パラパラと小石と土が天井に開いた大穴から落ちる音が、暗い地下道に響く。いや、地下道ではない。随分上に見える穴からの光で判断するなら、これは地下道ではなく水路だった。

皆、まとまって落ちたお陰か、水路ではなく水路脇の歩道に落ちたようだった。

「リド、助かりました……」

「そりゃどうも」

ヴィンスはリドの背中の上に乗ったまま礼を言つと、不本意ながらクッション代わりになってしまうリドは若干むくれ気味に返した。

「あ、いえ、クッション代わりにしたことでなくてですねっ。咄嗟に風で落下の衝撃を緩和して下さったのでしょっ？」

「ああ、高さが分からなかったからな」

何でもないことのようにリドは答え、立ち上がって土埃ちほいじを払った。「随分落っこちちゃったみたいだね」

幸いにして尻餅をついた程度で済んだ流衣は、立って天井の大穴を見上げた。高さからして、大体四メートルか五メートルといったところのように見える。流衣達がいる所まで光は降り注いでいるが、穴の前後は真つ暗で何も見えない。

「ここは何だ？ 遺跡か？」

デイルの零した呟きに、ビイは首を振る。

「分からない。王都近辺は専門外。分かるのは地上に戻るのは無理なことだけ」

端的なビイの言葉に、場に重い沈黙が下りる。

困った事態にうつろたえながら、流衣は少し新鮮な驚きを覚えた。

ビイはこういう話し方をするらしい。思えば、彼女とはほとんど言葉を交わしていない。

「もしかしたら、ここは たゆたいの水路 なのかもしれません」

「え？」

グインスの漏らした呟きに、他の者達は声を揃えた。

「公爵様、それは一体どういう？」

リッツの問いに、グインスは真面目な顔で顎に手を当てる。町娘風の青いブラウスと、黒いロングスカート、白い前掛け、という女装ながら、その仕草は男らしく見えた。男と知らない人から見れば、女にしか見えないだろうが。

「小さい頃、父上から聞いたことがあるのです。我らルマルディー王国が始祖しそ、クリエステル・ルマルディーが、王都を避難する為の地下通路を作らせたという話を。王城のすぐ北には銀鏡湖シルヴィラがあります。そしてその水は王都の中を通っているのですが、その水路がどこまで続いているか、あなた方はご存知ないでしょうか？」

リッツとビイ、そしてデイルは揃って首をひねった。

「確かに、水路はあるが、途中で見えなくなる」

デイルの独り言じみた言葉に、グインスは頷く。

「そう。当たり前すぎて誰も気付きませんが、水路は地下に続いて

いるのです。そしてそれは途中で小川と合流すると聞いています。二番目の王の時に起きた地震で一部が崩落し、通路としての使用は不可能になったそうです。この水路の名を、たゆたいの水路というのですよ。水が、光が、音が、それらがたゆたう水路。この通り暗いですし、音は水音しかないので、私にも意味は分かりませんけれど」

すらすらと説明するヴィンス。流衣はへえと感嘆の息をつく。

意味を知りたい？ 教えてあげようか？

突然、どこからともなく響いてきた、ガラスで出来た鈴を鳴らしたような涼やかで高い声に、流衣達は揃ってビクリとした。

「誰だ！」

リッツが槍を構えて警戒するが、声はどこから聞こえるか分からない。

怖がらなくていい、人間の子。わたし、ここの番人だから。

王家の血筋がいるから、襲ったりなんてしないわ。

「番人……？」

リッツは眉を寄せる。

すると、少し離れた場所の水路の水面が盛り上がり、人の頭が水から突き出た。

「ひっ！」

その登場の仕方は軽くホラーじみていた。流衣は短く悲鳴を上げて、すぐ側にいたディルの後ろに逃げた。

「……ひとを盾にしないでくれるか」

「大丈夫だよ、ディルなら行ける！」

「何を根拠に」

ディルの呆れたような言葉に流衣が自信をこめて言うつと、ますま

す呆れた顔をされたものの怒ったりはしなかった。

そのままデイルの後ろから水の中の頭を見ると、それは人間でも幽霊でもエイリアンでもなく、人魚だった。

薄い青色の肌の、長い金の髪と目をした、十代後半の姿形の人魚だ。額には金の輪を付けていて、両手首にもじやらじやらと金の輪の飾りを付けている。耳はヒレの形をしており、尾は緑色の鱗をした魚のそれだ。上半身には白いキャミソールのような服を着ているが、人魚が僅かに動く度にキラキラと白い光の粒が見えて、まるで星空を身に纏っているみたいで不思議だった。スパンコールやビーズの類ではないから、ここでの素材なのかもしれない。

初めは驚いたものの、目が覚める程美しい人魚だった。

わたしは、アリエス「テイレナ」オルスツビツテ。呼ぶのならば、テイレナと。アリエスという名は特別だから。

テイレナは魅力的な笑みを浮かべた。

「私はヴィンセント・クロディクス・シャノン公爵と申します、美しい方」

ヴィンスが名乗ると、テイレナは不思議そうな顔をした。

ヴィンセントは男の名前よね？ それにあなた、男の匂いがある。でも、女の格好をしてる。どっちが本当なの？

「私は男です。追っ手から逃れる為、このような格好を」

そこまで言っつて、ヴィンスは女装していることを思い出したのか、盛大に顔をしかめた。

そして、少し失礼を、と言っつて、いきなりその場で鬘かづらを外し、スカートを脱ぎ捨てた。下にはちゃんと黒いズボンを履いていたらしい。というか恐らく、意地でズボンだけは死守したのだろうと思う。上が女物のブラウスなので、まるで女性が男装をしているように

も見えるが、ティレナは納得したようだった。

分かった、男だ。女だったらそこまで潔く脱げない。

……確かに。

他五名、内心で声を揃える。

王様の末裔、追われているのなら、ここを使うといい。通路は途中までしか使えないけど、水路に潜れば先に行ける。

「ありがとうございます、では使わせて頂きます」

いいの。それが私の役目だから。でも、一つ困ったことがあるの。

「何ですか？」

崩落地点より先の方に、魔物が棲みついていて通れない。私もそろそろ湖に帰りたいのに、あいつのせいで帰れない。ねえ、どうにかしてくれる？ 王様の末裔なんだもん、強いんでしょう？

人魚は期待をたっぷり込めた目でヴィンスを見つめた。金色の目がキラキラと輝いている。

ヴィンスは言葉に詰まった。何せ、実戦経験もない十五の子供なのだ。あるのは試合くらいのものだ。

「大丈夫。そいつ、倒す」

が、ヴィンスが何か言う前に、ビィが一步前に出て言い切った。

びっくりしたようにビィを振り返るヴィンス。

「公爵様、どちらにせよ上には戻れない。それならここを通り、魔物を倒し、そして安全に城まで行く方がいい」

「そうですね、貴女の言う通りです。そうしましょう」
ヴィンスが承諾すると、ティレナは嬉しそうに肩を竦めて微笑んだ。

ありがとう、王様の末裔。あの蛙にガツンとかましてやって！

「蛙？」

目を瞬くヴィンスに、ティレナは大きく頷いた。

そう、蛙。火を吹いたり、氷を吐いたりするの。それに背中に分泌してるねばねばも注意だよ。

「ぜ、善処します」

ティレナの言葉に、一気に自信を失くしたヴィンスだった。

二十一章 たゆたいの水路 4

そうだった。たゆたいの水路の意味だったよね？ 教えてあげる、王様の末裔。

皆が水路を歩き出そうとしたところで、ふいにティレナは表情を明るくして笑った。そして目を閉じ、胸の前で両手を組み、短く息を吸い込む。

それは歌というより音だった。澄んだ鐘の音のような、色で表すなら極彩色の。ティレナの声は高く柔らかく、空気を震わせる。すると水路の中を声が反響し、両側の壁の中心に、光が点々と灯った。その光はラインをえがいて暗闇に沈んでいた水路を明るく照らし出した。

ティレナはすでに口を閉じていたが、音と水と光は確かにまだ水路の中にたゆたっていた。光が消えることはなく、不思議と清らかで満ち足りた気配が場を占めている。

皆、気付けば泣いていた。勿論、ティレナを除いて。

「……これが、人魚の『天上の歌』てんじょううた」
夢の中にいるように呆然としながら、ビィがぼつりと呟く。

最上級の褒め言葉をありがとう、あしん 亜人の娘。むすめ

ティレナはにこりと可愛らしく微笑んだ。

わたしの……いいえ、わたし達人魚の歌を聞くと、人間は皆そうなるわ。いつもは魂をレシアンテ様にお届けする時にしか歌わないの。でも、ここでは王様と約束しているから、特別なのよ。そ

れに、とても久しぶりに人間に会えたのだもの！ 歌ったっていいわ！

晴れ晴れと、本当に喜んでいるティレナに、流衣は何年もこんな所にいた寂しさはどんなものなのだろうと思った。

そこで初めて自分の頬が湿っているのに気付き、慌てて袖で涙を拭う。その動作で他の者もティレナの言葉の意味にようやく気付き、それぞれさりげない動作で涙を拭いた。互いに泣いているところを見られたせいで、微妙に居心地の悪い空気が漂ったが、皆それには気付かない振りをすることに徹する。

ティレナはそんな流衣達を面白そうに見つめ、クスリと小さく笑ってから、先に進むように促した。

* * *

グドナーの放った黒い雷を避け、シーリーの飛ばしてきた木の葉のナイフを結界で弾く。その合間を縫うようにして、蛇使いへびつかが呪のろいを投げ、それをエルナーが手の平で受け止めて霧散むざんさせた。
「なかなかやりおる」

蛇使い は低く唸るように呟いた。声が少し不機嫌そうだ。

アンジェラはそんな老人の行動を注意深く見守る。一番得体の知れない者はこの 蛇使い という老人だと悟っていた。

「遊んでる場合ではなさそうですね。私が追います」

シーリーは仕方なさそうに言う。それに対し、グドナーが反発する。

「俺の獲物を横取りする気か！」

「あなたが行ったら、殺しかねないでしょう？ 宜しいですね、

蛇使い 殿」

シーリーは冷やかにグドナーをいなし、リーダーたる老人に指しを仰ぐ。

「ああ、お主なら平気じゃろう。行け」

蛇使いの許しが出るや、シーリーは素早く呪文を唱える。
「負の腕より呼び出すは刃。宙を舞い、敵を滅せ」

シーリーは右手を横へ広げる。影のナイフがシーリーの周囲をぐるりと取り囲むように展開し、シーリーが右の人差し指を前方に突き出した瞬間、ナイフが宙を舞った。

それをアンジェラ達は光属性の結界を呼び出して対応する。闇属性の魔法を防げるのは、光属性の魔法だけだ。木の葉のナイフのよ
うな、特殊属性の植物のものならば防ぐのは楽だが、闇属性ではそ
うはいかない。調整を間違えば、簡単に結界を貫く。

「失礼」

ナイフの嵐をしのいでいるアンジェラ達三人の横を通り抜けざま、
シーリーは嫌味っぽく呟いた。

「あつ、この野郎、待て！」

咄嗟にエドガーが火の柱を魔法で起こして邪魔しようとしたが、
それをヒラリとかわし、シーリーは雑木林の中へと消えていった。

ちつと舌打ちし、エドガーは他の二人を止めることに専念しようと
と頭を切り替える。

「しっかりと下さいよ、先輩」

ひやりとした声でアンジェラが言い、エドガーは頬を引きつらせ
る。

「君、俺が一つ年上ってだけで、何でも後輩より上手くこなせるっ
て本気で信じてるのか？」

「まさか。現に私が隊長をしますし、総合能力なら私の方が優秀
です」

「……………」

「ですが、先輩の方が魔法の腕も良いですし、聖法も解呪に長けて
いるという稀有な能力の持ち主です。才能だけを見れば先輩の方が
優秀なはずです。経験だって私より一年多いですし。ただし、判断
能力は私より劣っています」

エドガーはどういった返事をすべきか、困惑気味にアンジェラを横目で見ると。感情の無い声で淡々と言うので、褒めているのかけなしているのか判断出来なかったせいだ。

「一応、褒め言葉として受け取っておこうかな。ありがとう」

「褒めてもけなしてもいけません、ただの分析です」

「あ、り、が、と、う！」

無理矢理話を締めくくるエドガー。少しくらい譲歩してくれたっていいのに、この後輩は……。

アンジェラは褒めたことになったのが嫌だったのか、非常に煩わしそうな目でエドガーを一瞥し、またネルソフに視線を戻した。

「まあいいです。冥土めいどの土産にとつといて下さい」

「は！？ 俺が死ぬこと決定か！？ それともアンジェラにとどめを刺される予定なのか？」

「安心して下さい。今でなくてもいつか必ず私がとどめを……」

「怖いと言わないでくれ、頼むから！」

ネルソフの攻撃を防いだり弾いたりかわしたりしながら言い合いをしていると、エルナーがほとほと呆れた目を二人に向けた。

「戦いに集中して。本当に冥土行きだよ」

エルナーがそう注意した瞬間、蛇使いの足元の影が突然膨れ上がった。蛇が一匹飛び出てきたのだ。そして影の蛇は三人の真ん前の地面に激突した。

瞬間、白い閃光とともに轟音が巻き起こった。

* * *

爆発の影響で、土埃と白煙で視界が閉ざされている中、蛇使いは感慨も何も含まない声で傍らを見た。

「……ワシは先に行く。グドナー、ここは任せたぞ」

「生死は？」

「問わぬ」

蛇使いの返答に、グドナーは口元をにやりと歪めた。

それを返事と取り、蛇使いは悠々とした足取りで雑木林の奥へと去っていった。

「へん、どうせ生きてやしねえだろうがな。一応、死に顔だけは拝んでおくか」

土埃と白煙とが風に流されて消え、ようやく周囲の状況が見えた。グドナーは敵がいた所をぐるりと見渡す。

茶色い髪の女が頭から血を流して倒れており、そこから少し離れた場所には、キザったらしい印象の茶色い髪の男が同様に倒れていた。グドナーは更に周りを見て、眉間に皺を刻む。

「一人足りねえ。一体どこに……」

あの爆発で遠くまで吹き飛ばされたのか、それとも木っ端微塵に消し飛んだか、そのどちらかだろう。探しに行くのが面倒だと思つた時、背後から声がした。

「ここだよ」

凧のように静かな声。微笑みを浮かべる様さえ脳裏に浮かぶ、穏やかな声だったが、そうと気付いた瞬間、全身に衝撃が走った。風で吹き飛ばされ、近くの木に激突する。そこでグドナーの意識は闇へと落ちた。

* * *

「やれやれ、術に引っかけられて助かったよ」

エルナーは溜め息混じりに呟き、植物を魔法で呼び出して気絶しているグドナーを縛り上げ、猿轡まで噛ませると、ほっと息をついた。魔法使いは術に長けても体力が無い者が多く、直接的な攻撃

つまり打撃に弱い傾向がある。だから木にぶつかった程度でもダメージを受けるのだ。そして、『精霊の子』と呼ばれる者達と異なり、呪文さえ唱えられなければただ人と同じである。

エルナーは右手の指をパチンと鳴らす。すると、地面に倒れてい

たアンジェラとエドガーの姿がスツと空気に溶けるように掻き消えた。

「投影とうえいの術ってこういう使い方もあるんだな」

実際にある光景を違う場所に映し出す、あまり使いどころのない光属性の術だ。

奥の茂みから左腕を押さえてよろよろと出てくるエドガー。その後ろには額から血を流しているアンジェラもいた。爆発は結界でのいだものの、防ぎきれずに吹き飛ばされ、アンジェラは頭を打ち、エドガーは左腕を骨折したのだった。が、生きているだけ儲け物だ。エルナーの方は爆発を完璧に防いだので無傷だ。直後、二人の姿を映し出してグドナーを陥おとしれることが出来た程である。

「敵の錯覚を引き起こすには便利だよ。ほとんど子供騙こどもたまたましなだけどね」

肩をすくめるエルナーに、アンジェラは首を振る。

「その子供騙しにこいつは引っかけたわ。ざまを見るって感じね」
清清しく微笑むアンジェラ。ネルソフの三人の中で、一番虫が好かないタイプだったからいい気味だと思う。

「止められたのが一人だけというのは痛いな。公爵様達が危ない。

……つつ」

エドガーはそこで顔をしかめた。左手首と肘の間が折れており、その骨を元の位置に戻したので痛みが走ったのだ。

「先輩、無理に触らないで下さい。悪化しますよ」

アンジェラが痛そうに顔をしかめ、エドガーの側に慌てて駆け寄る。

「大丈夫、治療なら慣れてる。ちょっと荒療治なだけだ」

「変な治り方をしたらどうするんですか。全くもつ」

アンジェラはその辺に落ちていた木の枝を拾い、それを接ぎ木代わりにして、ハンカチで結んで固定する。

アンジェラがエドガーの手当てをしている横で、エルナーは空を見上げた。鷹たかが一羽、周囲を旋回している。エルナーが右手を軽く

振ると、鷹はスツと舞い降りて、エルナーの右腕に止まった。

「王都の杖連盟に応援を頼むことにするよ。ネルソフを一人捕まえ
たつて聞けば、喜んで引き取りに来ると思う」

「レ・ストネルムの奴らか？」

杖連盟にある特殊な部、閥属性魔法使用の魔法使い対策部の正式
名を口にして、エドガーは首を傾げる。

「あの人達、本当にネルソフが嫌いよね。ネルソフ退治を皆嫌がる
のに、あそこだけは嬉々として請け負うんだから不思議だわ」

ハンカチをぎゅっと結び、終わったと告げ、アンジェラは自分の
額の血を乱暴に袖で拭った。少し切っただけだが、袖口にべつたり
と血がついて辟易する。見た目は派手だが、額は血が出やすいだけ
でそこまで酷い怪我にはなりにくい。

「アンジェラ、ほんとたまに男っぽいな。俺の怪我より、自分の怪
我を手当てしたらどうだ」

「我が力、糧かてとし、癒しの光、ここに顕あれよ」

呆れた視線を向けてくるエドガーをさらりと無視し、アンジェラ
は聖法の術五・癒しで怪我を治す。

「これでいいですか、先輩」

「……何で怒るんだい」

「先輩に心配される程、私は柔やわじゃありませんもの」

ふわつと微笑みつつ、余計なお世話だこの野郎と睨みつけられ、
エドガーは首を竦める。どうもこの後輩、心配されるのが大嫌いな
節がある。それも何故かエドガー限定で。前にビィから教えてもら
ったことでは、どうやら馬鹿にされているように思うらしいのだが、
とんだ被害妄想だと思う。

二人を困ったように見てから、エルナーは話を戻す。

「さっきの話の続きだけど、レ・ストネルムにいる魔法使いの多く
はネルソフに家族を殺されたり、呪いをかけられて人生が滅茶苦茶
になったりした被害者なんだよ。閥の魔法を憎んでるのさ。でも、
審査があるから、個人的な恨みでネルソフを殺めるような人間は入

れないけどね。あくまで法で裁くのが目的」

「ああ、そういうこと。それなら確かに楽しいでしょうね」

納得、という口調でアンジェラは頷く。

「僕はこのまま追跡するよ。エドガーさん、あなたの怪我では無理があるからここで待機して貰っていい？」

「了解。こいつをレ・ストネルムに引き渡して、君が進んだ方に案内すればいいんだな？」

「話が早くて助かるよ」

エルナーはにこりと静かに微笑み、用件を書いたメモ用紙を鷹の足に結わえ付け、何事か言い付けてから、鷹を空へ放した。

二十二章 vs 蛙

たゆたいの水路を奥へ進んで三十分ほどした頃、流衣達は崩落^{ぼんらく}地点に辿り着いた。

ここをもう少し進むと、水路の幅が広がっている所があるわ。あの蛙はそこに棲みついてる。

テイレナが瓦礫と土砂で埋まっている水路の向こうを見て、そう説明した。

「瓦礫の下は通れると言ってたよな？ 距離はどれくらいなんだ？」
リドがテイレナに問うと、テイレナは一度潜ってすぐに顔を出した。

少し潜る程度よ。皆痩せてるから、すぐ通れるわ。

つまりこの中では、年上だけあって一番がたいが良く見えるリッツでも、楽に通れるくらいの幅なようだ。

「しかし困った」

デイルが重苦しい口調で唸るように呟いた。上着の隙間から顔を出したノエルが、ギョピ？ と不思議そうにデイルを見上げる。ノエルの他の者も疑問をこめてデイルを注視する。

「何が？」

流衣の問いに、デイルは言いづらそうにもごもごと口を開く。

「君は忘れてるようだが、私は泳げぬのだ。どうすればいい？」
場がシーンと静まり返った。皆、何とも言えない視線をデイルに向ける。やがてリッツがその目をそのままヴィンスに向けた。

「ヴィンセント様、失礼を承知でお伺いします。……泳げますか？」
貴族は屋敷にいるばかりで泳いだことのない者が多い。田舎の領地に住んでいる者や、活発的な者はともかく、ヴィンスのような大人しそうな者が泳げるとは思えない。

リッツが緊張感満載で問うと、意外にもヴィンスは頷いた。

「ええ、湖程度でしたら。避難訓練の一環として城の裏で泳いだことがあります。流石に海は無理ですが」

その答えに、リッツとビィは揃って安堵の表情になる。

そうだ。王城の真裏には銀鏡湖があり、そこから堀に水を引いているのだ。城から避難するなら、確かに湖を使う方が良い。

「じゃあ問題はその真つ白小僧だけ。ティレナ様、引っ張っていつ貰っても？」

ビィの問いにティレナが頷くと、ビィは問答無用でディールを水路に蹴り落とした。

「ぐはっ!？」

ばしゃーんと水柱が上がった。軽装の鎧を付けているのも手伝い、泳げないという本人の申告通り、泳ぐ気配はなく沈んでいく。そんなディールの後ろ襟を掴むと、ティレナはすいーっと崩落地点の向こうへ泳いでいった。

やがて、すぐにティレナは戻ってきた。

ちゃんと陸に上げておいたわ。死にそうな顔してた。水の中で息が出来ないなんて、人間って大変ね。

そう言っつて、ティレナは楽しげに笑う。それから、にこりと微笑んだ。

でも、水で死んだら、水底の魂をわたしみなそこみたいな人魚が回収して、レシアンテ様にお届けするのよ。だから彷徨うことはないのね、安心でしょ？

「そ、ソウデスネ」

流衣は片言で返す。素敵な笑顔でなんて恐ろしいことを言うんだ、この人。

思わずぶるりと身震いしてしまう。他の面々も見事に凍り付いている。

そこでふと、流衣は肩にとまっているオルクスを見やる。

「オルクスはどうなの？ 濡れるの嫌なんでしょ？」

「……………」

オルクスは押し黙り、やがてひどく申し訳なさそうに申し出た。

「……………血と魔力を頂いても？」

そこまで鳥の姿で濡れるのが嫌なのか。

流衣は若干苦笑い、了承の言葉を呟いた。

水路の崩落地点を抜けると、皆それぞれ濡れた服を絞った。荷物も水に浸けてしまったから、着替えも濡れているだろう。

それでも、リュックの中ならまだ濡れていないと踏み、リュックから羽竜フライングドラゴンの青灰色のマントを引っ張り出す。思った通り、今着ている服よりマシだ。濡れて重くなった上着を脱ぎ、リュックに押し込もうとして、ふとビィが寒さに弱いことを思い出した。

そつとビィの方を見ると、彼女は青い顔で小刻みに震えていた。

物凄く忌々いまいましそうに下唇を噛んでいる。

「えっと、ホルテンスさんだったかな。これ、使って下さい」

「……………」

「そんなに濡れてませんか」

差し出したマントを、何故か親の敵を見るような目でビィが睨みつけてくるので、流衣はビクつきながら付け足した。

「……………濡れる」

「それなら乾かせばいいです。これ、暖かいので」

ビィはしばらく何かと葛藤しているかのように無言でマントを見ていたが、やがて渋々といった体で受け取った。

「後で返す。……ありがとう」

「いえ」

流衣はそう返事し、やっぱり上着は濡れていて重たいからとリュックに押し込む。上は白いシャツと皮製のベストだけになった。流衣の変装は上着とバンダナだけだから。髪が頬にはりついて気持ち悪いので、バンダナの方はそのままにしておく。

「あいつのあの態度、悪く思わないでくれな。他人に貸し作るのが嫌いな性分つただけだから。……助かったよ、あいにく俺は貸せる上着がないからな」

リッツが小声でビィのフォローをする。相変わらず、目は細すぎてほとんど閉じているようだが苦笑しているのは分かった。

「はあ、でも別に気にしてませんから」

無視をされないだけマシだ。流衣はあっさり返す。

それから、横で物凄く不機嫌な顔をしているオルクスを見上げる。黄色い髪から雫をボタボタと垂らしながら、しかも面で服をぎゅーっと力いっぱい絞っている。

流衣はそれを苦笑混じりに見つっ、とりあえず何も言わないことにした。今話しかけたら、どんな皮肉が返ってくるか分からない。

「人型をとっている使い魔は初めて見ました。竜が人に化けた姿なら、何度か見たことがありますか」

オルクスが人の姿をしているのに感動したらしく、ヴィンスは目を輝かせて言った。ヴィンスの傍らにいるリッツとビィもまた、オルクスを興味深げに見ている。

「わたのような動物型が化けているのはともかく、元より人の姿をしている使い魔を呼べば別ですよ。そちらを見たことはないのですか？」

「ありません。宮廷付き魔法使いでも、そんな大魔法を使う機会などありませんし。ここ数日が物騒なだけで、以前はとても平和でし

「だから」

「ヴェインスの返答に、オルクスはふむと首肯する。

「確かに公爵の言う通りですね。平和な時代に、彼らを召喚する必要はありません。たまに好奇心で呼び出したり、物騒な理由で呼び出したりする傍迷惑な連中が存在する程度です」

二人の話に耳を傾けていた流衣は、人型の魔物はそんなに強力なのかと思ひ、流衣は訊いてみた。

「オルクスは頷く。」

「そうですね、魔力消費は半端ありませんが、その対価を払うだけの仕事はします。大抵は兵器代わりとなるような攻撃系統で、数は少ないですが、知識を司る者や治療に長けた者もいます。難病を抱えた者が呼び出すケースもあります」

「そんなに強いんじゃない？あ、戦争にならないんじゃない？」

流衣が怪訝な顔を見ると、オルクスは首を振る。

「強力な攻撃ですが、防ぐことも出来ます。とはいえ、戦いが起きた場合、魔法使いの数か、もしくは良質な魔法道具の数で勝敗が決まるというのは否めませんが」

「なるほど」

感心して頻りに頷く流衣。ヴェインスは真面目な顔で言う。

「しかし、戦というのはそんな単純なものではないようですよ。地の利、作戦、畏、そんな物でころりと立場が逆転することもあるのだとか。兵法の教本の指南程度の知識ですけれど」

「ヴェインス君、兵法なんて習ってるの？ 凄いなあ、本当に同じ歳？」

「貴族の一般教養です。歴史学よりは面白いですよ」

「うん、確かに。歴史って眠いよね。僕は数学の方が好きだな」

公式さえ覚えていればどうにか応用すればいいので、数学の方が好きだ。歴史は暗記物が多すぎる。

のんびり話をするのもいいけど、そろそろ着くわよ。

場の空気が緩んできたところで、ティレナが口を挟んだ。そして、水路の中でぴたつと動きを止める。

わたしはこの辺で待ってる。よろしくね、王様の末裔。

そしてティレナは魅力的な笑みを浮かべた。

* * *

「この辺りは滑る、気を付けろよ」

「うん、ありがと」

ありがたくもリドから念押しのような注意を受け、流衣は素直に頷いた。

ティレナが側にいないのにも関わらず、通路の壁には光が灯っているから明るい。だから足元はよく見えるのだが、石畳の通路には長年湿った空気にさらされていたせいでカビやコケが生えており、滑りやすくなっていた。

「ルイも不安だけど、ディルはもつと気を付ける。落ちたら面倒だ」
思い出したようにリドは後ろを振り返る。最後尾からついてきていたディルは、慄然ぶぜんとした表情をする。

「……ありがたい忠告、いたみいる」

口では皮肉っぽく返すが、さつき水路に蹴り落とされたのが堪えているようで、さりげなく壁際に寄った。服が湿っていて嫌なのか、ノエルはいつの間にかディルの肩に陣取っている。好奇心いっぱいに辺りを見回しているが、大人しくしている。

そして、一行は通路が広がる地点に着いた。

他の支流との合流地点のようで、円形の小さな広場くらいの広さがある。今まで歩いてきた通路に比べ、光の数が少なく薄暗い。

そこに一步踏み込んだ瞬間、流衣の背筋がぞくりと粟立った。

何もこんな時に来なくてもいいと思う、不幸の前触れだ。

「蛙なんて見当たらないな」

壁に沿ってカーブをえがく通路を足音を殺して歩きながら、小さな声でリッツは呟いた。一番先頭で、槍を持って警戒している。

そのすぐ後ろについているビィも警戒しているらしく、黒い獣耳がピクピクと忙しく動いている。きつと些細な音すらも聞き逃すまいとしているのだと思う。

流衣もまた杖を握り締め、水路の真ん中辺りの暗がりを見つめて身構える。そんな風に遠くに気を取られていたせいだ、足元が留守になったのは。

右足首を何かに掴まれたと思った瞬間、力いっぱい水の中に引きずり込まれる。

「ルィ！」

すぐ後ろにいたリドが仰天したような声で叫んだのと、耳元で水が鳴る激しい音が同時に聞こえた。

水底は暗く、冷たかった。

流衣は驚いたものの杖は手放さず、水面上がろうと上を見て目を開けた。が、やはり足に何かが絡み付いていて動かない。

(何……?)

まさか水草だろうかとそれを見て、初めはロープかと思った。が、真正面にいるものを見て、蛙の舌だと気付く。

ゴボツ!?

驚いた拍子に口から空気が思い切り零れた。慌てて両手で口を押さえる。泡が目の前を上っていき、そうと認めたら急に息苦しくなった。

蛙は確かに蛙だった。黄色い色をしていて、腹は白い。真正面で見合っているからよく分からないが、蝦蟇に似ている気もする。ずんぐりむっくりした、目が黒い蛙。

その頬に黒い星みたいなシミがあるのを見つけた。魔物！

蛙は流衣と同じくらいの高さがあった。大きい。大きいが……、まさか餌になんてしないよね？

嫌な予感がした瞬間、まるで狙ったみたいに獲物のかかった舌を引き戻し始める蛙。

慌てて反対方向に泳ごうとするものの、掴まる所などないのであっさり引つ張られる。

（嘘だろ？ こんなとんでも世界での死に方、蛙に喰われました？ 間抜けすぎてゴシツプで笑われるよ！）

混乱のあまり突拍子のないことを考え、じたばたもがいていたら、ふいに肩を掴まれ、視界が転じる。

水を感じがなくなっただわりに、今度は腹部に負荷がかかって、流衣は若干飲んでいた水を吐いて咳き込んだ。

「もう大丈夫ですよ、坊ちゃん」

どうやらオルクスが転移して助けてくれたらしい。ついでに言えば、腹に圧迫を覚えるのは小脇に抱えられているせいだ。まるで荷物みたいな扱いである。

「……オルクス、下ろしてくれとありがたいんだけど」

「下ろしたらまた水の中ですよ？」

言われてみれば、オルクスが立っているのは通路ではなく水面の上だった。

「どうやって立ってるのっ？」

びっくりだ。すごい。水面を歩くなんて、地球じゃ聖人が忍者にしか出来ないことだとされていたから尚更。

「ただの浮遊の術です。　　というか、真っ先に気にするのはそこなんですか」

じと目で睨まれた。うつ、オウムと違って青年姿だと迫力があって怖い。流衣は首を竦めるが、同時に水面下に影を見つけた。

「蛙が下に来てる！」

「分かってます。すみませんが餌にさせて頂きました！」

嬉しくないことを事後報告してくるオルクス。なるほど、それから水面に浮いているのも納得。

「って、そんな納得してる場合じゃない！」

水面が円形に盛り上がり、蛙が頭を出す寸前、オルクスは水路の奥へとジャンプして、また水面に着地した。軽く水がはねる。

「ぐへっ、な、何で僕が餌？」

また腹に圧力がかかって潰れた声を出しつつ、流衣は疑問を口に
する。

「これはただの推測ですが……」

「うん？」

「一番弱そうな者を選んだのではないかと」

「……………」

自分は人間だけでなく魔物にまでひ弱に見えるらしい。

流衣は情けなくなり、数年すればきつと背も伸びてマシになるはずだと将来に希望をかけた。今は無理だ。せいぜい、体力をつけるのが関の山。

大蛙はオルクスと流衣の方を向き、口をがばっと開けた。ツララが口から飛んで来る。

「わーっ！」

思わず悲鳴を上げて目を閉じる。が、頬に風を感じただけでツララが命中することはなかった。またオルクスが横へ跳び、ツララをかわしたのだ。

ほんとに氷を吐いたよ、この蛙。

かわしてしまうオルクスも凄いが、蛙も凄い。ゾツとした。

「こんなのがゴロゴロしてるなんて……。ラーザイナは恐ろしい所だね……………」

「人気の無い場所くらいですよ、こんなのがゴロゴロしているのは」
オルクスはあいている右手を上に向け、火で出来た輪を呼び出した。
た。

それを蛙に投げつけるが、蛙は水に潜もぐってあっさりそれをかわす。

ジュツという音がして、炎が水にかき消された。
「ちつ、焼き蛙にして差し上げようと思いましたが」
舌打ちし、黒い表情でぼそりとオルクスは呟く。
側で聞いてしまった流衣は内心震え上がった。
怖っ。口調は丁寧なのが余計に怖い！

* * *

「わては水相手だと分が悪いのです」

蛙の潜った水面下をじつと見つめたまま、オルクスが渋い声で呟いた。

「え？」

流衣も杖を抱えて水面の影を目で追いながら、思わず聞き返す。
オルクスはとても強い使い魔であるのに、弱点もあるのか。

「使い魔には得意な領域が存在します。わては転移を含む飛翔能力と治癒と火と風と光属性がそうなのです。水は完全に領域外です」
言われてみれば、確かにオルクスが使う攻撃系の魔法は火属性か光属性しか見たことがない。煙を吹き飛ばす程度なら、風も使っていた。

「だったら水から出せば良かろう。お三方は氷の魔法は使えるだろうか？」

話を聞いていたデイルは良いことを思いついたらしく、ビィとリツツとヴィンスの方に問いかける。

ビィとリツツは首を振り、ヴィンスは頷いた。

「私は割りと得意な方です。どうされるのです？」

「一部を残して、表面を凍らせるんです。蛙はそのうち空気を求めて穴から出てきますから……」

「そこを狙うというわけですね。なるほどー！」

感心して頷くヴィンスに、デイルは、中央部だけ残すと告げ、呪文を唱え始めた。

何をしでかす気が気付いたオルクスは、パツと転移し、通路の方に着地する。ようやく地面に下りれた流衣は、腹の圧迫感が消えてほっと息をつく。それとほぼ同時に魔法が完成した。デイルとヴィンスはそれぞれ片手を水面に付ける。

ペキパキペキペキ！ 軋む音があちこちから聞こえ、冷気が立ち込める。音が止むと、目の前にはスケートリンクのような氷が出来ていた。真ん中だけ大穴があいていて、まるで釣堀のようだ。

しばらく様子を見守る七人。蛙は水面に浮上しようとして天井に頭をぶつけたのか、ゴツと鈍い音がした。

しばしの沈黙。

奥の方の氷面に、突如として炎の柱が立ち上った。

「！」

デイルとヴィンスの二人は目を丸くした。

蛙が口から炎を吹き、氷の板を溶かしたのだ。

「……そういえば火も吹くんでしたね」

冷や汗混じりにヴィンスは呟く。

蛙はびよんと氷の板の上に飛び乗り、流衣達の方を見た。口をぱ

かっとなげる。

「うわわわわ！」

氷の塊が幾つも飛んで来た。

流衣は慌てた声を上げ、皆も急いで通路の奥へと逃げる。氷の塊はどかどかと水路の壁に当たり、通路にゴトリと転がった。その衝撃で、天井からパラパラと土埃が落ちてくる。

「まずい。あまり酷いと、崩落する」

ビィが苦虫を噛み潰したみたいに顔をひそめ、可能性を口にする。困ったな、意外に手間取るぞ、これは「

リッツは、蛙を横目に見て言う。

が、折りよくもそこに新たな闖入者が現れた。

「見つけましたよ！」

さっきのネルソフの三人のうちの一人だ。シーリーと呼ばれてい

た、中肉中背の男。黒いフードを目深に被っていて、顔は見えない。シーリーの声を聞き、蛙はそちらに目標を変えたようだった。口をばかりと開け、再度氷の礫つぶてを発射する。

シーリーがぎよっと立ち止まったのが分かった。

ビィは口元を引き上げる。

「素敵なおとり。どうやらあいつが倒してくれるみたい。私達は行くこつ」

ざまを見ると言わんばかりなビィの言葉に、流衣達は反論もなく頷いた。

二十三章 わたしの光

「ちよつ、人魚さんとの約束はいいんですかっ？」

追っ手の一人に蛙の相手押し付け、通路を奥へと走り出すヴィンスの護衛二人の後を追いかけてながら、流衣は慌てて叫んだ。

約束を反故にするのは間違っていると思うのだ。

久しぶりに人間に会えたと言っていたティレナの笑顔を思い出し、自然と気分が沈む。

「約束も大事だが、ネルソフが追いついたんじゃ護衛の方が優先だ。蛙なら、後で手配しとくから平気」

が、心配は杞憂だった。あつさりリッツに返され、ちゃんと事後のことも考えていたのだと感心しつつ、考えの浅い自分が恥ずかしくなった。流衣ときたら、逃げるのだけでも手一杯なのに。

通路後方から、魔法での衝撃音が、もしくは蛙の攻撃音みたいな音が響いてくる。それから出来るだけ遠ざかるべく、ひたすら奥へと走る。靴音がいくつも通路に反響した。

やがて行き止まりに辿り着いた。階段があるが、天井は壁でふさがれている。

「開かないぞ、どうなってるんだ？」

天井を両手で押し上げてみても、蓋ふたではないのか開く気配がない。リッツは天井をガンガン叩いてみて、やはり開かないので苛立ち混じりの溜め息をついた。

「どこかに仕掛けがあるのではないか？」

ディールの言葉に、皆、壁や床に仕掛けが無いか探し始める。

「お、ここ外せるぞ」

壁をコンコンと叩いていたリドは、空隙くつげきの軽い音がした壁の煉瓦

を剥がした。そこには輪のついた鎖があったので、それを手前にグイと引っ張る。

ガガガガと音を立てて天井がスライドしていき、出口が顔を出した。

「流石！」

「やるではないか！」

流衣とデイルは歓声を上げてリドを褒める。

リドは「まあな」とだけ答え、にやりと口端を引き上げた。

流衣達はそのまま出口から外へ脱出する。

途端、視界に飛び込んできた太陽の光が眩しくて、流衣は目を細めた。

「うわあ……」

徐々に慣れてきた視界で外を見ると、出口から出た場所はどこかのお屋敷の裏庭のようだった。

左には煉瓦造りの堅固な壁が見え、右にも壁があり、見上げると見張り用の塔が見えた。兵士が外を向いて屹立している。その壁沿いには木や低木、薔薇などが植えられていて、風に流されて甘い香りが鼻腔をくすぐった。

「石像の下が入口だったんだな」

出てきた出口の方を振り返り、そこにあった女神像らしき石像をしげしげとリドは見た。髪の毛の長い美しい女性が、祈るように手を組んで空を見上げている姿をしている。その台座は真四角だ。

「ここはもしか……」

周囲を見回し、ヴィンスは何か思い出したように呟く。

「この場所、知ってるの？」

流衣がヴィンスの横顔に目を向けると、そこで金属がガシャガシヤと鳴る音と重い足音が聞こえてきた。

建物の影から、白い鎧を身に着けた男が二人出てくる。

「真つ昼間から堂々と城に入り込むとは、不屈きな侵入者め！ 見張りの目から逃れられるとも思ったのか！」

「大人しく縛につけ！」

二十代半ば程に見える男達は、騎士のように見えた。兜は被っていないが、白で統一された制服と鉄製の鎧を身に纏い、腰の高さまでの短めの青い色をしたマントを着けている。彼らは流衣達がいるのを知っていたらしく、それぞれ警戒たつぷりの表情でスラリと剣を抜いた。

流衣は声を失くして凍りついた。

どうか切り捨て御免なんて言われませんように！

「お騒がせして申し訳ありません。火急につき、姉上にお会いしたいのですが」

ヴィンスがやんわりと取り成すと、男達は怪訝な顔になった。

「姉上……？」

そこでヴィンスが誰かに気付いた二人は、慌てて地面に膝を突き、礼を取った。

「ややつ、これは王弟殿下ではございませんか！」

「気付かず無礼を致しました。どうぞこちらへ、ご案内致します！」

そしてすぐさま立ち上がり、キビキビとした足取りで先に立って歩き出す。

（権力つてすごいなあ）

王族の権威の凄さを目の前で見て、流衣はそんな風に感心を覚えた。

その後、ヴィンスが事情を簡単に話し、そこから退く前に男達のうち片方が仲間の兵士を呼びに走った。

* * *

流衣達が出た場所はお屋敷ではなく王城の裏庭だったらしい。

お陰様で、ヴィンスを城まで送るといふ予定も終わった。が、だから、「はい、さよなら」というわけにもいかず、城の兵士の詰め所で待機することになった。事情についてはビィヤリッツが説明し

てくれるらしいので助かる。どうも流衣が説明すると、分かりやすく言おうとして逆に回りくどくなってしまうのだ。流衣とリドとデイルなら、リドが説明した方が一番分かりやすいのではないだろうか。大雑把に要点だけで纏めてくれそうだ。

今は、流衣達がびしょ濡れだったこともあり、兵士達がタオルを貸してくれたので、それでオウムの姿に戻ったオルクスの水を拭ってやっている。濡れそぼっているオルクスは不機嫌丸出しで、あのオウム怖いと兵士達にまで言わしめる程である。

「アンジェラさん達、どうしてるのかな……」

待っているうちに、残してきたアンジェラやエドガー、それからエルナーのことが気になってきた。

「無事なら来る。安心しろ」
「ビイが素っ気なく言った。」

心配じゃないのかなあとそちらを見ると、ビイは言葉に反して落ち着かない様子である。六人掛けの四角い木のテーブルやベンチが部屋の半分に二つだけ並んでいて、その一つに流衣達は腰掛けている。そのテーブルの盤面を、ビイは指でカツカツと鳴らし、誰かが入ってくる度に戸口を凝視している。

これは待たされてイラついているのと、アンジェラ達を待っていて不安なのと、どっちなんだろう。

リッツの方はそれ程心配していないのか、兵士の出してくれた茶をのんびり飲んでいいる。といつても、目が閉じているに近い細目なので、流衣には表情が読めなかったただけだったりする。

流衣も茶を飲み、何とも渋みのある味に顔をしかめ、さりげなくテーブルに置き直す。それから所在なく待っていると、やっと待ち人が到着した。

アンジェラとエドガーだった。何故かエルナーの姿はない。

「アンジー！」

二人が入ってきた瞬間、ビイがガタツと騒々しく立ち上がった。そして、アンジェラの愛称だと思われる名を呼ぶ。完全にエドガー

は眼中にないようだ。

アンジェラは全員を一瞥し、落ち着いた笑みを浮かべる。

「皆、怪我はないようね。公爵様を無事にお連れしてくれてありがとう。二人とも、途中で大役を押し付けてごめんなさいね」

「それが仕事。仕方ない。アンジーは怪我は？」

「ビィ、俺には訊いてくれないの？」

エドガーが横から問うと、ビィはさらりと返す。

「エドのは見れば分かる」

「……………そうだね」

全くもってその通り。三角巾で右腕を吊っているから、とても分かりやすい。肩を落とすエドガーを横目に見て、クスリと笑い、アンジェラは言う。

「怪我はしていたけど、治療したわ。ただのかすり傷だったから」

「そう。ならいい」

ビィはその返事で満足したのか、あっさり引き下がった。

「アンジェラさん、エルナー君はどうしたんです？ 一緒じゃないみたいですけど」

流衣が意を決して会話に加わると、アンジェラはにこりと微笑んだ。

「彼は杖連盟の方に行ったわ。そのことも含めて報告があるから、今から話しましょう。勿論、あなた達の報告も聞かせてね」

結局のところ、襲撃者である三人組のネルソフのうち、グドナーというのっぼだけが捕まり、他の二人は逃げおおせた。

水路から出てきたシーリーを兵士達が捕らえようとしたが、一歩間に合わず転移魔法で逃げられてしまった。もう一人の老人は、水路には来なかったようで、足取りは掴めなかった。危機を察知して逃げたのではないかというのが杖連盟の人達の意見だ。

二手に分かれていた時のグループ同士で報告し合っていたら、水

路の蛙退治を頼まれた兵士達が帰ってきて、蛙はすでに死んでいたという話をしてくれた。多分、シーリーが片付けたのだと思う。

これでひとまず、問題点は全部無くなった。

「あなた達、この後はどうするの？」

アンジェラの問いに、流衣は元々の予定を話す。

「風の神殿の近くにあるっていう魔法学校を目指す予定です」

するとアンジェラは目を瞬いた。

「魔法学校？」

流衣は頷いて、転移魔法の権威の先生に会いたいという話や、転移や召喚について知りたいという話をした。

「そういう魔法について知りたいのなら、とう塔を訪ねてみるという」

横からエドガーが口を挟んだ。思案気に顎に手を当てている。

「塔って何ですか？」

「杖連盟の本部のことだよ」

流衣が疑問を口にする、今度はリドが口を出した。魔法のことなのに分かるのかとリドを振り向くと、ひょいと肩を竦められる。

そして一言。

「常識」

「あ、そう……」

小さく苦笑いする流衣。その常識が分からないから困るのだ。

「ではしばらく滞在予定なのだな？ その間、姉上にお会いしてきても構わないだろうか？ 王都に来たのに立ち寄らないで通り過ぎると、後で小言が酷くてな」

デイルが神妙な表情で切り出すので、流衣はきよんとする。一拍後、そういうえば、デイルには王都に住む貴族に嫁いだ姉がいるのだったなと思いついた。

「それには及びませんよ、カイゼル伯爵。あなたの姉君も招待することになっていますから」

詰め所に入ってきたヴィンスが、さらりと言った。

「招待、ですか？ 何のお話ですか？」

すつと自然な動作で椅子を立ち、デイルは丁寧に訊ねた。

皆がベンチから立ち上がったので、流衣も慌てて真似つつ、ヴィンスを見る。

ヴィンスは服を着替えたようで、貴族然とした格好をしていた。

白いブラウスを着て、その襟元には絹製のビラビラとしたタイをつけている。ブラウスの上には金糸の細かい刺繍が施された青色の上着を着ていて、下は黒いかっちりとしたズボン、靴は茶色い皮製の靴を履いている。更に上着の上には肘を覆う程度の短いマントを纏い、正面で紐でとめ、赤色の宝石のブローチを付けていた。

どこから見ても王子様だ。今までもどこかキラキラしていたが、綺麗な顔をしているだけに、幻覚だろうが本当に光り輝いているように見える。眩しい。

「皆さんに助けて頂いたと姉上 陛下にお話しましたら、陛下は大変感激されて、一週間後に予定していた夜会に招きたいと。勿論神官殿方だけでなくあなた達もです」

その一言に、一般庶民の流衣とリドは揃ってたじろいだ。思わず顔を見合わせてしまう。

不安そうにしたのを見てとり、ヴィンスは小さく笑う。

「ふふ、そんなに心配しなくても大丈夫ですよ。フォローなら私もしますから」

……フォローすること決定事項なんですか。

流衣は思わず胡乱気にヴィンスを見やる。しかしヴィンスは楽しみに笑って取り合わない。

「それでは、また後で」

様子を見に来ただけだったのか、ヴィンスは優雅に一礼し、戸口に立っているお供の騎士とともに去っていった。

お供だ、お供。城の中なのに。流石、元王子様ってだけはある。

どうやら姉弟仲はすこぶる良いみたいだ。王子様でないのに周りが破格の扱いをしているのは、きっとその為なのだろう。女王が大

事になっている弟を手荒に扱ったら、女王が怒るのは目に見えているし。

それにしたって、ヴィンスのお姉さんってどんな人なんだろう。

流衣は首を傾げた。

ヴィンスみたいな金髪と青紫色の目をした綺麗な人なんだろうか。お姉さんならきつと優しそうな雰囲気 shouldn't ない。

そう一人納得したところで、ヴィンスの残していった言葉に気付く。

「ん？ 後で？」

後でって、どういう意味？

* * *

蛙がいなくなつたので、ティレナは水路を遡シルヴァラって銀鏡湖まで泳いだ。

湖はずっと前に見たのと同じで、水面に光を反射して銀色に輝く美しい湖だった。

懐かしくて、嬉しくて、涙が出てくる。

人魚は水底に沈んだ魂の運び手だ。精霊みたいなもので、寿命なんてものは端はなから存在しない。

ずっとずっと、あの闇に沈む水路に居続けると思うと苦しかった。ただいま。お帰り。久しぶり。

色々と呟いてみたけれど、返ってくる言葉はない。

一つの湖に一人の人魚。海も区分分けされていて、仲間と会ったことはない。

ティレナの友達は、ずっと前にいた赤い髪をした人間の王様だけだ。

赤い髪。

そういえば、あの子、王様に似てた。

王様の末裔と共にいた少年を思い出して、ティレナは心の内で呟

く。

いや違うわ。王様じゃなくて、王様の弟の……。名前は何だったかしら？ 風の精霊に好かれていた優しい人だった。

でもその疑問もすぐにどこかに追いやった。

嬉しい気持ちも勝って、ティレナは千年と少しぶりに湖を泳ぎ回る。魂が水底に幾つも沈んでいるし、とても仕事のしがいがある。

ティレナは水面下から太陽の光が煌くキラキラのを見つめ、静かに目を閉じた。

ねえ、王様。

あなたはわたしを日の光のようだと言ってくれたけれど、わたしにとつての光はあなただったのよ。

大好きよ、わたしの大切なお友達。

だからわたし、ずっとここで見守るわ。

あなたの築いた国と、子孫と、人々を。

二十三章 わたしの光（後書き）

・蛇足の後書き・

第四幕終了です。

第三幕と第四幕は一つのくくりって感じなのもあるし、一話完結部分もあるから何となく纏まりが悪かったように思います。

あと、登場人物増やしまくって申し訳ないです； 主要キャラはあくまで、流衣とオルクスとリドとティルなので。サブ辺りがヴィンスで、神殿メンバーはむしろオマケというか。（目立つオマケですね；）

悪役はまあ、組織名だけ覚えておいて貰えば大丈夫です。悪役が二つあるんで、ちょっとごたごたしてる。それに、この世界ではあくまで流衣は「おまけ」の存在なので、勇者よりは表に出てこないです。

私の書き手としての腕ではこれが精一杯だなあ。修行を積み重ねばですねっ。続きもさくさく頑張りたいと思います。

第五幕は、流衣の王都での話です。

神殿で開いている魔法を教える授業に紛れ込んでみたり、杖連盟本部を訪ねてみたりと、帰る為に魔法を勉強しようとする流衣だが、ひよんなことで知り合った少女と関わった為にまたもや厄介ごとに巻き込まれ！？

もしかして上手くいけば勇者が出てくるかもしれません。

そんな感じを予定してます。

まだまだ話は続きます。これで序章くらいかも？ 相当長いので、

お付き合い頂ければ幸いです。では、これにて失礼致します。

追記。

目次を作り直しました。ここまでを、物語の序盤として第一部で
ひとくくりにしました。

第二部はこちら <http://ncode.syosetu.com/n08971/>

もしくは、作者名から作品一覧をご覧下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0858/>

おまけ召喚 第一部 異界より来たる少年

2011年8月26日03時26分発行